
スクール・オブ・ザ・デッド

NAO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スクール・オブ・ザ・デッド

【Nコード】

N3242B

【作者名】

NAO

【あらすじ】

俺の人生で、一番長い一日が始まる。事件は、俺を取り巻く全てを飲み込んで始まった。クラスメイト、親友、憧れの人……そして、主義、主張までも。極限の状況の中で、俺には一体なにができるのだろうか……。

第一話・「はい、今開けます」

遅刻するのは、生まれて初めてだった。

あわてて高校の制服を着、鏡も見ないで家を飛び出そうとする。靴の紐がうまく結べず、もどかしくなる。好きなデザインの靴だが、あいにく在庫がこれしかなかった。少し大きめのサイズでもいい、と我慢した結果がこのまだ。靴の紐をきつく締めないと、走っている途中で脱げてしまう。

「ファッションは我慢だ、か。……身にしみるよ」

そう言った親友の顔が思い出される。

靴の紐を結び終え、ようやく出発できるとなったとき、呼び鈴が鳴った。

「……？」

すでに遅刻の徒である俺の家に、誰が訪れるというのであろうか。実家からかなり遠い高校に通う俺は、過保護の両親からアパートを与えられていた。入居当初は、勧誘その他がたくさんあって、いい加減うんざりだったが、最近は静かなものだ。そんな俺の家を訪れるのは、友人しかいないはず。

しかし、同じ高校に通う友人が、遅刻している俺の家を訪れるはずがない。

……とするといった誰だというのであろうか。

遅刻しているのも忘れて思案する。その間も、ドアの向こうには確実に人の気配があり、ドアに寄りかかったり、うろろしたりし

ているようだった。

尋ね人がいないのに帰ろうとしない客。

そんな客がいるであろうか。ましてや、俺が学校に通っていることを知っている人間なら、そもそもこの時間に訪れようなどとはいはずだ。

開けるに開けられないドア。

何の躊躇もなくドアを開けて、客を追い払ってしまおうかとも考えたが、さすがにそんなことはできない。やはりここは、意を決しドアを開け、懇切丁寧に対処し、帰ってもらうしかないだろう。それが一番だ。

「はい、今開けます」

俺は、のぞき穴に眼を通さず、おもむろに外開きのドアを開けた。

第一話・「はい、今開けます」（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

色々な経緯があつて再掲載です。

変更点として、主に誤字、脱字、不自然な文章を修正しました。

また、平行して、この本編では語られなかった平行時系列の「スクール・オブ・ザ・デッド」を連載します。不定期（一週間に一度くらい）になりますが、よろしければお付き合いください。

評価、感想、栄養になります。

第二話・「私、胸、小さいのかな」

「……何をやってるんだ？」

ドアの脇に寄りかかっている少女を発見する。

「あれ、正臣まこみも遅刻？ 奇遇だね」

「奇遇だね……って、香奈かなも遅刻か。珍しいな」

「うん、なんか完全に遅刻って分かったら、あわてるのも億劫になっちゃうて」

長く伸びたぼさぼさの頭をなでつけながら、香奈と会話する。

「和輝かずきは？」

香奈が首を横に振る。

「今日は雪でも降るのか？ いつも遅刻してる和輝が遅刻しないなんて……」

「同感」

「……にしてもだ。遅刻した人間が、どうして俺の家の前にいる」「うーん、なんでだろ。正臣も遅刻するような気がしたんだよね」

けらけらと笑って見せる。こちらとしては複雑な心境だ。遅刻を予言されるのは、端的に言えば馬鹿にされたような気分になる。

「あ、置いて行かないでよ。つれないなあ……」

香奈を無視して歩を進める。この微妙な調子が、俺は苦手だ。自

由奔放というか、天真爛漫というか……思考回路が人とは違う。

「正臣、髪の毛切ってあげようか？」

無視する。

「私としては、短い髪の毛のほうが好みなんだけどな」

無視。

「そういえば、睦月さんが、正臣のこと……」

思わず足の動きを止めてしまう。

「……なんて言ってた？」

「髪の毛切らせてくれる？」

質問を質問で返される。

しかし、優先順位は俺と香奈の立場上、明らかだった。

「……短すぎないように」

完全に遅刻していると分かっている中での登校風景は、いつもとは違う新鮮な気持ちにさせられる。いつもは朝の通勤などで、にぎやかになっている通学路も、今はまったくの無人だ。遅刻などしたことない俺は、今まさにその新鮮さを味わっているのだった。

「どんな髪型にしようかな……」

香奈は先程から、ずっとこの調子だ。髪の毛を切らせてもいいと

俺がしぶしぶ承諾してから、香奈の頭の中ではいくつもの髪形が現れては消えているのだろう。

「……で、その、睦月さんの件。なんて言ってたんだよ」

香奈はすっかり忘れていたと言わんばかりに、手のひらをぽんと叩いた。

「聞きたいの？」

「決まってるだろ！」

思わず声を荒げてしまい、慌てて周囲を見回す。
人影はまったくくない。どうやら、誰にも聞かれてはいないようだ。

「そんなに大声出さなくていいじゃない」

「悪かったよ……」

頭が痛くなりそうだった。香奈に踊らされてばかりの不甲斐なさ
に。

「睦月さんは、こう言いましたとさ」

努めて平静を装いながら耳を傾ける。

「東城正臣？ 知らないわ」

「……は？」

傾けた耳に飛び込んできた言葉を疑う。

「一言一句、もれなく伝えました。短かったから、忘れようも、間

「違いようもないけどね」

「本当にそれだけ？」

「本当にそれだけ。『東城正臣？ 知らないわ』」

本当に頭が痛くなってきた。

「『東城正臣？ 知らないわ』」

心なしか胃もきりきり痛む。

「『東城正臣？ 知らないわ』」

「聞こえてる！」

「……あら」

「いや、当然といえば当然の結果だよな。かたや、学校一の優等生にして、スカウトの目にもかかるほどの美女。かたや、ただの男子高校生だもん……」

心なしか、学校までの道のりがいつも以上に遠く感じる。

「正臣……だいぶ落ち込んでるね。でも、いいじゃない。私がいるんだし。ほら、慰めてあげるよ。この大きな胸に飛び込んできなさいな」

「そんなに胸大きくないだろ」

「あ、セクハラ」

そんなやり取りの一方で、確実に自分が落ち込んでいるのが分かった。

もしかしたら、憧れの睦月雫が、俺のことを知っていて、密かに気にかけているんじゃないか。

そんな根拠もない希望　妄想とも言っ　が、今まさに現実の

名の下に一刀両断された。

人生はドラマではないと分かっているけれども、どうしてもドラマのような展開を期待してしまう。

人間は希望を持つことの出来る動物であるが、現実になるとは限らない希望を抱くのは愚かでもある。

そうすると、愚かなのは俺なのだろうか、それとも、人間なのだろうか。

「正臣……。私、胸、小さいのかな」

「気にしてたのかよ」

「正臣がそう言うから、気にした」

「じゃあ、例えば俺が、髪の毛の短い子が気になるって言ったら？」
「短くする」

……。ため息が出る。考えてみれば、今日は朝からろくなことがない。

寝坊し、完全に遅刻し、香奈には踊らされ、憧れの人には存在すら知られていない。散々だ。

「厄日だな……。これは」

近づいてきた威風堂々たる校舎に怨嗟をこめて、俺はつぶやいた。

第三話・「……そんな馬鹿な」

遅刻処理は、職員室にて行われる。

初めての作業に少しどきどきしながら職員室に入った。
後ろから香奈がひよっこり顔を出す。

「あれ、誰もいないね」

職員室には、不思議なことに誰もいなかった。

その一方で、閑散としているにもかかわらず、職員室には職員や教師たちがいたという痕跡がある。教師専用の机の上には、生徒に配るためのプリントが幾重にも重なっている。窓から入り込んだきた風の悪戯か、床にはそのプリントが散らばってしまっていた。

「職員室に誰もいないとなると、これは体育館で集会の最中か……
まいったな」

学校の受付の職員すらいないという疑問もあるにはあったが、偶然席を外しているということも考えられる。それ以前に、今はそんな職員どうのこうのよりも、自分がきちんと出席扱いをしてもらえるかということが重要だった。

香奈が、担任教師の机の前に散らばったプリントを、拾い集めている。

「香奈、とりあえず荷物を置きに教室に行こう。職員室に誰もいないとなると、集会でみんな体育館にいるんだろっし」

「先に行っていいよ。私、ここ片付けてから行くから」

拾い集めたプリントの束を机の上でそろえ、同じく机の上にあっ

たパンチを重石にして、落ちないようにしていた。

「分かった。先行く」

教室に向かう廊下にも、職員室同様、人の姿はない。携帯電話を開いて時間を確認してみると、確かに今の時間帯は授業中で、廊下には人がいなくて当然だ。

しかし、通りすがりに教室一つ一つをのぞいてみたが、やはり生徒も教師もいなかった。

「これはいいよ、集会の可能性大だな」

全校生徒が集まった中に、遅刻として入場するのは笑いものにされるようなものだ。教室に着いて自分の席にどっかりと腰を落としながら、今後どうすべきか考える。やはり、集会が終わってからがベストのような気がする。

「和輝は……来ているみたいだな。こんなときばかり、きちんと登校しやがって……」

和輝は、こちらに引越してから最初に知り合った人間だ。地元の友人も誰もいない進学先の学校で、すんなりクラスに馴染むことが出来たのも、和輝のおかげと喋っている。

今ではとても大切な友人だ。

それに比べて香奈との出会いは、和輝ほど大層なものではない。和輝が俺の次に声をかけたのが香奈だったということ。

入学当初、友人も誰もいない俺を含めた生徒は、会話することが出来た際、その人間を起点としてクラスに溶け込もうとする。そして、慣れ始めると、その起点から離れて、本当に気の合う人間同士でグループを作り出す。

つまりは、香奈の起点が、和輝と俺だったということだ。

香奈は、俺と和輝を除けば極端にどのグループに属するということとせず、普通は女同士でグループを組むというのに、それすら積極的にはしようしない。

まるで中立国のように、誰にでも平等に付き合っている。もちろん、嫌われもしないし、深く好かれもしない。

もし唐突に、好きな人間同士でグループを作れと言われたら、香奈はすぐには決まらないが、残ることもないだろう。

しかし、そんな香奈も、俺と和輝にはすぐ近寄ってくる。特に趣向が合うわけでもないのにだ。和輝が言うには、

正臣のことが好きだからだろ。

らしいが、実際のところは分からない。今日のように、朝一緒に登校しているのは稀なケースだ。

それ以前に、俺は香奈のあの独特の調子が苦手だ。マラソンランナーが自分のペースで走ろうとしているのに、先頭集団に巻き込まれたため、ペースを上げざるをえない、という状況に似ている。

和輝にこの例えを話したら、長いけど上手い例えだな、と笑っていた。

俺は大きいため息をつく。

「集会はまだ続いてるのか？」

もうそろそろ次の授業の鐘が鳴る。体育館から教室へと向かう喧騒が迫ってきてもおかしくない時間帯だ。

「香奈も、いつまで職員室の後片付けをしてるんだか……」

もしかしたら、集会から帰ってくる先生と、偶然職員室で鉢合わ

せして、そのまま遅刻の手続きをしているのかもしれない。

「一応」

俺は一人で置いてきてしまった香奈の様子を見ると、遅刻の手続きを一緒にしたにして席を立つた。

優先順位は、香奈ではなく遅刻手続き、これがポイントだ。

俺は二度、無人の廊下へと戻るのだった。

廊下には、俺の足音だけが響く。体育館ではまだ集会が行われているのだろうか。授業を遅らせてまで集会が続くということは、大層なことが話されているに違いない。そんな集会に出席してない、ましてや遅刻が原因である、ということが先生に知れば、これまた俺自身が大層な目に遭いかねない。

「昨日の段階では、そんなことはまったく……」

職員室に着いたところで、とうとう次の授業開始を告げるチャイムが、学校に響き渡る。

始まりの合図であるはずのチャイムが鳴り響いても、何のリアクションも示さない無人の空間が、不気味に思えてくる。

廊下を急ぎ足で教室に戻る生徒、授業に向かう先生。そんな光景が存在しない。

俺は、やはり誰もいない職員室に入室する。もちろん、無人といえども入室の挨拶は忘れなかった。

「失礼します」

各教員の机をくまなく歩いてみるが、やはり誰もいない。

「香奈？」

プリントは片付けられてはいなかった。俺が見ていた場所のプリントはきっちり片付けられているが、それ以外は散らかったままだ。

「あいつ…どこに行ったんだ？」

香奈のことだから、ふらりとどこかへ行ってしまったということも考えられる。

「先に体育館に行った……のか？」

言葉尻は、自分の目を疑って出たものだった。

「これは……香奈のバッグだよな」

香奈がプリントを片付けていた場所に置いてあった。おそらく片付けの邪魔になるから置いたのだろう。溜息をついて、手に取る。

「バッグを忘れてどこかに行くかよ、普通」

授業に使う教科書は学校に置きっぱなしになっているのか、非常に軽い。人のことは言えないが、俺のバッグはここまで軽くはない。得意な教科だけは、アパートに帰っても勉強するために持ち帰っているからだ。

「とにかく、俺も体育館に行くか……」

香奈のバッグを教室に戻して、体育館に向かうことにする。

「まだ、誰もいないか」

教室に戻っても、クラスメイトも、バッグの持ち主である香奈もいなかった。携帯電話を開いて、香奈にメールを送る。

「バッグが職員室に……」

置き忘れていたから、机に置いておく。

「これだけ書けば分かるだろ」

送信。

自分のお人好しに満足しながら教室を出ようとしたとき、香奈のバッグの中から、蠢くような音がした。

持続的な振動音。

最近ではごく当たり前のように聞くようになった音だ。

「本当に裏目、裏目だな……」

そんな自分に嫌気がさす。力なく教室の扉に手を着いて、先程より大きな溜息をつく。いつまでも鳴り止まないバイブレーション音が、脳内を振動させた。

俺は、負の意識にとらわれ始めた頭をバイブレーションよろしくぶるぶると振ると、力強く足を踏み出す。

教室を出たところで、続いていた振動のためか、香奈のバッグが机の上から落ちる音がした。

誰もいない教室でそんな音が響くと不気味だが、種も仕掛けも分かっているの、怖くもなんともない。

そう、バイブレーション機能でバッグが落ちたのだ。

「……そんな馬鹿な」

すぐに教室に引き返して香奈のバッグを確認しようとする。バッグは、あっけなく見つかった。口が開いたまま机の脇に転がっている。

近くには俺のメールを受信した携帯電話が、いまだに震えている。

……が、バッグを落とすほど震えているようには見えない。

携帯電話を手にとってバイブレーションを止め、香奈のバックを持ち上げる。マナー違反とは分かりつつも、俺は香奈のバッグの中をのぞいてみた。すると、想像していた通り、バッグの中には教科書、ノートともに一冊も入っていなかった。だが、バッグの中には確かにあるものが入っていた痕跡があった。

「何だこれ……」

卵の黄身のような、どろりとしたものが、大量にバッグの内側に付着していたのだ。試しに触ってみると、それは親指と人差し指の間で長い糸をひいた。

朱色の粘着物質。

鼻に近付けると、自動車に轢かれて腐ってしまった猫の臭いがする。それは嘔吐感を示すほどの強烈なものだった。

心底、朝食をとらなくて良かったと思う。

「何で香奈のバッグにこんなものが……」

俺は自分の指についた粘着物質を、ポケットティッシュで拭う。しかし、これで原因が究明されたわけではない。香奈のバッグを落とす原因となったモノが、未だ見つかっていないのだ。

「香奈め……あとで覚えてろよ」

焦りが俺の中に巣を作り始める。巣から大量に発生して、俺を独占しようとする。それに後押しされるように、慌てて周囲を見回すが、それらしきものは見当たらない。

「現実だぞ。それに、ここは日本だ。考えるだけ無駄なんだ」

再度、頭を振って冷静を取り戻す。

バッグがなぜ落ちたかなんて、粘着質の液体の正体が何かなんて忘れてしまえばいい。

体育館に行つて、集会に遅れて参加して、終われば、またいつものような学校生活が始まる。

「……よし」

俺はブレザーの襟を勢いよく正す。

教室を出、職員室を通り過ぎれば、体育館はすぐそこだ。それが、何気無い今日の始まりなのだ。

自分を自分でカウンセリングするように俺は胸で念じた。

第四話・「学校なんてどうでもいい！」

体育館は、校舎から少し離れたところにある。

校舎とは渡り廊下で繋がっており、全生徒を一堂に会す集会となると、その渡り廊下を全校生徒がぞろぞろ連なって歩く。

その様は、江戸時代で言うところの大名行列のようだ。

ぼんやり渡り廊下を歩いている俺は、体育館の中からマイクを使った話し声が聞こえてこないことに気がついた。普段なら、生徒指導の体育教師の野太い声が聞こえてきたりするものだが。

「扉全部閉まってるし」

放送機器が詰まった部屋への扉はもちろん、生徒入場用の扉も、普段は通気用に開放してある扉も、硬く施錠されている。頭上に並ぶ体育館の窓を見上げると、どの窓も暗幕で遮られていて、中をうかがうことは出来ない。

演劇部が全国大会に出場したとき、似たようなロケーションにして演劇を披露していた記憶があるが、今年の演劇部は地方の大会で入賞したにとどまっているので、それが披露されているということはない。もしそうだとしても、内側から声が聞こえてくるはずだし、全ての扉を閉め切る理由にはならない。

「……畜生、ここでもないのか」

つぶやいた刹那、扉が内側から強くたたかれる音がした。

ノックするなんて生半可なものではない。加速を付けて体当たりしたような、扉が破碎するのではないか、という強さ。

俺はとっさに身構えるが、どうやら扉は壊れてはいないようだ。

俺は施錠されているのを確認して、恐る恐る扉に耳を押し付けて

みた。中に人がいると分かったのだ。内部の事情を探ってみるしかないだろう。

何かをまさぐるような音、爪で引っかくような音が継続して聞こえてくる。たとえるなら猫を閉じ込めたときの音だ。

目をつぶって想像すると、そんな情景が浮かんでくる。

そして、扉はまたも内側から強く叩かれた。扉に密着させていた耳に強い衝撃が走り、あまりの痛みに耳を手のひらで押さえる。

「こ、鼓膜が……」

破れはしなかったものの、頬から耳にかけて殴られたような痛みが広がる。

ここ数年感じたことのない強烈な痛み、涙が出そうになった。

「鍵がかかっているっていうのに……」

二度の衝撃に備え付けの南京錠はすでに壊れかかっている。

こうなれば、誰が壊しても一緒だ。

俺は、鍵を根元から外そうと手を伸ばす。

「正臣、外しちゃ駄目だよ」

香奈の声だった。

いつの間にか背後に立って微笑んでいる。俺は鍵を外そうとしていたのを忘れて、香奈に向き直った。

「お前な……いきなりいなくなるし、職員室にバッグは置きっぱなしだし、いい加減にしろよ。俺が教室に持っていく羽目になったんだぞ」

「ありがと。優しいね、正臣」

屈託のない笑みだ。普段から見せている笑みだが、不安だった今の俺からすれば、天使の微笑のようにも見えるから不思議だ。

「別にいいけどさ。それはそうと、お前バッグに……」

「今日は学校休みみたいだよ。だから、正臣、帰ろう?。」

俺の質問はあっけなくかき消された。香奈が俺の手を取ってせがんでくる。細指が俺の指に絡みつく、ほんのりと香奈の体温が伝わってきた。

「正臣の髪形、考えたんだよ。きっと似合うと思うんだ。早く帰って切ろう。ね、切ろう?。」

子供のようにはしゃぐ。友人の髪型ひとつでここまで楽しくなれる香奈が羨ましかった。

「……そうだな。誰もいないようだし、帰るか。たまにはこんな日もあっていいだろ」

不良の仲間入りをしたようで、内心ドキドキする。

校則を破るスリルが、快感に変わる訳が分かったような気がした。

「分かったから、手を離してくれ。子供じゃあるまいし」

俺は名残惜しいと思ってしまふ自分に少し腹が立った。

だから、自分でも乱暴だなど思いつつも、強めに振りほどいてしまった。

香奈はそれでも悲しそうな顔ひとつ見せず、嬉しそうに俺の出發を促す。飼い主にどこまでも従順な忠犬のように。

俺は今日でなくなるばさばの髪の毛の感触を、手櫛で味わう。

「短くなりすぎないように頼むぞ？」

「任せて任せて」

俺は香奈と連れ立って体育館を離れようとするが、その行動は唐突な扉の破砕音により、急停止させられてしまう。

破られたのは予想に反して、俺が耳を当てていた扉とは反対の、放送機器があるほうの扉だった。

目を凝らせば、そこには見覚えのある人間が倒れこんでいた。扉を壊した荒業の報いか、倒れた扉の上でうつ伏せになっている。

「正臣！　香奈！」

倒れたまま顔を向けたのは、和輝だった。

「え？　人間？　人間なの？」

和輝の後ろから転がるようにして出てきたのは、俺の憧れの睦月むつきし雲。ずく

「睦月、早く行け！　邪魔だ！」

その後ろからは生徒会長。

険しい顔で睦月さんを扉から押し出す。眼鏡がずれているのにも気がつかないほど焦っている。

冷静沈着な生徒会長というイメージが嘘のようだ。

「早く、ど、どいて！」

眉間にしわを寄せた生徒会長を押しつけるように、さらに細身の男が飛び出す。

確か、放送部の人間だ。

「佐藤君、大丈夫です。まだ十分もちますから、あわてないで」

最後に扉から出てきたのは、同じクラスの水野夏美^{みずのなつみ}だった。仕事熱心な図書委員で、書庫の脚立が壊れて怪我をしたという事件は、一時期大きな話題になった。

「あ、正臣君に、香奈さん、無事だったんですね！　よかった……」

右足はまだ完治していないので、松葉杖に包帯の巻かれた足が痛々しい。

「和輝、それよりも何やってるんだ？　俺、今日は学校ないようだから、これから帰ろうとしていたところだぞ」

和輝は一瞬目を丸くして固まっていたが、すぐに沸騰した。

「学校なんてどうでもいい！　今はとにかく」

扉の破壊される音。今度こそ、俺が耳を当てたほうの扉が壊れた。和輝同様、壊れた扉と共に倒れこんだ人間は、ゆっくりと起き上がる。

……不自然な方向に曲がった手と足を器用に使って。

第五話・「化け物め」

「お前、ラ、どこに行く、ンダ」

生徒指導の体育教師は、機械のように首を曲げながら告げた。

「せ、先生……集会に遅れたのは訳があつて……」

先生の様子はともかくとして、俺は集会に遅れた言い訳をしようと、一歩進み出た。

「ドコニ……行く、ンダ」

「あ、あの、先生、聞いてください」

「正臣！ そいつから離れろ！」

「お前、そういう口の利き方を」

俺は大声を出した和輝を黙らせようと振り返る。だが、それは先生の手が俺の肩をつかんだことでさえぎられた。強引に面と面を向かい合う状態にさせられる。

「ア、ア……」

この生徒指導の体育教師は、生徒に制裁を加えることで有名だ。今では少なくなった体罰教師だが、暴力を嫌う生徒も多い一方で、慕う生徒も多い。時には体罰も必要だ、ということを分からせられる先生の典型だと思う。

そう考えるから、俺はとっさに殴られるのだろうな、と思い、歯を食いしばり、目をつぶった。

数秒後、目の前にいる先生から、何かが爆ぜるような音が聞こえはじめる。握り拳がいつまでも飛んでこないことを訝しんで、俺は薄目をあけて先生を確認する。

目を疑う光景が、そこにはあった。

先生の口の中から異形の生物が這い出している。一見すると手のひら大の蜘蛛。灰色に薄汚れた体躯。甲殻類のようでもあり、節のある足を見ると、節足動物でもあるようだ。口からは触手のようなものを数多と出して、獲物を物色するように蠢いている。

得体の知れないそれは、先生の口を無理矢理こじ開けた。声にならない声を出して、先生の顎が外れる。容易に握りこぶしが二つ入るぐらいに押し広げられた先生の顎は、もはや見ていられない。口の端の皮膚は無残にも裂け、出血がよだれのように地面に滴り落ちる。怪談で言うところの、口裂け女を連想させる。

「ば、化け物め」

生徒会長の感想は、今の俺の感想を代弁した。

蜘蛛の化け物は、その醜い体を完全に現すと、先生の顔に張り付いたまま、目標を定めようと三つある瞳を俺に向ける。目玉が飛び出しそうなほど隆起し、俺を見定めるその様子は、ぎょろり、という擬音語がお似合いだった。

俺の両足が石のように固まって動かない。

蜘蛛の足がばねのように曲がるのが見える。

俺は自分の中の警鐘が鳴るのを感じた。しかし、反応できない。

「正臣君！ 逃げて！」

水野さんの叫びが聞こえる。

物静かな水野さんからは想像も出来ない大音量。

蜘蛛の化け物は、そんな水野さんの声など意にも介さず、俺に飛び掛った。

第六話・「人が悪い」

「正臣！」

俺の顔面めがけて飛んできた蜘蛛の化け物は、和輝が投擲したつぶてによって撃墜された。

蜘蛛が地面に落ちる硬質の音が、俺の意識を呼び覚ます。

蜘蛛は内容物を飛び散らせて地面に落ちたものの、致命傷までとは至らず、裂けた腹を見せて必死にもがいている。

八本の足が空中をつかもうとする様は、気持ち悪い、の一言だった。

「正臣、今のうちに行くぞ！」

和輝の声が、救いの声に聞こえる。

「あ、ああ！」

もがく蜘蛛と、倒れた血だらけの先生を横目に、和輝に並ぶ。

「ちょっと！ 待ちなさいよ！」

睦月さんが、真っ先に逃げ出した放送部員の佐藤を追いかけて校舎に飛び込んだ。

「早く行ってくれ！ 後ろが詰まってるんだ」

生徒会長が、忌々しそくに罵声を浴びせながら二人を追随する。

「正臣、手伝ってくれ」

「な、何だよ？」

俺は蜘蛛が起き上がって飛び掛ってくるのではないかと、内心冷や冷やしていた。

今すぐ、逃げてしまいたい。

放送部員の佐藤のように、真っ先に自分の保身のために逃げ出してしまいたい。

だから、今の言葉の中に不機嫌さが混じっていたことは、おそらくこの場にいた誰もが分かったことだろう。

和輝がそんな俺を看破して声を荒げる。

「水野さんは怪我をしているんだぞ！俺たちは走れるけど、水野さんは」

激昂する和輝の袖を引っ張る水野さん。

「あ、あの、私は大丈夫ですから！この通り、もう治りかけなんです。ほら、ね？」

松葉杖を放り出して小走りに駆けてみせる。額には玉のような汗が浮かぶ。

「水野さん……」

俺は猛省する。

和輝に瞳を向けると、和輝の怒りはすでに収まっていて、俺に対して頷いて見せた。

「ごめん、水野さん」

俺は水野さんの正面に立つ。

「え、え？」

水野さんは何も理解できていないのか、目が点になって俺を見つめてくる。そんな水野さんの思考を置き去りに、俺は水野さんの前で背中を向けてひざまづく。

「早く、乗って！」

「え、そんな！ 私……正臣君に、そんな、おんぶして、もらうなんて……そんな資格……」

真っ赤になった顔を両手で押さえる。

和輝は松葉杖を拾い上げていた。

「水野さん、あきらめて早く乗ったほうがいい。俺たちも早く逃げよう」

「乗らないんだったら、私が乗るけど」

今まで黙っていた香奈が、いつのまにか水野さんの後ろに立って耳打ちしている。

「香奈、黙ってろ」

俺は一刀両断した。

「水野さんだけ、ずるい。私も正臣の背中に乗りたいよ。おんぶしてほしいよ」

さっきまで張り詰めていた緊張の糸を容易く切断していく香奈。

「香奈、俺でよかったら
「ヤダ」

和輝の誘いも、容易く切断するのだった。

「と、言うことで、水野さんが乗らないんだったら、私が
「水野夏美。乗ります」

握りこぶしで高らかに宣言する水野さん。
耳の先まで真っ赤にしている。

「水野さん、大丈夫？ 痛くない？」
「は、はい。とっても幸せです！」

水野さんは、俺の背中にぴったりと体をくっつける。

「そ、そう。それならいいんだけど」

意図していない回答に俺は困惑するが、両足に力を込めてしっかりと、第一歩を踏み出す。

「怪我の功名……って、こういうときに使う言葉じゃないですよね」
「え？ 何か言った？」
「ううん。なんでもないです」

少し楽しそうに笑う。

俺は息遣いでそれは笑ったのだと分かった。
現実にある恐怖に支配された状況で、それは和輝の叱咤同様に、

俺に冷静さを取り戻させてくれた。

「う……これは」

他方、冷静さは次に別のものを俺に吹き込んだ。よく考えれば、俺の首には細い腕が巻かれ、耳の辺りには水野さんの小さな顔がある。

耳を澄ませば水野さんの息遣いが聞こえ、呼吸をすればほんのりと香ってくる甘い香り。

その女である数々の証が、俺の胸を否応無く締め付けるのだ。

「あ、あの、重いですか？ だったら私、降ります」

「お、重いなんて、そんなことないよ」

俺は今の自分の至福を悟られまいと強がって言った。

制服越しでも伝わる体温と柔らかさに、もう頭はフル回転だった。

「……あの、香奈さんと、どっちが重いですか？」

「香奈をおんぶしたことなんて無いから、分からないな」

「そ、そうですか」

俺は体育館を離れて、校舎に入ろうとする。

「……そうなんだ。やったね、夏美」

首に巻かれた腕が外れ、小さくガツポーズする水野さん。

「え？」

「うつん。なんでもないの。こっちの話です。こっちの話」

やはり水野さんは嬉しそうだった。

なぜそんなに水野さんが嬉しそうなのか理解できずに、俺は前を
行く和輝と香奈に必死についていく。

「……あの、変な音、しませんか？」

もう少しで校舎に入れるという時、背後から、奇怪な音が聞こえ
てきた。

水野さんもそれに気がついていたようで、恐る恐る俺に耳打ちす
る。

「確かに……俺も聞こえる」

俺は嫌な予感がして振り返れず、それよりもとにかく校舎に入る
うと急ぐ。

校舎の入り口だけを見て。

他には目もくれずに。

「来る……」

おんぶしている水野さんが、意味深な一言をつぶやいた。

「追いかけてくる……」

「正臣、急ぐぞ！」

前を行っていた和輝が、俺の背後に回り、水野さんごと押す。

俺は前のめりに転びそうになるのを耐え、訳も分らず全力で校
舎に向かう。

「早く！ 正臣、追いつかれちゃうよ！」

香奈が、先に校舎について、すぐにでもドアを閉められるように身構えている。

水野さんを抱えなおすことも出来ずに走らされ、支えている手が外れそうだ。

そうになったら、水野さんを落としてしまう。

「く……！」

腕の痛みが激しい。

水野さんが重くないといっても、それは人間の範疇の話だ。おんぶしたままの激しい上下運動は、普段から運動していない俺にとつては酷だ。

「正臣　！」

香奈が叫ぶ。

和輝はラストスパートといわんばかりに、後ろから思いっきり押す。

「香奈、閉めろ！」

後ろから和輝の声が聞こえる中、俺と水野さんは、校舎の中に転がりながら飛び込んだ。

直後、ドアの閉められる大きな音。

ドアのガラスには先ほどの蜘蛛が勢いよく貼り付き、腹部が大写しになった。

臓物を撒き散らしたまま、ここまで追いかけてきたのだ。生命力は尋常ではない。

蜘蛛が剥がれ落ちたドアのガラスには、赤色の液体が付着し、そ

れはダイイングメッセージのように痕跡を残した。

「き、危機一髪だったな……」

俺は体全体で呼吸しながら、廊下にうつぶせに倒れている。

「ごめんなさい……。私が走れないせいで……」

「いや、それは仕方が無いよ。でも、結果としてみんな助かったんだ。良しとしないと」

水野さんに手を差し伸べた。水野さんは、少し戸惑いながらも、しっかりと手を取る。

「それは違うよ、正臣」

香奈が柔らかい笑みで俺を見つめる。

「和輝が犠牲になったんだから、それは間違ってるよ」
「……え？」

周囲を見回す。俺と水野さんを後ろから押してくれた和輝の姿が無い。

「嘘だろ……」

「嘘じゃないよ。ここにいないのが何よりの証拠でしょ？」

待ち合わせに遅れた人間のことを話すように、簡単に事実を言うのける香奈。

その悲嘆の欠片もない香奈に、怒りがこみ上げてくる。

「香奈……お前、何でドアを閉めたんだ！」

香奈の胸倉をつかんで締め上げる。

「正臣、苦しいよ……」

「何でドアを閉めたかって聞いてるんだ！ 和輝がまだいないのを分かってただろ！」

「私……和輝が、言うとおりに……しただけだよ……」

「正臣君、止めて！」

足の怪我で思うように立ち上がれずに、廊下に這ったまま訴える。

「だから閉めたのか！ 和輝が、閉めろ、って言ったから、そう言っただけから見捨てたのかよ！」

「お願い……止めて……正臣君！」

俺は水野さんの悲鳴が耳に入っても、聞き入れるつもりなど無かった。

それぐらい、和輝を見捨てた香奈の所業は許せなかった。

「自分が何をしたのか分かっているのか！ 和輝とはずっと一緒にいた仲間だろ！」

「……私、は……正臣が……」

苦しいはずなのに、香奈の目は俺をしつかりと捉えて離さない。それは、俺の暴力を許すといわんばかりの慈愛の目だ。

「お願い……止めて！ 正臣君、こんなこと駄目だよ……！」

俺は香奈の目と、足にすがり付いてきた水野さんの泣き声で、や

つと自制心を取り戻した。いまだにたぎる怒りを何とかこらえて、香奈を解放する。香奈はその場にくず折れて咳き込んだ。

「和輝……」

俺は窓の外に目を向けることが出来ない。そこには蜘蛛の化け物に蹂躪される和輝の姿があるかもしれないからだ。

遠くでガラスの割れる音がした。蜘蛛が侵入してきたのだろうか。

「和輝を……失うなんて、考えたこと無かった……」

足の力が抜けていって、その場に座り込んでしまう。

身近な人を失うなんて、考えたことが無かった。テレビで放送している数多の死は、どこか現実離れしていて、全てがフィクションのように見えた。それが、ここにきて死の現実性を認識させられることとなった。蜘蛛を宿していた先生も、おそらくはもうこの世にはいない。

そんなこと、にわかには信じられるわけが無い。

「和輝が死ぬなんて……そんなの」

頭を抱える。

掻きまるとぼさぼさに伸びた髪の毛が、一本、また一本と廊下に落ちていく。

「和輝が……」

目頭が熱くなってくる。俺はこれから涙を流すんだな、なんて冷静に考えたり出来ることが、不思議で仕方がなかった。人はこんなときにでも、冷静になれるものなのだろうか。そんな自分自身が悔

しかった。

それでも、悲しみを乗り越え、これから迫り来る脅威に立ち向かわなくてはならない。

ガラスの割れる音は、その前触れだ。

「和輝……俺、お前の分も」

強く生きなければならない。

「本当に参ったよ。木に登ったまでは予定通りだったんだけど」

そのとき、懐かしい声がした。

「肝心の踊り場の窓が開かないんてな。想定外だよ」

「え……？」

俺は階段から悠々と降りてくる人間にかつ目する。

「和輝君！」

「あ、生きてたんだ」

「……香奈、それは無いよ」

階段を踏み外して転びそうになる和輝。

「和輝……お、おま、お前！」

「そうなんだよ。踊り場の窓、鍵が壊れてて開け閉め自由だったんだけど、今日見たら新しいのと交換されてるんだ。さすがに焦ったよ」

「そんなことじゃない！」

「だよな、非常時とはいえ学校の窓を割ったのは確かに許されない

よな」

冗談がこんなに心地の良いものだとは思わなかった。

「良かった…本当に良かった…」

水野さんの涙が、悲しみから喜びに、その色を変える。

「正臣も、泣いてくれたんだろ？」

俺は和輝が水野さんの方を向いているうちに、目に浮かんだ涙を拭ってしまおうとしたが、どうやら間に合わなかったようだ。

「泣くわけないだろ」

小躍りしそうな心を抑えて、強がって見せる。

「それよりさ、正臣。お前、香奈に謝れよ」

和輝は困ったような笑顔を浮かべて、俺の肩をたたいた。

「木の上からでも聞こえてたぞ、お前の声。ガラスを割るタイミングに困ったほどに」

「和輝君。そういうの、人が悪いって言うんだよ」

壁を支えにして立ち上がった水野さんが、笑いながらたしなめる。

「スマン。でも、続きが気になってさ。俺がいなくなったときのことなんて、普通自分には分からないことだろ？ だからつい、な。でも、水野さんの言うとおり、俺も人が悪かった。もっと早く俺が

生きてるってことを知らせれば良かったんだ。余計な問題起こさせたのは俺のせいだ。本当にスマン」

和輝を除いた三人に深々と頭を下げる。和輝の人の善さが見えた気がした。数多くある欠点を、全て長所で埋めてしまえるのが和輝だ。それは、人の善さでも悪さでも同じことだった。和輝が人から嫌われたりしないのも、頷けるというものだ。

「香奈……」

俺は服装を整える香奈に向き直る。

「さつきは……」

香奈の目を見ることが出来ない。勘違いとはいえ、相当なことをしてしまったのだ。香奈には、俺を断罪する正当な権利がある。俺はどんな罰も受ける。その覚悟を述べるため口を開こうとする。

……が、それは香奈によってさえぎられた。

「正臣は謝らなくていいんだよ。それに私は、正臣にならどんなことをされても平気だから。苦しいのも好きだよ」

胸倉をつかまれ、罵倒されたとは思えないほど朗らかな言葉。

「香奈さん……」

水野さんが驚いた表情で香奈を見ている。

「ま、香奈はこういう奴だからさ。そんなに驚かないでよ」

和輝に指摘された水野さんは、自覚していなかったのか、顔を粘土のようにこねて表情を整えている。

「それでも、ごめん。埋め合わせは必ずする。一方的に許されていいはずがないから」

俺は香奈に深く頭を下げる。

「おんぶ」

頭を垂れていた俺に回りこんだ香奈が、後ろから抱き付いてくる。

「だってさ、正臣。高くついたな」

肩をすくめる和輝。

「それじゃ、水野さんは俺が…」

「私は一人で大丈夫ですから。松葉杖もあるし」

背中を向けてひざまづいていた和輝が、水野さんの言葉を受けて静かに立ち上がる。背中には特大の哀愁が漂っていた。

「正臣、和輝がフラれてるよ」

「ああ、分かってる。みなまで言っな」

俺の首にぶら下がったままの香奈が、道端に落ちたゴミでも見つけたかのように言う。

「なんだろう……悲しくないのに目の前が曇って見える」

そう言った和輝の背中が、どんどん小さくなっていく。

「和輝、今は非常時なんだ。細かいことは気にしていられないだろ」

「正臣、おんぶ」

「お前は黙ってる」

いつまでもおんぶの態勢に移行してくれないのに業を煮やしたか、香奈がせがむ。

「いいな……香奈さん」

「水野さんも黙って」

松葉杖で足を支える水野さんを、俺は香奈とは違うトーンで遮断した。

「正臣……俺、実はいなくなっても構わなかったんじゃないだろうか」

「そんなわけ無いだろ！」

まただ。

今日の俺は感情の高ぶりがいつもより極端だ。水野さんはまた驚いてしまって、松葉杖を取り落としそうになる。

「分かってる」

種明かしでもするように、和輝から憂いが一瞬で消えた。

「正臣には心底感謝してる。俺がいなくなったとき、あんなに感情的になってるお前見たら……。あんなに嬉しかったこと、人生で一度も無かったからな。冗談でも、もう言わないよ」

「あ、ああ……分かって、くれれば……」

気恥ずかしい。

俺だってそんな台詞、誰にも言われたことは無い。

「和輝君、人が悪い」

水野さんに睨まれる和輝。

「水野さんはいつでも正臣の味方なんだもんな。それに気がつかない正臣も相当鈍感なんだが。香奈がいつもそばにいるんじゃ、麻痺しても当然か」

俺は松葉杖が凶器に変わる瞬間を、初めて見た気がする。

「和輝君！」

松葉杖を大回転させて和輝の脳天に叩き込む。図書部員の体力も、案外侮れない。

「おっと！」

和輝は間一髪で松葉杖を避ける。あのスピードを避ける和輝もたいたものだと思う。

「もう！ 本当に人が悪いんだから！」

水野さんは顔中真っ赤にして、そっぽを向いてしまった。

「おんぶ」

「……はいはい」

年少の子供の面倒を見ているような気分だ。俺は大きくため息をついて、香奈を背中に負ぶった。

「和輝、それでこれからどうする?」

和輝はあごに手をやって呻く。

「とにかく、先に出て行つた三人と合流しよう。なるべく大人数でいたほうが何かと便利なような気がする」

「だな」

「何より、お前の気にかかる睦月さんと合流しなくてはな」

「さ、みんな行こう」

「あの、どういふことですか」

さらりと流そうとした俺に、怒っていたはずの水野さんが食って掛かった。

「…か、ず、き?」

「悪いのはこの口だな。本当に悪い口だ、うん」

頬を引っ張って反省しているふりをする和輝。

「睦月さんはね、正臣が好きな人なんだよ」

「香奈の口も俺に負けず劣らずのようだな」

和輝が香奈の頬を引っ張ろうと手を伸ばすが、蠅でも追い払うように叩かれる。

「仔細詳しく聞きたいです」

「……プライバシーは？」

「ありません」

断言する水野さん。

「正臣、大変だね」

香奈が子泣き爺に思えてくる。……いや、女だから子泣き婆だろうか。

「ま、とにかく歩きながら、詮索なり追求なり、尋問なりすればいいよ。おそらく、あの三人は生徒会室にいますと思う。あそこは色々な物が揃っているから。今後の対策を立てるのに便利はずだ。三階の一番奥だから、化け物に気づかれにくいとも思う」

和輝がこの場をまとめるように階段に歩を進める。

俺も渋々香奈を背中に負いながら続く。

水野さんが付いて来れるように、いつものペースより遅く歩いている和輝の心遣いが羨ましい。

俺にはそういった甲斐性はない。

自然にそれが出来る和輝は、俺の憧れだ。

思えば、出会ったときからそうだった。

慣れない友人との会話でも、違和感無く話題を提供してくれるし、空気を読んで話題の転換をしてくれる。

さっきだって、水野さんと俺を背後から押してくれ、自分は危険を顧みず別ルートから合流しようとした。

誰にでも持ち得るわけではない自己犠牲精神。そんな自己犠牲精神が世界中にあれば、きっと世界は恒久的に平和になるのだろう。

和輝はずっとそうだった。

俺の一番の憧れなんだ。

「あの、聞いていますか？」

水野さんが俺の後ろから声をかけてきていた。

第七話・「何やってるんだろ……」

「ごめん、聞いてなかった」

「三回は言いませんから。その……正臣君の好きな人って、睦月さんなんですかって、そういう話です」

「……うん。そうだよ」

後ろからついてきているために水野さんの表情は分からない。

階段でおんぶをしたまま振り向くわけにもいけないので、俺は一步一步慎重に階段を上るのに終始するのだった。

「どこがいいんですか？　どんなところが、好きなんですか？」

「しいて言うなら、一目惚れ、かな」

「……恋する理由として、一番単純で、一番説得力のある言葉……。一目惚れ……か。お互いに何も理解してないのに好きになれるんですから……便利ですよね……」

「み、水野さん？」

鬱に入ってしまったいそうな水野さんの声音。

「いいんです。続けてください」

一瞬、何が続けるの、と問いかけそうになったが、俺は一目惚れの状況について問われているんだと合点して話を続ける。

「睦月さんを初めて見たのは、入学式のときだった。入学生代表として挨拶している凛々しい姿見たら、純粹にドキドキしてきてさ。会話すらしたことないのに、視界に入っただけで胸が高鳴って仕方が無くて。傍から見たらストーリーカーでしかないけどね」

俺は自分の虚しさに笑うしかなかった。

クラスが別になったというのも、会話ができない理由の一つとして挙げていたが、たとえ同じクラスになったとしても、ともに話せていたかどうかは分からない。しどろもどろになって悪印象を与えないだけマシかもしれない。

「だから、私、正臣に言われて、睦月さんに直接、『東城正臣のことどう思いますか？』って聞いてみたんだ」

「え……」

香奈の闖入に、水野さんが反応する。

「お前、そんな聞き方したのかよ！」

和輝が俺の大声に振り向くが、察してくれたようで、再び階段を上りだした。

「だって正臣、『それとなく俺のこと知ってるかどうか聞いてみてくれ』って私に言ったじゃない」

「それとなく、って意味分かってないだろ！　というか、それ以前の問題だろ！　こうなることを分かっていて、そう聞いたとは思えん」

香奈をこの場に放り出したい衝動に駆られるが、さすがに階段でそれは出来なかった。

「『東城正臣？　知らないわ』」

香奈が、おそらく睦月さんの真似をして言った。

睦月さんとは話をしたことが無いので、口調の正否は分からない。それがまた、彼女との距離を感じさせられ、やるせなくなる。

「言つなよ……結構堪えてるんだから」

「睦月さんにそう言われたんですか？」

「そうみたいだね、はは……」

我ながら乾いた笑い声だ。

「でも、好きなんだから仕方が無いよ。それだけは相手がどうであれ、関係ないことだし」

かすかな希望、とでも言えいいのだろうか。睦月さんが俺を好きでなくても、彼女を好きでいなければいけない。

万が一、睦月さんが俺を好きになったときに、俺の恋心がなければ、全てが無駄になってしまうはずだ。

……つくづくそんな自分が情けない。

「睦月さんは……そんなに出来た人ではないと思います。性格が悪いって言うし、高飛車で、高慢で、男関係がひどいとか、みんなに言われてるし……それに、彼女は顔だけだって……」

「水野さんにそんなこと言われたくない。そんな風に言われてるのとぐらい、俺だって知ってる。でも、だからって、目の前で好きな人の悪口を言われるのは……許せない」

「あ、正臣が怒った」

香奈の横槍をかわすのも億劫だ。

「どうしたの？ いつもの水野さんはもっと」

俺は努めて冷静に言っただつた。

「私の、何が分かるって言うんですか……」

俺は二の句を継げなくなった。

「私だって、醜いところあります。嫌いな人だっています。悪口だつて言いたくて仕方が無いんです！……でも、隠さないと生きていけないじゃないですか！嫌われないように隠して、偽って、やっと今の自分の位置があるんです！だから、学校での私がいつもの私だなんて、そんなこと……言わないでください！」

三階の廊下に響いた叫びに、俺は振り向かざるをえなかった。

水野さんは大粒の涙をぼろぼろと流しながら、松葉杖で自分を支えていた。

俺は言葉が出なかった。

触れてはいけないものに触れてしまったような気がした。

人が普段は隠している、敏感で傷つきやすい場所に、俺は土足で踏み込んでしまったのだ。

水野さんは、香奈をおんぶしたまま立ち止まる俺を通り過ぎて、和輝を追いかけた。生徒会室へはもうすぐだ。

和輝はあの大声を耳にしても、振り向こうとはしなかった。

俺を待つこともせずに、どんどん先に行ってしまう。

それは和輝なりの意図があつてのことなのだろうか。それとも、単に俺に失望したのか。

「正臣、私たちも行こうよ」

香奈が何事も無かつたかのような声で、俺の前進を促す。
水野さんの歩く姿が目飛び込んでくる。

松葉杖を使つて歩く作業は、思っている以上に力がある。俺は水野さんの前にいたから分らなかったけれども、水野さんはずっと人一倍頑張つて、努力して付いてきていたのだ。思うように動かない足に苛々しながらも、歩くために必死になっていたのだ。

「俺、何やつてるんだろ……」

自嘲だった。

第八話・「私の盾になって」

生徒会室に入ると、和輝の予想通り、先に逃げ出した三人がいた。各々椅子に座って、暗い表情をしている。

「とにかく、無事で何よりだ。適当なところに座ればいい」

生徒会長は俺たち三人を一瞥すると、つまらなさそうに告げた。

「正臣、座ろうぜ」

和輝に言われて、俺はパイプ椅子に腰掛けた。

当たり前のように香奈が俺の隣に腰掛ける。

長方形のテーブルを、四つ寄り合わせた出来合いの大テーブルの一番奥には、生徒会長が陣取っている。おそらく、定位置なのだろう。それに向かい合う形で睦月さん。

長方形の長い辺には、互いに三つ席が設けられており、俺たちは睦月さんの側から、香奈、俺、和輝の順に座った。香奈の向かいには水野さん。水野さんの隣は空席で、その空席の隣に佐藤という席割だった。

ちらりと水野さんに目を向けると、松葉杖を壁に立てかけているところだった。椅子に座るにもぎこちない様子で、見ていて心配になる。

ふと、目が合ってしまうが、二人で言い争ってしまった手前、バツが悪そうにすぐさま視線をそらしてしまう。

「……で、これからどうするかって、アンタたちが来るまで話し合ってたんだけど」

睦月さんが腕と足を組んで不機嫌そうに切り出した。

「睦月、順番が違っただろう。私は今来た三人を知らない。まずは自己紹介をしてもらうのが先決だと思うが」

生徒会長が睦月さんの発言を却下したことで、睦月さんは更に不機嫌になったようだった。

「勝手にすれば」

組んでいた腕をほどいて、つまらなさそうに広げる。多少大袈裟すぎるようにも見える。それだけ苛ついているのだろう。

「じゃ、俺から」

和輝が立ち上がる。

パイプ椅子のこすれる音が、静まり返った生徒会室に響く。

「永沢和輝、一年。部活動は」

「別にそんなことまで言わなくていい。最低限のことさえ知ればそれでいい」

生徒会長の無慈悲な言葉。

「そうね。知ったところで明日があるわけではないし」
「そんな……」

水野さんが思わず声を上げてしまう。

「本当のことじゃない。それとも明日があるとでもいうの？　こん

な状況で、元気よく登校？　ありえない」

水野さんの意気がしぼんでいくのが分かった。

「とにかく、永沢和輝です。よろしく」

和輝は事務的な口調になって、さっさと座ってしまう。座り際に小さく舌打ちしていた。

「東城正臣です。同じく一年です」

和輝と同じく最低限の自己紹介で座ろうとする。

「どこかで聞いたことある名前……。何だったかな。ま、いいか」

睦月さんが首をひねる。おそらく香奈に聞かれた状況を思い出そうとしているのだろうが、所詮俺に対しての記憶なんてそんなものだ。分かつてはいたけれども、現実には思い知らされるとなると、やはりつらいものがある。

俺は力なくパイプ椅子に体を預けた。

「中井香奈、一年」

ものの三秒もかからない自己紹介だった。

昔、香奈の本名を知ったときの俺と和輝の反応が思い出される。

前から読んでも、後ろから読んでも、なにかいかな。

失礼にも大笑いしてしまった記憶がある。

無論、そんなことをこの場で気がつく人間はいなかった。今がそういう時ではないことは皆が周知している。

「私の番ね」

颯爽と立ちあがる。

長い漆黒の髪がそれにしただって揺れた。

「私は、睦月雫。どうせ知ってると思うけど」

確かに、一年の睦月雫といったら、おそらく全校生徒が知っている。

美人であるということもそうだが、何よりスカウトの目にも留まり、芸能活動もしているというのが、一番の宣伝効果となっているからだ。

どっかりとパイプ椅子に座りまた足を組む。太ももが大胆に見えるぐらい大袈裟に足を組むものだから、俺は目が釘付けになるのを押さえつけるのに必死だった。

制服の上からでも分かるくびれたウエスト、一見華奢でありながらも存在を主張する胸、バレエダンサーのようにしなやかな足、シヤンプーの宣伝で見えるような、きめ細やかな髪質、黄金比と言っても過言ではない整った目鼻立ち。

それらは確かにテレビに映えるだろう。スカウトが見逃せないのも分かる。

「水野！ 夏美です……。スイマセン、一年です」

いつの間にか睦月さんに釘付けになっていた俺の視線が、水野さんの大声で引き剥がされた。

水野さんは、足を気遣いながらゆっくりと着席すると、表情を隠すように小さくなって顔を伏せた。

「佐藤達也……。一年です」

虫の鳴くような声で自己紹介をする。俺は名前が聞き取れなくて、和輝にこっそりと聞いてしまった。

最後になった生徒会長が、テーブルに手をつき、議場で発言する政治家のごとく自己紹介をする。

「三年、生徒会長の後藤俊史だ。よろしく」

眼鏡の真ん中を持ち上げ、全員を見回すようにして着席する。

「やっと終わったわね。で、話の続きなんだけど」

「ああ、これからどうするか。途中だったな」

「あ、あの、一ついいですか」

俺は意を決して立ち上がる。睦月さんには恨まれることになるだろうが、俺はこれだけは聞いておきたかった。

「正臣だっけ、アンタ。私、自己紹介が終わるまで待ってたのよ。更にそこから待てって言うの？」

テーブルに勢いよく手をついて立ち、不満を露にする。
いちいち大袈裟で芝居がかっている。

「悪いけど」

嫌われただろうな、そう内心でがっかりしながら、俺は睦月さんに頭を下げ嘆願した。激昂するだろうと覚悟していたが、睦月さんは思っていたよりもあっさり身を引いた。

「話せば？ 聞いてあげるわよ。ただし」

安心したのもつかの間、睦月さんは条件を出してきた。

「私の盾になって。いいわよね、それぐらい。男が女を守るのは当然だし」

「睦月さん……」

水野さんが信じられないといった表情で呟いた。

「……分かった」

「ハイ、決まり」

手を叩いて、盾の件を終了させる。

後は、どうぞ話さないよ、といわんばかりに手のひらを俺に差し出した。

俺は気を取り直して口を開く。

「俺は……俺と香奈は、学校に遅刻したから状況がよくつかめてないんです。体育館に着いてみたら、皆が飛び出してきて、先生があらんなことになっていて……。だから、分かるように説明して欲しいんです」

生徒会長は目をつぶったまま、俺の話に耳を傾けていた。

「いいだろう」

ゆっくりと目を開け、テーブルにひじをのせる。

そして、顔前で手を組むと、落ち着いて話し出した。

第九話・「情けない男」

「集会が始まるまでは、いたって平常の学校生活だった。ただ、集会が近づくにつれて体育館が閉め切られ、カーテンさえも閉められていった……」

生徒会室の窓から入る光で、眼鏡のふちがきらりと光る。

「生徒会長である私も、そんなことは聞いていなかったからね。疑問に思っただけで先生に尋ねたさ。しかし、先生方は無言のまま答えてはくれなかった」

「そうね、私も聞いていなかったわ」

「ああ、おそらく誰一人としてその理由を知っている生徒はいなかっただろう。生徒会長であるこの私でさえ知らないのだから、当然のことだが」

「……いちいち癪に触る男」

それは睦月さんも同じだ、と言える豪気な人間がこの場にはいない。

「真つ暗闇で光も無い中、私たちは待たされていた。そして、どのくらい時間が過ぎたか……感覚が鈍ってきたところで、ある異変が起こった」

口内に溜まった唾液を飲み込む。

「最前列の生徒から、悲鳴が上がった。やがて、それが暗闇も手伝って一大恐怖となって伝播し、体育館全体が恐慌状態と化した。私は壇上の袖にいたので詳しいことは分からなかったが……その点は

睦月のほうが分かるんじゃないか？」

髪の毛をいじっていた睦月さんも、話が振られたことが分かったところを見るでもなく話し始める。

「私も、最後尾にいたから、詳しいことは分からない。でも、前で悲鳴が上がったのは聞こえたわ。みんなパニックになって後ろに逃げて来るから、後列はもみくちゃ。最悪」

肩をすくめる。

「でも、みんなで『何かがいる』とか『殺される』とか。そんなことを口々に言っていたのは覚えてる」

何か、とはあの蜘蛛に似た怪物のことだろう。

「ああ、みんなで押し合いへし合いだったからな。暗闇で右も左も分からない中で……ほら、携帯が開くとディスプレイの光が漏れるだろ？ バックライト機能ってやつ」

和輝が自分の携帯電話を取り出して説明する。

「最初、暗くなつてからは、先生にバレるのが怖くて誰も携帯開かなかったけど、騒ぎになつてからは、そんなの気にしなくなつて、慌てて走って落したり、電話かけて助けを求めたりしてたから……。あちこちに携帯の光が灯つてさ、俺が夜目いいのも手伝つてその光だけで状況把握出来たんだ。そこに……あの化け物がいた」

「蜘蛛の形をしたあれね」

険しい顔の睦月さんが、蜘蛛の輪郭を手で描く。

「ああ。生徒の顔に張り付いて、触手のようなものを出して、首を絞めるんだ。そして……気絶したところで、無理矢理口を開けさせて、中に入っていた」

「中つて、口の中にか？」

和輝はうなづく。

「出てきたときには、成長してたよ」
「成長？」

皆が口々にその単語を繰り返す。
和輝は二度、神妙な顔でうなづいた。

「握りこぶし一個分の大きさしかなかった。口に入る前までは。それぐらいだったら、まだランチュラ程度だから、何とかなかったかもしれない。でも、しばらくして気絶した生徒の中から蜘蛛が出てきた」

全員が和輝の言葉を待つ。

体育館の中にいたといっても、全員が状況把握できていたわけではないから、この新事実にも固唾を呑むしかないのだろう。

「う……う……」

佐藤が耳を手で塞いだ。

体が震えだして、極度におびえているようだ。パイプ椅子を巻き込んで震えているのだから、相当な恐怖が彼を襲っているのだろう。そういう俺も、心臓が暴れだしていて、胸から飛び出してしまっそうだ。

「生徒の……その……腹から」
「わあああつ！」

佐藤がパイプ椅子を勢いよく倒して生徒会室から駆け出していった。

その発狂ぶりに、室内のほぼ全員が驚いて肩を震わせる。
ただ、香奈だけはいつもと変わらず平常心で、パイプ椅子に腰を落착けていた。

「な、何かと思えば。そんなことぐらいで逃げ出して……本当にアレっっているのかしら」

睦月さんが鼻を鳴らす。

「で、でも、私も……です。そんなところにいたなんて考えただけで……」

水野さんを見ると、制服のスカートを強く握り締めている。何とか逃げ出したい衝動をこらえているようだ。

「話すの、止めようか？」

和輝が水野さんを気遣う。

「何よ、怖いのか？ 女は度胸。それぐらい黙って聞きなさいよ。みっともない。だから男になめられるのよ」

斜め向かいに座る水野さんを挑発する。

「もういい、ここまでにしよう。正臣、水野さんを外に出してやれ」
「あ、ああ……」

和輝が話を打ち切ろうとする。
俺は自分が要望した話でここまでになるとは思っていなかったから、少し反応が遅れた。

「よかったわね。男に気遣ってもらえて」

明らかに人を馬鹿にした言葉。
いくらなんでも、言いすぎだ。

「睦月！」

思わず呼び捨てにしてしまう。

「何よ、盾のくせに私に物申そうって言うの？」

睦月さんは物怖じせず、見下すように話す。

「……や……めて」

「言っていいことと、悪いことがある」

「本当のことを言っただまじゃない。格好つけるのやめてくれる？
どうせ自分の言葉の責任も取れないくせに」

「責任ぐらい取れる！」

「止めてください！」

水野さんの目尻には、たくさんの涙がたたえられていた。

「正臣君も……睦月さんも……やめてください……。争いの止めて

ください」

「正臣、座れ」

和輝が俺の肩をつかんで、パイプ椅子に座らせた。

「泣けばいいってわけじゃないわよ」

口では文句を言いながら、バツが悪そうに着席する。

「和輝君、私……大丈夫ですから。続き、話してください」

「でも」

「いいんです。聞きたいです。話してください」

和輝は苦虫を噛み潰したような顔を見ると、一つ大きなため息をついて、中断した話を再開する。

ふと、生徒会長を見れば、こめかみを押さえて眉間にしわを寄せていた。

推測するところ、俺と睦月さんの口喧嘩が頭痛の種になったというところだろう。

香奈は香奈で、やはり興味があるのか無いのかわからない微妙な表情をしている。

俺が香奈の様子を気にしていることに気がつくと、視線を合わせて満面に笑みを浮かべて見せた。

「それで、蜘蛛が生徒の腹から出てきたところまで話したけど……」
「ああ、そこまでは聞いた」

生徒会長が眼鏡を外し、ハンカチでレンズの汚れを拭っている。
眼鏡を外した生徒会長は初見だが、かなりの美形だ。

欠点はいえば、目つきが鋭すぎて、人を寄せ付けない感じがす

るところだ。

「出てきた虫の大きさが、二倍ぐらいに大きくなってた。姿形はそのまま、大きさだけが二倍になっていたんだ。ちょうど、正臣が襲われたやつと同じぐらいの大きさだった」

先生の口が引き裂かれて、中から這い出てきた蜘蛛を思い出してしまい、気分が悪くなる。

「それで、また他の生徒を襲いだした。次々に……」

「化け物のやりそうなことね……」

忌々しそうに親指の爪を噛む。

「で、それは一匹だったのか？」

眼鏡をかけなおした生徒会長が、鋭い眼光を和輝に向ける。

「一匹であれば、すでに致命傷を負わせたはずだ。内容物を撒き散らして、もがいていたのを見たが」

「残念ながら、一匹じゃない。少なくとも、三匹はいた。暗闇で詳しいことは言えないけど、確実に見たのは三匹だった」

「そうか……」

腕を組んで思案にふける。考える姿が誰よりも絵になる生徒会長だ。

「でもさ、それ以上増えないんだったら、何とかなるんじゃないか？」

俺はかすかな望みにすぎる。

「馬鹿ね、そんなわけ無いでしょ。子孫を残そうとしない生物なんてナンセンス極まりないわ。そんな希望、すぎるだけ無駄」

「俺もそう思う。それに、俺たち生徒を襲い尽くしたんだ。三匹だけとは到底思えない」

和輝が睦月さんに同意する。

それを聞いた睦月さんは、俺を鼻で笑う。

当然よ、と言わんばかりだ。

俺の味方だと思っていた和輝の同意を得たことで、図に乗っているのは間違いない。

「最悪の可能性だが、それも視野に入れて考えなければならないな」

「なら……助けは呼べないのか？ 電話なんかで」

首を横に振る和輝。

「携帯電話は、どこに移動してもまるつきり電波が無い状態だった。最初は体育館の中だけかと思ったけど、学校内も駄目。機種も、メモリーカーも関係なかった」

俺は自分の携帯電話を開いて確認するが、やはり和輝の言うとおり電波が無い。圏内のはずなのに圏外を表示。

滑稽なのを承知で、角度、高さ、窓際、その全てで試してみたが無駄だった。

「ついでに言っておくが、固定電話も確認するだけ無駄だ」

生徒会室の固定電話を目に留めた俺を見越した言葉。

「そんなことって、あるのか」

「あるのよ、実際に。今、ここで。それが事実。受け止めるべき現実」

「でも、俺は学校に来てから、一度だけメールをした。香奈、そうだよな？」

「私、携帯持ってないよ」

バッグごと教室においてきたことを思い出す。

「もしそうだとすれば、送信時刻はどうだ。確認してみる」

携帯電話を開いて、メール送信時刻を確認する。

時刻を声に出して告げると、生徒会長は大きくため息をついた。

「集会が始まった直後だな。暗闇の中だったが、大体の時間は把握していた」

「正臣君、集会が始まるまで、携帯電話は普段どおりに会話もメールも出来ていたの」

「そ。途端に圏外になったのよ」

俺は、自分の席に座り、肩を落とすしかなかった。

「だから、自力で助けを呼ばなくちゃいけない。そういうワケ。理解してくれた？ 正、臣、君？」

睦月さんの馬鹿にするような言葉に、水野さんが唇を噛む。

「……ああ、分かった」

俺は燃えたぎる内側の炎に水をかけ、苛立ちを押さえた。

「これでやっと本題には入れるわね。情報は今ので私たちに追いついたんだから、少しはマシな意見出してよね」

前髪を弄ぶ。

俺には期待していないという意味の現われに思える。

「案は二つある。一つは、学校に残って助けを呼ぶ案。もう一つは、学校から逃げ出して助けを求めるかだ。先ほどまで話し合っていた結果では、逃げ出すほうが得策だ、という案で趨勢は決していたのだが」

「私も賛成。ここにも誰かが助けてくれる保証は無いし。第一、自分たちで動かなきゃ何も始まらないわ。私、そういう受身なのは嫌い」

「と、言うわけだ。何か意見はあるか？ 無ければそういう方向で決定するが」

話がまとまるうとしていた。

生徒会長の有無を言わせぬ凄みに、反対意見や質問を出すに出せない状況になってきている。

俺はその中で、あることに気がついてしまう。

「何度もすいません。もう一つだけ」

生徒会長は睥睨して頷くと、俺の発言を許した。

「ここから逃げ出すことは構わないと思います。俺も賛成です。でも」

思わず拳に力が入る。

「体育館には、もう生存者はいないんですか？」

生徒会室が静まり返る。

室内の人間の動きが止まったと言っべきか。

「それを聞いてどうする？」

「どうするって……生存者がいたら、助けるべきではないんですか。逃げるとか、助けを待つか、そういう以前に」

「そうか。それもそうだな。なら、助けに行けばいい」

眼鏡の奥に宿る不気味な光。

「ただし。賛成する者がいれば、だがな」

俺は周囲を見回した。

「まさか」

和輝は悔しそうに歯軋りし、香奈は相変わらず目が合えば微笑み、睦月さんは露骨に顔を背け、水野さんは俯いてスカートを握り締めている。

「……嘘だろ」

生徒会長に至っては、その炯眼で俺を焼き殺そうとするかのようだ。

「友達は？ クラスメイトは？ みんな今まで一緒に生活してきた

仲間のはずだろ」

俺は立ち上がる。感情が再び息を吹き返す。

「生きてるかもしれない、助けを求めてるかもしれない。それを置いて逃げ出そうなんて、そんなの間違ってるだろ！」

選挙活動のように周囲を見回し訴える。

「どこかに隠れて、俺たちが助けに来るのを待ってる奴だっているかもしれない！ 全員が化け物に殺されたなんて、そんなこと助けに行かなきゃ分からないだろ！」

俺は和輝を振り向く。

和輝なら。

「なあ、和輝！ そうだろ？」

「正臣……」

そこに俺は、一筋の曙光を見た気がした。

「正臣……座れ」

「和輝！ お前まで！」

雰囲気が違う。

「自分の言っていること、よく考えてみるよ」

「よく……考える？」

和輝は言うかどうか迷ってから、重々しく口を開いた。

「お前……逃げたろ。あの時……誰かを助けるとか考える前に、逃げ出しただろ。その証拠に、お前は水野さんを見捨てようとした。俺が声をかけていなかったら、水野さん、香奈を置いて先に逃げ出していたんじゃないか？ 違うかよ」

「それは……」

先生の口から蜘蛛が出てきて、俺は何とか和輝に助けられた。しかし、巨大な恐怖が、俺を逃避に駆り立てた。

水野さんの足が不自由なことなんて、頭に微塵も無かった。

「そんなお前が、何で今更、誰かを助けようなんて言えるんだよ。とつさに逃げ出そうとしているのに、本当に人を助けるなんて出来るのか？ 助けに行つて、俺たちの誰かが危険にさらされたとき、正臣……お前はそいつを助けられるのか？ 絶対に逃げ出さないなんて言えるのか？ 酷なこと言つてると思う……。確かに、俺だつて助けたい。正臣の気持ちも痛いほど分かる。だけど……」

「だつたら！」

「アンタ、こつち向きなさい」

睦月さんの声が俺を振り向かせた。

が、俺の視界は次の瞬間真っ白になる。

振り上げられた拳。

殴られた頬。

何が起こったかわからず、痛みでさえ理解するのに数秒かかった。

「……偽善者が、感情的になつてるんじゃないわよ」

不意打ちに尻餅について倒れ、壁に背中をぶつける。

「吐き気がするわ。こういう奴の言い草聞いてると」

「同感だな」

生徒会長の冷徹な一言が、俺の胸に突き刺さる。

加え、睦月さんに殴られた痛みと、吐き捨てられた言葉が胸を深くえぐる。

どちらも、泣き出してしまうぐらいの激痛だった。

「正臣、大丈夫？」

席を立った香奈が、俺のそばに座り込んで頬を優しく撫でる。

「情けない男」

睦月さんが吐き捨てる。

「相当、甘やかされて育てられたのね」

睦月さんの一言一言が正鵠を得ていて、そのたびに胸が痛む。

「よしよし。痛い痛い飛んでいけ」

香奈だけがそばで笑顔を浮かべ、俺を慰めようとしている。

俺はそれを振り切る男らしさも、強がって言い返す意志も持てないでいた。

それどころか、香奈の優しさを受けて、どうしようもなく甘えたという衝動にすら駆られている。

「何でこんな男に同情する女がいるのか、私には理解できないわ」

俺は床に視線を落とす。

今は誰の視線も見ることが出来ない。この場にいる全員の軽蔑の視線が、俺に突き刺さっているような気がしたからだ。

「睦月、それ以上は止めろ、時間の無駄だ」

俺は自分で罵倒を振り切ることも出来ずに、誰かに止めてもらっている。

どんどん惨めになっていく自分がいる。

「た、大変だ！ 殺される！」

外に飛び出していたはずの佐藤が、ドアを蹴破る勢いで中に飛び込んできた。

「なんだ？」

和輝と生徒会長が、異常を察知して席を立つ。

佐藤は呼吸が困難になっているようで、第一声がなかなか出てこない。

「何があつた？」

佐藤の肩をつかんで、和輝がその先を聞き出そうとする。

「みんなが……体育館から……出てきてる！」

「馬鹿な！」

生徒会長は冷静さを欠いて、生徒会室を飛び出していく。

「嘘、そんなことって……」

睦月さんもそれに続く。

佐藤は、俺のほうをちらりと見て何があつたか理解できずにいた。しかし、俺が再起不能であると即断すると、あわてて生徒会長の後を追つて、再び外へ出る。

「正臣、傷ついたんだね。大丈夫だよ、私が癒してあげるから」

和輝は佐藤が出ていったのを確認してから、俺に近寄ってくる。

「正臣、はつきり言つぞ」

和輝はいつに無く真剣な口調でそう切り出した。

「俺は……お前と香奈さえ助かればいいと思つてる。お前たち二人は、俺にとって一番の宝物だ。だから、他の人間がどうなつたつてかまわない。だけど、正臣と香奈だけは、命に代えても守ってみせる。だから、お前の案には賛成出来ない。みすみすお前を危険にさらすことは出来ない。分かつてくれ」

和輝は俺の肩をぽんとたたくと、そのまま状況確認のために生徒会室を出て行くこととする。

「水野さん……ごめん。俺はこんな奴だから」

悲哀が滲んだ和輝の声。

「うん……分かつてるよ……」

水野さんは涙を浮かべて和輝に笑いかけた。

「和輝君が……本当は、人が良いことぐらい」

和輝はピースサインをして、口元を引き締めた。

「宝物は任せて」

水野さんもピースサインで返す。

「頼んだ。おっと、香奈はこっち」

「私、正臣とずっと一緒にいる」

駄々をこねる。

「いいから、一人で二つは守れないから」

嫌がる香奈を無理矢理引っ張って、和輝の足音が生徒会室から遠ざかっていく。

生徒会室には、俺と水野さんが取り残された。

第十話・「約束だよ」

殴られた頬は、香奈のまじないが効いたのか、ひりひり痛むだけだ。

口の中を切ってもいないし、歯が折れたわけでもない。

思い返せば尻餅をつくほどのパンチだったかどうか怪しい。

あの時、皆が俺の意見を反対したことで、俺の心が折れてしまっていた。

だから、睦月さんのパンチでも、あれだけのダメージがあつたのかもしれない。

「正臣君……いい友達を持ってよかったね」

水野さんが足の痛みをこらえて俺の隣に座る。二人で壁に寄りかかる格好だ。

「私、あんなふうに言われたら感動して泣いちゃうよ、きっと」

水野さんの透き通るような声が、生徒会室に響く。耳朵をなめるような優しい声。

「私には、あんな友達いないな……。うらやましいよ、正臣君が」

包帯の巻かれた右足をさすりながら微笑む。

「足がちゃんと動いてくれたら、正臣君の言う通り、私もみんなを助けに行きたかった。本当だよ？ でも、私……このままだと、ただの足手まといにしかないから……。足の怪我だけに、足手まとい。すごい皮肉だね……」

涙声になりながら微笑む水野さん。

「ごめんね」

水野さんの心遣いが、胸に染み渡っていく。鋭く切り裂かれた心の傷を、優しく癒してくれる。

「謝るのは俺のほうだ……ごめん」

俺の謝罪に疑問符を浮かべる水野さん。

「今更だけど、階段のこと……」

「私も、ごめんね。正臣君が睦月さんのこと楽しそうに話すから……なんか馬鹿みたいに嫉妬しちゃって。それであんなこと言っちゃった」

小さな握り拳で、自分の頭をたたく。

「あれね、実は正臣君の真似なんだ」

「俺の真似？」

「うん、感情的になる真似。正臣君の長所でもあり、短所でもあるところ」

人差し指をピンと立てる。

俺は困惑していた。

「感情の赴くままに、生の感情をぶつけたの。そうしたら、心の中が晴れていった……。後悔も少しあったけど、心の中に隠していたことを全部ばら撒いたって感覚で、すっきりしたんだ」

そう言つて、水野さんは天井を見上げる。まるで青空の袂で伸びをするかのように。

俺はその拍子に水野さんの白い首筋が視界に入ってしまったて、大きく胸が高鳴る。

落ち込んでいるはずなのに、そういった欲望を露呈してしまう不純な自分が嫌になる。

「普段生活するうえで口に出してはいけないこと。言いたくても言えないこと。私たちはそういうものをひたすら隠して生きてる。私は、人に悪く思われなくて、ずっと本当の醜い自分を隠して、猫をかぶつて、当たり障りの無いように生きてきた……。それが当たり前だつて思つてた」

頭上にかけてある時計の秒針が、微かな音をたてて動いている。

俺と水野さんの時を、確実に刻んでゆく。

「……だから、我慢ばかりするようになって、一步引いたところで物事を考えていた。でも、正臣君を見て、思つたんだ。あんなに感情を正面に出して、本気で誰かのことを心配したり、非難できることつて、実は簡単には出来ないことなんじゃないかって」

見上げていた顔を戻して、俺の瞳をのぞいてくる。まっすぐな瞳で。汚れの無い純粹な瞳で。

俺はそんな水野さんの瞳に吸い込まれそうになる。

「和輝君、本当にうれしかったんだよ。香奈さんを責めちゃったのはいけないことだけど、でも、和輝君はすごく感謝してた。私も睦月さんのことで悪口を言っちゃつて、それを正臣君が本気になって叱ってくれて。嫉妬心もあったけど、この人は本気で言ってくれて

るんだなって、ぶつかってきてくれてるんだなって思えた」

怪我していない方の膝を立てて、そこに頬を乗せる。さらりと水野さんの髪の毛が流れた。

「感情的になるって、悪いようにしか聞こえないけど、人に正面からぶつかっていけるっていう長所でもあるって、わかった気がする」

薄紅色に頬を染めて微笑む。

「その……正臣のおかげで」

「水野さん、今……」

「あ、あれ？ 私、何か言っただかな。あはは……」

とぼけたふりをする水野さんが、手を顔の前ではたつかせる。恥ずかしいなら無理しなくていいのに。

そんな言葉が頭に浮かんだが、それは勇気を振り絞った彼女に失礼だ。

「……かまわないよ、俺は」

水野さんの動きが止まる。せわしく動いていた手も、顔の前で停止した。

「呼び捨てでも」

それを聞いて、目の前で止まっていた腕がゆっくりと下りて、水野さんは折りたたんだ膝に顔を隠した。

「……まさおみ」

顔を隠したままの水野さんがそつとつぶやく。

恥ずかしがる水野さんを見ると、こちらも恥ずかしくなってくるから不思議だ。

「まさおみ」

名前を言われるのがここまで新鮮に思えたことは無い。

和輝や香奈はともかく、水野さんに言われるということが、なぜか恥ずかしい。

「そう何度も呼ばれても」

俺は頬がむず痒くなるのを感じて、指で掻いた。

水野さんは、今度はきちんと顔を上げて、俺の名前を呼ぶ。

「正臣」

伝染した恥ずかしさは、体中に感染したようだ。

自分の名前を呼ばれるたびに、体が熱くなってくる。

「ストップ、もういいよ」

俺は水野さんに手のひらを向けた。水野さんは小悪魔のように笑い、あろう事かこんなことを言い出した。

「役割交換。今度は、私の名前を呼び捨てで、どうぞ」
「……な」

噴火する。

沸騰ではない、噴火だ。
それくらい顔から体まで全てが熱い。

「それは無理」

「香奈さんは、呼び捨てだよね」

「アイツは、そういう奴だから」

「しかも、香奈さんのことよくご存知で。アイツ、だって」

「……あの、水野さん？」

唇を尖らせて、すねるような仕草。俺は困ってしまって、次の言葉が思いつかない。

「……よし」

水野さんの声が聞こえた気がした。

「……水野夏美、いきます」

小さくつぶやいたかと思うと、急に顔を上げて、俺の顔を両手で固定した。

俺が現状を把握できないうちに、水野さんの唇は俺の唇に重なる。本当に一瞬の出来事だった。

泥棒、そう叫びたくなるほどの、一瞬の早業。壁に立てかけてあった松葉杖が床に転がった。数秒後、唇を離し真っ赤な顔で笑う。

「その……元気になるおまじないかな」

人差し指を立てて説明する。

「……香奈さんに、殺されちゃうね」

俺は返す言葉も、行動も無く、ただ呆然とするばかりだった。

「正臣！ 水野さん！」

和輝が血相を変えて飛び込んでくる。

「正臣！」

香奈も一緒だった。

「正臣？ ねえ、正臣」

香奈が俺の肩を激しく揺さぶる。

「な、なんだよ」

俺は放心状態から回復して、香奈をにらむ。

「正臣、悪いけど説明は後です。とにかく手伝ってくれ。水野さんは、ここにいて。香奈も、いいな？」

和輝が矢継ぎ早に指示を出す。

「正臣が行くなら、私も行く」
「駄目だ」

和輝の表情が本気だ。

俺は事の重大さを認識し、立ち上がろうとする。

「……正臣」

水野さんが俺を呼ぶ。立ち上がる俺の手を握りながら。

「次までに名前が呼べるように練習しておくよ」

「……うん、約束だよ」

水野さんは安心したように微笑み、手を離す。

俺は和輝のようにピースサインを試してみた。

少しだけ強くなれる気がした。守らなければいけない大切なものを再認識した気がした。

水野さんも、和輝にしたのと同様のピースサインを俺に返す。

和輝はそんな俺と水野さんを見守るように表情を緩めたが、すぐさま引き締める。

「行くぞ」

「正臣、私も行く」

「頼むから、ここにいてくれ」

和輝が懇願する。

香奈は頬を膨らませて抗議するが、香奈のわがままを和輝は許さなかった。

第十一話・「狂ってる」

「ああいうときは、俺が言うよりも、正臣に言ってもらったほうが、香奈はおとなしくなるんだよな」

生徒会室を出た俺と和輝は、廊下を走り出す。

「でも、少しはお前たちの間に入り込みたくてさ。正臣には任せなかった。分かるだろ？」

「あ、ああ」

訳も分らず生返事をしてしまう。

「そういうわけなんだよ」

和輝が俺を鈍感だと言ったが、早急に自覚する必要があるそうだった。

「それはそうと、正臣、落ち着いて聞けよ」

三階の廊下に二人の足音が響く。

「死人が、歩いてる」

俺はそれに問い返すことが出来なかった。

一瞬、往年のゾンビ映画を思い出してしまったからだ。

蜘蛛の化け物に襲われたときから、現実はずでに現実ではなくなっている。しかし、現実ではなくっているにしても、これはあまりにも突飛過ぎる。映画の撮影でも行われているのではないかと、

逆に陽気に考えられてしまっただ。

「今、生徒会長たちが、バリケードを作ってる。何とか奴らの進行を防ぐために」

和輝が二階に続く階段を駆け下りずに、踊り場までジャンプする。ふざけていたとはいえ、不意打ちに近い水野さんの松葉杖の攻撃を回避するだけはある。

俺はもちろんそんなことは出来ず、二段飛ばして駆け下りるのが精一杯だ。

二階まで降りると、そこには机を大量に持ち出した生徒会長と、睦月さん、そして佐藤がいた。

容赦なく一階の踊り場に投げ込まれる机。

踊り場には、机と椅子、教卓が一緒くたになって積まれている。

「ここはもういい！ 東城と永沢は反対側だ！」

手伝いに来た俺と和輝を、怒号が出迎える。

生徒会長は、眼鏡がずれるのもかまわずに、机を運び込んでいる。

「さっき、向こう側に移動していくのを見たんです！」

椅子を持った佐藤が、声を裏返して叫ぶ。

額には大量の汗が噴き出しており、制服は机の脚に付着した赤錆で汚れてしまっている。

「分かった。正臣、行くぞ。反対側だ」

俺はきびすを返す。

途中、俺を殴り飛ばした睦月さんとすれ違う。

佐藤よりも椅子を多めに持って、大またでこちらに向かってくる。女らしい睦月さんのどこにこんな力が隠されているのか、不思議だった。

「しばらく立ち直れないと思ったのに、案外元気ね」

すれ違った俺の背中に聞こえた声に、俺は急停止してしまう。

「こっちはもうすぐ終わるから、手伝いに行くわ」

重労働で乱れてしまった髪を揺らす。俺が立ち止まっているのを分かっているのか、それだけ言うと、バリケード建設現場に戻っていく。

「正臣！ 早くしろ！」

俺は、睦月さんのすらりと伸びた背中を目に焼き付けて、和輝に続く。

制服、髪、肌が汚れるのも構わず尽力する睦月さんを見ているだけで、励まされているような気分になる。

それは俺の勝手な妄想に過ぎないのだろう。

だが、確かに励まされた俺がいる。

受身が嫌いで、自分から行動することを厭わない、睦月さんらしい行動。

自分の運命は、自分で切り開くんだ、という強靱な意思が、その背中からは見て取れるような気がした。

「よし、運び出すぞ」

俺は踊り場に手近な教室に飛び込んで、机を持ち上げる。机に入

っている教科書やノートは、全部教室にぶちまける。筆箱は音を立
てて落ち、ふたが外れた。教室に転がったシャープペンシルを踏み
潰しながら運び、ノートには上履きの足跡がつく。

外に出ると、すぐさま踊り場に向かい、階段の上から机を放り投
げる。

学校内では考えられない轟音が響き渡った。

普段なら、驚いて教室から生徒が飛び出してきたり、先生が目を
丸くして駆けてきたりするだろう。

「正臣、次だ、次！」

同じく机を運んで踊り場に放り投げた和輝に、背中を叩かれる。
和輝は腕をぐるぐる回しながら、次の机を求めて教室に入っていっ
た。俺も続いて教室に舞い戻ろうとする。

「……た、す……ケテ」

それはクラスメイトの声だった。
踊り場から声が聞こえてくる。
聞き覚えのある声に、俺は涙が出そうになる。

生きていたのだ。

「……良かった、本当に良かった……」

俺は机を運ぶのを止めて、階段を下りる。踊り場に転がっている
机をどけて、うつぶせになって倒れているクラスメイトに近付いて
いく。

俺の机の隣に座る女の子だった。

普段からあまり会話する間柄ではなかったが、時々隣から大きな

笑い声が聞こえてきてびつくりしたことがある。ソフトボール部に所属していて、少々がさつな印象があった。

俺はそんな平和だった頃の学校生活を思い出しながら、彼女、加藤さんを助け起こす。

手にどろりとした感触。

助け起こした加藤さんの腹部が、真っ赤に染まっていた。本来の色を失い、赤い制服かと思えるほどの出血。

「加藤さん！」

俺は加藤さんに呼びかける。

「タス……け、て？」

加藤さんの目が俺を捕らえる。口がパクパクと金魚のように動き、体中が痙攣を繰り返している。

「大丈夫、もう大丈夫だから」

俺は加藤さんに言い聞かせるように繰り返した。

言い聞かせるものの、加藤さんの症状は改善されない。

それどころか、痙攣は次第に酷くなっていく。筋肉という筋肉が全て爆発してしまいそうなほどだ。

俺は痙攣で暴れる加藤さんの頭を、腕から落としてしまう。

踊り場に、加藤さんが頭を打つ鈍い音が響き渡る。

すると、加藤さんの痙攣がぴたりと止んだ。

「か、加藤さ」

俺は信じられなかった。

重症に見えた加藤さんが、次の瞬間、勢いよく立ち上がったのだ。俺は片膝をついたまま、加藤さんを見上げる。

加藤さんの腹部からは、なおも出血が続いているようで、血液は太ももを伝い、ハイソックスに染み込んでいく。

「タ……ス、タス……タス、け……」

加藤さんの目が、ぎょろりと俺を向く。眼球が飛び出しそうだ。

「……か、加藤さん？」

加藤さんの口元から、よだれのように血が流れ出す。いや、よだれではない、嘔吐だ。

量が尋常ではない。

加藤さんが言葉を話すたびに、うがいに似た音がする。腕が俺に伸びた。

両手を俺に伸ばして、つかもうとしてくる。

往年のゾンビ映画で見る前傾姿勢のように。立ち上がったばかりの赤ん坊のように……。

加藤さんの手が、俺の顔に到達した。

そう思えたとき、加藤さんは飛んできた机の角に頭をぶつけて吹き飛んだ。

机は音を立てて俺の前に転がり、加藤さんは勢いよく窓を突き破って、半身を外に露出させた。

「正臣！ そいつから離れろ！」

「そいつ？ お前、加藤さんに何をしたか分かってるのか！」

和輝が階段を慌てて下りてくる。

片膝をついたままの俺の腕を強引に引き上げ、壁に押し付ける。

「割り切れよ！ 分かるだろ！ 俺たちを除いて、もう生きてる奴なんかいない！」

「和輝……」

和輝の息が荒い。

「助けを……求めてるんだ」

「助け？ だからか？ だから助けたのか？ 助けたお前が殺されるとしてもか！」

窓ガラスを突き破った加藤さんが、ゆっくりとガラスから半身を引き抜く。机をぶつけられた頭はくぼみ、血が沸き出している。顔面に滝のように赤が流れ、直視できない。見ても嘔吐感がこみ上げるだけだ。

「加藤さん……」

俺は茫然自失で、名前を呼ぶので精一杯だった。

和輝は、壁に押し付けた俺から手を離し、加藤さんに対峙する。俺をかばうようにして。

加藤さんが和輝に腕を伸ばす。和輝はその腕を取るなどという生半可なことをせずに、跳躍して加藤さんの顎に蹴りを放つ。加藤さんの首筋があらわになるほどそっくり返り、仰向けに倒れこむ。

顔を染めていた血が、飛び散って踊り場の壁に飛散する。壁に付着した血は、重力に引かれて真っ直ぐな筋を作った。

「た……スケ」

加藤さんのつぶやく声が聞こえる。
俺はいまだに信じられない。

「和輝、お前……！」

肩で息をする和輝の背中。

「正臣、割り切れよ。もう生きている奴なんかないんだ。惑わされるな。皆死んでる」

和輝が仰向けに倒れた加藤さんに近づいていく。口をパクパクさせて血を噴き出す加藤さんの顔の前に立つと、バリケードに使うはずの机を持ち上げる。

何をするというのか。

「止めろ、和輝。加藤さんは生きてるんだぞ」

和輝が机を高々と持ち上げる。

「和輝、止めろ」

俺は加藤さんがそうしたように、和輝に腕を伸ばす。
かすかな望みにすがりつくように。

「た……ス、け？」

加藤さんが眼球をきよろきよろと動かす。卵から生まれる直前のメダカのように。

和輝の腕に力が入るのが見える。

鉄槌が振り下ろされようとしていた。

俺は、体が思考よりも先に自然に飛び出すことを知る。

「アンタたち、何やってんのよ!」

睦月さんの、叫びにも似た声がほとばしった。

俺はコンマ一秒の速さで、加藤さんに覆いかぶさっていた。

他人が見たら、きつと加藤さんを襲っているように見えただろう。

「正臣……どうしてだ?」

背中に叩きつけられた机の威力は、俺が今まで生きてきた中でも三本の指に入るのではないかという痛みだった。

激痛が背中から広がっていく。

「何で分かってくれない!」

和輝が吼える。

机を投げ出し、頭をかきむしる。広げた両手には、かきむしりすぎて抜けた髪の毛。

「俺はお前を守りたいんだ! 助けたいんだ!」

「……なんなの、これ」

俺と和輝を見比べて、状況を判断できないでいるようだ。しかし、俺がかばっている人間を見て豹変する。

「死ぬわよ、アンタ」

俺を冷酷な瞳で見つめる。

「…………スケ…………て」

加藤さんが俺に語りかける。背中痛みで泣きそうになる。でも、俺は加藤さんを守ることができた。その価値に比べれば、この背中の痛みなんかたいした問題ではない。

「助けたいんだ！ 分かってくれ！ 邪魔をしないでくれ！」

泣きそうな声で狂ったように訴える和輝。和輝のこんな醜態は今まで見たことがない。

「俺だって、助けたいんだ…………加藤さんを。まだ生きてるんだ」

「何言ってるの？ それ、化け物よ」

「そうじゃない、生きてるさ…………ほら…………」

加藤さんが小刻みに震えだす。俺は、なだめるように加藤さんの頬を優しくなでる。

まだ温かい。

頬も、頬を伝う血も、確かに暖かいのだ。

「狂ってる」

俺を、まるで化け物でも見つめるような視線で見下す。

「狂ってるのは、どっちだよ…………」

俺は、痛む背中と折り合いをつけて立ち上がる。交渉は難航したようで、激痛が俺の表情を歪めさせた。

「何で……そうも簡単に割り切れるんだよ……」

俺は握りこぶしに力を入れる。

「同級生だろ！ 学校生活の仲間だろ！」

睦月さんが唇を震わせる。

「昨日まで、昨日まで一緒に生活してきたのに、なんで殺せるんだ！」

和輝が、俺の言葉を聞かたびに、苦しそうに頭を抱え込む。頭痛にもだえ苦しむようだ。

「そんなのおかしいだろ！」

「救いようのない偽善者」

睦月さんの瞳が鋭くなる。

これは敵意だ。蜘蛛の化け物に向けるそれと同じ。

「……ケ、てテテ、て」

加藤さんが再び痙攣を繰り返す。

「化け物のくせに」

睦月さんが、壁に設置してあった消火器を取り出す。

睦月さんの視線は、痙攣を繰り返す加藤さんに注がれている。加藤さんが起き上がる気配はない。腹が膨れたり、へこんだりを繰り返す。

返しているだけだ。

「正臣、何騒いでるの〜？」

階段から、身を乗り出すように踊り場をのぞいてくる香奈の声。場違いな明るい声に、その場にいた全員が我を失う。

香奈は小走りに階段を下りると、階段の手前で何かを手招く。

「ごめんなさい。その……大声が聞こえて、それで……心配になつて」

香奈の手招いた先から、松葉杖をついた水野さんが恐る恐る顔を出した。

第十二話・「……どうして」

「香奈、あれほど言ったのに、お前……」

和輝が廃人のようにつぶやく。

「だって、正臣がいなくて寂しいんだもん」

「あの、違うんです。私が……その……正臣が心配だから、って無理言って」

水野さんが香奈をかばう。

「こんな男のどこがいいのか」

消火器を持つ睦月さんが、敵意を持ってつぶやいた。

「……か、加藤さんの……？」

水野さんの声で、全員が加藤さんに注視する。

加藤さんの腹が、ありえないほど極端に膨らんだ。そして、膨らんだまま動かなくなると、それは制服の中を蠢き、真っ赤な足を露出させた。

血で染まった、節のある灰色の足。

加藤さんに動きはない。指一本動く気配なく、口も半開きのままだ。

制服から体を完全に露出させたのは、先生の口から出てきたのと同様の蜘蛛だった。形は同じだが、一回り小さい。

蜘蛛は、三つある目玉をぐるぐると回すと、口から出ていた触手をしまって跳躍した。

周囲確認、捕捉、捕食。

まるで一連の動作のような、手馴れた素早さだった。

幸い、避けられないスピードではなかった。俺と和輝は、体をさばいて回避する。捕食に失敗した蜘蛛は、そのまま血塗られた壁に張り付き、また一連の作業を繰り返す。

そして、あるうことか、階段の上にいる三人に狙いを定めた。

俺から見て、左に睦月さんがいる。右には香奈、その後ろに水野さんがいた。

蜘蛛の狙いは右か、左か。

睦月さんが、迎撃しようと消火器を構える。つぶらな瞳が、敵愾心に染まった。

「香奈！ 逃げろ！」

和輝の叫喚が、鼓膜を振動させる。

蜘蛛は睦月さんの気迫に押されたのか、右、香奈のほうに飛び掛った。

香奈はそれに反応できない。

「香奈！」

和輝の叫びが、再び鼓膜を揺らす。

その叫びが届いたのか、蜘蛛は香奈に取り付かなかった。狙いが甘かったのか、香奈の首元を掠めただけで、香奈には触れもしなかった。

しかし、俺は戦慄する。

蜘蛛は香奈を素通りしたかわりに、水野さんのスカートに取り付いていた。

恐怖のあまり身動きできない水野さん。

蜘蛛はスカートの生地を引っ掛けるようにして、器用に水野

さんの顔へ向かっていく。

水野さんの顔が恐怖に歪む。

スカートから、腹、そして胸へ、蹂躪するように上ってくる。その勢いにのまれたのか、水野さんは仰向けに倒れこむ。

松葉杖が廊下に転がった。

「嫌！ いやあああああつ！」

水野さんの顔をがっちりと六本の足でつかんだ蜘蛛は、器用に残りの二本の足で水野さんの口をこじ開ける。

「水野さん！」

俺は、背中の痛みに耐えて駆け出す。

「いやあああああつ！ 正臣 ！」

蜘蛛を手で引き剥がそうとするが、蜘蛛は離れない。

水野さんの顔の皮膚に食い込む足。

足を固定させている場所からは、水野さんの血が流れる。

俺の鼓動が加速する。

大切な人の血。

俺に笑いかけてくれた人の血。

助けを求めている。

しかし、階段を登ろうとする足の動きが突然鈍くなり、俺は前のめりに転んでしまう。

……足が震えていた。

蜘蛛は助けようとする俺など気にする様子もなく、こじ開けた口に尻の方から体を押し込んでいく。軟体動物のように関節をあらゆる方向に曲げて、水野さんの口腔に体をうずめる。

俺は震えて動かない足を叱咤するが、やはり思うように動いてはくれなかった。

走り出そうとするが、すぐに転んでしまふ。足が走ろうとしていない。

蜘蛛の恐怖におびえるように。

死にたくない、行くな、と俺に語りかけるように。

……蜘蛛が見えなくなった。

水野さんは、蜘蛛が口に入った後、少しの間、俺を不思議そうに見つめて、こう言った。

「……どうして」

助けてくれないの？

俺の視界が真っ赤に染まった。

水野さんは、その直後、口から血を吐き出して動きを止めた。数秒後、ゆっくりと立ち上がる。

機械のようなぎこちない動きで、関節を動かしている。歩く水野さんの脚が、転がっていた松葉杖を蹴った。

包帯の巻かれた足で、しっかりと地面を踏みしめている。右足、左足。

一步、一步、確実に歩いている。
本来なら感動する場面のはずなのに。なぜ、こんなにも悲しいの
だろう。

「マ……さ、オ……ミ……」

水野さんが涙で見えなくなる。

「サ……オミ、ま……？」

ゆっくりとこちらに手を伸ばし、近づいてくる。口から湧き水の
ようにこぼれる血で、制服や、スカート、右足の包帯が真っ赤に染
まっている。

「……」

睦月さんは無言のまま、手に持った消火器を振り切った。

「やめろおおおおっ！」

俺はあらん限りの声を振り絞る。

慈悲もなく、消火器が水野さんの後頭部を直撃した。

廊下に倒れこむ水野さんがまだ動いていることを知ると、睦月さ
んは落ちていた松葉杖を拾い、階段の手すりに叩きつけて壊す。松
葉杖の一部だった板を選別すると、先端の鋭利さを確認する。

「残念だけど」

それは俺に言ったようだった。

睦月さんは水野さんの心臓に、板を突き立てていた。

「……ま、お才、三」

俺の名前の一部分を使った断末魔。紅に染まる左胸。

体中に血を供給する場所を突いただけあって、湧き水のように滾々と血が噴き出す。

悪魔に止めを刺す主人公。

映画のワンシーンのように、それは現実味に欠けていた。

それよりも、生徒を殺す生徒という構図が、そもそも現実から剥がれ落ちていく。

睦月さんは、微動だにしない水野さんの顔を横に向ける。しばらくすると、そこから蜘蛛が這い出てきた。それを、待ってましたとばかりに踏み潰すと、タバコの火を消すように廊下にこすり付ける。

睦月さんの足のサイズに納まりきらない蜘蛛の足が、土踏まずから飛び出していた。

「何があった？」

生徒会長と佐藤が、バリケード作業を終えたのか、反対側から走ってくる。つぶさに状況を理解したのか、眼鏡を指で持ち上げると、冷たい瞳を水野さんに向けた。

「どうせ足手まといになるのだから、遅かれ早かれ、結果は同じだっただろう」

今すぐ走って行って、生徒会長の胸に、水野さんに突き立っているものを刺してやりたかった。刺し殺してやりたかった。

「……香奈じゃなくてよかったよ」

俺の横を和輝が通り過ぎる。俺にはまったく目を合わせようとしていない。

俺は、這うようにして水野さんに近づいていく。

そつと頬をなでると、加藤さんの時のように、まだかすかに温もりがあった。血のにおいに混じって、水野さんの甘いにおいがする。

「アンタが、彼女を殺したのよ」

言いたいことは分かっていた。

「臆病で、何もできない、口だけの偽善者が、彼女を殺したのよ」

加藤さんは確かに生きていた。ただし、蜘蛛に操られる形で。

「アンタ、いざとなったら私を盾にするんじゃない？」

加藤さんをかばったせいで、結果的に水野さんに被害が及んだ。生きている人を助ける。

俺は正しいことをしたはずだった。なのに。

「契約解消。言うまでもないけど」

加え、いざというときに足を動かすことができなかった。

俺は怯え、すくんでいた。

和輝の言った通りだった。

「睦月、反対側のバリケードは完成した。早急にこちらも作成する

ぞ」

生徒会長は、人の死など気にも留めなくて、睦月さんに指示を出す。

「分かってるわよ。いちいち指示しないで」

睦月さんの歩いた後には、蜘蛛の体液で作られた足跡が残る。困ったようにため息をつき、生徒会長も教室に向かっていった。

「ひ、人殺し」

佐藤が、俺を大きく迂回するように、生徒会長についていった。詳しい事情を知らない佐藤が睦月さんの台詞を聞けば、そう思われなくても仕方がない。

「正臣」

香奈が俺を背中から抱きしめる。

「私は絶対、正臣を残していなくなったりしないよ」

涙が、頬を伝って水野さんの頬に落ちる。血だらけだった頬を洗い流すように。

「俺……は……俺は……」

どうして助けてくれないの？

「俺は……見殺しに……」

彼女は助けを求めていた。俺を頑なに信じていた。きっと助けてくれると……。

だが、自分が蜘蛛に侵入されたと知ったときの、あの絶望の表情は。俺に向けたあの目は。

そう、彼女は。

信じていた者に裏切られたのだ。

「泣かないで、正臣。泣かないで」

香奈が俺の頭を撫でる。我が子をあやす母親のように。

「……夏美……夏美……」

守ることができなかった大切な人と、最悪の形で守られた約束。俺は、償うようにずっとその名前を呼び続けるのだった。

第十三話・「仕方がなかった」

階下からは、昨日までこの学校の生徒だった人間の声が聞こえる。完成したバリケードを引っかく音や、叩く音、それらは止むことなく継続的に耳に入ってくる。

背中痛みは、いつの間にか消えていた。

身体的な痛みよりも、精神的な痛みのほうが勝っていたから、感じる事ができなかったかもしれない。

あのあと……俺は水野さん　夏美を机と椅子のなくなった自分の教室に運び、胸で手を組ませ、ハンカチを顔の上にかけた。

心臓に突き刺さった板を抜くと、そこからは夏美の中を流れていた血潮があふれ出した。夏美の体から板を引き抜いたときの感触。それは、本当に人間に刺さっていたのか、と疑いたくなるくらいあっさりと抜けた。

俺の手は、夏美の返り血で真っ赤に染まる。

やがて流れ出る量も少なくなると、夏美の体は急激にその色を変え、今では蠟人形のように、教室の中心でぐっすりと眠るばかり。キスをしたら起きるのかな、なんて馬鹿な想像をした瞬間、また目から涙が落ちた。

俺は教室のロッカーに寄りかかり、膝を抱えている。

「正臣……」

甘えるような声が聞こえた。

香奈は俺の膝にまたがると、ゆっくりと顔を近づけてくる。俺は膝を抱えることができなくなり、手のやり場に困った。

対して香奈は、俺に愛しそくに微笑みかけ、曇りのない瞳を、ま

ぶたの裏に隠す。

……香奈の唇が、俺の思考を奪った。

顔の角度を変え、積極的に舌を俺の舌に絡めていく。

吐息と吐息が混ざり、唾液と唾液が混ざり、俺は混沌の中へ落ちていく。

求め、触れ合えば、確かに悲しみは薄れる。快樂の前では、思考は無力だから。

薄目を開けると、そこには夢中になって舌を絡める香奈の顔。

香奈がこんな夢中になることなんて、今までにあっただろうか。誰と接していても、どこか距離を置くようにして、積極的に交わろうとしない。

でも、断ることもしない。誘うこともしない。だから嫌われもしない、好かれもしない。

常に微笑を浮かべているから、人は香奈に悪い先入観など持たなかったし、発言もほとんどしないから嫌味も言われなかった。

でも、俺と和輝には違った。

初めて香奈が俺に話しかけてきたときのことを思い出す。

和輝と他愛無い会話で盛り上がっていたところに、突然香奈が寄ってきた。俺と和輝は会話を中断し、香奈を振り向く。

近くにいてもいいですか？

今のように呼び捨てで呼び合うような仲ではなかったから、俺と和輝は耳を疑うばかりだった。お互いに頬をつねったりして、現実を確かめたりもした。特別好かれるようなことをした覚えもなかった。

ただ、一つ思い当たることがあるとすれば。

それは、雰囲気。

俺と和輝の。俺と和輝は、こんなにも気の合う人間がいるのかというほど気が合った。毎日楽しくてたまらなくて、二人でいつも笑ってばかりいた。

太陽のように笑う俺たちの近くに居ること、自らを照らして欲しかったのかもしれない。闇夜に浮かぶ月のように。

でも、俺は和輝と居るほうがずっと楽しかったから、香奈を避けようとしていた。香奈が混じると色々制約があるし、身動きもとりにくかったから。

俺は香奈を避けていた。

でも、それでも香奈は俺に寄ってきた。

嬉しそうに、愛しそうに……。

香奈が唇を離す。

つぶらな瞳を持った童顔が、俺に甘えたそうに笑う。

「……もっと。正臣も」

駄々をこねるように、香奈はキスを要求した。

俺は何のためらいもなくそれに応じる。

現実とか、助けるとか、守るとか。

そんなもの全て忘れてしまいたかった。

俺を好きでいてくれる人。その好意を受け止めてしまえばいい。

慰めてもらえばいい。

楽になれる。苦勞せずに。ただ受け取ればいいだけだ。こんなに楽なことはない。

俺は行き場をなくしていた手を、香奈の背中に回した。香奈は嬉しそうに呻き、キスは激しさを増す。

これでいい。

俺は、これでいいんだ。

頑張った。十分頑張ったはずだ。
だから、楽になったっていい……。

どうして助けてくれないの？

耳元で誰かがつぶやいたような気がして、俺は目を開けた。
そこにはハンカチを取った真っ赤な夏美が立っていて、包帯の巻いてある足を引きずって歩いてくる。

どうして助けてくれないの？

胸から血を流しながら、俺に手を伸ばしてくる。

どうして助けてくれないの？

俺は香奈を引き剥がしていた。

「どうしたの？ 正臣」

「こんなこと、駄目だ……」

夏美は、やはり教室の中心で眠りにっている。ハンカチも顔にかかったままだ。

一方で、胸の辺りで組ませた手が解け、教室の床に片手がついていた。

「……助けたかったんだ」

「正臣？」

「助けたかったんだ。助けようとしたんだ！ でも、助けられなかった！……足が動かなかった。怖くて、怖くてどうしようもなかったんだ」

止まっただけの涙が、また流れ出す。

「守りたかったんだ！……加藤さんも夏美も……みんな、みんな、救いたかったんだ……」

「でも、正臣はできなかった」

俺は香奈に視線を合わせる。

「正臣、無理しないで。できることだけすればいいんだよ」

天使のような微笑を浮かべる。

「正臣ができることを。正臣ができる範囲で、正臣なりにやればいいんだよ」

「香奈……」

「和輝も、それが分かっているから、正臣を救おうとしたんだよ。大事な人だけを」

宝物を守ると言った親友の顔。夏美に謝った親友の顔。

「正臣には守れなかった。加藤さんも、水野さんも。正臣にはできないことだったんだから、仕方がないことなんだよ」

香奈が俺の頭を愛撫する。子供をなでる母親のように。優しく、ゆつくりと。

「仕方がなかった……？」

甘い蜜のような言葉。

「うん、だから、正臣は悪くない。悲しむことなんてないんだよ。正臣にはできないことだったんだから」

香奈の言葉がすんなりと俺の耳に入ってくる。まるでそれが心理であるかのように、俺の心の中に定着していく。それは、まさに麻薬だった。

「仕方がない……」

「うん。正臣は悪くない」

香奈は笑いかける。悪意の欠片もない、完全なる笑みだ。

「好き。ずっと一緒だよ」

冗談と決め付けて相手にしてこなかった言葉を、俺は心の底から欲しがっている。

誰一人として、俺を信じてくれなかった。

偽善と罵られ、睨みつけられてきた俺。そんな俺をずっと信じ続けてくれた人、香奈。

俺は、彼女を欲している。

それがたとえ甘えから来たものでもいい。

今、この瞬間、俺を受け止めてくれる人がいる。

だから、俺は香奈だけを守る。香奈だけを守ればいい。他に何もいらない。俺にできることはそれだけだから。

仕方がないんだ。仕方がないことなんだ。

俺は自分に言い聞かせる。

心の奥底で悲鳴をあげる過去の自分を押し殺して、俺はその上に新たな自分を刷り込んでいく。

誰に文句を言われようとかまわない。それが自分のできる範囲だ。

俺はもう、香奈以外誰も助けない。誰も助けなくていいんだ。

周囲のものなど切り捨てればいい。それができなければ、香奈でさえ失うかもしれない。加藤さんを見捨てて、夏美を助けていれば、少なくとも夏美は助かっていたのだから。

それが最善。

犠牲を最小限に、効果は最大限に。

それが人間だ。

一人の人間のために、百人が犠牲になることはない。迷わず、一人を見殺しにすればいい。

それが俺にできる範囲だ。俺のなさなければいけないことだ。

……心がきりきりと痛む。

過去の自分を捨てしまえばいい。罪悪感で俺を苦しめる過去の自分なんて、捨ててしまえばいい。そんな過去の精神など、必要ない。

「……俺も」

加藤さんのことも、夏美のことも、仕方がなかったんだ。そう思うしかない。思うしかないんだ……。

「好きだよ、香奈」

俺は、いまだに痛む心に鍵をかけようとした。

「正臣……お前、何してるんだよ」

香奈と口付けようとする俺に割って入る形で、声が飛んだ。見れば、和輝が教室の入り口に立っている。

「何をしてるかって、聞いているんだよ」

心が痛い。鍵をかけることはできなかったようだ。でも、確実に奥へと押し込むことはできた。

「正臣は、私と」

「香奈には聞いてない!」

見たこともないような和輝の表情だった。泣いているような声、しかし、面は鬼の形相だった。

「正臣!」

「……悪いな」

和輝が大またで俺に近付き、強引に香奈を押しつける。香奈が尻餅をついて、小さく不平をもらした。

「痛いよ……」

和輝はそんな香奈には目もくれずに、俺の胸倉をつかんで立たせると、そのまま、顔を詰め寄せさせる。

「正臣、悪い、って何だよ。何が悪いっていうんだ?」

俺には香奈が必要なんだ。香奈がいなければ、俺は一人だ。和輝でさえ、加藤さんを助けることに反対した。

俺は和輝とともに生徒会室を出たときの事を思い出す。

あのときは、和輝の言葉を理解できなかった。

でも、今なら理解できる。

俺にとって香奈は必要だ。

失う怖さを知ったとき、俺は和輝の気持ちに気がついた。そう、俺の味方だとずっと思っていた和輝でさえ、結局は香奈が目当てだ

ということに。

「香奈を取られて、悔しいんだろ？」

「お前……！」

「俺と香奈を宝物だつて言ったこと、覚えてるよな？」

「……覚えてる」

和輝が俺をいぶかしむ。

「結局それって、香奈が俺を好きだから、仕方なく、なんだろ？」

胸倉をつかむ力が強くなっていく。

「俺がいなくなったんじゃ香奈が悲しむから、仕方がなく俺を助けるんだよな？」

和輝の瞳の色が失望に染められていく。

「はつきり言えよ、和輝。香奈が好きなんだよな」

「ああ……だからどうした」

「俺は香奈が、好きだ」

和輝がつかんでいた手を離す。そして、振り上げられた右腕は、唸りをあげて俺の右頬をとらえた。

俺はロッカーに背中をぶつけるが、倒れることだけはこらえなければならなかった。

この痛みをこらえなければ、自分の意思を貫き通すこともできないように感じたからだ。

香奈が、殴られた俺のそばへ駆け寄ってこようとするが、俺はそれを右手で制す。

ロッカーに手をついて体勢を立て直し、和輝の鋭い眼光を受け止める。

「正臣、睦月さんのことはどうでもいいのかよ」

和輝の言葉に、心の奥底に抑えたはずの気持ちが震えだす。

「あんなに好きだって……お前、言ってただろ」

「正臣は、私のことが好きなんだよ、和輝」

「香奈、正臣を見てるなら分かるだろ。こいつは、お前を慰めても
らえる道具としてしかみてない」

香奈の純真な笑顔は、なおも輝く。

「みてないよ。正臣は、私のことが好きなんだよ。ね？」

和輝と香奈が、俺の動向に感覚を傾ける。

「ね、正臣？」

だが、俺は揺れだして止まらない心と、折り合いをつけるのに必死だった。鍵をかけそこねた心の奥。刷り込んだ意識が押し返されそうになる。

「正臣？ そうだね？」

香奈が俺の袖を引いた。

「正臣、ね？ 正臣」

引く回数が増すにつれて、その力は強くなっていった。

「正臣！」

「あ、ああ……そうだよ」

慌てていた。声が裏返りそうになるのを押さえるのがやっとだった。

第十四話・「この痛みがなくなったら」

「正臣、お前……！」

「俺は、香奈が好きだ。香奈は俺が守る。和輝は自分だけ守ればいい。簡単だろ？」

自分が自分でなくなる。

冷静に、客観的に、俺は自分が何を言っているか分かっていた。

この言葉を言うことで失うものが何かも。

香奈が好きだ、と口に出すことで、俺は自分の気持ちを押し通そうとした。決して後戻りができないように、退路をふさいだ。

もう進むしかない。それがたとえ、茨の道でも、間違った道でも。

「香奈、ずっと一緒だ。これからも」

「うん！」

和輝の手がわななく。

憎しみを込めた拳が繰り出された。ロッカーに寄りかかるようにして立っていた俺は、体重を沈めることで和輝の拳を間一髪でかわす。よけると思っていなかった和輝は、拳をロッカーに打ちつけた。ロッカーを叩く乾いた音が、教室に響く。

俺は和輝の横に回りこむように移動し、上体を低く構えた。

ロッカーを凹ませるほどの力が込められている、和輝の徒手空拳。その憎しみ、怒りの大きさは計り知れない。

「正臣……心底、お前には」

「悪かったな。こんな奴で」

和輝の右手指から血が滴る。赤みが差し、震えている。

「いまなら、まだ」

和輝がかすかな望みにすぐるように、握力を緩めようとする。だが、俺はそれを許さなかった。

「戻る気はない。もう戻れない。それに……お前が言ったんだぞ、和輝」

「ああ……そうだ。俺が言ったんだっただな」
「俺は、割り切ったんだ」

和輝に突進する。低い体勢で和輝にタックルし、腰をとらえた。和輝は、教科書やプリントの散らばる床に腰を打ち付ける。俺はそのまま和輝の腰にまたがり、マウントポジションから、和輝にこぶしを振り上げた。

「俺は！」

和輝の頬にこぶしをめり込ませる。
至近距離からの打撃は、確実に和輝にダメージを与える。人を殴ることの痛み。殴られた側も、そして、殴った側もそれ相応の痛みを伴う。

俺の拳は悲鳴を上げた。

硬質と硬質、骨と骨、心と心。

俺と和輝は互いの心と体を削りあっている。

「お前に！」

……憧れていた。

誰よりも身近だった。誰よりもわかりあえた。これからずっと

親友だと思っていた。

歳を重ねても、離れ離れになっても、ずっと、ずっと。

親友だと思った。

「ふざけるなよ……」

目を腫らした和輝が、自由になっていた足で俺の背中を蹴り上げる。後頭部に痛打を受けた俺は、和輝に覆いかぶさるように体勢を崩す。

それを和輝は見逃さなかった。

素早く身を翻すと、今度は逆に俺の上にまたがろうとする。俺はそれが分かっていたので、前のめりの体に更に加速をつけて前転し、和輝と距離をとる。

だが、距離をとるという油断が、その後の展開を大きく変えた。

床に膝をついたまま振り向いた俺は、油断から、目前まで接近した和輝に気がつくことができなかった。腰に受けた机のダメージもまだ抜けてはいない。

俺は、立ち上がるのにさえ手間取ってしまう。

結果、和輝の膝をこめかみに受けてしまった。

脳漿が破裂したかのようなのだ。右の頭蓋に入り込んだ衝撃が、左の頭蓋から飛び出す。

視界が二重三重に分裂し、意識が体から抜け出ていきそうになる。手をつくこともできずに、床に落ちていく。

追撃は、すぐに来た。

和輝が、床に横向きに倒れた俺の腹部を蹴り上げようとする。

その様がスローモーションのように見えた。サッカーボールを蹴るかのように足を振り上げる。

ゆっくりと動く時間の隙間に、和輝の顔が見えた。

和輝は、何でこんなに悲しそうな顔をしているんだろう。

憎悪をこめるべき相手なのに。想い人を最悪の形で奪われたのに。何で、こんなに悲しそうな顔をして、俺を痛めつけようとするのだろう。

そうか……そうだった。俺は分かった。和輝が……。

「止めて！」

和輝君が……本当は、人が良いことぐらい。

夏美の涙交じりの声が、聞こえた気がした。

「止めて。正臣が痛いのは、私も痛いんだよ」

俺をかばった香奈が、和輝の足蹴りを受け止めた。和輝の足を抱きしめるように、つかんで放さない。バックスイングを得た足蹴りは、相当重かったはずだ。

女の子なら泣き出し、立ち上がれないくらい強烈なはずだ。

「止めて、和輝」

香奈は笑顔だった。痛いなんて表情には出さない。多少咳き込んではいるものの、笑顔を崩そうとはしない。

和輝は愕然としているようだった。香奈の腕から足を引き抜くと、そのまま何も言わずに教室を出て行ってしまふ。

しばらくして、遠くからガラスの割れる音が聞こえた。
和輝の悲痛な咆哮が、廊下に響く。

「正臣、大丈夫？」

頭痛がひどく、香奈の声が遠くに聞こえる。幽体離脱でもして、自分で自分を見下ろしている気分だ。現実感が薄れていく。

「正臣？」

波のように寄せては返す痛み。痛みにまぶたが閉じそうになるのをこらえて、瞬きをする。

そこに広がる教室の風景。

遅刻者が慌てて教室に入ってきて、友人に舌を出しておどける。
女子生徒は、リーダー的役割の女子の席に集まって、隣の高校の美男子の話で盛り上がっている。

夏美は、加藤さんと次の授業の準備。

どうやら加藤さんが宿題をやったことがなかったらしく、夏美のノートを丸写しにしているようだ。

香奈は相変わらずの笑顔で、自分の席に置物のように座っている。
香奈の視線の先には俺と和輝。お互いに肩を叩き合って、涙を流し、腹を抱えながら笑いあっている。

担任の先生が入ってくると、慌てて自分の席に戻り、全員が教卓に目を向ける。先生が大きな声で朝の挨拶をすると、生徒全員が、それぞれの声量で挨拶を返す。

みんなの笑顔がまぶしい。

……瞬きをする。

そこに広がる教室の風景。

机も、椅子も、教卓もない代わりに、机から放り出されたノートや教科書、プリントの残骸が、乱雑に散らばっている。壊れた筆箱の中身が散乱し、プラスチックの下敷きには、蜘蛛の巣状のひびが入っている。

俺が持ってきた香奈の携帯も、捨てられたように床に転がっていた。

そして、教室の中心には夏美が横たわり、顔にはハンカチ。生涯切れるはずないと思われた俺と和輝の絆も、あっけなく切れてしまった。

そこには、誰の笑顔も、声も、姿もない。

「正臣？」

涙がとめどなく流れる。

戻すことのできない、大切な時間。大切なもの、大切な人。もう、何も残っていない。

「正臣、痛いのか？」

「俺は……失ってはいけないものを……たくさん失ってしまった……もう二度と取り戻すことのできないものを……」

いつまでも続くと思った学校生活。いつまでも続くと思った楽しい時間。

「割り切ることは、そういうことだよ。楽になれたでしょ？ 正臣がずっと背負ってきた重荷を、下ろすことができたでしょ？」

自分も痛いはずなのに、笑顔で俺を抱きしめる。二人横になって、抱きしめあう。

「これで、もう苦しまなくていいんだよ。自由になったんだよ、正臣」

枯渴することのない涙腺。滂沱として流れていく雫。

「この痛みがなくなったら、きっと正臣は強くなれるよ。だって、割り切れたんだもん」

香奈を強く抱きしめ、俺は泣き続ける。
涙でこの教室が見えなくなるまで……。

第十五話・「正しいのかな？」

夢を見た。

子供の頃の夢だ。

俺がまだ、小学校の低学年だった頃の夢。

空を飛んだとか、人魚に会ったとか、そんな奇想天外な夢ではなく、過ぎし日のリフレインだった。

当時は誰よりもやんちゃで、何をするにも率先して行動していた。発言もし放題だったし、悪戯盛りでもあったから、俺はよく先生を困らせていた。我慢するということを知らず、おもちゃ屋の前で駄々をこねて両親を困らせる、なんてことは日常茶飯事だった。

そんな俺でも、両親は飽くことなく愛情を注いでくれ、結局は必ず欲しかったおもちゃを買ってくれた。だから俺は、自分の思い通りにならないことなんてないと思っていた。

わがままを言えば、駄々をこねれば、すべて自分の望み通りになると。

そんな自分主義の俺なのに、周囲から嫌われなかったのが、今でも不思議でならない。持ち前の明るさと、指導方針を間違わなかった両親の賜物だろう。

正しいことをしなさい。

おもちゃを買い与えるとき、両親は必ずそう言った。小さなときから、ずっとそう言われて育ってきた。成長するにつれて、それがいかに難しいかということに気がついたが、それでも善悪の判断だけは敏感だった。

人はどうして、当たり前のことをできないのだろう。

悪いと分かっていることを平気でするのだろう。

声には出さないまでも、念じるだけで怒りがこみ上げてきた。上級生にタバコを勧められたとき、俺は未成年者だから、ということ、断固拒否した。両親が泣くのが分かっていたし、自分の主義に反したからだ。上級生からは、いい子ぶりやがって、と嫌味を言われたが、俺には重要ではなかった。

正しいことをした、という自負があったから、胸を張って生きてこれた。

俺は両親に寵愛され、不自由なく、自分の思い通りに生きてきた。正しいことが好きだったから、規則に忠実で、模範生徒だった。当然だ。当たり前だ。俺は間違っていないはずなのに……。

臆病で、何もできない、口だけの偽善者。

睦月さんにそう言われたところで夢が覚めた。

涙が固まって目を開けることができなかった。目をこすって何とか涙の欠片を取り除くと、抱きしめていたはずの香奈がいらないことに気がつく。横になったまま教室をぼんやり眺めると、香奈はすぐに見つかった。

転がっていた自分の携帯電話のディスプレイを、真剣に見つめていたのだ。

普段から笑顔の香奈にしては、貴重な真顔だった。

「正臣、起きたの？」

夕焼けを通り過ぎた教室は、もはや薄暗い。香奈の笑顔がかるうじて見えるくらいだった。

「起こしてくれても、よかったのに」

頬が痛んだ。口を動かさなければ痛くなかったので、気がつかなかった。

和輝との殴り合いが、現実であることを再認識させられる。

「正臣は疲れてるから。休んでおかないと」

香奈は微笑みながら、制服のポケットに携帯電話を入れる。

「いまさら俺のメールでも確認してたのか？」

「うん。確かに受け取ったよ」

「でも、もう必要ないだろ。連絡できないんだし」

「そうだけど、正臣の思い出も詰まってるから」

香奈は満面に笑みをたたえた。それが疲れた心を癒してくれた。

「もう薄暗いな」

俺はストレッチをしながら、蛍光灯のスイッチに近づく。思った以上に痛みが引いていることに驚く。若いということ自体が武器である、と誰かが言っていたのを思い出した。

「あれ……」

「どうしたの？」

「いや、電気がつかないんだ」

オン、オフを幾度となく繰り返すが、蛍光灯はうんともすんとも言わない。

「他の教室は……」

俺は教室を出て行こうとするが、香奈に止められた。

「他の教室も同じだよ。それに、ほら」

左手に持った懐中電灯を見せる。

「お、準備がいいな」

「もつと褒めて」

香奈が猫のように擦り寄ってくる。俺はそんな香奈が愛しく思えて、抱きしめる。

「俺が、香奈を守るから」

「うん」

香奈の手が、俺の背中に回る。俺の胸に顔をうずめる香奈。

残り少ない太陽の光が、教室をほんのりと照らす。窓から侵入した光は、教室全体を照らすことはなく、床をわずかに切り取るだけだ。

夜が近い。

「そうだ正臣、これ見て。何だと思う？」

思い出したように俺の胸から脱出して、香奈は床に落ちていた袋を取る。その袋には見覚えがある。

「備品入れる袋だろ。ホチキスとか、パンチとか、ハサミとか入れる」

「うんうん、まさにその通り」

香奈は嬉しそうに頷くと、その中をまさぐって、ハサミだけを取り出した。

「これから、正臣の髪の毛を切ろうと思います」

「今から？」

「うん」

「ここで？」

「うん」

「こんなときに？」

「うん」

香奈がいちいち丁寧にうなづく様子が、とても微笑ましい。

「はい、よだれかけ」

「よだれかけって……。もっと別の言い方があるだろ。それじゃ俺が赤ん坊みたいだ」

「男はいつまでも赤ん坊だよ」

意味深な発言だ。

「それに正臣だって、赤ん坊でもないのに泣いていたでしょ」

「お前、それは……」

遠慮もなく笑顔で言われてむっとする。

俺にとってあれだけ悲劇的だった出来事が、香奈の中では赤ん坊のそれと同様に思われているのだろうか。

ふいに出そうになる反感を抑える。

「それより、座ってよ」

「……分かった。床でいいか？」
「いいよ」

俺は床にあぐらをかくと、香奈に渡されたよだれかけを首に巻く。このよだれかけは、ジャージを裁断して広げ、適当につなぎ合わせたものだ。つなぎ目がホチキスの針というのも、多少無理がある。しかし、落ちてくる髪の毛を受け止めるには、十分な大きさだった。

「短くなりすぎないように、頼むぞ」

朝の会話が思い出された。香奈が玄関前に座っていた朝を。思い返してみると、朝から日常から逸脱していたように感じられる。

遅刻して、香奈がいて、予告のない集会があつて……。

「それじゃ、切るよ」

香奈がハサミを動かして、嬉しそうな声を出す。

膝を床に着いた香奈は、俺の髪がある程度つかんで、勢いよく断髪していった。俺の長く伸びた髪の毛が、目の前を雪のように落ちていく。ジャージに降り積もったそれをつまんで、親指と人差し指ですりつぶすと、まとまっていた髪の毛が、一本一本になって落ちていく。

香奈の鼻歌が聞こえる。

一昔前に流行った曲で、カラオケでよく歌った覚えがある。音痴な和輝には、笑わされてばかりだった。

思い出が、また俺の涙腺を緩ませようとする。

割り切ったのだから、もう思い出す必要などないのに。

あいつはもう、俺の親友だった和輝ではない。今は、ただの他人だ。

「正臣、和輝のことを考えているでしょ？」

心臓が破裂するかと思った。

「駄目だよ。割り切ったんだから。いざというとき、正臣自身を滅ぼすことになるよ」

「あ、ああ……分かってる」

「加藤さんのことも、水野さんのことも、睦月さんのことも、私以外みんな他人。考えるだけ無駄だよ。過去なんていらぬ。私との今と、未来だけあればいいんだよ」

「……それが、割り切るってことなのか」

「うん。正臣は割り切れたんだよ。そうでしょ？」

「……ああ」

すつきりとしぬ肯定。

「できることだけをする。それを妨げるだけの過去なんて、いらぬんだよ」

「……できることだけ、か。……香奈、それって」

俺は短くなつた前髪を確認する。

「正しいのかな？」

香奈のハサミの動きが止まる。

俺はそんな大層なことを聞いたと思えなかつたので、動きが止まつたことに驚いた。

「割り切ったはずだよ、正臣。正しいとかそういうことは、もう意味がないよ」

正しいことが意味を成さない。心の奥が震えた。

「それより、少し短くなりすぎたけど、このくらいでどう？」

「……俺の言ったこと、理解してないだろ。むつ……」

睦月さんに俺のことを尋ねた件もそうだった。

そう言おうとした口を止めていた。割り切ったのだから、過去を持ち出してはいけない。決めたはずだ。割り切ると……。

「ま、まあ、いいんじゃないか。頭が寒いけど」

上手く誤魔化せただろうか。

俺は髪の毛の感触を確かめながら立ち上がる。

「かつこいいよ、正臣」

自分の思い描いた俺にすることができて、満足げな香奈。どうやら何とか誤魔化せたようだった。

「そ、そうか？」

俺は手鏡を香奈から渡され、自分の姿を確かめる。

すでに周囲は日が没していて、懐中電灯片手での確認だった。

見慣れない自分に多少の戸惑いがあるが、慣れるまでの辛抱だ。

「それにしても、暗いな」

教室を見渡す。窓の外はすでに闇の中だ。虫の声一つ聞こえない、完全なる闇の空間が広がる。その中で、バリケードを叩く音、引つく音、音が継続して聞こえ続けている。知能が低く、バリケードを取り除くことができない、ということが分かってからは、ただ耳障りなだけで、恐怖感は薄れ始めている。

俺は、懐中電灯を何気なく窓の外に向けてみた。

「なんだよ……これ」

懐中電灯の光が、校庭を輪郭の乏しい楕円形に切り取る。

校庭には、一般人が歩いていて。一人ではない、十数人、いや、何十人だろう。

そこから予想できることは、すでに学校外にも被害は広がっているということ。学校に閉じ込められた俺たちに気がついて助けに来てくれる、ということも、すでに望みが薄いということ。

「外に逃げても、これじゃ……」

悪態をつく。

食料もないこの現状では、飢え死にが関の山だろう。

短髪になった頭をかきむしると、完全には払拭できなかった髪の毛がばらばらと落ちた。

「正臣は大丈夫だよ」

香奈が、俺の背中に触れたときだった。

地響きのような音に続いて、鼓膜を引き裂くような金属音が、バリケードのある方向から聞こえてきた。

第十六話・「死にたくない」

俺が教室から廊下に飛び出すと、様子を見に来た生徒会長たちと遭遇した。

上の階から来たことを見ると、生徒会室にいたらしい。

俺と同じく懐中電灯を持った生徒会長が、俺の顔を照らす。

「生きていたのか」

喜びも何もない言葉。

「光をどける、鬱陶しい」

俺は生徒会長に直射していた懐中電灯を下ろす。生徒会長の横には和輝がいた。

「……和輝」

和輝の姿を見て、俺は心に痛みが走る。

和輝は気まずそうに俺から視線をそらして、バリケードに向き直った。

「何の音なんですか……これは。誰か、誰か知ってますか？」

佐藤がおろおろと周囲の人間を見回す。

「知るわけがないだろう」

佐藤は生徒会長の背中に、ぴったりとついていく。腰巾着という

言葉が、頭に浮かんだ。

「泣き寝入りしているかと思えば。髪の毛切ったのが原因？　だいぶ甘えてすつきりしたの？」

馬鹿にするように投げかける睦月さん。

「それとも、卑猥なほづのすつきり？　偽善者さん」

腕を組んで見下してくる。尊大な態度は相変わらずだ。

俺は言い返してやろうと思ったが、止めた。相手にすれば、割り切ることができなくなる。

「無視？　弱い人間がよくやる手段ね」

「黙れと言ってるのが分からないのか！」

生徒会長の大声に、近くにいた佐藤が肩を震わせる。

「よく言えるわね、臆病者の癖に」

生徒会長の眉毛がぴくりと動く。

「睦月、貴様……上級生に逆らうのか？」

「貴様？　漫画でしか聞かないわね、その台詞」

止まるところを知らない睦月さんの悪態に、生徒会長は手を振り上げた。暗くてよく見えていないのか、睦月さんはよけることもできずに、頬に平手打ちを受けた。

乾いた音が闇に溶けていく。

「フン。手を挙げれば服従するとても？　これだから男は」

睦月さんは健在だった。

折れた様子も、衝撃を受けた様子もない。一体どんな精神力をしているのだろうか。

こんな時、夏美だったら、泣きながら二人止めるだろう。

……だが、夏美はいない。よって、止める者もない。

俺は首を横に振った。考えるな、割り切れ。そう念じた。

一触即発の雰囲気は、和輝の一言で破られた。

「やめてくれ。今はそんなことをしている時じゃない」

「そ……そうですよ。やめてください」

和輝の後ろに隠れるように、佐藤も声を出す。ただし、声量は虫のようだった。

言い争っている間にも、謎の物音は大きくなっていく。

そして、次の瞬間、バリケードの一部だった机が、こちらに向かって飛んでくる。

俺と生徒会長の間を飛んでいく机。

よける必要がなかったのが、救いだった。

どんな贅力を込めて投擲されたものなのか。階下の踊り場から投げられた机は、一直線に廊下の天井にぶつかって、転がった。

机の行方を追っていた俺。

落ちた机の脇には、非常ベルの不気味な赤い光が揺らめいている。暗闇に浮かぶ赤は、さながら人魂のようだった。

「……お……カア、さん……」

男の声。

漆黒の闇に包まれた踊り場から、声が聞こえた。バリケードが破

壊されたと考えていいだろう。机を軽々と投げるほどの力を持った何か。それが、今、俺たちの目の前にいる。

「……か、あ？ ……サン」

俺は恐る恐る懐中電灯を向けた。光は階段を照らし、そして、踊り場にたたずむそれを照らし出した。

「ひい」

佐藤の悲鳴。尻餅について、あとずさる。

異様な姿をした男子生徒。

上半身には数え切れないほどの蜘蛛を張り付けている。あまりの数に制服など確認もできない。男子生徒だと分かるのは、スカートの有無だ。

張り付いた蜘蛛、その全てが激しく蠢き、膨大な数の触手を口から伸ばしていた。蜘蛛の足同士が触れ合う不気味な音。それが、あの金属音の正体だ。

「……か……アサ……？」

うつろな右目だけが、びっしりと張り付いた蜘蛛の隙間から、かろうじて確認できる。その目が、恐怖を口走った佐藤を捕らえる。

「……い、いやだ……死にたくない……」

異常なほどに膨れ上がった腕。それに似合わない普通の足。膨大な蜘蛛を携えたその生徒は、もはや人間ではない。

蜘蛛が持つ三つの目玉が、真紅に光りだす。暗闇でもはつきりと輝く何百という目玉は、さながら死神のようだった。

「……さん？ ……かア……」

重い上体を揺らしながら、階段を登ってくる。真っ赤な光点が揺れる方向に尾を引いた。

「なによ……これ」

豪胆な睦月さんも、例外ではなかった。

尻餅をつくことはなかったが、顔が青ざめている。

生徒会長は眼鏡がずれ落ちているのも気がつかず、腰を抜かしていた。

立っていられたのは、階段の手すりのおかげだ。

「逃げるぞ……」

「……賛成」

睦月さんが和輝に賛同した。俺は香奈を背中に隠すように移動した。

「ありがと、正臣」

この最悪の状況で嬉しそうに笑うことのできる香奈。そういう無神経さが、俺には理解できない。

「逃げるのには、賛成。でも、その前に……試してみないと分からないじゃない」

「馬鹿か！ 勝てるわけないだろ！」

戦闘行動を取ろうとする睦月さんに、和輝が、信じられない、と

いったように叫んだ。

「……死にたくない……死にたくない……」

佐藤は廊下の端に身を寄せて念仏を唱えている。もはや立つこともできないようだった。それでも、何とか逃げたそうともがき始める。はいはいをする赤ん坊のように、敵に背を向けて反対側の廊下へ這っていく。

「おい！ 私を助ける！」

腰を抜かして立てない生徒会長が叫んだ。眼鏡を落としかけて、あわててキャッチし、改めてかけなおす。

眼鏡がないと何も見えないのだろう。

眼鏡が落ちたときの慌てようは、すさまじかった。そこに、普段の怜悯な生徒会長の面影はない。

懐中電灯すら取り落とし、それは怪物のほうに転がっていく。怪物はそれを踏み潰して、階段を上ってくる。

周囲を照らす光が減少した。

「滑稽ね」

口の端を吊り上げて嘲笑する睦月さん。

「貴様ああああ！」

血管が切れるのではないかというほどの怒号。口からつばを飛ばし、睦月さんを殺すように睨んだ。それでも、睦月さんは生徒会長の怒号など、どこ吹く風だ。和輝が舌打ちをして、生徒会長を立ち上がらせる。

直後、化け物の大木のような腕が動いた。

自らの体に張り付いている蜘蛛を掴み取る。つかまれた蜘蛛は、その体を丸めて、動きを止めた。

化け物にも、蜘蛛を取り除こうという意味が存在するのだろうか。

……だが、そうではなかった。

両手に持った蜘蛛を、あろうことか俺たちに投げつけてきたのだ。この場にいた誰もが、化け物の予想外の行動に、反応できない。化け物の右手から放たれた蜘蛛は弾丸と化し、睦月さんの右足を直撃する。

続いての二投目。

睦月さんは持ち前の運動神経で身を捌く。投擲された蜘蛛は、そのままのスピードで廊下のガラスを突き破り、外の暗闇に飲まれていった。

「……殺してやるわ、絶対に」

硬質の皮に覆われた蜘蛛の威力。それは、廊下に足を着く睦月さんが証明している。

睦月さんを襲った一投目の蜘蛛は、地面に着地すると同時に足を広げ、個別に俺たちを襲いだした。

間髪入れない第二波。よけられることを見越しての二次攻撃。

投げられることを想定していたとしか思えない行動。その知能が、この化け物にあるというのか。あるいは身についたのか。

睦月さんを襲う一投目の蜘蛛。

一直線ではなく、壁を利用して死角から取り付こうとする。光源のない暗闇の状況。蜘蛛の赤い目玉だけが、煌々と不気味に輝いている。赤い光は、三角形の軌道を描いた。

跳躍、天井、睦月さんの背後。

膝をつき、蜘蛛を見失ってしまう睦月さん。

駄目だ。襲われる。

「後ろだ！」

睦月さんは、声と同時に振り向いた。蜘蛛が自らの腹を向けて飛びつく。

そのほんの僅かな時間。迷わず睦月さんは体を旋回させた。

ダメージを受けた膝を軸にして、左足を振りぬく。蜘蛛には予想外だったろう。空中では回避動作もままならない。よって避けることは不可能。

なすすべもなく回し蹴りを受けた蜘蛛は、腹から臓物をばら撒いて、壁に直撃した。

壊れた足が廊下に転がる。

投げて、つぶれたトマト。

体液を飛び散らせる様は、まさにそれだった。

「……なめるからよ」

痛む膝を抱えて、勝利の美酒を味わう。だが、とても酔うことなどできない。俺は睦月さんにライトを向ける。痛めた右足は赤く腫れ上がっている。それでも立ち上がる睦月さんの胆力には、感服するばかりだ。

「正臣……割り切って……言ったのに……」

睦月さんに蜘蛛の位置を伝えたのは俺だ。とっさに出た大声に、俺はしまったと思った。

しかし、声を出してからではもう遅い。

「香奈、それは！」

「何でかな。愛が足りないのかな」

なぜ、笑っていられるのか。

なぜ、そんなに楽観的でいられるのか。

「永沢！ 屋上だ！ 屋上に連れて行け！」

生徒会長が和輝に命令する。

「何をしてる！ 早くしろ！ うすのろが！」

和輝は、肩を貸してしまったことを後悔するように、唇を引き結ぶ。

「早くしろと言ってるのが分からないのか！」

「鍵は……」

三階は生徒会室、その上の階は屋上だ。頑丈な扉があり、通常は施錠されている。

「鍵なら私が持っている！ 助かりたかったら私を運べ！ これは生徒会長としての命令だ！」

生徒会長には鍵を持つ権限がある。確かに八方塞の今、それしか方法はなさそうだった。

「分かりました」

和輝は感情のない声でつぶやくと、階段を上り始める。

「そうだ……それでいい」

生徒会長は満足そうに唇を歪ませた。

「生徒会長であることを今持ち出すなんて……愚かね」

睦月さんが、和輝とともに階段を上り始めた生徒会長に、怨嗟をこめる。

「睦月……覚えている」

不気味に微笑む生徒会長。

「忘れるわよ。アンタのことなんか」

「売女が……」

二人は階段を上っていく。

「……アサ、ん。おか……」

化け物が階段を上りきった。ビクビクと体を痙攣させてこちらに近づいてくる。素足で歩く怪物の足音が、耳に張り付くようだ。

ひたひたひたひた。

その巨体からは、おおよそ似つかわしくない。

「お母さん、お母さん。よっぽどマザコンなのね」

額に大量の汗をにじませながらも、睦月さんは睦月さんだった。自分のペースを崩そうとしない。

「正臣、私たちも行こう?」

香奈が笑いかけてくる。張り付いたような笑顔に、俺は疑問を感じる。

「ああ……行こう」

この疑問や苛立ちは、今の状況が生み出したものだ。俺はそう思い込むことにした。

ライトを向けると、怪物がいまだに痙攣を続けている。襲う意思は見られないようだ。油断はできない。大量の蜘蛛は相変わらず足を鳴らして蠢いており、怪物の筋肉は、そこかしこで膨張を繰り返している。上半身から放出される血液が、注射針から漏れる液体のように見えた。片方しか見えない怪物の目は、黒目が消えたり現れたり、忙しく動き回っている。

怪物を大きく迂回して、階段を上りだす俺と香奈。

俺は、階段の途中で睦月さんを振り返る。睦月さんが階段を上ってくる様子はない。俺が立ち止まって睦月さんに視線をくれているのを発見した香奈は、恋人同士がそうするように、後ろから俺の目を手で隠した。

「駄目だよ、正臣。言ったでしょ、いざというとき、正臣自身を滅ぼすことになる、って」

俺は香奈の手をはがして振り向く。香奈は、やはり笑顔だった。

「今がそのとき。割り切るんだよ」

俺は香奈と睦月さんを、交互に見比べる。

「行こう、正臣」

優しい声。女神のように思えた声。今それが、頭の中で反響する。俺は激しい葛藤の中、ライトの光で睦月さんを照らす。

「屋上に行くなら、それ頂戴。私、もう少し頑張るから」

腕を組んで軽く言つてのける。余裕の表情だ。

「くれれば、勝てるかもね」

俺は懐中電灯を投げ渡す。受け取った睦月さんが、わずらわしうに額の汗を拭った。運動しているわけでもないのに、汗が噴き出している。

俺はこの光景に見覚えがあった。

そう、あれは、夏美をおんぶした時。俺が恐怖のあまり逃げ出して、和輝に止められて、夏美が無理をして……。

「正臣。ほら、大丈夫だつて言ってるよ」

香奈が俺の腕を引く。

「行きなさいよ。偽善者の助けなんて、こっちから願い下げ」

指先をこちらに向けて言い放つ。

「同情で立ち止まるぐらいなら、さっさと屋上行けば？ 観戦されると目障りなのよ」

苛立ちと、葛藤と。俺は俺自身に翻弄されている。

屋上に行けば、俺と香奈は助かる。だが、睦月さんはどうなる。本人は大丈夫だと言っている。

しかし、相手は未知の化け物だ。いくら睦月さんとはいえ、危険すぎる。

「正臣、早く行こう。割り切るんだよ」

割り切る。

俺は、和輝と仲違いしてまで手に入れた決心を思い出す。ここでその意志を曲げてしまえば、俺自身が駄目になる気がする。失ってきた全てが、無意味になる気がする。

割り切れ。割り切るんだ。そのために俺は、俺を取り巻くものを捨ててきたのではないか。迷うことは許されない。

「……行くぞ、香奈」

香奈はいつそう嬉しそうに笑顔を浮かべ、後ろを歩く俺の手を引いて、階段を上る。

「置いていかないで！」

それは睦月さんの悲鳴ではない。廊下の隅に体を寄せた佐藤だった。もはや這って逃げることは不可能だと悟ったのか、俺に手を伸ばしてくる。

「お願いです、置いていかないで……！」

涙交じりの悲痛な声は、再び俺の心を震わせた。封印したはずの心の奥が、産声を上げる。

涙を流し、鼻水を垂らし、すぐるように俺に手を伸ばす佐藤。

「正臣」

「分かってる！」

張り上げた声。

「悪い……。佐藤……睦月さんも」

「別に。期待してないし。契約も破棄してるし。行けば？ 彼女が怒るわよ」

手でごみを払うように、人払いをする。彼女は割り切ることを望んでいるのだ。罪悪感を抱くだけ無駄ではないのか。

心の震えが沈静化する。

「そんな！ それでも人間ですか！」

佐藤の叫喚が、背中を向ける俺に突き刺さる。

日と見で、誰かの後ろにしかいられない人間。あるときは生徒会長、あるときは真っ先に逃げ出す臆病者。

自分勝手すぎる。

俺は佐藤を振り返ることすらせずに、階段を上っていった。この階段を上る一步一步が、割り切ること。足が、重い。

「助けて！ おい、聞こえないのかよ！ 助けてよ！ 偽善者！」

佐藤が、夢中になって俺を呼び止めようとする。床に両手を叩きつけるアピールをしながら。

割り切れ。

でなければ、また大事なものを失うことになる。

もう失いたくない。俺は、割り切ることができるはずだ。

「正臣。守ってね」

香奈の声が、俺の背中を押した。

そう、俺には守らなければならない、たった一つのものがある。

全てを捨てても、守らなければいけない人がいる。俺は、香奈を守ると決めたんだ。それが、割り切ること。

それが正しいことのはずなんだ。

「分かってる。分かってるさ……」

睦月さんと佐藤の姿が見えなくなった。

第十七話・「偽善者でいたい」

「正臣、香奈……」

屋上の夜風が、和輝の声をさらう。

「残ったのは、これだけか」

生徒会長は、俺と香奈を見て眼鏡をかけなおした。

「散々だったな、まったく……」

俺の横を通り過ぎた生徒会長は、そう言つと、屋上に続くドアの鍵を閉めた。

俺はその行動に目を見張る。

「これで、いくら強靱な力があるうとも、入っては来れないだろう」
「……それでも、生徒会長なのか？」

和輝が満天の星空を背に、怖い声を出す。

「生徒会長だからこそだ。ここの鍵を持っているのは私なんだから、私が助かるのは当然だ。だが、遅れてくる、または」

冷たい風が、俺の身を震わせる。

「死んでいく人間まで待つ必要はない。それ以前に、この場にいる人間を救うという選択をした私が、称えられるはずではないか？」

満天の星空を仰ぐように、両手を広げる生徒会長。

「二人の命と、四人の命。どちらが優先されるべきか。言われなくても分かるだろう？」

それが割り切ること。最小限の犠牲で、最大限の命を救うこと。

「助けに行くというのなら、止めはしない。行くがいい。二度と屋上へは来れないがな」

手に持った鍵を、手の中にくるくる回してもてあそぶ。

一度鍵をかけてしまえば、内側からも外側からも、鍵がないと扉は開かない。

「……俺は」

割り切ること。

過去の自分を捨てる。出来ないことはしない。出来ることだけをする。自分の範囲内で、やれることだけをする。できないことは仕方がない。失敗は過去にして、忘却の彼方へ追いやってしまったばい。見捨てることも、大切な何かを守るためならば仕方がない。

確かに、それは心地よく聞こえる。体にすぐに浸透してくる。心を落ち着かせてくれる。当然のように聞こえる。

「正臣？」

香奈が俺の正面に立って、両手をつかんでくる。

「まだ迷ってるの？ 私たちは助かったんだよ。悩む必要なんてな

いんだよ」

笑顔を浮かべて、俺の体を揺する。

「香奈……」

「守ったんだよ。私を。愛している人を」

香奈の言う通りだ。俺はやれることをやった。やるべきことをした。できる範囲のことをした。大切な人を守った。割り切ったんだ。

「俺は、これでいいんだよな……？」

「うん。間違ったことなんて何一つしていないよ。正臣は正しいよ」

正しいこと。両親が俺にずっと教え続けたこと。言い続けてきたこと。

「もう悩まないで、正臣」

加藤さん。俺の隣の席だったクラスメイト。守れなかった命。

「割り切ろう？」

夏美。俺に勇気をくれた人。犠牲にしまった命。

「ね？」

睦月さん。俺の憧れの人。立たされている危機。

「正臣？」

和輝。親友だと思っていた人。切れないと思っていた絆。

「俺は……」

たくさんものを、俺は過去にしようとしている。どれもかけがえないもの。二度と手に入らないもの。俺の心の中で、輝くべきもの。

割り切れば楽になれる。割り切れば幸せに生きることができる。心につながって俺の足を引っ張る荷物など、鎖ごと引きちぎってしまえばいい。そうすれば身は軽くなる。

でも、それでは俺は弱いままではないのか。重いものをずっと背負い、引き続けることで、足腰が強くなる。強くなればこそ、引き続けてきた重荷は、次第に軽く感じられるのではないか。

前者と後者の違い。

それは、俺自身の強さ。

「……俺……は……」

割り切れ。

「俺……は」

心の奥底にしまつて、蓋をした感情。過去の自分。

それが、蓋を持ち上げて顔を出す。上から押し付けようとするも、力が及ばない。徐々にその姿が見え始める。

「正臣！」

どうして……。

夏美が襲われたときの顔を思い出す。不思議そうな顔で俺を見つめていた。自分の絶望を悟り、俺に失望した顔。自らの運命を呪う顔。

どうして……。

睦月さんの右足。蜘蛛の直撃を受けた足。夏美と同じ右足。

「正臣は割り切ったんだよ。そうでしょ？」

夏美と睦月さんが、重なって見えた。

「正臣、正臣！」

立ち上がってから、ちっとも動こうとはしなかった。ただ生意気な言葉を言うばかりで、階段を上ろうともせず、俺を追い払おうとしていた。逃げることに賛成したはずなのに。何度も拭ったあの大量の汗。あの額の汗は、極上の強がりではないのか。

どうして……助けてくれないの？

夏美は言った。

俺はもう一度思い出す。夏美の口の動き、あのときの俺を見て、

彼女は。

どうして……。

俺はあの言葉の先を、今になって知る。

どうして……そんなに悲しそうな顔をしているの？

夏美は、俺を思いやっていた。間近に迫った死の感覚に怯えながらも、夏美は他ではない俺を思いやっていた。夏美はずっとそうだった。

右足に不自由しながらも、心は誰よりも自由だった。

逃げ出したい俺のことを気遣って、背に乗るのを遠慮していた。誰かの力になれないことに胸を痛めながらも、元気付けようとしてくれた。蜘蛛に襲われたときもそうだった。俺を心配して来てくれたんだ。

恐怖のあまり動かなかった俺の足。夏美は分かっていた。だから、俺が助けられないのを知って、せめて悲しまないで、と。

自分勝手な思い込みかもしれない。楽になりたいがための方便かもしれない。

でも、最後の最後まで俺のことを考えていてくれた。

「香奈……行かせてくれないか」

「何言ってるの？ 私とずっと一緒にいるって」

大切な人がいる。大事なものがある。

「馬鹿なことを言い出すものだな」

生徒会長の冷笑が闇に吸いこまれる。

「割り切ったと思った。割り切れると思った……」

俺を必死につなぎとめようとする香奈の腕を、優しく振りほどく。

「でも、過去は捨てられない。自分が犯した過ちを、仕方がないなんて、そんな風に考えられないんだ」

香奈が、笑顔で俺の頬に手を添えてくる。

「違うよ。正臣は、少し混乱しているだけ。抱きしめてあげる。そうすればきっと落ち着くよ」

「あのとき……確かに俺は、加藤さんを助けようとした。そのせいで夏美が犠牲になって、結局誰も助けられなくて……」

今度は俺が、香奈の肩に手を置く。

「割り切ればよかったのかもしれない。加藤さんをあきらめていればよかったのかもしれない」

「何言ってるの？ 正臣」

微笑を浮かべている香奈の声は、表情とは裏腹だ。

「でもね、香奈」

俺は出来るだけ優しく、そして、真剣に言葉を積み重ねていく。

「俺は二人とも助けたかったんだ。本心なんだ。偽善でなく、心から……。出来ないから、出来る範囲のことだけする……。分かるよ」
「分かるなら、もう止めよう。割り切れるよ、正臣なら」

微笑んでいる香奈の目が、うつすらと濡れていく。

「それでも……俺は出来ないと分かっているけど、二人を、みんなを助けたかったんだ」

「まさ……おみ？」

「だから……割り切ることは出来ない」

「お前って奴は！」

香奈と俺の間に入ってきた和輝が、両手で首元を締め付けた。鼻と鼻がぶつかるくらい接近した顔。烈火のような眼光。俺を焼き尽くそうという意思表示。

「香奈を守るんだろう？ 好きなんだろう？ なら、どうして一緒にいてやらないんだ！」

和輝が、俺を屋上のコンクリートに引き倒す。

雨と風にさらされ続けた屋上のコンクリートは、砂利が多い。叩きつけられた頭皮に食い込んでくる砂利の痛み。その痛みが、夢でないことを教えてくれる。

「俺は香奈が好きだ。でも、お前ならいいって！ 仕方ないって！ 憎いけど、お前なら香奈を幸せにしてやれるだろうって！」

「和輝……」

「お前の代わりなんていないんだ！」

コンクリートに倒した俺の胸倉をつかんで叫ぶ。和輝の肩越しに夜空が見えた。和輝の瞳は、夜空に浮かぶ恒星のように、悲しく輝いていた。

「どんなに憎くても！ 傷つけられても！ お前はたった一人の俺の親友なんだよ！」

俺が懂れた人間。誰よりも人が良い。俺にとってもたった一人の親友。

それが、和輝だ。

「だから、香奈を悲しませないでくれ……頼むから……」
「和輝……俺は……」

雨が俺の頬に落ちた。和輝から降り注いだ雨。

「それでも俺は、偽善者でいたいんだ」

涙を拭わない和輝。いや、拭わないのではない、拭えないのだ。

「臆病で、何もできない、口だけの偽善者で……」

睦月さんの顔が浮かんで、消えた。

「それが俺の 正しいことなんだ」

俺の返答に対する答えか、和輝の拳が振り上げられる。だが、拳はいつまでたっても落ちてこなかった。目を閉じ、齒を食いしばった俺は、やがてゆっくりと星空を目に映す。

「正臣に乱暴しないで……和輝……」

香奈が和輝に抱きついて、動きを封じている。

「いい加減にしてくれ、香奈。何でそんなにされても」

背中越しに疑問を呈する和輝。

「好きなんだもん……大好きなんだもん……愛してるんだもん！」

俺からは香奈の顔は見えない。苦悶に歪む和輝の顔だけが見ることが出来た。和輝は眉を寄せたまま立ち上がり、座り込んでしまった香奈を抱擁する。

和輝に包まれた香奈。

俺はその和輝の背中を見て立ち上がる。

「放して……和輝」

「放さない」

和輝は香奈をさらに強く抱きしめた。

「正臣？」

和輝の胸に顔を抱かれた香奈は、視界を失っている。

「正臣？」

香奈が俺を呼んでいる。

「過去は、捨てることなんて出来ない。過去があるから、今の俺が

あるんだ」

香奈の胸に届くだろうか。

「和輝、放して。正臣と話をするの」
「放さない」

和輝の胸を押し返そうとするが、香奈の力ではそれが叶わない。

「加藤さんを救えなかった。夏美を守れなかった。俺が二人を殺したんだ。それを背負っていく」

俺は伝わらないと分かっているけど、微笑を浮かべた。涙まで浮かべるつもりはなかったのだが、どうやら涙腺が勝手に反応してしまったようだった。

「失敗しても、傷ついても、俺は偽善者でいたい。誰かを思いやりたいたいんだ」

誰かを助けたいという心があるから、人は人でいられる。人は優しくなれる。

俺の考える正しさは、誰かを思いやること。

割り切らずに、過去を背負いながら、後悔しながら生きること。苦しむ誰かに、手を差し伸べること。

たとえ、恐怖に足がすくんだとしても、俺は手を差し伸べたい。偽善と言われても構わない。

俺は助けたいだけ。自分に正直に生きたいだけ。

それが、俺の正しさ。

「正臣？ どこ？」

甘い考えだとは分かっている。

でも、甘やかされて育った俺だから、愛情を多く受けて育ってきた俺だから、誰よりも優しさを知っている。誰よりも優しく出来る。

甘やかされた分、今度は俺が甘やかす番。

誰かに助けられた分、誰かを助ける番なんだ。

「放して、和輝。正臣と話がしたいの」

「和輝、香奈を頼む」

俺は生徒会長に目配せする。生徒会長は、心底わずらわしそくに顔の筋肉を動かすと、屋上の扉を開けた。

俺は生徒会長に一礼する。

「勝手に死ねばいい」

腕を組んで俺を侮蔑する。

「行かないで正臣！ 私のそばにいて！」

俺は、開け放たれた暗黒への扉に、第一步を踏み出す。

「割り切れるよ！ 正臣なら出来るよ！」

次第に遠ざかる香奈の声。

「好きだって言ったよね？ ずっと一緒だって言ってくれたよね？」

恐怖の蔓延する校舎には、星空は不釣り合だ。もちろん、今の俺にも。

「信じてるよ！ 私、信じてるから！」

香奈が和輝から抜け出そうと、和輝を叩く。

「ごめん……香奈。助けを待っている人がいるから。危険な目にあっている人がいるから。俺は……行くよ」

香奈が、和輝の中で暴れる。黙して痛みを受け止める和輝。

「放して！ 和輝！ 正臣が行っちゃう！」

香奈の顔を見なくて済んで、良かったと思う俺がいる。もし、あのいつもの笑顔が消えていたら、俺はきっと、この場から去ることが出来なかっただろう。

泣いている香奈は、想像できない。

「戻ってきて正臣！ 愛してるの、一緒にいてくれなきゃ嫌なの！」

止まっては駄目だ。深い沼に、何度も足を取られそうになるのを耐える。

「お願い！ 放して！ 正臣が！」

扉をくぐるところで、和輝の声が聞こえた。背中越したから表情が分からない。

「宝物は任せろ」

「任せた」

「お願い……ずっと……一緒にいるって……割り切るって……」

俺が扉を通過すると、生徒会長は乱雑に扉を閉める。投獄されたような感覚。

やがて鍵の閉まる音がした。

後戻りは出来ない。賽は投げられたのだから。

「正臣！」

扉の向こうから聞こえた最後の一声は、まるで別世界からの声のように聞こえた。

第十八話・「何も出来ないくせに！」

屋上から出てくるのに時間がかかってしまった分、睦月さんと佐藤の安否を気遣う。

平常の睦月さんならいざ知らず、右足を負傷しているのだ。俺は階段を駆け下りて、睦月さんと別れた場所に降り立つ。

「睦月さん！ 佐藤！」

大声を上げて呼びかけてみるが、二人からの返事はない。真っ暗闇が、俺の声を飲み込んでいくだけだ。廊下の先を見ても、非常ベルの赤い光が揺らめいているのみで、俺が睦月さんに渡した懐中電灯の光は見えない。

上半身蜘蛛だらけの化け物も、どうやらここにはいないようだった。

俺は、壁に叩きつけられた死んだ蜘蛛の破片に、身震いする。睦月さんが回し蹴りで粉碎した蜘蛛。

臍物は、いまだに夜のかすかな光を受けて、光沢を放っている。

「足が震えてる……駄目だな、俺」

もう二度と動くことのない、襲ってくることのない蜘蛛の死骸を見ているだけでも、両足が震えてきた。

暗闇が少しずつはれていく。

雲に隠れていた月が、顔を出したようだった。屋上にいたときには、満天の星空を望むことが出来たのだから、月が出ていてもおかしくない。

廊下の窓から、青白い光が差し込んでくる。俺は光を頼りに廊下を駆け抜ける。

月の光が照らした廊下には、蜘蛛の死骸がそこかしこに転がっていた。

ガラスに突き刺さって、赤い体液を飛散させた蜘蛛や、手足がちぎれて胴体だけになっている蜘蛛、逆に胴体がちぎれて真つ二つになっている蜘蛛、原型はそのままだが内臓が染み出している蜘蛛。それら無数の蜘蛛が、廊下にバケツの水をぶちまけたかのような体液を散らして、転がっていた。

その蜘蛛の隙間を縫うように、血が転々と、まるで俺を導くかのように連なっていた。

睦月さんの血だろうか、それとも佐藤の。

焦りと不安に胸が高鳴る。

血は廊下の途中で左折していた。

「こつちか……」

校舎第二棟へと続く、二階の渡り廊下。

この学校は、体育館、第一棟校舎、第二棟校舎と、並んで建設されていて、それぞれが渡り廊下でつながっている。一棟二階には、二棟二階へ続く渡り廊下、というように、それぞれの棟、階に、それぞれの棟、階へとつながる渡り廊下がある構造だ。

渡り廊下から望める中庭の景色は、惨憺たるものだった。

虫に侵入されているだろう生徒の群れが、月明かりの下でぞろぞろと群れをなしている。行くあてもなく、この世をさ迷うばかり。

渡り廊下にいる俺を見つけると、高低差があることすら忘れていいのか、一階の渡り廊下の外壁に張り付いて俺を見上げてくる。

俺はちらりと彼らを視界に収めただけで、通り過ぎる。

二棟の廊下も、似たような惨状だった。

だが、明らかに雰囲気が違う。大声で二人を呼ぶのも、躊躇してしまうほどに。

呼吸困難になりそうなほど、濃縮された重い空気が漂う。息をす

るたびに体中に蓄積されていって、体を鈍重にさせるかのようだ。

突然、化学実験室のガラスが吹き飛ぶ。

ガラスから飛び出してきたのは、蜘蛛だった。実験室のガラスから、廊下のガラスへ。二枚のガラスを突き破った蜘蛛は、月明かりの照らす中庭へ落ちていった。

俺は実験室へ足を踏み入れる。

「睦月さん！」

天秤、はかりなどの、実験器具が詰まった戸棚。そこに寄りかかる睦月さん。右手には野球部持参品のバットが握られていた。バットにこびりついた真っ赤な液体は、蜘蛛の体液だろうか。

「……………カアサ」

全身に蜘蛛の鎧をまとう化け物が、前進に邪魔な実験テーブルをひっくり返す。ちゃぶ台をひっくり返すように軽々と。

流し台につながっていた配管が、音をたてて折れる。机に付属しているガスバーナーも、チューブごと引っこ抜かれた。

ガスの漏れる異様な匂いが、室内に漂う。

備え付けの実験テーブルを、こつも易々と引っこ抜く化け物の力。屋上の扉を安心だと言った生徒会長がこの光景を見たら、また腰を抜かすだろう。

「アンタ、なんでここにいるのよ！」

化け物が、上半身に蠢く蜘蛛を身につけたまま、実験テーブルを持ち上げた。重量挙げの選手のように、高々と誇示する。化け物の腕が、以前見たときよりも確実に膨れ上がっている。

俺は佐藤の姿を探していた。

月光を頼りに実験室を見回す。実験テーブルの下、戸棚の陰……。唐突に俺の視界は反転する。

俺のいた空間を横切っていく実験テーブル。

あんな巨大なものが目の前を飛んでいく光景を、俺は見たことがない。実験テーブルが飛ぶと、誰が予想できるだろう。

実験テーブルは、奥にあった戸棚に直撃した。

戸棚のガラスが割れ、その身が傾く。ビーカー、試験管、フラスコ……それらが雪崩のように戸棚からこぼれ落ち、破碎音の実験室に響き渡った。

「足手まといなのよ！」

俺は睦月さんに助けられていた。俺を押し倒して、自らも体勢を低くすることにより、難を逃れたようだ。

「馬鹿なの？ それとも、それに気がつけないくらい大馬鹿なの？」

「俺は……」

「何も出来ないくせに！ どうして来たのよ！」

俺の胸の中に顔をうずめていた睦月さんは、一難去って顔を上げると、当然のように激昂した。

「俺は、助けに来たんだ！」

汗を浮かべる睦月さんに言い返す。

「なら、どうして私がアンタを助けてるのよ！」

「そ、それは……」

「偽善者は偽善者らしく、言うだけ言って、尻尾巻いて逃げていればいいのよ」

睦月さんは颯爽と立ち上がる。

化け物に立ち向かうつもりなのだろう。

細腕は、擦り傷や切り傷だらけ。相変わらず腫れ上がっている右足は、病院に直行すべき怪我だ。制服もところどころ破れている。破れたスカートは、スリットのように切れ込みが入っていた。

「それでも、俺は睦月さんを助けたいんだ」

「だから、アンタには出来ないって言ってるじゃない！」

「盾ぐらいにはなれる！」

俺は感情的になっていた。

忘れていた感情の波が、再び押し寄せてきた。

冷静ではない俺の心が、勝手にその言葉を叫ばせていた。

「盾ぐらいにはなれる？ よく言うわね。人を見殺しにした偽善者が」

「……確かに、俺は見殺しにした。それは事実だ。でも！」

立ち上がって睦月さんと顔を突き合わせる。

「睦月さんを助けたいと思う気持ちに、嘘はない。怖くても、震えても……それでも助けたいと思ったから、俺はここに来たんだ」

「どういつ心境の変化？」

睦月さんの問いに答える間もなく、蜘蛛が飛んできた。

今は、睦月さんの会話だけに意識を傾けていい時ではない。

「いい加減、飽きたわ」

体を丸めた蜘蛛が、高速で向かってくる。更に太くなった怪物の右腕から放たれた直球は、確実に速度を増していた。もし、目標が睦月さんでなく俺だったら、確実に顔面にクリーンヒットしていたところだ。

睦月さんは、右手に携えたバットのグリップを強く握り締め、鋭く振りぬいた。

風を切る音は二つ。

投擲された蜘蛛と、睦月さんのスイング。

その二つは瞬き一つの間に激突し、勝敗はすぐに決した。居合い抜きのように解き放たれたバットの軌跡は蜘蛛をとらえ、実験室の天井へと打ち返す。

「少しつまらされたわね。良くて二塁打」

蜘蛛自身のスピードと、睦月さんのバットの力。

両方からくる力の激突から生まれた破裂音。

体を覆った硬質の皮膚は剥がれ飛び、内臓が教室に飛び散った。

腸のような長い管は、実験室の黒板に張り付き、内容物を失った蜘蛛は、天井にへばり付いた。

やがて重力の力に引かれて、化け物の前にぼとりと落ちる。

軽口を叩く睦月さんの表情は、口調ほど軽くはない。

「……オカア……さ」

丸太のような太い手が、また両肩にへばりついた蜘蛛をつかむ。右手と左手につかまれた蜘蛛は、口裏を合わせたように動きを止め、

体を丸める。

「馬鹿の一つ覚えみたいに……」

ため息をついて不敵な笑みを浮かべる。汗が頬を伝い、あごに到達する。睦月さんは鬱陶しそうに制服の袖で拭う。

「睦月さん、もう……」

俺は睦月さんの腕を取る。細くて白い、陶磁器のような肌が、切り傷で赤く痛んでいる。

「気安く触らないで。殺すわよ」

気が立っているのか、化け物にかける言葉と同じ強さを持っている。

俺はそれでも、睦月さんの手を放さない。

睦月さんは舌打ちをする。

「先に謝っておくわ」

俺を蹴り飛ばすと、蜘蛛を投げようと振りかぶる化け物に突進していく。

「……睦月……さ……」

強烈な腹部への蹴りで、睦月さんの手を放してしまう。

床に膝を着いたときには、睦月さんはすでに怪物の右手から投げられた蜘蛛の調理を、終わらせていた。体のひねりを加えた渾身の袈裟切りで、蜘蛛を床に叩き落とす。

ぐちゃり、と床に体液が広がる。

ばらばらになった足が、俺のほうに飛ばされてきた。

左手の二投目は、投げることにすら許されなかった。

化け物の左手側に回りこんだ睦月さんが、袈裟切りの勢いのままに化け物に背中を向ける。

それは更に勢いを増した一撃を加えるための布石だ。

まるで、あらかじめ用意されていた演舞を舞うかのように、それは一部の狂いなく実行された。

回転力を込めた一閃が、化け物の左手に炸裂する。

バットで叩かれた左手ごと、蜘蛛は粉碎された。内部から破裂するように、左手から蜘蛛の臓物が飛び出す。

美しくなびく髪の毛が、睦月さんの顔を取り巻いた。

さらに華麗なステップを踏む睦月さん。回転力を加えたバットは、次に化け物の右手をなぎ払う。

化け物の右手の指は、あらぬ方向に折れ曲がった。

睦月さんは、痛む右足をこらえて更に加速を加える。化け物の後方にある実験テーブルに跳躍すると、三角飛びの要領で、化け物の頭上に唐竹割りを叩き込むべく、舞い上がる。剣道で言うところの面だ。

天から地へ。

稲妻のように、化け物の頂点へと叩きつけられるバット。化け物の右手と左手を封じた上での、決定的な一撃。俺にはそう思えた。

だが、演舞は予想した最後には至らない。

床に転がるバット。無情の金属音。

化け物の脳天に命中させた金属バットが、折れ曲がっていた。振り切ったその手から、バットを取り落としてしまった睦月さん。バットが折れ曲がるほどの衝撃で、使用者に負担がかからないはずがない。作用反作用の法則は、誰にでも付きまとう。規格外の睦

月さんとて、例外ではない。化け物のすぐ後方に着地した睦月さんは、両腕を震わせて顔を苦痛に歪める。震える手を見つめる睦月さんは、化け物の反撃に気がつかない。

化け物は、指の折れた右手で、背後の睦月さんに裏拳を見舞う。それは、お世辞にも鋭いというほどの攻撃ではなかった。睦月さんなら、十分回避可能なものだ。

しかし、睦月さんはそれが出来ない。

酷使した右足のためか、不注意のためか、予想外のためか。

いずれにせよ、睦月さんは回避することが出来なかった。かろうじて右手で顔をカバーするのが精一杯。裏拳を見舞われた睦月さんは、実験室の椅子を蹴散らしながら床を滑っていき、壁に激突して動きを止める。

「睦月さん！」

腹部の痛みを忘れて、睦月さんに駆け寄った。

「……怒鳴らないで」

抱き起こす俺を突き放して立ち上がろうとするが、もつれて俺に身を預ける形になる。

「アンタは……自分の心配だけしてればいいのよ……」

軽い脳震盪を起こしているのか、言葉がおぼつかない。それでも強がろうとする睦月さんが、悲しく思えてくる。

「私は……逃げない。絶対に逃げない」

俺を突き放して、転がっていた椅子を手に取る。殴り飛ばされた

とき、椅子にぶつけたためか、頭から血が流れている。白い肌には似合わない真っ赤な液体が、額から、眉、目を伝って頬へと落ちていく。

それは、赤い涙だ。

「絶対に、殺してやる」

亡霊に取り付かれたように、繰り返す。左目から流れる血涙は、あごに到達し、床にこぼれ落ちた。落下した血涙は、床に一つ二つと斑点を作っていく。

俺は、化け物へ一步を踏み出す睦月さんの前に、両手を広げて立ちただかる。

「化け物をかばうの？ それとも殺されたいの？」

「そうじゃない」

「アンタを見ているだけでイライラするのよ。その偽善ぶりには反吐が出る」

睦月さんの目が鋭くなる。

「それでもいい。俺はこれ以上、睦月さんが傷つくのを見たくないんだ」

広げた両手の指先にまで力を込める。

睦月さんには、これ以上戦ってほしくなかった。睦月さんをここまで駆り立てるものを俺は知らない。

でも、ここで睦月さんを戦わせてしまったら、きっと睦月さんは命尽きるまで戦い続けるに決まっている。

それだけは、なんとしても止めたかった。

「戦つては駄目だ。逃げるんだ」

「逃げて、何が解決するっていうの？ 戦わずして生き残ろうなんて虫のいい話……さすが偽善者ね」

俺の背後から、恐怖の足音が聞こえてくる。背中を向けている分、背後の音には敏感になる。化け物との距離感が不確かな分、恐怖は倍増する。

それは、命を投げ出すような行為。

「足が震えてるわよ。怖いんでしょう？」

化け物の打撃を防御した腕をさすりながら、笑う。

「逃げれば？」

化け物が俺の背後に迫る。耳のそばで化け物の息遣いが聞こえてくるようだ。

「死ぬわね。そのままだと確実に」

蜘蛛の足の擦過音が、耳にこだました。耳朵を震わせ、鼓膜に入り込み、勇気を削っていく。

俺の両足は、自分でも見ていられないほど震えている。

「じゃあね、偽善者さん」

睦月さんは俺に手をふった。友人との別れ際に交わす挨拶のように。

化け物の足音が止まる。

「ン……おカア……さ」

声は頭の上から聞こえた。

緊張に心臓が止まる。命の鼓動が止まる。

戦慄が体中を駆け抜けた。頭上に待ち構える圧倒的な暴力。

化け物が腕を振り下ろすイメージが、俺の脳裏に描かれる。

確かなイメージは、俺の予想通りの弧線を描いた。

その先に待つのは、死、だった。

第十九話・「戦っては駄目だ！」

死は、風を切って俺に振り下ろされる。

けれど、俺は生きていた。怪物の凶悪な右腕は床にめり込んでいて、床の欠片がぱらぱらと俺の頭に降りかかってきた。

「度胸は認めてあげるわ」

睦月さんがすんでのところで、俺の制服を強引に引き寄せていた。

「でも、私は逃げるつもりはないから」

引き寄せた俺に顔を突きつけて、睨みをきかせる。

「逃げないなら、そこで見てるのね」

細く描かれた眉を吊り上げた。

「戦っては駄目だ！」

実験室の背もたれのない椅子を持ち上げた睦月さんは、床に手を突っ込んだままの化け物に接近する。

「睦月さん！」

震えが止まらない足に鞭を入れる。

化け物に命を握られていた先ほどの恐怖がいつまでも尾を引いていて、両足にうまく力が入らない。

睦月さんの接近を感知したのか、化け物は床から腕を抜く。

巨体が、蜘蛛の百を超える目で赤く輝いた。

睦月さんは、まぶしさに一瞬目を細めるが、かまわず椅子を化け物に振り下ろした。木製の椅子は、金属バットをへし折った化け物の頭部には無力だ。無残にも砕け散って、木片が散らばった。

「石頭が……！」

睦月さんの舌打ちが聞こえた。化け物は、目の前に着地した睦月さんに、左腕を振り下ろす。睦月さんは膝をついた状態から、横に回転して逃れる。転がっていたバットを手に取りながら立ち上がると、下段に構えた。

転がる動作に、バットを拾い上げるといふ動作を組み込む、とっさの機転はさすがだ。

一撃は強大だが、愚鈍な化け物には、まさに天敵といえるだろう。しかし、それも攻撃が通用しないとあっては意味がない。

「オオ、かアああ……」

蜘蛛の動きが活発化する。

化け物に張り付いて、足を鳴らすだけだった蜘蛛が、いつせいに激しく動き出したのだ。

「また何かあるわけ？」

俺は、健在するもう一つの実験テーブルの手を借りて立ち上がると、化け物の動向に気を配る。

「ササ……さ、ンン」

化け物に張り付いていた蜘蛛が、剥がれ落ちた。

一匹、二匹……その数が増加していく。実験テーブルを排除して出来たスペースが、真っ赤な目を光らせる蜘蛛で満ち溢れていく。化け物が、化け物を生んでいる。

「まさか、こんな……」

「上等じゃない」

バットのグリップを握りなおす。

すでに数十匹の蜘蛛が、化け物から剥がれ落ちていた。剥がれ落ちた箇所からは、人間だったものの皮膚が見え隠れする。浅黒く、太い血管が膨れ上がっている。中を流れているのは血ではない。重油のように薄汚い何かだ。

蜘蛛は、落ちた順から移動を開始する。

蜘蛛の群れは二方向に分かれ、俺と睦月さんに殺到した。ある程度の距離になると、跳躍して飛びついてくる。俺は恐怖を携えて、窓際を駆け抜けた。

窓を次々に突き破っていく蜘蛛の群れ。

耳元で風を切る音が聞こえる。蜘蛛の足が俺の制服を切り裂く。

一方、睦月さんは、飛びついてくる蜘蛛を、片っ端からバットで弾き返していた。正面の蜘蛛は、下段からの振り上げで天井に叩きつけ、横方向からの蜘蛛には、体を捌いての叩き落とし、下方向からは、バットを使わずに左足で蹴り飛ばす。

見事な殺陣さばきだった。

だが、そんな睦月さんでも、体力は確実に消費する。加えて、右足の痛み。蓄積されたダメージ。

俺が実験室に入った直後の睦月さんとは、明らかに動きが別人のようだ。

弾き返した蜘蛛が活動を再開できるのが、その証拠だ。

一撃で粉碎してきたはずの攻撃に、力が見られない。余裕を持つ

て回避してきた蜘蛛の足も、今では紙一重。さらには、死角への対処もおろそかになっている。有視界を最大限に動かすことで死角をなくし、蜘蛛の攻撃を見切ってきた睦月さん。

その睦月さんが、死角を作ってしまったっている。

天井と、背後。

睦月さんは、その二箇所蜘蛛の動きに気がついていない。

三つの赤い目は、攻撃の合図。睦月さんの視界にいる蜘蛛は、皆一様に目を爛々と輝かせているのに、死角にいる蜘蛛は目を光らせていない。

陽動。

俺の頭にその二文字が浮かんだ。

だが、その浮かんだ二文字を消し去るかのように、俺の頭を蜘蛛がかすめていく。窓から飛び出さずに柱に取り付いた蜘蛛は、更に俺へ跳躍する。睦月さんの戦闘に気を取られていた俺は、柱から飛んでくる蜘蛛に気がつくことが出来なかった。

視界の端に映った瞬間、あわてて身をよじったが、時すでに遅し。

蜘蛛は俺の背中に張り付いていた。

バックバックを背負うような感覚がしたかと思うと、すぐさまバックバックは、俺の頭部目指して這い上がってくる。連続で針を刺されるような痛みが、恐怖とともに背中を駆け上ってきた。

八本の足が俺を捕らえて放さない。

走ろうが、飛び上がるうが、決して剥がれない。

俺はジャンプしたまま、意識的に背中から床に倒れこむ。

蜘蛛は、背中と床の間で板ばさみとなり、卵の割れるような音を響かせた。

背中に蜘蛛の体液が染み込んでいく。

俺はすばやく立ち上がると、椅子をつかむ。恐れを振り払うかのよう、連続して向かってきた蜘蛛を叩き落とした。そして、持っていた椅子を追いかけてくる蜘蛛に投げつけると、睦月さんに向かって駆け出す。

天井から睦月さんを見下ろす蜘蛛。背後から舌なめずりする蜘蛛。その二匹の蜘蛛の合計六つの目が、強烈な赤い光を放った。

「上！」

その俺の言葉だけで、睦月さんは理解したようだった。

白い首筋があらわになる。睦月さんは、折れ曲がったバットの先端で、落ちてきた蜘蛛の腹を突いた。腹をつき抜かれた蜘蛛が、バットの先端に突き刺さって、もがいている。

「油断も隙も」

睦月さんの頬が緩むのが見えた。

まだだ。まだ安心していい時じゃない。

睦月さんの背後で控えていた蜘蛛が、天井から落ちた蜘蛛がやられるのと同時に、睦月さんへ飛び掛った。俺は、息継ぎのタイミンで声を出せない。

睦月さんの流れるような髪の毛に、蜘蛛が張り付く。

「睦月！」

呼び捨てにしたことは、もはや気にならなかった。

睦月さんが、バットを投げ捨てて、蜘蛛をはがそうとする。

「いつ……！」

焦りの色が見えた。

美しい顔が初めて恐怖にゆがむ。懐に入り込まれたことで生まれる恐怖、というのは想像を絶するものがある。蜘蛛がつかんでいるのは、睦月さんの髪ではない。睦月さんの命を驚づかみにしているのだ。

睦月さんが仰向けになる。俺と同じ行動をしようというのか、後頭部をがっしりとつかんだ蜘蛛を床に打ちつけようとする。だが、頭部ということもあって、思うようにいかない。万一、気絶してしまふようなことがあれば、当然命取りになるし、脳震盪を誘発させても、思考力の低下は免れられない。

どちらにせよ、睦月さんの命は、蜘蛛によって蹂躪されてしまうだろう。

俺は、背中に飛びついてきた蜘蛛を払いもせず、睦月さんのそばにしゃがみこんだ。睦月さんの後頭部をつかむ蜘蛛に、手をかける。

「く……そ！」

蜘蛛の爪が、睦月さんの頭部に食い込んでいく。流れるような髪の毛が、睦月さんの血で濡れる。髪の毛を伝った血は、筆で描いた文字のような跡を、床に残した。

怪物は、そんな俺たちを見下ろしたままだ。体からは次々に蜘蛛が剥がれ落ちていて、もはや数えることすら不可能だ。大拳して俺と睦月さんに牙を剥いてくる。

俺の背中に張り付いた蜘蛛も、俺の胸に回り込み、マスクのように俺の口をふさいだ。

「逃げなさいよ！ 偽善者でしょ！」

「睦月さんを……助けるまでは」

「アンタ、馬鹿じゃないの？」

二人の人間に殺到する、蜘蛛の大群。集中豪雨を思わせる一斉跳躍。

俺の背中へ、瞬く間に蜘蛛で覆われた。蜘蛛の爪先が体中に突き刺さる。全身を針で刺されたかのようなのだ。

発狂したくなる激痛。

「なんで！」

背中が重い。

この重さと痛みは、全て蜘蛛がもたらすものだ。もう自分の力ではどうしようもない。剥がすことも出来ない。睦月さんに覆いかぶさるようにしているから、睦月さんに取り付いている蜘蛛は、後頭部の一匹だけ。

それだけが救いだっただ。

「俺は助けたいんだ！」

これなら、睦月さんだけは助けることができる。

「意味ないじゃない！」

俺の全身は、もはや蜘蛛だらけだ。

腕も、腰も、背中も、腹も、顔も、全てが蜘蛛の支配下だ。

もう、蜘蛛しか見えない。

視界ですら蜘蛛の腹で邪魔されて、満足に睦月さんを見てられない。蜘蛛の眼帯をしたかのようなのだ。

「それでも！」

恐怖がないと言ったら嘘になる。腹の底から怖い。足だって震えている、体中が震えている。

俺の口をがっちり固定しようとする蜘蛛。入り込むつもりらしい。……体中が重い。悶えることすら出来ない。それでも。

「逃げなさいよ！」

睦月さんが、俺を睨み付けて叫んだ。目には光るものが浮かんでいる。

「私のことなんかいから！ アンタは自分のことだけ考えてればいいのよ！」

俺を覆いつくした蜘蛛が、俺だけでは飽き足らず、睦月さんにも取り付こうとしていた。俺は気力だけで、その蜘蛛を振り払う。まだ、睦月さんに取り付いた蜘蛛は一匹だけだ。

俺は、睦月さんを守り続ける。

顔に取り付こうとした蜘蛛を腕で払いのけ、足をつかもうとする蜘蛛を蹴り飛ばした。

睦月さんに触れさせるわけにはいかなかった。

それだけは、絶対に。

「なんで分からないの！」

鼻をつく臭いが漂ってくる。化け物が引っこ抜いた実験テーブルのほうからだ。視界のすみに、ガスバーナーのホースが転がっているのが見えた。

睦月さんは雄叫びとともに、髪の毛に張り付いた蜘蛛を引き剥がした。蜘蛛の足に引っかかったせいで、髪の毛が大量に引き抜かれ

る。

赤く染まった髪の毛が、蜘蛛とともに床を転がった。

「……………それでも俺は」

睦月さんのポケットから、懐中電灯が転がる。屋上に行くかどうかの選択が迫られたとき、俺が睦月さんに投げ渡したものだ。

「偽善者のくせに……………偽善者のくせに！」

一筋の雫が、睦月さんの頬を流れ落ちた。

それは、今まで見たどんな涙よりも美しく、そして、儚かった。

「それでも、俺は！」

膨大な数の蜘蛛に取り付かれて身動きも出来ない。耐える力も残されていない。意識すら遥か彼方に飛んでいきそうだ。

それでも、俺は氣力を奮い立たせて腕を伸ばし、なんとか懐中電灯を掴み取る。

「雫を助きたいんだ！」

スイッチを入れると、無我夢中で、蜘蛛を供給する化け物に投げつけた。

回転しながら蜘蛛に向かっていく。次々に跳躍する蜘蛛に危なくぶつかりそうになりながらも、目標に向かって飛んでいく。

「……………馬鹿な偽善者」

睦月さんのささやきと、化け物に当たった懐中電灯のガラスが割

れたのは、同時だった。

電熱線があらわになった瞬間、火花が散ったのが見えた。

刹那、閃光が周囲を包み込んだ。

炎の渦が、俺と睦月さんを飲み込んでいく。

化け物が炎に包まれ見えなくなり、床を覆いつくしていた蜘蛛も、俺と睦月さんのほうに吹き飛ばされてくる。

体中を蜘蛛に覆われた俺は、睦月さんをかばうために、体を盾にする。

灼熱の業火が、俺と睦月さんを覆いつくした。

第二十話・「偽善者ってどんな気分なの？」

……爆発と炎が沈静化すると、俺はゆっくりと睦月さんを覆った体を上げた。

背中に張り付いていた蜘蛛の群れが、剥がれ落ちていく。炭になっ
ていたり、焦げていたり、足がなかったり、目がなくなっていた
りと、爆発規模のすさまじさを思わせる。

気を失わなかったのは、体中を覆った蜘蛛のおかげだった。
不幸中の幸いとはこのことが。

蜘蛛が俺の体に隙間なく張り付いていなかったら、俺は全身に大火傷を負って、命を失っていたかもしれない。

一方、大量の蜘蛛を生んだ化け物は、実験室の戸棚にめり込んでいた。手足が根元からなくなっている。全身は真っ黒で、張り付いていた蜘蛛にも動きは見られない。

周囲の床には、ばらばらになった蜘蛛の死骸が転がっていて、そのあまりの多さに驚かされる。実験室のガラスというガラスが割れていた。

「睦月さん！」

睦月さんの肩を揺らす。

化け物でもないのに、蜘蛛をまとった俺が生きているとは、皮肉だった。

「睦月さん！」

俺が何度も何度も呼びかけても、返事はなかった。まぶたは下り
ていて、目を覚ます気配がない。

「まさか……そんな……」

俺は身が凍るような思いだった。

あわてて呼吸を確かめるべく、鼻先に耳を近づける。

「よかった……呼吸はある」

俺は安心するあまり、尻餅をついた。尻の下にひかれた蜘蛛の丸焼きが、枝の折れるような音を立てて壊れた。

「生きてるんだな……俺」

全身が熱い。蜘蛛の鎧をまとっていたとはいえ、高熱で肌を焼かれたのだ。軽い火傷と、火照る体だけで済んだのは奇跡に近い。そんな奇跡にめぐり合えたことが、可笑しく感じられる。

「これでよかったのかな……夏美、加藤さん……」

俺の信じてきた正しさを貫き通すということ。俺は今、それを一っだけ達成することができたんだ。

「いや……違うな」

俺は、上半身に蜘蛛を身につけた化け物を眺める。

戸棚にめり込んで、二度と動くことはない。半身を失っている様は、物言わぬ屍そのものだ。

「俺は、また救えなかったんだ……」

化け物も、元は人間だった。もはや見る影もなくなっているが、この学校の生徒だった。蜘蛛にいいように操られていただけだ。

「……また」

涙腺が刺激された。誰かを助けるために誰かを犠牲にしたのでは、それでは割り切ることと同じだ。

俺の信念は、ただの机上の空論でしかないのかもしれない。

己の無力さが、ただ悔しい。

床に転がる蜘蛛に、拳を叩きつける。乾燥した蜘蛛は、いとも簡単に壊れた。砂山を崩すように簡単に。

「アンタのしたいことって何なの？」

体を横たえたままの睦月さんが、目を開けた。

「気がついたんだ」

「ぶつぶつ独り言を言われれば、そりゃ起きるわよ」

満身創痍の睦月さんが、苦しそうに身を起こして俺を見つめてくる。

「聞かせて。アンタのしたいことって何？」

俺は制服に引っかかった蜘蛛の爪を、一つ一つ丁寧にはがして放り投げる。鋭い爪には、俺の血糊が付着していた。

「助けたいんだ」

俺は、体にそれほど異常がないことに安堵して、立ち上がる。

ところどころ破れた制服の上着を脱ぎ捨て、ズボンのほこりを手で払う。

「……誰かを助けるために、違う誰かを犠牲にしたり、自分のことだけ考えて、誰かを見捨てたり、そういうのはしたくないんだ」

ひとりでは立ち上がれそうにない睦月さんに、手を差し伸べる。

「それで自分が傷ついてても？ たとえ死ぬことになったとしても？」

差し伸べられた手を取ろうとしないで、下から見つめてくる。

不可解な俺の真意を、見透かそうとするかのようだ。

「これが、その証拠だと思うけど」

俺は少し大袈裟に実験室を見渡した。縁が溶けて黒ずんだガラス片と、蜘蛛の残骸、木片と化した容器棚、実験機器、動かない化物。

「確かにね。最悪、私も死にそうだったけど」

腕を組もうとしたが、痛みで組むことが出来なかったようだ。眉根を寄せる睦月さん。

「でも、生きてる」

睦月さんがこうして生きていてくれることが、嬉しかった。

「かろうじてよ。馬鹿にしないで」

近くに転がっていたガラス片を手にとって、投げつけてくる。

「確か……正臣だっけ、アンタ」

名前を思い出すのに数秒を費やすところが、睦月さんらしい。

「手当てしたいんだけど、連れて行ってくれる？ 保健室」

「かまわないよ」

「正臣、肩を貸して」

俺が上体を起こしていた睦月さんの左隣に座り込むと、睦月さんは俺の左肩に左腕を回してきた。睦月さんの右手右足は、化け物との死闘で深手を負っている。

「偽善者ってどんな気分なの？」

実験室を出て、廊下を歩いていた。月が白く照らす廊下は、幻想的な空間。二人の言葉が、静かに月夜に溶けていく。

「……つらいよ」

「馬鹿でしょ、アンタ」

「馬鹿かもね」

「馬鹿よ」

「でも、俺はそれが正しいと思えるから」

睦月さんが、右足をかばいながら歩くさまは、運動会という二人三脚のようだった。

「正しいことなんて人それぞれよ。例えば……」

睦月さんが考え始める。

「正臣がボートに乗っていると。三人乗りのボート、二人分の空席。で、三人がすぐ近くで溺れているの。二人は助けられるけど、一人は見捨てなければいけない。もし、全員をボートに乗せてしまえば、ボートは沈んでしまって、みんな死んでしまうことになる」

保健室の表札が見えてくる。

「私だったら、迷わず一人を見捨てるわね。全員の犠牲には代えられないもの。誰かを助けようとして、全員が犠牲になるなんて、本末転倒もいいところ。……これが正しさよ。誰も私を責めないと思うわ。誰にでも分かる、簡単な問題よ」

保健室の扉の前で、俺は立ち止まった。

すぐ近くにある睦月さんの瞳を真摯に見つめる。

少し顔を近づければ、鼻と鼻が触れ合う距離。

「な、なによ？ 言いたいことがあるなら、言いなさいよ」

少し頬が赤いのは気のせいだろう。すすで汚れているからそう見えるだけだ。

「俺がボートを降りるよ」

「は？」

「俺がボートを降りれば、みんな助けられる。それが俺の正しさ」

微笑んでみた。

自分の馬鹿さ加減を笑うように。偽善ぶりを嘲笑するように。

「……あきれた偽善者。誰よりも臆病で、真つ先にボートを占領する人間のくせに」

大きなため息をついて、保健室の扉を開ける。

「でも、偽善だと分かっている、俺の答えは変わらない」

どんなときでも、誰かを思いやること。俺は夏美からそれを学んだ。

「……私が怪我してなかったら、二度と立ち上がれないくらいに殴り飛ばしてあげるのに」

「それはやめて欲しいな……」

「冗談よ。何とか立ち上がれるくらいにするから」

今度は俺がため息をつく番だった。

第二十一話・「……勝手にすれば」

「包帯と、消毒液、それとガーゼ、それから……」

保健室のベッドに腰掛ける睦月さんが、俺に次々と注文する。
俺は保健室内を物色して回り、注文の品を次々とそろえていく。

「制服も交換したいところだけど、さすがにそれは無理か……」

俺は救急箱の中身を確認して、睦月さんを振り向いた。

「……な」

睦月さんは、あろうことが堂々と制服を脱ぎだしていた。

上着を脱いだ睦月さんの上半身は、窓から差し込む月の光で、青白く光り輝く。

まるで、御伽話で言うところのかぐや姫のようだ。

俺は生唾を飲み込む。

鎖骨から胸元に降りていくラインは、絹のようにきめ細やかで、水滴などはあまりの滑らかさに高速で滑り落ちていきそうだ。胸の主張は理性を狂わせんばかりで、ブラジャーの上からでも形のよさをうかがわせる。腹筋、くびれの腰周りも完璧だ。腹筋はうつすらと割れていて、常日頃の鍛錬を思わせた。何より、豊満な体つきにもかかわらず、体脂肪など微塵も感じさせないのが不思議だった。だが、それがよけいに悲しい。

美しすぎるはずのその体は、見れば見るほど化け物との死闘で傷ついてしまっている。

十指で数え切れないほどの青痣が、上半身に分布していた。裂傷が手足のいたるところに見え、直撃を受けた右足と右腕は、もはや

腫れ上がっていて、見るに耐えない。

「後ろ向け、とか言わないから、早くそれ持ってきて」

それでも、俺の心臓は、破裂しそうなほど高鳴る。

胸の高鳴りが化け物に襲われているときよりも大きく感じられるのは、気のせいだろうか。気のせいであって欲しい。

「背中の中、お願い。切り傷とかはないと思うから、湿布だけでいいわ」

睦月さんの背中に回る。傷ついた睦月さんの体を痛々しく思う反面、高揚していく心がある。

明らかな矛盾だ。

性欲と、理性が存在している時点で、俺はもう矛盾しているのかもしれない。

「分かっていたけど、結構冷たいものね」

睦月さんの背中に湿布を貼っていく。直接ではないにしろ、俺の手は睦月さんの体に触れている。

筋肉の張りとともに、女らしい体の柔らかさが、存分に伝わってきた。

「その、ホックの上に重なるけど、かまわない？」

「邪魔なら、外して」

ブラジャーのホックの上に湿布を貼ろうとすると、睦月さんは自分の腕を治療しながら、何気なく言ってきた。

俺は幻聴かと思って、耳を引っ張る。

残念ながら二度と幻聴は聞こえてこなかったもので、俺は恐る恐る睦月さんに問い返した。

「……外すって？」

「ブラに決まってるじゃない。まさか、外したことないの？」

「……ないよ」

自分の経験のなさを悔やんでしまうのは、男の性だろうか。

「初めてなんだ。それで、さっきからぎこちないわけ？ ……それもそうか、初めてじゃね」

馬鹿にするような口調だ。

「私ですら、初めてのときは少し緊張したし。男でもそれは一緒なのね」

睦月さんの言っていることは分かる。いくら鈍感な俺でも俺の中で何かが傷つけられたような気がした。

睦月さんの噂は聞いている。

男遊びがひどいとか、体で稼いでいるとか。

でも、どこかで俺はそれを否定していた。

睦月さんは、そんな人ではないと。

本当は純情で、真面目な人なのだと。

「ちょっと、手が止まってるわよ」

でも、それは俺が作り上げた幻想でしかない。

勝手に幻想を抱いて、神格化して、いざ真実が分かったとたん、俺は傷ついている。認めることを拒んでいる。

自分勝手に盛り上がって、自分勝手に傷ついて、自分勝手にフオリして……。

救いようがない滑稽さ。

本当の睦月さんは、目の前にいる睦月さんだ。それを認めなかったら、俺は誰に恋心を抱いていたのだろうか。

幻滅して、それで終わる恋心だったのだろうか。

だとすれば、なんて愚かで、なんて自分勝手なんだろう。

「正臣、アンタさ」

気がつくと、睦月さんは俺を正面から見据えて怒っていた。

「私の体が気になることは認めるけど、そんな顔するのはやめてくれる？」

「そんな……顔？」

俺は自分の顔を確かめることが出来ずにうつろたえる。

「そうよ。デレデレするのは分かる。鼻息を荒くするのも分かる。でも、何でそんなに苦しそうな顔してるのよ。見ているこっちが嫌になる」

俺の頬をつまんで引き伸ばす。

「男なら、黙って欲望と理性の板ばさみにでもあってればいいのよ」
「睦月さん！ 分かった、分かったから！」

どんな握力をしているのか。頬が千切れそうだ。

「それにアンタさ、私のこと睦月さんとか、睦月とか、雫とか。い

い加減はつきりしなさいよ。聞いているこっちが恥ずかしいんだから。どんな風に呼んだらいいのか迷うあまり、探りを入れている新入生みたいよ」

頬をつかんでいた指を離すと、腰に手を当てる。

「微妙なたとえだな……」

「微妙で悪かったわね……」

手を閉じたり開いたりして、感触を確かめている。なんとも不気味だ。

だが、あっけなく睦月さんの怒りが消える。

「で、何を考えてたの？」

背中を向けて、治療を再開する睦月さん。

「別に、何も」

言えるわけがない。睦月さんに幻滅したとは、口が裂けても。

「どうせ幻滅したとか、そんな類じゃない？」

手に持った湿布を取り落とす。

「まったく、どいつもこいつも幻滅幻滅。本当に嫌になる」

睦月さんの右腕に包帯が巻かれていく。口と左手を器用に使って、腫れた右腕を白い布が包んでいく。

「芸能活動なんかしていると、大概そういうことになるのよね。写真には性格は写らないし。テレビでは本性は見えないし。いい加減うんざり」

包帯をハサミで切って結ぶ。

「この際だから言うけど。そういう経験なら、私、もう数えられないほとしてるから。男がどうすれば喜ぶかも分かってるつもり。文字通り、身についたとでも言うべきかな」

世間話でもするかのような、軽い言葉の連続。

「……聞きたくない」

幻想は壊れた。俺は傷ついた。
でも、それでも、心が痛む。

「初めては、小学校の高学年のときに無理矢理。金額、いくらもらったか忘れたわ」
「もう、いい」

睦月さんは言葉をつむぐのを止めてはくれない。楽しそうに語り続ける。

「男三人でまわされて、数百万単位のお金もらったときはすごかった。あごが外れるかと思ったわ。事実、次の日に医者に行っただけだね」

俺の頭は、しなくてもいい想像をしてしまう。

目の前にある睦月さんの美しい肌を、薄汚い男の舌が這いずり回

っていた。

そう考えただけで、胸が燃え上がるように熱くなってくる。知らない男が、いとも簡単にホックをはずして、その先にあるものを貪り尽くす光景が、俺の中で上映される。

快楽に顔をだらしなく弛緩させる睦月さん。

男たちに貫かれ、征服される睦月さん。

自分から男たちに懇願する睦月さん。

「止めてくれ！」

俺は叫んでいた。叫んだ俺を蔑むような声が、睦月さんの背中から聞こえた。

「私に幻想を抱くのは勝手だけど、本当の私がきちんと存在しているってこと」

睦月さんがブラジャーのホックを外す。

「仕方がなかったのよ。自分ひとりで、小さな頃から生きていくためには。それが現実。利用できるものは利用して、いろいろなものを犠牲にして、踏み台にして、私の今がある。本当の私を見て、なんてかわいいことは言わない。幻想を抱きたいなら、抱けばいい。でも、私は私。誰にも踏み込ませない。幻想に媚びたりしない」

胸を隠すように腕を組んだ睦月さんが、肩越しに嘲笑する。

「偽善者のアンタには、到底理解できないでしょうけど」

俺は身に着けるものなくなった背中に、湿布を貼った。それを

確認してから、湿布の上からブラジャーを身につける睦月さん。

「覚悟はしていたけど、幻想が壊れるのはつらいな……」

俺は余った湿布を救急箱にしまう。

「それでも……なぜか嫌いになれないんだ。雫が」

俺は雫と呼ぶことに決めた。

雫、いい名前だと思う。

「……勝手にすれば」

雫は、俺の微笑から顔を背けた。

いまだに幻想を引きずろうとする心が痛んでいたが、その痛みもほんの少しだけ治まってきている。俺は、心の痛みを、幻滅の痛みを、ゆっくりと時間をかけて治そうと思った。

「次は足のほうお願い」

少しだけ楽しそうな雫が、足を揺らしていた。

第二十二話・「ありがとう」

誰よりも大人びて美しい雫が、ベッドに座って足を揺らしている様子は、どこか子供じみていて微笑ましい。

「なんで笑ってるのよ？ 気持ち悪い」

いぶかしげに眉を吊り上げる所作も、芝居がかっていて面白い。足をぶらぶらさせたり、表情を変えたり、見ているだけで楽しくなってくる。

「解せないわね。変態じみてるわよ」

「そ、そうかな……？」

俺は雫の正面に回りこむ。ベッドに腰掛けた雫の足元に座り込んで、救急箱を開けた。

「ねえ、ちょっと」

雫が俺の肩を叩いてくる。

「待ってくれ、今、湿布を」

今度は少し乱暴に肩を叩かれた。

「だから待てって言って……」

顔を上げると、そこには雫の引き締まった白く長い足。足で人の肩を叩くという暴挙。しかし、そんなことはどうでも良

かった。

羞恥心を持ち合わせていないのだろうか、彼女は。

制服のスカートは短い。これでもかというくらい短い。それならまだしも、化け物との戦いで切り裂かれ、スリットまで入ってしまった。もはや、普通に立っていても下着の色が分かってしまうという、難しく言えば、公然猥褻物陳列罪状態。

「早くしてよ。いつ化け物に襲われるか分からないんだから」

触れた手をはじき返しそうな弾力をたたえる、ふくらはぎ。

「あ、目の前にもいるか。いつ化け物に変わるかもしれない人間が」
雫の挑発するような目。

「人はそれを、狼とか、けだものって言うのよね」
「あのさ……」

俺はなるべく雫に目を向けないように、救急箱から湿布を取り出す。

「羞恥心とか、ないの？」

「慣れてるから、こっぴどいの。いちいち気にしてられないわ」

ベッドに仰向けに倒れこむ。奥の枕にきれいに頭を着地させると、まぶたを閉じた。

ベッドのきしむ音が猥雑に聞こえてしまうのは、ひとえに雫のせいだ。

「慣れてる、ね……」

俺は立ち上がったて雲を見下ろすと、腫れ上がった右足に湿布を張り付けた。

次に、消毒液を取り出すと、足のところどころにある傷に塗りつけていく。治療の手順などがあつたはずだが、保健の先生ではないので分からない。

とりあえず、俺が正しいと思う手順で治療を施す。

時折、雲が痛みでうめき声を上げる。それがまた欲望の火に油を注ぐようで、俺は鎮火させるのに苦労した。

「正臣、アンタさ……」

「ん？」

俺は治療の手を休めないで、声だけで先を促した。

「香奈って子のことどうしたの？」

黙ったまま、消毒液を湿らせた綿を患部に持っていく。

「好きなんじゃないの？」

綿を少し強めに患部に押し当ててしまう。

「ちょっと！ もう少し優しく出来ないの？」

荒療治に、大層ご立腹のようだ。

「……香奈には、和輝がいる」

「何それ。あの子、アンタのこと好きだったように見えたけど。てつきり、二人は両想いなのかと思っただわ」

自分でも分からない。

香奈が俺を想ってくれているのは、火を見るより明らかだ。言葉で、行動で、俺を慰めてくれた。どんなときも、俺の味方でいてくれた。

「……合わなかったんだと思う」

俺も好きだと思った。愛していると思った。

でも、香奈の思いが伝われば伝わるほど、何かが違う、と俺の中で叫ぶ声があった。

割り切ること。

出来ないことを、出来ないとおきらめること。

出来ることだけをすればいいということ。

仕方がなかったことにして、過去を後悔しないこと。
それらは違う気がした。

「そう」

淡泊な返事を返す雫。

「雫は、そういうことないの？」

治療の終わった道具を、救急箱に入れる。

「私？ そうね……誰かをそういう対象として見たことすらないから、分からないわ」

「見たことないって……？」

ベッドに仰向けになったままの雫を、視界におさめる。

「私、こう見えて年齢、イコール、恋人いない暦なのよ」
「そ、そうなんだ。意外」

過去を保健室の天井に映し出すように、雫はじつと天井を見つめ続ける。

「寄ってくる男は掃いて捨てるほどいるけど、どれも私の幻想に勝手に恋しているから。そういうの、なんか嫌なのよ」

天井に右手をかざして、開いたり閉じたりを繰り返す。怪我した腕の状態を確認しているようだった。

「見てて羨ましいわ。あの香奈って子」

雫を覆っていた外殻が、少しだけ剥がれた気がした。

「といっても、私がそうなることはありえないけど。ましてや、偽善者相手には絶対無いわね。まさに皆無」

俺は、たった今、恋愛予防線をひかれたのだろうか。それとも、単にふられただけなのか。

「そういう意味で、あんたは確かに馬鹿で、臆病で、救いようのない偽善者だけど、救い甲斐のある偽善者でもあるわね。絶滅危惧種分かる？」

睦月さんはベッドから降りると、ストレッチを始めた。右腕、右足のストレッチは、慎重に入念に行う。

「少なくとも、私が誰かの行為に涙したのは、アンタが初めて。正直、死ぬと思っていたから、あの時は」

完全に蜘蛛に囲まれ、逃げ出すことも出来なくなったあの時。雫の目から、一滴の涙が落ちた。

彼女のように美しい、頬を伝う雫。

「何でもひとりで切り抜けてきた私があきらめたのに、アンタはあきらめなかった。敵ながらあっぱれ」

「……敵？」

「そ、偽善者は私の敵」

人差し指を俺の鼻先に突きつける。

「私を泣かせたんだから、責任は取って欲しいわね」

俺は銃を突きつけられた犯罪者のように、両手を胸の前で広げた。

「最後まで、死ぬまで偽善者でいなさい。どこまで偽善を貫けるのか、この私が見届けてあげる」

「……分かった」

俺は雫からのプレッシャーを跳ね返すように、眉間に力を込める。

「よろしい」

腕を組んで満足そうになづく雫。

「じゃ、上着脱ぎなさい。アンタの手当てもしてあげる」

「俺？ 俺はいいよ。それほど怪我しているわけではないし」

「私だけしてもらって、アンタはしないじゃ納得いかないのよ。ま、曲がりなりにも私の盾になってくれたんだから、それぐらいさせなさい」

「契約は破棄しただろ。だったら関係ないじゃないか」

「つべこべ言わない。してあげるって言ってるんだから、おとなしく座りなさい。はい、椅子！」

保健の先生が使っているキャスター付の椅子を、俺のほうに蹴つてよこす。俺はそれを慌てて受け止めて、仕方なく腰を下ろした。上着を脱いでベッドにかけると、雫は思っていたよりも丁寧に手当てをしてくれた。

てつきり乱暴に手当てされると思っていたから、拍子抜けだった。机の直撃を受けた俺の背中に、雫は顔をしかめていたが、気を取り直すと、なんでもなしのように湿布を張り付けた。

「言ってなかったわね」

「何を？」

俺は保健室の窓の外を眺める。相変わらずの月の光だ。

「ありがと。助かったわ」

「偽善者だから」

「そうね」

雫が笑ったような気がした。

「よし、こんなものね」

俺は立ち上がって腰を回転させたり、膝を曲げないで床に手をつけたりした。まだ背中に痛みは残っているが、跳ねたり走ったりに

支障はない。湿布の貼られた違和感もあるが、それはこの際無視だ。

「正臣、調べたいことがあるんだけど、付き合って」

俺がストレッチをしている間、雫は保健の先生の机を物色していた。引き出しを開け、書類をかき回し、あらかた探し終えたときに、俺に声をかけてきたのだった。

「いいけど、調べたいことって？」

「気になることがあるのよ」

雫は神妙な顔つきで考え込んでいる。

「とにかく、職員室に行くわよ」

きびすを返して保健室を出て行く。

俺は腑に落ちないながらも、それに続くしかなかった。

第二十三話・「スクール・オブ・ザ・デッド」

思い返すと、職員室を訪れたときには、すでに事件は始まっていたのかもしれない。

遅刻手続きをするために職員室を訪れた。そこは無人で、プリントが散らばっているだけだった。そもそも職員室が無人なんてことはありえないのだ。

俺がそのことに気がついていれば、こんな事件に巻き込まれることもなかったのかもしれない。

「こう沢山机があると、どこから探していいものか迷うわね」

雫が腰に手を当てて職員室を見回す。月のおかげで光源に困らないのが、せめてもの救いだ。

「正臣、アンタ遅刻してきたのよね」

職員室の入り口に立つ俺を振り向いて、指を突きつけてくる。

「ああ、そうだけど」

「だったら、職員室に入ったとき、不自然なことなかった？」

「不自然なこと？」

俺は腕組をして朝の光景を思い出す。

「香奈と一緒に職員室に入って……誰もいなくて……プリントが散らばっていて……」

巻き戻した記憶を、スローで再生していく。細かい見落としがな

いか、しっかり確認するためだ。

「香奈がプリントを片付けるって言い出して、俺は先に教室に戻った」

「……ふうん、あの女がね」

雫は教務主任の机に腰掛けている。足を組み、あごに手を当てて思案にふけるさまは、さながら口ダンの彫刻、考える人だ。

「他には？」

「他か……特に不思議なことはなかったかな。職員室には誰もいなかったし、ましてや、怪しい人間がいたわけでもないしな……」
「そう」

教務主任の机から降りると、机の引き出しを開けて、中に詰まった書類を引っ張り出していく。

「あ、これ私の携帯電話！ 没収されたの忘れてたわ」

「……まさか、それを探しに来たなんて言わないよな」

「使えないなら、意味がないじゃない」

興味がなくなつた玩具を放り投げる子供だ。雫の携帯電話が放物線を描いて飛んでいく。

「捨てることはないだろ。思い出とか詰まっていたりしないのかよ」

香奈がポケットにしまっていた携帯電話を思い出す。

「思い出なんて、無駄な記憶よ。思い出して悲しむくらいなら、初めから無かつたほうがいいわ」

机の引き出しを勢いよく閉める雫。八つ当たりをしているように見えた。

「なんで、思い出が悲しいものだなんて決め付けるんだ？」

「甘やかされて育ったアンタなんかには、分からないわよ。親の愛をまったく受けられないで育った、私の気持ちなんか」

背筋をピンと伸ばした雫の背中が、孤高を思わせる。

群を抜いているが故の、孤高。誰も寄せ付けることなく、交わることなく、ただ己の道を進んでいくだけ。

足をくじいても、心が折れても、脇で支えてくれる人はいない。それは、とても悲しいことなのではないか。

「雫……」

無意識のうちに言葉が口から出てしまう。

「なによ？」

「あ、い、いや……なんでもない」

俺は何を言おうとした。何をしようとした。

「呼ぶ必要もないのに呼ばないで。鬱陶しいから」

胸の奥が締め付けられて、やるせなくなった。

雫の中に、俺の中にある何かを注ぎたくなった。

締め付けられた胸の奥で、溢れ出てくる何か。それは俺の体を勝手に動かした。

痛みはない。でも、苦しい。

破裂しそうなほどに。

心臓が二つあるように感じられる。もう一つの心臓から供給される何かは、俺の全身から出たがっている。何かに向かって注ぎたくて、仕方がなくなっている。

俺は自分の手のひらを見た。

……そうだ。

これは俺が一方的に受け取ってきただけのもの。生まれてからずっと、受け取ってばかりいたもの。

温かくて、泣きたくなる、液体のようなもの。

受け皿である俺の中で一杯になって、ついにこぼれようとしている。

これはなんだ。

絶え間なく、注がれてきた、何か。

生まれてから今まで、ずっと俺に注がれてきたもの。

「雫……」

「だから、何よ？ さっきから」

あきれたように振り向く雫。

「アンタ、大丈夫？ 真剣な顔して、具合でも悪いわけ？」

「雫」

俺は雫ににじり寄る。

「……平手打ちしてくれないか」

「かまわないわよ」

言うが早い、雫の拳が俺の頬を襲う。予告なしの行動に、歯を食いしめる暇もなかった。倒れなかったのは、雫の手加減のおかげだろう。助走も何もないパンチは、それでもあごの骨が砕けたのではないかと錯覚するほど、強烈だった。

「人の話を聞いてないだろ！俺は平手打ちって言ったぞ！確かに！」

「こっちのほうですっきりしたでしょ？」

右の拳をさすりながら、朗らかに言つてのける。

「調子はだいぶ良くなったみたいね」

右腕をぐるぐると回す。どうやら、化け物にやられた怪我はだいぶ癒えているようだった。

俺は、ちょうどいい実験台というわけだ。

「にしても、急に何よ？」

「……ん、おかしくなりそうだったから」

「それは元からでしょ。偽善者なんだから」

俺は苦笑いを浮かべるしかなかった。

「それより、探しているもの、教えてなかったわね。私が探しているのは、証拠よ、証拠」

机に勢いよく手をつけてアピールする。机の上のホチキスが、おびえるように飛び上がる。今時ドラマでも見ないような光景。やはり、雫はいちいち大袈裟だ。

「生徒会室で話したときのこと、覚えてる？」

「大体は」

「後藤が言ってたでしょ？ 体育館が締め切られる理由を先生に聞いても、答えてくれなかったって」

「後藤？ 誰？」

「生徒会長よ」

生徒会長とばかり頭にあっただので、咄嗟に分からなかった。

俺のクラスの学級長も、確か同様の立場にあっただのを思い出した。役職名で呼ばれて、本名を覚えてもらえないという……。

「とにかく、それを今から確かめるわけ」

「そうか、先生が知っていたのなら、それについて何かあるかもしれない……」

「ザッツ、ライト！」

発音がまいち日本語的だ。

「正臣は反対側から。私はここから探すから」

各自作業に取り掛かる。机という机の引き出しをひっくり返して、中の書類やら、プリントやらを速読していく。

テストの答案、没収したエッチな本、家族の写真、教科書、参考書……先生の顔を脳裏に浮かべながら、机を物色していく。

今はもう、生きているのか、それすら分らない先生方……。

俺は過去を懐かしむ心を振り払うように、頭を振る。そして、頬をたたいて景気をつけると、証拠探しに没頭していく。

……しばらくして、雫の大きな声が聞こえた。

「何か見つかった？」

俺は書類に釘付けになっている雫を、背中から覗き込む。座り込んでプリントを読みふける雫の手が、震えていた。怒りなのか、恐れなのかは分からない。

「雫……？」

十数枚のプリントの束。明らかに他の紙と材質が異なっていた。表紙はすでにめくられているので、何の書類かは分からない。蟻のように微細な文字で書かれ、日時が詳細に指定されている。

どうやら、何かの予定表のようだ。

猛スピードでめくられていくプリントの束。俺は雫の速読についていくことが出来ず、内容が読み取れない。

やがて、読み終えた雫は、肩を落としたように俺にプリントの束をよこす。

「読んでみなさい。分かるわよ、この事件の真相が」

力を失った雫の目が、俺を見上げてきた。学年主任の机の中から出てきたそのプリント群を、俺は恐る恐る受け取った。雫は、学年主任の机の脚に背中を預けて、力なく座り込んでいる。

「やってくれるわね……！」

手のひらで目を覆って、大きなため息を吐く雫。

俺は、雫に落としていた視線を、ゆっくりとプリントの表紙に移していく。機密文書、とも、極秘、とも書かれていないその表紙に、俺は何の違和感も抱かない。しかし。

「……なんだこれ」

中央に配された、機械的な明朝体で書かれた一文。

「スクール・オブ・ザ・デッド？」

何かの冗談かと思った。

第二十四話・「地域担当者」

「冗談では済まされないのよ、そこに書いてあることは」

俺はカルテに目を通す医者のように、文字を丁寧を追っていく。

「全てがそこに書いてある文章どおりに運んでいる。仕組みられているのよ、これは」

体育館に先生を含めた全員を集合させる時刻。集会の開始時刻。携帯電話、その他通信機器、電気機器が使用不能になる時刻。それらのスケジュールが、分単位で組まれている。

「それで電話も、教室の電気もつかなかったのか……」

「それだけじゃないわ。次のページを開いて」

人差し指を立てるジェスチャーは、次のページをめくれという指示だ。

俺は言われた通りにページをめくる。

「封鎖、地域？ これは……俺たちの町全体じゃないか！」

俺たちの町を囲うように、地図に赤線が引いてあった。各方面に抜ける道路という道路が、集会の開始とともに封鎖される手はずになっている。

「そ。町の中心であるこの学校が、事の発端ってわけ」

見れば見るほど現実味が薄れていく。

「その『スクール・オブ・ザ・デッド』とかいう、生物実験だかなんだか知らないけど、それは明らかに、私たちを犠牲にして行われている。この国で、容認せられている出来事なのよ」

俺たちの町を犠牲にするほどの大規模な計画が、ここ日本で実行されているということに驚きを隠せない。

日本は平和の国ではなかったのか。

安全神話はどこへ消えたというのか。

町ひとつを実験場にしてしまえる、残酷な国に成り下がってしまったのだろっか。

ましてや、日本は欧米と違い、一般人は銃も刀も持つことを許されない国だ。蜘蛛や、蜘蛛をまとった化け物に対抗する手段を、持つことすら出来ない。

「そこにひとつ気になる記述があるわ」

プリントから目を離して、床に座ったままの睦月さんを見下ろす。

「化け物の記述のところよ。そこから二ページくらいめくってみて」

一度読んだだけで把握しているのだろうか。だとしたらかなりの記憶力の持ち主だ。

「そこに、蜘蛛の解放について、っていう記述があるでしょう？」

「ちょ、ちよっと待ってくれ」

雫の脳内のページに追いついていけない。雫はため息をついて立ち上がると、学年主任の椅子を引いて、背もたれを前にする格好で座った。

「あ、あった。蜘蛛の解放について……これだな？」

「そこ、音読してみて」

「分かった。えっと、蜘蛛の解放については」

発表の場でもないのに緊張する。

俺の音読を、背もたれの上で腕を組みながら聞き入っている雫。

「体育館、集会開始時を見計らって、地域担当者の責任において解放される」

「何か引つかからない？」

音読したばかりの一文を、もう一度の頭の中で読み返してみる。

「……地域担当者？」

「それよ。つまり、あの蜘蛛は、自然発生的に現れたんじゃないってわけ。第三者が、その指令書にある通りに、体育館に蜘蛛を放ったのよ」

「それって、つまり……」

「集会が始まったときには、地域担当者やらは、私たちの近くにいたってことになるわ。体育館内、もしくは外に。体育館の中から出てきたのは、私を含めて五人。……正臣、名前挙げてみて」

雫が、学年主任の机に手を伸ばす。

「雫に、和輝、生徒会長、佐藤、そして夏美」

雫は学年主任の机の上にあったメモ帳とボールペンを取り、そこに名前を書き込んでいく。

「そして、外にいたのはアンタと香奈。もちろんそれ以外にもいるかもしれないけど、蜘蛛を放つタイミングからして、あんたたち二人に見つからないようにするのは、至難の業ね」

俺と、香奈の名前も書き込んでいく。

「俺は、職員室と教室を行ったり来たりしていたから、誰もいないことは確認できた」

「てことは」

雫のペンの動きが止まる。

「ここから、一人抜いて……」

夏美の名前にバツが付けられる。その瞬間に、胸が痛んだ。

「残った六人の中に、地域担当者がいるってことね」

「雫、何を言ってるんだ？」

「簡単なことじゃない。犯人が私たちの中にいるってこと。私たちの町をめちゃくちゃにした、憎むべき犯人がね」

俺は首を横に振る。誰かを疑うことをしなくなかった。

「もちろん犯人は私かもしれないし、アンタかもしれない」

雫の細い指が、俺と雫を行ったりきたりする。犯人を特定する指針のように。

「アンタの親友の和輝かもね。もしかしたらあの女かもしれないわよ?。」

ノック式ボールペンの、ペン先の出し入れを繰り返す。ノックする力チカチという音が、次第に耳障りになってくる。時間制限のあるクイズに、答えさせられているような気分だ。

「俺たちの中に犯人がいなくて可能性も、まだ残されているだろ」「それはそうだけど、現実的に見れば、可能性は極端に低いわね」

俺は悔しさに歯噛みするしかなかった。

俺たちの中に犯人がいるかもしれない。

雫はいとも簡単に言っただけだ。

「いい加減認めたらどうなの？ もし私たちの誰かでないとしても、生き残っている他の誰かを疑うことに変わりはないのよ？」

ボールペンを俺に突きつける。それは俺の首元に突きつけられたナイフのように、鋭く俺の願いを切り裂いた。

「いざつてとき、正臣、アンタは偽善者であり続けられるの？」

もしも、俺たちの中に犯人がいるとしたら。

「そいつが生き残った誰かを殺そうとしたら？」

雫が席を立つ。俺の周りをゆっくりと歩き始める。

「誰かが殺されてしまったら？」

容疑者を尋問する刑事のように、威圧感を増した瞳で、俺を周回する。

「答えなさいよ」

俺の目の前で立ち止まると、俺を下からのぞきこんでくる。
うつむきかけていた俺を、逃さないために。

「俺は、犯人が俺たちの中にいるなんて思っていない。そんなこと、考えたくない」

まだ可能性が残されているなら、俺はその可能性に賭けたかった。
クラスメイトとして、同じ学び舎で生きる学生として、今までともに生活してきた仲間が、仲間同士で殺しあうことなんて、狂気の沙汰だ。

「ま、いいわ。そう思いたいなら思っていればいい。ただし」

俺の胸に、雫が人差し指をつきたてた。

「もしも、あんたの願いが最悪の形で裏切られたとき。そのときは覚悟しなさいよ。私は、裏切り者には容赦しない。アンタが偽善者として、犯人でさえかばうようなら、私はアンタに対しても容赦はしない」

雫の指から、言葉から、残酷な意思が伝わってくる。雫は、自分以外の何者も信用してはいない。自分自身を信じることが出来るだけの、過去と経験を持っている。

「アンタは、そうなったときの覚悟を決めておきなさいよ。そうならないことだけを祈るんじゃない」

指が俺の胸から離れる。それとともに、雫の威圧感が消えていった。

「……これは、私の勝手な思い込みなんだけど」

他の教師の机をあさり始める雫。

「アンタは、犯人じゃない気がするわ」

生徒指導の教師の机の中から、おそらく没収したものと思われるナイフを取り出す。

刃先を確認して、満足そうにポケットにしまった。

「アンタが犯人だったら、馬鹿らしくて笑っちゃうもの」

「信じてくれるのか？」

「信じるっていうか、勘よ。女の勘」

手を振って、信じる、ということを否定する。

「ま、背中を任せるとまでは言わないけど、背中を向けてもいいかなって、思えるのよ」

「喜んでいいんだよね？」

「喜びたいのならね」

腕を組んだ雫が、ニヤリと笑う。俺はその笑みを見て、喜びを抑えるしかなかった。馬鹿にされているように感じたからだ。

「私がこんなことを言うのは珍しいんだから、素直に喜びなさいよ」
「そんなこと言うから、素直に喜べなくなるんだろ」

唇を尖らせる。雫はそんな俺を見て楽しそうに笑っていた。馬鹿にするような笑いだったが、そこには、あざけりも、さげすみもない。ただ、楽しいから笑っているようだった。

「とりあえず、この後は、みんなと合流するのか？」

「それなんだけど」

雫が、プリントの束を渡せと言わんばかりに手を差し出したので、俺は黙って従った。

「これを見る限りでは……」

雫の目が、プリントの文字列を高速スキャンする。

「蜘蛛を解放した後の、先生達の脱出方法は記載されていないのよね」

「逃げるつもりはなかったってことか？」

「分からない。ただ、学年主任の机の中から出てきたってことは、学年の先生達には伝達してあるんでしょうね。私、集会のとき最後尾のほうにいたんだけど、後ろにいた先生は騒ぎが起ころうとも慌ててなかったもの」

俺が香奈のバッグを教室に持っていた頃だ。

職員室に置き忘れていて、香奈の携帯電話にメールをした。香奈の携帯はバッグの中にあって、俺の厚意は無駄に終わった。

「犠牲になることを承知で、あの場にいた。もしくは、想定外の出来事があったのか。体育館にいた教師も、他の生徒同様殺されたんだし……。ま、そんなことはどうでもいいけど」

あの時、机から落ちた香奈のバッグの中に、卵の黄身のようなものが大量に付着していた。赤くて、どろりとしていて、触ると指と指の間で糸を引いた。

「脱出する経路、方法が見つからない以上、合流したほうがよさそうね。犯人が誰か突き止める必要もあるだろうし、あわよくば脱出する方法を知ってる可能性もある」

あれは何だ。嗅いだことのない強烈な異臭。

「悔しいけど、今はそれしかないようね」

それ以前に、なぜ落ちたプリントを整理する必要があったのか。なぜ俺を先に行かせたのか。そして、俺がその後に職員室に行ったとき、プリントは整理されてなかった。それはなぜか。

「そうと決まったらさっさと行くわよ、正臣」

雫は俺に背中を向けて、職員室を出て行こうとする。

だが、俺がついてきていないことが分かると、振り向いて首をかしげる。

「何ばうつとしてるのよ？ 死にたいのなら止めはしないけど」

プリントの束を持った手を腰に当てて、呆れたように言ってくる。

「あ、ああ。スマン」

俺は頭を二、三度小突いて、邪念を振り払う。そして、大きく息

を吐き出す。邪念が、息と共に出て行ってくれるのを願った。

「まったく、しっかりしてよね。足を引っ張るようだったら、切り捨てるわよ。それと、これ、持ってた」

月光の光で銀色に輝くそれは、鍵だった。下手投げは予想外にハイスピードで、俺は落としそうになりながらも、何とか両手でキャッチした。

「学校のマスターキーよ」

「何で俺が？」

「信じてるってわけではないけど……とにかく！ アンタが持ってた、なくしたりしたら殺すわよ」

雫は咳払いすると廊下に出て行く。

照れ隠しのようなものが、混じっているように見えた。

俺も続いて廊下に出ると、雫は廊下の奥を、真剣な表情で見つめていた。

「どうした？」

「何か聞こえる……足音」

雫の手が俺の口を覆っていた。

第二十五話・「来る！」

雫のしている廊下の先は突き当たりで、左右に廊下が分岐している。

左は職員玄関で、右は第一棟につながる廊下、という構図だ。その第一棟につながっている廊下から、足音が聞こえてくる。

「一人……違う、三人……この場合、三匹と言ったほうがいいのかもね」

足音は、こちらに向かってだんだんと大きくなる。すぐにでも突き当たりに飛び出してくるだろう。

「来る！」

俺の口をふさいでいた手を戻して、雫が身構えるのと同時に、それは姿を現した。

廊下の突き当たりに手をついて、息を荒げている。

背後を執拗に気にしながら、もつれるように再び走り出す。廊下の先にいる俺と雫を発見したとき、まるで藁をもつかむような勢いで、それはすがり付いてきた。

「た、助けて！」

雫の制服の袖にすがりつく佐藤。雫はそれを鬱陶しそうに振り払うと、大きく鼻で笑う。

「見捨てた人間に、助けを求められるとは思わなかったわ」

紫電の瞳が、佐藤を恐怖でのけぞらせる。助けを求めようとする佐藤の手が、引っ込んだ。

「そんなこと言ったら、こいつだってそうじゃないか！」

佐藤は雫に訴えるように、俺を指差す。懇願するような媚びた目で、雫を見ている。

一方で、ちらりと俺に向けられた目は、明らかに敵に対して向けるものだった。

「ま、それもそうね。でも、私はあの後、正臣に助けられてるのよ。残念ながら」

手を振ってため息を漏らす。

「でも、こいつは助けを求めてる僕たちを見捨てたんだ！」

「私と一緒にしないで。私は助けなんて求めてないわよ」

雫のぶつきらばうな言葉に、拳を震わせる佐藤。

「おい、お前！　今僕を馬鹿にしただろ！」

佐藤の怒りの矛先が俺に向いた。

みっともないほどに顔を紅潮させ、なおかつ、こめかみには青筋が浮き出ていた。

俺はそんな佐藤の激情に驚いて、声も出せない。

「僕を笑っただろって、言ってるんだよ！」

「笑ってなんかない。ただ、驚いただけで」

息も絶え絶えになっているのに、怒鳴ってくるものだから、佐藤は咳き込んでしまう。

呼吸困難にでも陥ってしまいそうな佐藤は、確実に冷静さを失っている。目をきよろきよろさせて落ち着きもない。

「それより、アンター人？」

雫より背が低い佐藤を、見下して問いかける。雫は、誰かの上に立って物を申すのが好きなようだった。もちろん、身長ではなく、態度の意味で。

佐藤は、雫の言葉で我に返り、自分が走ってきた廊下に目を向ける。

「追われてるんだ！」

大声を上げた佐藤が、再び雫の袖にすがり付こうとしたとき、佐藤を追跡していたそれが、廊下を曲がって姿を現した。ただし、廊下を曲がったといっても、廊下にはいない。

「バリエーションが豊かなのは、飽きられないための大事な要素だ。ってことは認めるわよ。でも、こういうのは嫌」

佐藤と俺は、声を出すことも出来ない。

「トビラ……を……あけ……て」

人間という生き物は、見た目で判断すると、どこまでが人間なのだろう。

「ヲヲヲ……アケ……て？」

天井に背中をこすり付けるようにしながら、こちらに正気を失った目を向けてくる。

背中からは、蜘蛛の足が飛び出していて、がっちりと天井をつかんで体重を支えている。腹と胸、足、顔には相変わらず蜘蛛の大量群が取り付いており、手だけが廊下に向かって垂れ下がっていて、人間であつた証拠を残している。

「何かで見たわ、こういうの」

「エクソシスト、だろ」

「あつたわね、そんな映画」

鎧のように蜘蛛をまとつた化け物を見てきた耐性か、俺は自分でも驚くくらい冷静に、記憶の引き出しを開けることが出来ていた。

「シニ……たくな……イイ」

一匹目と同じ経路をたどるように、二匹目が姿を現した。天井を這ってくる二匹の化け物は、全身にまとつた蜘蛛の赤い光で、不気味に輝いている。

どうやら、完全に標的にされたようだった。

雫はポケットに手を入れて、ナイフを握り締める。

「逃げよう。いくら三人でも、これは」

「……場所を変えるわよ」

雫は徐々に後ずさりを始めている。

「……嫌だ……嫌だ嫌だ嫌だあああ！」

佐藤は背中を向けて、真っ先に逃げ出した。転びそうになりながらも、何とか這いつくばるようにして駆け出す。

それが、号砲だった。

瞳を輝かせた化け物が、天井から落ちてくる。

背中から飛び出した足のほうを、地面に向けて着地したということとは、人間の背中が、蜘蛛にとっては腹側ということなのだろうか。人間の頭が、廊下にぶつかる鈍い音がこだまする。

俺は、佐藤に続いて走り出した雫の後を追う。ぎりぎりのところで振り向きながら、俺は化け物との距離を測った。

蜘蛛と一体化した人間が、ブリッジをしながら駆けてくるさまは、映画さながらだった。

ただし、人間である部分はごくわずか。

地面を蹴っているのは蜘蛛の足であり、正確にはブリッジなどではない。手、足、頭は引きずられて、その度に赤い波線が廊下に描かれる。

紛れもなく、それは血液だ。

俺たちは階段を一段飛ばしで上る。このまま延々と廊下を走る体力勝負では、分が悪いと踏んだからだ。

……体力の差だろうか。三人の逃げる順番が入れ替わっていた。

先頭が雫、次に俺、そして最後尾が佐藤だ。

佐藤は走って逃げてきた上に、さらに走らされている。きついのは当たり前だ。

「ま……待つて！……僕を置いて……行かないで！」

佐藤が俺の袖をつかんでくる。俺はバランスを崩して階段に倒れ

てしまった。転がり落ちなかったことが不幸中の幸いだった。

階段に座るように倒れた俺は、化け物が上ってくる様子をしっかりと視認した。

化け物は階段を上ってきてはいない。

階段の壁側に張り付いたまま追いかけてきている。

二匹は互いの距離を保ったまま、俺との距離を詰めてきた。

順番が入れ替わった俺と佐藤。

佐藤は、転んだ俺をこれ幸いに、助け起こそうともせず階段を上っていく。俺は口から吐き出したい怒りの衝動を押さえ込んで、二人を追いかけた。

体力も限界に差し掛かる三階。

ここからは屋上に続く階段のみだ。第一棟とまったく同じ構造の第二棟。窓の外を眺めれば、月明かりに照らされた生徒会室が同じ高さにある。

雫は廊下をトップスピードで走り抜けている。怪我が全快したとは思えないが、それにしても軽快な走りだ。

雫は走りながら俺たちを振り返る。

「死に物狂いで走りなさいよ！」

俺たち二人は返事すら出来ない。疲労で衰えるスピード。背後から迫る化け物。差は詰まるばかりだ。

走ろうとする意思に、体がついていかない。

途中、佐藤のせいで転んでしまった俺は、佐藤よりも離れた地点を走っている。佐藤と化け物、どちらが近いかといえば、それは残念ながら化け物だ。

雫が物々しい扉の前で立ち止まる。どうやら図書室に逃げ込もうという算段らしい。

「正臣！ 鍵よこしなさい！」

背筋が凍るような思いだった。マスターキーは俺が持っている。俺が到着してから鍵を開けるとなると、背後に迫る化け物との距離からして、三人は完全に化け物に殺されてしまう。

蜘蛛に全身を覆われた事を思い出して、身の毛がよだつ。

「鍵を投げてよこせよ！」

佐藤は図書室に着くやいなや、疲れなどどこ吹く風で発狂した。

俺は化け物の足音に精神と体力を削られながらも、ポケットから鍵を取り出し、佐藤に向かって放り投げた。

廊下を一直線に走る銀色の弾丸。

俺の投擲力などたかが知れたもので、投げた鍵はすぐに重力に負けて、廊下を滑っていく。

滑っていった鍵は、佐藤の上履きにぶつかって止まる。佐藤は大急ぎでそれを拾い上げると、焦慮と汗をみなぎらせた顔で、鍵穴に差し込もうとする。

「ああ……入れよ！ この、入って！」

震える手のせいで、鍵を上手く差し込むことが出来ないようだった。

ミスをすればミスをするほど、焦れば焦るほど、次の成功が遠のいていく。ミスは体をさらに硬くさせ、焦りは更なる焦りと呼ぶ。迫る化け物との距離は、絶望までのカウントダウンだ。

「アンタ、とろいのよ！ 貸しなさい！」

佐藤を押しつけて、雫が鍵を奪い取る。

俺は、廊下の半分まで来たところで、足元がもつれて転んでしま

疲れか、焦りか、恐怖か。

いずれにせよ、転んだことは命取りになる。

突然、月明かりがあるのにもかかわらず、俺の周囲が黒く染まった。

風を切る嫌な音がする。化け物の足音が聞こえない。

転んで手を着いたまま、俺は肩越しに背後を振り返る。

見えたのは、化け物の腹。

同化した人間で言うところの背中部分。顔面を血で染める生徒の顔が逆さまになって俺に迫る。

俺は廊下を横に転がるしかなかった。

俺がいた場所には、蜘蛛の太い足が突き立っている。全身に巢食う蜘蛛の赤い目が、一斉に俺を見た気がした。

みつともない格好のまま、俺は走り出す。四本足で走る動物のようになり、手を使いながら。

「開いた！」

雫の歓声が聞こえた。佐藤は開いた扉にいち早く体を滑り込ませていく。押しのけられる形になった雫は、怒りで廊下を踏み鳴らしていた。

飛び掛った化け物に代わり、二匹目の化け物が先頭を切る。

俺に飛び掛った一匹目の化け物は、男子生徒を取り込んだ化け物。二匹目は、女子生徒を取り込んだ化け物だ。長い髪が、まるで化け物のひげのように、ゆらゆらと揺れている。

俺と化け物との距離は、五メートルもない。時間に換算したら一秒もないのではないか。

「正臣！」

雫が観音開きの片側を開けて待っている。普段の雫ならば閉めか

ねない扉だった。身の安全を最優先に考えそうな雫だからこそ、俺はそんな雫の行動が嬉しかった。元気付けられた。足に力が戻ってくるようだった。

「閉めるわよ！」

次第に扉の間隔が狭くなる。時間制限がある扉ということなのだろうか。なんとも雫らしい。

「も、もう閉めたほうがいい！ 間に合わない！ あいつのせいで僕たちまで殺される！」

雫が持つ扉の取っ手を握り、閉めようとする佐藤。

先ほど抑えた怒りを、雫は忘れていなかったのだろう。そんな佐藤を右腕の一閃で、振り払った。

鼻柱に裏拳を見舞われた佐藤は、鼻を両手で押さえて尻餅をつく。鼻からは、大量の血が流れ出していた。

俺はラストスパートをかける。

体内の酸素を全て燃やす。肺は悲鳴を上げていて、視界もどこかぼやけている。

ランナーズハイ。

周囲の景色は消え去り、扉と雫しか見えなくなる。化け物の恐怖は、どこかへ消えた。ただ図書室に飛び込むためだけに、俺は最高速度で走り続けた。

ゴールテープを切るように扉の中に入ると、俺は走るスピードそのままに、図書室の床に無様に転がった。

雫が体中の力を使って扉を閉める。女子生徒の化け物が、飛び上がるのが見えた。体を滑り込ませようとしている。

雫が早いか、化け物が早いか。

勝負は、雫の勝利で終わった。

化け物の足が、閉じられた扉に挟まって千切れる。太い足が雫の前に転がった。

化け物が扉にぶつかる轟音。千切れた足から漏れる、血液に似た赤色の体液。

雫はすぐさま扉に鍵をかけ、俺たち同様、床に尻餅をついた。

「これで何とか乗り切ったわね……」

肺に大量の空気を送り込みながら、安堵の一息。

俺も何か声をかけようかと思ったが、限界まで酷使した体は、言うことを聞いてはくれなかった。

佐藤は、止まらない鼻血に悪戦苦闘している。持っていたハンカチは、すでにぐっしりと赤で濡れていた。

恨めしそうに雫を見てはいるが、当の本人は気がついていない。

俺は床に大の字になる。ひんやりと冷たい床が、火照った体に気持ちいい。

さすがの化け物も、分厚い図書室の扉からは侵入できないようだった。扉に体当たりしたり、足で削るような音が繰り返されたりしていたが、やがて無駄だと分かったのか、化け物の音は彼方へ去っていった。

この地域でも有数の蔵書数を誇る、我が高校自慢の図書室。

普段は、生徒に混じって一般客も訪れているほどだ。貴重な本も多々あるので、扉はもちろん厳重にしてある。

今このときだけは、学校の設備に感謝するしかなかった。

第二十六話・「頼りない返事」

「それにしても、なんで化け物はいろいろ変化してるのよ」

「そのプリントには書いてないのか？」

俺は雫が持っているプリントを指差す。

「書いていなかったわ。蜘蛛の生態なんて」

「僕にも見せてくれ！」

やっと鼻血が止まったのか、ハンカチを投げ捨てて、雫のプリントを乱暴に奪い取る。

「何だこれ……？」

佐藤は食い入るように見つめて、プリントをめくっていく。

「何だよこれ……何なんだよ！」

ばら撒かれたプリントが空中を漂う。雫につかみかかる佐藤。雫の制服をつかんで揺り動かす。

「……離して。殴るわよ」

「説明しろよ！ 何で僕がこんなことに巻き込まれなくちゃいけないんだ！」

聞く耳も持てない佐藤の豹変ぶりに、雫の右腕があっけなく振り抜かれた。

どうやら、二度目の忠告はなったようだ。

言葉では言い表せない声をあげて、佐藤はのけぞり、仰向けに倒れた。

「あが……かが……」

佐藤の鼻骨は折れているのではなからうか。一度目はまだ手加減していた。

しかし、雫の逆鱗に触れた今回は手加減なしだ。骨にぶつかる鈍い音がしたことからも、それが理解できる。

「佐藤、大丈夫か？」

俺は仰向けになって苦しむ佐藤の肩に手を置こうとする。

「うるさい！」

慈悲のない言葉によって、俺の手は払われてしまった。佐藤の力任せな払い方に、腕がひりひりと痛む。

「ほつときなさいよ、そんな奴。足手まといになるだけよ」

「雫、悪いのはお前だろ。俺たちは仲間だ。今は仲間内で争っている場合じゃ……」

「さすが偽善者。言うことも理にかなってるわね」

「俺は自分の正しいと思うことをしているだけだ」

「もういい加減、それは聞き飽きたわ」

興味がないというふうな、肩をすくめて見せる。

「……復讐して……やる……復讐……してやる……殺してやる……」

自分自身に催眠術でもかけるかのように、体を丸めた佐藤が繰り返し返している。俺に背中を向けるように体を丸めているので、良くは分からないが、目元には光るものが浮かんでいた。悔しさのあまり、泣いているのだろうか。

「やってみれば？ 弱虫のアンタなんかには出来ないでしょうけど」

地獄耳の雫が、馬鹿にするように鼻で笑う。その言葉を耳にした佐藤は、ぶるぶると震えるばかりだ。

恐怖におびえて震えているわけではない。

手のひらに食い込んだ爪が、それを物語っている。

「雫！」

俺は立ち上がって、床に足を投げ出して座る雫を見下ろした。

「私を見下ろさないでくれる？」

不機嫌な顔を俺に向ける。

「雫……敵ばかり作っても、疲れるだけだと思う」

見下ろされることが嫌で仕方がないのか、雫は立ち上がって同じ高さに視線を持ってきた。

「仲間ばかり作ろうとしてるアンタにすれば気に入らないんだろうけど、私はこれでいいと思ってるわ」

不機嫌は加速する。

「仲間は、馴れ合いと甘えしか生まない。いつもみんな仲良しこよし。そんなに仲良しなら、手でもつないでピクニックにでも行けばいいのよ」

俺の鼻先に突きつけられる指。

「俺はそうは思わない。仲間がいるから、励まし合える。仲間がいるから、喜びを分かち合える。仲間がいるから、優しくなれる。仲間がいるから……」

「仲間が何だっていうの？ 他人の顔色をうかがって、愛想笑いを浮かべて、当たり障りのない意見を言い合う」

俺に突きつけた指で、仲間のデメリットを指折り数える。

「自分の意思がまったくない、ただの協調性だけの集団じゃない。心の中ではまったく正反対の考えをしても、嫌われたくないから、自分の意見を押し殺す。個性も、自主性も、積極性もない、馴れ合いだけの集まりなんて、まっぴらごめんよ」

「俺は雫を仲間だと思ってる」

俺の言葉を聞いた雫は、腹を抱えて笑い出した。

「止めてよね。そういう歯の浮く台詞。笑い死にそう」

「俺は本気だ」

「分かってるわよ。アンタはいつだって本気で偽善者をやってる。だから、私は笑うしかないのよ」

目に涙をためて笑う雫。

「結末がひとつしかないから」

笑いをこらえて、剣のような言葉を俺に突きつけた。

「そのままだと確実に死ぬわね、正臣」

図書室の奥の窓ガラスが割れる音がした。

音は二方向。

西側と、東側の窓ガラス。

「意外と早いじゃない」

雫の舌打ちが、何が侵入してきたかを物語っていた。

俺たちは読書スペースにいる。机と椅子に囲まれていて、周囲を良く見渡せる。

それに比べて書棚が整然と並んでいる奥は、薄暗さも手伝ってほとんど状況を把握できない。本棚が碁盤の目のように並べられているから、本棚と本棚の隙間は迷路のようだ。

「ここまでできたら、やるしかないわね」

奥から、化け物が移動する細かい音が聞こえてきた。

本棚と本棚の間、狭い通路を高速で移動している。

雫は読書スペースの隅にある、掃除用具が入っているロッカーを開けた。そこからモップを取り出すと、一本を俺に投げてよこす。

「自分の身ぐらい自分で守って」

雫は、モップの拭き取る部分を外して、柄の部分だけにする。俺もそれに倣う。

「佐藤！」

俺が振り向くと、佐藤はだらしなく股を広げて、がたがたと震えていた。

「机の下にでもいてくれ！　そこだと化け物の目に付きすぎる！」

大声にびくりと反応した佐藤は、這うように奥の机の下に逃げた。

俺は、モップとしての機能を失った棒を握り締めて、雫の横に並ぶ。

「私のことは気にしないでいいわ。アンタは自分のことだけ心配してればいい」

図書室が暗闇に覆われていく。

太陽のように周囲を照らしていた月が、黒く大きな雲に覆われた。光源を失った俺たちの視界は、限りなくゼロに近い。

暗闇と化け物、俺たちは二つのものと戦うことになりそうだ。

「正臣、アンタは右。私は左から来るのをやる」

「分かった」

「あらかじめ言っておくけど、いくら私でも、一人で二匹は相手に出来ないわ。私たちが生き残るには、各個撃破が絶対条件。折を見て、二人対一匹の状況を作って」

「……やってみる」

「頼りない返事」

化け物の赤い目が、本と本の間を駆け抜ける。

「嘘でもいいから、任せろ、ぐらい言っしてほしいんだけど」

雫が不満を漏らすのと同時に、二匹の化け物は本棚から姿を現した。

第二十七話・「やるじゃない」

「シニ……タク……なナ、ナい……」

男子生徒の化け物は、俺の方へ。

「トトト、びらを、アケ……アケテ」

女子生徒の化け物は、雫の方へ。

俺たちは、背中を向け合う形で、化け物と対峙する。

化け物の赤い目が輝きを増した。

俺は重心を低くして、モップの柄を横に構える。男子生徒の背中から生えた足を曲げて、化け物は跳躍する。そして、天井に張り付き、俺の頭上から急降下。

全身に張り付いた蜘蛛の赤い目が光っていなければ、俺は反応すら出来なかっただろう。

俺は体を回転させて、その場をしのぐ。

机の上に着地した蜘蛛は、すぐさま全身に張り付いた蜘蛛の目を動かして、俺の位置を探る。天井に張り出すような男子生徒の腹部からは、小腸が垂れ下がっており、跳躍の衝撃で大腸までもが飛び出していた。それでも声を出している男子生徒は、果たして生きていると言えるのであろうか。

「シニ……シニ……タタタ」

男子生徒の目がぐるぐると回る。

俺は化け物の背後に回りこもうとする。

だが、化け物は一足早く俺を発見すると、再び跳躍した。先ほどと同じく天井に張り付く。

割れた蛍光灯の破片が、ぱらぱらと床に降り注いだ。

「タタ……タタた、クナ……イ」

化け物の体が、痙攣する。ふるい落とすように体にまとった蜘蛛の大群を床にばら撒いていく。さながらそれは、赤い雪だ。真っ赤な目を持った蜘蛛が次々に床に着地していく。

机の上、椅子の上、そして、床の上。

音もなく着地しては、俺の周囲を取り囲むようにして移動していく。赤い包囲網が完成しつつあった。

俺は先手必勝とばかりに、包囲の薄い方向に走り出す。

囲まれたら終わりだ。

俺は飛んでくる赤い光を切り払う。自動車のテールランプのように、赤い尾を引きながら蜘蛛は突進してくる。頭部を襲ってきた蜘蛛は、上段からの切り下ろしで、真っ二つに。

蜘蛛の骨格を潰す、ぐしゃり、という音と、内容物が床に叩きつけられる、べちゃり、という二つの音が、蜘蛛を迎撃するたびに室内に響く。

正直に言えば、俺は震えるほどに怖い。

しかし、今日一日で幾度も経験してきた恐怖や悲しみが、化け物に対する耐性を作り始めていた。つまりは、慣れた。

俺はなるべく体を回転させ続けるよう意識しながら、死角を補っていく。雫がそうするように、回転の動作の中に攻撃を織り交ぜる。机の上に乗った蜘蛛が俺の頭部に、床を移動してきた蜘蛛が俺の足に取り付こうと加速した。

頭部を襲った蜘蛛を、回転をかけた一撃でなぎ払い、さらにもう一ひねりを加えて、足元を移動する蜘蛛を蹴り飛ばす。

本棚に激突した蜘蛛は、バウンドして床に落ち、弾き飛ばした蜘蛛は、机の上を滑っていき、壁にぶつかって破裂した。

破裂した蜘蛛を見て、佐藤が悲鳴を上げる。

次々と俺に殺されていくのに業を煮やしたのか、男子生徒の化け物は、天井に張り付いたまま、俺のほうへ移動を始める。男子生徒の首が揺れ、赤いよだれが滴り落ちる。

左右からは蜘蛛の群れ。前方からは天井に張り付いた化け物。

三方向からの敵。

完全に追い詰められた。

化け物の赤い瞳が不適に輝く。それは、俺を殺そうと跳躍する合図だ。

だが、化け物はものの見事に着地に失敗する。

「がら空きなのよ、後ろが」

机の上からの跳躍を利用して、勢いのついたモップを天井の化け物に叩きつけていた。横っ腹に打撃を受けた蜘蛛は、バランスを崩して、床に腹を向けた状態で転がる。それを雫は見逃さない。

モップを縦にして、化け物に突き立てようと走りこむ。

「これで、終わりよ」

腹を見せた蜘蛛を殺そうと、振りかぶる。

女性との化け物がその隙を逃すはずがない。背中を向けた雫に対して、蜘蛛を発射する。発射といっても、射出機構があるわけではない。

体を回転させた遠心力で、蜘蛛を飛ばしたのだ。

下手な鉄砲も、数を撃てばいつかは当たる。

何十という蜘蛛がばら撒かれ、赤い弾幕がはられた。そのうちのひとつが、運悪く雫の背中にクリーンヒット。雫は前のめりの床に突っ伏し、モップを手放してしまう。

床に手をついた雫に、背中を襲った蜘蛛が飛びかかる。

俺は床を蹴って雫に近づき、背中ぎりぎりをなぎ払った。

雫の背中に取り付こうとしていた蜘蛛を打ち返す。

だが、それで終わりではない。

ちようど円状に飛ばされた蜘蛛の軍隊は、俺たちを包囲する形で着地していたのだ。

まさに、四面楚歌。

「雫！」

俺はモップを雫にパスする。転がっていたもうひとつのモップを拾い上げて、包囲網のひとつに飛び込んでいく。

「やるじゃない」

雫が笑みを浮かべた。右手でモップをがっちりと受け取った雫は、右から飛び込んでくる蜘蛛に視線をくれずに、弾き飛ばした。

倒れていても、周囲の状況は把握していたということか。

もしかしたら、俺の助けなど要らなかったのかもしれない。

包囲網を突破しようとする俺に、赤は殺到する。

数え切れない蜘蛛の大群が、一斉に俺の頭上から降り注いだ。まるで赤い花火。

俺はあえてそれに抵抗しない。

全ての蜘蛛が俺の頭上から急降下しようとしているため、下から空きのなだ。腰を落として、足をたたむ。

野球部で言うところのスライディング。

制服が床にこすれる摩擦熱が、俺の膝を焼いた。包囲網を突破した俺は、スライディングの姿勢から素早く立ち上がり、居並ぶ書架の中に飛び込んでいく。

ちらりと雫を見れば、どうやら俺と同じ考えだったようだ。

考え方としては単純だ。

三百六十度が見渡せる読書スペースで戦うことは、数で攻める蜘蛛にとっては絶好の戦域だ。

一方、本棚が整然と並ぶここは、左右を本棚で覆われているから、単純な話、前後だけに気を配ればいい。

少しでも蜘蛛の絶え間ない攻撃を緩慢にさせようという狙いだ。しかし、それは逆に逃げ場を失うことを意味する。

前後を封じられてしまうのだから、容易には逃げられない。

前門の虎、後門の狼　一難去ってまた一難。

「見通しが甘かったようね」

俺の背中に、雫の背中が触れた。二人で背中を支えあう形だ。

「雫、ひとつ考えがあるんだ」

「発言を許可するわ。言ってみなさいよ」

「奥に、普段はかなり古い本ばかりが置かれている書庫があるだろ」
「貸し出し厳禁のやつね」

雫の背中が離れる。

俺たちのいる書棚をつきとめた化け物が、雫に飛び掛っていた。

雫はそれを袈裟切りに打ち払おうとするが、ただでさえ狭い本棚と本棚の間、モップが本棚に引っかかってしまう。

雫の苦渋の選択。

モップを横にして化け物を受け止めようとする。だが、それはあまりにも無謀だった。化け物の重量を受け止めることが出来ずに、床に押し倒されてしまう。

「とと……ビラヲ……」

女子生徒の逆さまに垂れ下がった顔から滴る血が、雫の頬に落ちていく。女子生徒の口からは、大量の触手が吐き出され始める。それは個々に自由意志を持っているようで、全てが別々の動きをしていた。

雫を選別するように全身を嘗め回し、やがて狙いを定めたように、口を狙って直線的に動く。銃弾のように放たれた触手の束を、雫は顔を動かすことによって、何とかかわした。

首元を通過した触手は、床に突き刺さる。

「まさか、女同士でセクハラされるとはね！」

雫の細く、しなやかな足が、化け物の腹部を蹴り上げた。雫から引き剥がされた化け物は、書棚にぶつかって床に落ちる。床に尻をつけたままの雫を放っておくほど、蜘蛛の群れは紳士的ではない。化け物に代わって獲物を得んとする蜘蛛が、津波のように連続して襲いかかった。

尻餅をついた格好から起き上がる雫。化け物を蹴り飛ばしてから、一秒も経過しないうちの追撃。舌打ちをする暇もない。

「早く書庫に！」

俺は雫をかばうように正面に立つ。

「自分のことを心配しなさいよ！」

立ち上がった雫は、両手を本棚に伸ばして、文学全集を握り締める。

立ち位置が入れ替わった俺と雫。

俺は雫をかばうように雫の前に出、雫は俺の背中に迫る蜘蛛を持

った辞書で叩き落とす。

正直なところ、雫は俺に迫った蜘蛛ではなくて、あくまで自分に迫る蜘蛛だけを迎撃しているのかもしれない。

「アンタの尻拭いを」

それでも、雫の迎撃をかくぐって、俺の背中に取り付く蜘蛛は存在しない。

「なんで私がしなくちゃいけないのよ！」

俺に助けられていると勘違いしているのか、かんしゃくを起こして、右手に持った文学全集を化け物に投げつけた。俺は蜘蛛を打ち落とすことに神経を傾けていたが、雫の怒声にびくりと肩が跳ね上がったしまった。

雫は、蜘蛛の迎撃で手一杯の俺の手首を取る。

「アンタがいると私の調子が狂うのよ！」

雫の悔しそうな顔。

「各個に応戦するのは分が悪いわ！ 実力的にも、アンタは特に！」

右手に俺の手首を握り締めたまま、左手に持った文学全集で、蜘蛛の群れを叩き割って進む。

俺はもつれるようにして雫についていくだけだ。

蜘蛛の群れを押しつけるように、化け物が俺を追跡してくる。

俺はその刹那、ちらりと佐藤のほうに目をやった。

暗くて佐藤の様子はよく分からないが、蜘蛛の群れが佐藤のほうに行った様子はない。陽動には成功しているようだ。雫にすれば、

陽動しているつもりはないだろうが……。

本棚という本棚に、蜘蛛の光があふれていた。

赤い洪水が、本棚の隙間を流れてくる。なるべく蜘蛛の少ない本棚の隙間を移動しながら、雫は目的の書庫へ走っていく。

雫に強く握り締められた手首が痛みが走った。

「雫！ 痛いって！」

「アンタ、一人で逃げられるとも思ってるの？」

「そういうわけじゃ……！」

「アンタみたいな偽善者は、結局誰かの助けがないと、自分の意志なんて貫けやしないんだから！」

光り輝く赤の奔流が、天井から、本棚から、床から、俺たちに魔の手を伸ばす。

「言ってることと、していることが矛盾してるぞ！」

「何がよ！」

「だから！ 雫は一体何がしたいんだってことだよ！」

雫は黙って走り続ける。

疲れて声が出せないのではなく、思案している間のように感じられた。

学校にあるとは思えない広大な書籍群を駆け抜けながら、俺たちは奥へ奥へと進んでいく。

「確かに、矛盾してるのかもしれないわね」

「……は？」

耳を疑うような発言だった。

第二十八話・「……もう少しだけ」

雫が自分の非を認めるような発言をするのは、初めてだったから。それ以前に、誰かの意見を、悪態なしに素直に受け入れたことが信じられなかった。

「上手く説明できない。アンタが偽善を貫くのは虫唾が走るわ。でも、アンタを死なせるのも気分が悪いのよ」

俺を振り向かずに、淡々と言葉をつづった。走りながらも、言葉ひとつ濁さない雫の体力は、もはや常人の域ではない。

「クナ……しに……たく」

天井から俺たちを追跡する化け物。

「びらト……びら……フアケテ……」

蜘蛛を押しつけながら、もう一匹の化け物が床を這い回る。

雫は書庫に続く扉を蹴破った。

蝶番は何とかその衝撃に耐えたのか、開いた扉は、限界まで開くと、バウンドして再び閉じようとする。

その少ない時間で、雫はまず俺を書庫の中に荷物のように放り込み、自らもドアの隙間に身を滑り込ませる。

ドアが閉められるのを見越してか、複数の蜘蛛が赤い放物線を描いた。ドアの隙間に大挙して押し寄せる蜘蛛。

赤い波を見て、雫は忌々しそうに頬を歪めた。

体全体を使つて、体当たりするようにドアを閉める。ドアの隙間に体をねじ込んだ蜘蛛は二匹。一匹は体をドアにはさんでしまい、

胴体と頭部がねじ切れた。

もう一匹は、足を失う代償ですんだようだ。

四本の足を失った蜘蛛が、上手く着地できずに書庫を転がる。

半分の足を失った蜘蛛は、動きにくそうにしながらも、本能のみで雫を襲おうと走り出す。

「下等生物のくせに」

雫の無慈悲な言葉が、蜘蛛の死刑宣告だった。

雫の靴底が、蜘蛛の赤く輝く目玉を踏み潰す。

光る目玉は、踏まれた衝撃で飛び出して、俺の足元にころころと転がってきた。本体を離れてからもしばらく目玉は光り輝いていたが、やがて死を迎えるようにゆっくりと輝きを失っていった。

「正臣！　そこにある戸棚をこのドアの前に！」

背中で扉を押さえる雫の体が跳ね上がる。ドアの向こうでは、信じられないような蜘蛛の大群と二匹の化け物が、ドアを破壊しようと力任せに体当たりをしているに違いない。

俺は、書庫に関するあらゆる資料の詰まった戸棚を、何とかドアの前に持つてくると、力任せに押し倒した。これでしばらくはもつはずだった。

だが、木製のドアの耐久力は低い。

いくら押さえをつくろうとも、ドア自体の耐久力が限界を迎えてしまえば、それでおしまいだ。壊れたドアの隙間から、無限に蜘蛛が侵入してくるだろう。より多くの障害物を作れば、蜘蛛の侵入をふさぐことが出来るかもしれないが、残念ながら書庫にはこれ以上動かせるものはない。

無駄なものを廃したスペースにあるのは、可動式の書棚と、その中に敷き詰められた貸し出し厳禁の本。加えて、俺が握り締めてい

た元モップであつた棒と、雫の左手にある文学全集。

窓もあるにはあるが、何せここは三階だ。落ちればただではすまない。遅かれ早かれ、怪我をした俺たちは、化け物に食い殺されるだろう。

絶体絶命。俺の頭にそんな言葉が浮かんた。

「考えがあるって言つたわよね」

「……言つた」

絶体絶命の状況を切り抜ける妙案ではないかもしれないが、その案は確かに俺の頭の中にある。

「聞かせてくれる？ 参考までに」

腕を組んで、床に転がつている俺を見下ろす。

書庫に放り込まれた俺は、立ち上がるのもつらいぐらいに、筋肉が悲鳴を上げている。

「雫の案はないのか？」

「質問を質問で返されるのは嫌い」

腰に手を当てて、俺の顔を覗き込んでくる。鋭い眼光に、俺は氣圧されるばかりだ。

「いい？ 私はアンタに賭けてやるって言ってるの。自信を持って話さないよ。そんなんじゃ、台無しよ」

「台無し？」

「……別に。深い意味はないわ」

俺を上から覗き込んでいた雫の顔が、そっぽを向いてしまふ。

髪の毛が、シャンプーのコマーシャルのようにその動きに従った。

「……ごめん。そんなにいい作戦ではないんだ」

「もう！　そういう態度止めてくれる？　ほら、立ちなさいよ」

筋肉の酷使で立ち上がれない俺に、雫が手を差し伸べてくる。白くて繊細な手。戦いで傷ついてしまった手。

「ここまで来たら、付き合うしかないでしょ。少し癩だけど、アンタの駒になってあげるから、自由に言ってみなさいよ。ちなみに、百二十パーセントの結果を期待していいわ」

俺は差し伸べられた雫の手を取る。

女性に似合わない腕力で、雫が強引に引っ張り上げるものだから、俺は勢いあまって雫の胸に飛び込んでしまう。

誰も見てはいないだろうが、それは他人から見れば、立ったまま雫に抱きつくような格好だ。

「……アンタが落ち着くなら、少しぐらいこのままでもいいわよ」

俺は狙って雫を抱きしめたのではない。俺は極限の状況下で、そんな狡猾なことを考えられる人間ではないから。

雫の身長は俺とほぼ同じだ。俺よりも少しだけ背が小さいくらい。そのせいで、雫の顔がより近くに感じられる。

息遣い。頬の体温。髪の毛のきめ細やかさ。様々な情報が俺の胸を締め付ける。

「……ごめん」

「べ、別に。慣れてるから」

雫にしては珍しく言葉につまづいた。

俺の胸の高鳴りは、雫にも伝わっているはずだ。これだけ体を密着させてしまつては、隠すものなど何もない。

心音も、体温も、緊張も、二人の間を行ったりきたりする。

ドアが今にも破られそうだった。

ドアにはひびが入り始め、内側の木の色が見え始める。戸棚の重量も慰め程度にしかない。

切迫しているはずなのに、俺の心中は少しずつ落ち着いていく。不思議なくらいに落ち着いていく。ただ、腕の中にいる雫を感じるためだけに、研ぎ澄まされていくようだった。

「もう、いいでしょ。放しなさいよ」

雫は唇を尖らせて抗議する。どこか子供っぽく、かつ、雫らしい大袈裟なリアクションが、心をくすぐる。

仮面の奥の素顔をのぞきたくなるような好奇心が、俺を満たしていく。

「……もう少しだけ」

数分後には死ぬかもしれないというのに、俺は何を言っているのだろう。

外側では、死をもたらす化け物が蠢動し、俺たちの肉をむさぼろうと舌なめずりをしている。死の気配が迫ってきている。

「変態偽善者ここにありけり、ね」

だからこそ、俺はこのわずかな時間を感じていたかった。

俺の思いが伝わったとは思えない。けれど、大きく息を吐いた雫が、俺の背中に手を回してきた。

気持ちを切り替えたのだろうか。それとも、呆れたのだろうか。いずれにせよ、それは雫にしか分からない。

「こういうときでもなかったら、殴り飛ばしているんだから。そのところ、分かってるんでしょね」

とげとげしいはずの台詞なのに、今はその棘がない。照れ隠しのように聞こえてしまうのは、俺の自惚れなのだろう。

「このままでいいから、作戦、説明してもらえる？」

「……ありがとう、雫……」

耳元でささやくように、俺は雫に心からの感謝を伝えた。涙が出そうなほどの感謝。

真っ暗闇の中で、確かな白い輝きがある。真っ暗闇のトンネルの先に現れた、小さな光。曙光。

それが雫だった。

「な、慣れてるから」

俺は、破られそうになるドアの破碎音を聞きながら、雫への感謝を繰り返した。

第二十九話・「私の中に入っていないで」（前書き）

泣いて馬謖を斬る……「どんなに優秀な者であっても、私怨私情で法や規律を曲げて責任を不問にすることがあつてはいけない」の意。

第二十九話・「私の中に入ってこないで」

作戦の説明は、三十秒とかからなかった。

あまりにも単純だったため、雫が大きく嘆息するほどだった。

俺たちは、書庫内を埋め尽くす可動式書棚を大急ぎで動かしている。

書棚の横にクランクが付いていて、それを回せば書棚は横にスライドしていく仕組みだ。書棚は、入り口に対して縦に置かれ、それぞれが平行に並んでいる。それを左右に敷き詰めて、中央に大きなスペースを作った。クランクをぐるぐると回して移動させるのは一苦労だったが、慣れれば素早く行うことが出来た。

左側の書棚は、あえて壁に敷き詰めず、一人がやっと通れるぐらいのわずかな隙間を残してある。

「本当に、こんなので上手くいくのかしらね」

書庫の一番奥に、俺と雫はいる。かの有名なモーセが海を割ったシーンのように、横幅十メートル以上ある書棚は、左右に除けられている。

「きつと、上手くいく」

中央は自由に戦えるように広くしたので、棒を自由自在に振り回すことができるだろう。

「どこからそんな自信が来るわけ？ さっきは落ち込んでたくせに」

馬鹿にするような視線で手を広げる。右手には、俺が持っていた棒が握られている。元モップだった棒を器用にくるくると回す様は、バトン部のようなだった。

「自信は、雫のおかげだよ」

「……それ以上言っと、セクハラで訴えるわよ」

モップの先を俺の鼻先に突きつける。俺は寄り目になってモップの先端を見つめる。

「最初で最後よ。あんなの私らしくないんだから」

自分自身に言い聞かせているようだった。

「とにかく、今の私は、アンタの優秀な駒なんだから、かなり期待していいわよ。責務を立派に果たして見せるわ」

鼻息荒くふんぞり返って、胸をドンと叩いてみせる。

漫画でしか見たことのない動作に、俺は微笑んでしまう。西遊記で見る孫悟空は、きつとこんな感じなのだろう。

雫が俺の一步前に出る。

「泣いて馬鹿を斬る、って言葉知ってる？」

背中越しに俺に語りかける。もう間もなく、入り口の扉は崩壊する。ダムが決壊するように、二匹の化け物と、数多の蜘蛛が押し寄せるだろう。

「いや、知らないけど」

「……そう。ならいいわ。今度辞書でも引いてみれば？」

「雫、何を言ってるんだ？」

背筋がまっすぐに伸びた雫の背中。

「もし」

その背中には、誰が見ても美しく見えるだろう。仁王立ちというには、あまりにも釣り合いの取れない、美しい背中。

「私に何かあっても、もう、助けなくていいから。あんたは自分のことだけ考えていればいい。分かったわね？」

ドアの上部が破壊され、そこから蜘蛛が這い出してきた。

「そんなこと、できるわけないだろ！」

ドアの崩壊は、予想よりも早かった。最初は一匹ずつ侵入してきた蜘蛛だが、蝶番が壊れた頃には、化け物も書庫に入り込んできていた。

ドアを支えていた戸棚は、ばらばらに壊れてしまって、中に入っていた書類が放り出されてしまう。蜘蛛に踏まれて散り散りになってしまったプリントは、乱雑なシュレッダーにかけられたようだ。

「さっきも言っただけど、アンタといると調子狂うのよ。私は、私。過去も現在も未来も、変わらない私のまま」

「何を……」

雫の言いたいことが理解できない。蜘蛛と化け物の侵入に思考の大半を奪われてしまって、雫の言葉を吟味することが出来ない。

「これ以上、私の中に入ってこないで」
「しず」

俺の言葉を待たず、雫は化け物に突進していった。棒をくるくると回し、最初に飛びかかってきた蜘蛛を上段から叩き落す。

俺は作戦上、その場から動くことが出来ない。本当は、俺が雫の役を演じるはずだった。だが、雫は強引にその役を奪ってしまった。

「次から次へと！」

雫の演舞は止まらない。

高速回転しつつ、流れるように棒を繰り出す。死に体が無いと言ったら、それは言い過ぎかもしれないが、見ている俺にはそうしか思えない。

棒の中心を持ち、回転させる妙技。

複数の蜘蛛が飛びかかってくるのを防ぎ、一匹の蜘蛛に対しては、容赦のない一撃を浴びせる。蜘蛛は本棚にその身をぶつけ、臓物を飛び散らせていく。

息絶えた蜘蛛の数は、確実に増してきていた。

転がっている死体の数、折れた足の数は、数え切れない。月光の絶えたこの空間で、ここまで空間を認識できるものなのだろうか。

蜘蛛が赤い光を放っているとはいえ、赤い光の軌跡は目に残像を残す。

「私は！」

残像は互いに重なり、錯覚を生むはずだ。それをものともしないで蜘蛛に打ち込んでいく雫には、鬼気迫るものがある。

「変わらない！」

雫の気合の音が、蜘蛛の破砕音に混じる。

化け物が、雫を左右から挟みこんだ。一方は天井から、もう一方は床から。二匹の化け物は、ほぼ同時にその体を宙に舞わせた。赤い光がさらに輝きを増す。

取り込まれた男子生徒の口からは、長い舌が出ている。意識を失った男子生徒のうつろな目は、蜘蛛の光を映して赤く輝く。

だが、その目が雫をとらえることはなかった。

振り切った棒を、背中を回すようにして右手から左手に持ち替える雫。隙のないスムーズな持ち手の切り替えは、驚嘆に値する。

瞬間、雫の口の端が持ち上がった気がした。

狙いすましたように、モップの先で、鋭く化け物の腹を突く。化け物の腹、つまり男子生徒の背中中、腰が本来曲がるはずのない方向に曲がっていた。

打撃を受けた化け物は、書棚にぶつかって、本を撒き散らす。

しかし、化け物は二匹同時に雫を襲ったはずだ。

「甘いのよ」

雫は一方の迎撃を怠ってはいなかった。

床を這うようにして雫を襲った化け物は、雫の強烈な足蹴りを浴びていた。女子生徒の顔面にめり込んだ靴。靴が剥がれ落ちた女子生徒の顔には、靴底の跡がはつきりと見て取れた。

化け物の挟撃を切り抜けた雫に、休む暇はない。

我先にと、次の刺客が襲い掛かる。

棒と足を死に体にしてしまった雫は、それに反応することが出来なかった。

二匹の蜘蛛が、足に取り付いてしまう。

右足の太ももと、足首に光る蜘蛛の紅玉。雫は額に汗を浮かべながら、死に体だった棒を引き戻す。そして、太ももに取り付いてい

た蜘蛛を棒の先端で貫く。

蜘蛛の体を突き抜けた棒を回転させると、蜘蛛はものの見事に雫の太ももから引き剥がされて、そのまま別の蜘蛛に激突した。

足首に取り付いた蜘蛛も、回し蹴りで同士討ちにされる。蜘蛛の取り付いた箇所、飛びかかってくる蜘蛛を蹴ることで、二匹の蜘蛛を相殺することに成功したのだ。

「あと、もう少し……」

俺は雫の動きに驚愕しながらも、壊れたドアを確認していた。

書庫に飛び込んでくる蜘蛛の数が、明らかに減ってきている。二匹の化け物の体に寄生していた蜘蛛。そのほとんどが剥がれ落ちていて、今は床をせわしなく動き回っている。

鎧の剥がれた化け物は、今は八割が生徒の形を残していた。

「ケテ、ケテ……とびララ……アケ」

内臓が存在しない生徒は、それでも小さく声を出している。それは、もはや生きているのではない。かろうじて蜘蛛によって生きながらえているといった感じだ。

雫にやられた衝撃で吹き飛んだのか、肝臓らしき物体が、本と本の隙間に入り込んでいるのが見える。女子生徒の化け物も、肋骨が完全に露出していて、本来あるはずの五臓六腑が消えてなくなっている。

「な……ナイ……シニた……くナ……」

脳だろうか。

蜘蛛は脳を侵食することで、人間を制御しているのだろうか。人間としての生きる機能を失っても、脳だけを生かすことで、化け物

は化け物として存在している。宿主を得ることで、自らを進化させているのだろうか。

だが、今はそんなことはどうでもいい。

ドアから侵入してくる蜘蛛がいなくなったときが勝負だ。化け物の体から生まれた蜘蛛の大群が、全てこの書庫の集ったとき、俺たちの反撃が始まる。

「もう少し……」

俺がつぶやいたとき、雫は書庫に足をかけて空中に舞っていた。足をかけるときも、あえて蜘蛛が歩いている場所を狙う。それによって、蜘蛛を踏み潰すことが出来、なおかつ空中に身を投げるこ

とが出来るというわけだ。

最低限の行動で、最大限の結果を出そうとしている。

多少の無理でも通そうとする、雫らしい戦い方だった。

だが、その戦い方は、それなりのリスクを伴っている。

体に蜘蛛が取り付くのはこれで何回目だろうか。その度に雫の足は赤みが差し、わずかではあるが血が流れ出していた。最大限の結果を得るために、雫は自らの肉を切らせて、蜘蛛の、化け物の骨を絶とうとしている。

ただ、明白なのは、何度も肉を切らせ続ければ、やがて雫は膨大な出血と疲労に殺されてしまうということ。

俺は、飛び出していきたくなる衝動を抑えるのがやっと。

握り締めた拳、手のひらに食い込む爪。

切り刻まれていく彼女の体を見ている俺の心の痛みは、俺の体が切り刻まれていくのと同義だ。

そのとき、ドアから侵入してくる蜘蛛が途切れたのが見えた。

「今だ！」

雫と視線が重なる。アイコンタクトは、作戦開始の合図。

俺は、あえて残しておいた書棚の隙間をすり抜けていく。どうやら蜘蛛と化け物は、雫だけに狙いを絞っているようだった。

雫の大立ち回りが、ここになって生きてくる。

書庫の隙間から、雫の戦う姿が見えた。

俺が待機していた場所に、少しずつ後退していく。書棚を回りこんだ俺は、入り口のドアに近い位置に出た。雫に集中しているため、ドア付近には蜘蛛はいない。

恐ろしいほどの蜘蛛の大群が、雫だけに襲い掛かっている。

赤い光で埋め尽くされて、雫の姿が確認できない。

俺は、クランクを握り締める。

「雫！」

俺は叫び、腕が千切れるのではないかというぐらいにクランクを回した。書棚が、迫り来る壁のように、右の書棚へじりじりと寄っていく。一部の蜘蛛が俺の存在に気がついたようで、三つの赤い瞳を俺に向けた。

「雫！」

雫の姿が確認できない。雫がいるはずの書棚の奥は、大量の蜘蛛が放つ赤い光で充満している。まぶしいぐらいの光で、雫の姿が確認できない。

俺は、それでもクランクを回し続けた。

あきらめたわけでも、割り切ったわけでも、見捨てたわけでもない。

信じているから。

赤い光が、勢いよくはじけ飛ぶ。

そこから飛び出してくるものがあつた。

猛スピードでこちらに向かってくる。
喜びに満ち溢れそうになる顔を抑え、俺はさらにクランクを回し続ける。

「雫！」

俺の歓喜に答える声。

「シニ……しに……たくな……イ」

それは、化け物だった。俺は絶望に打ちひしがれる。
クランクを回す手が止まってしまう。

雫の姿が見えない。

奥で蠢いている蜘蛛の群れが、俺に向かってこないのはなぜだ。
何に夢中になっているんだ。

蜘蛛が奥に群がっているのは

雫を貪るのに夢中になっているからではないのか。

化け物が俺に向かってくる。このままでは間違いなく死ぬだろう。

……結局、俺は雫を見捨てたのだ。

自分の意志を、偽善を貫くことが出来なかった。大切な人を誰一人として守れなかった。何ひとつとして満足に出来なかった。
最低で最悪だ。

……絶望が、俺の体を蝕んでいく。

「あきらめるんじゃないわよ！」

二度、赤い光がはじけ飛ぶ。

「百二十パーセントを期待しろって言ったでしょう！」

走りながら、所々に取り付いた蜘蛛を叩き落としていく。
高速で回転する棒は、まさに竜巻のようだ。周囲を激しくなぎ払う。

俺は、取り戻した力でクランクを回す。

涙腺が弱くなっているのではないだろうか。クランクを回す度に、目の前が霞んでいく。

「邪魔なのよ！」

俺に飛びつこうとする化け物に追いつき、後ろから叩き落した。
滑り込むように地面に倒れる化け物。その背中、生徒で言うところの腹を踏み台にして、雫は書棚から抜け出す。全身に傷を負いながらも、雫は無事に責務を果たした。最後は足がもつれたのか、勢いあまって入り口のところで転んでしまう。

その拍子に、ポケットに入っていたナイフが、床に転がった。

雫は、それでも力強く立ち上がると、俺に力を貸そうとする。クランクを回す俺の手を握り、力を込める。

二人の力が、書棚と書棚の隙間を埋めていく。

やがて書棚は、圧搾機のように、蜘蛛と化け物を挟み込んだ。
この世のものとは思えない、おぞましい音が書庫に響く。

書棚の間からは、おびただしい量の赤い液体が流れ出て、それは滾々と湧き出る温泉のように、床に広がっていった。

「百二十パーセントでしょう？」

書棚を利用して蜘蛛を一掃しようとは考えていたが、全滅を予想してはいなかった。
最高の結果だ。

「ああ……さすがだよ」

かすれてしまう声を、誤魔化すことは出来なかった。

「ま、私にかかればこんなところね」

腕を組んで、自慢げに鼻を鳴らす。

蜘蛛と化け物の数がいかに膨大だったかが、密着しない書棚と書棚から理解できる。その隙間からは、雫が足蹴にした化け物が見える。軟体動物のように、体があちこち複雑に曲がっている。生徒の血と、蜘蛛の血が混ざり合って、こちらに広がってきていた。ぴくり、と化け物が動いた気がした。

「あ、生きてたんだ。弱虫さん」

雫の声がしたほうを振り向く。

そこには、怨念をたぎらせた佐藤が、ナイフを握り締めて立っていた。

第三十話・「殺してやる！」

佐藤の形相に、俺は声をかけることが出来ない。

佐藤が持つているナイフは、雫が職員室から持ってきたものだ。生徒指導の教師が、生徒から没収したバタフライナイフ。

それは、再び雲間から顔を出した月の光によって照らし出され、銀色に輝く。

切っ先は、血を求めるように光を反射し、まるで目標を定めているようだった。

「てつきり、アンタなんか死んでいると思ったわ」

ナイフを持つ佐藤の手が、小刻みに震えている。

「年甲斐もなくお漏らししながら、机の下で頭を抱えていたんでしょ？ 本当にお似合いね」

雫の悪い癖だ。誰かの弱点を見つけると、そこをとことん攻めようとする。

「今頃出てきてどうするつもり？ 化け物なら本棚に挟まってるから、安全なところからいくらでも殺せばいいわ。逃げるだけ逃げて、安全になったら顔を出して。そんな奴が平和を享受しようとしてる。そんな資格もないくせに」

自分が相手よりも優位に立っていることを、誇示しようとする。

「アンタは、偽善者以下よ。自分の意思もなく、誰かに頼って、すがって、ついていって。誰かの前を歩こうなんて、これっぽっちも

思っていない」

親指と人差し指で、空気をつまむようにする。

「アンタは所詮、誰かの犠牲の後を喜んでを歩こうとしてる、ただの弱虫よ」

「僕をそんな風に言うな！　そもそも何なんだ？　一体お前は様なのつもりなんだ？　そんなにお前は偉いのか！」

顔を真っ赤にして沸騰する佐藤。

「偉いわね」

臆面もなく言つてのける。

腕を組みながらの、存在自体を見下すような雫の視線は、もはや特許を取得しているのではないだろうか。

俺よりも、雫よりも背が低い佐藤からすれば、常に見下されている気分だろう。

「僕を見下すんじゃない！　雌豚が！」

憤慨しながら、ナイフを雫に突きつける。

「腰が引けてるわよ。そんなんじゃない、人はおるか、蜘蛛の一匹だつて殺せないわね。強がっちゃって、まるで子供みたい」

雫の口の端が、笑みに歪む。

「殺してやる、殺してやる……！」

「やってみれば？　少なくとも、あんたが私を殺せるとは思えない

けど」

その言葉が、佐藤の逆鱗に触れたようだ。

腰の位置にナイフを構えて、雫に突進する。

余裕の表れか、雫は手に持っていたモップを足元に転がした。

「馬鹿な男」

ナイフを振り回すならともかく、一直線に突くには明らかなスピ
ード不足だった。

進行方向を把握していた雫は、腕を組んだまま佐藤の突きをよけ
る。

佐藤の足を引っ掛けるといふ、おまけ付きだ。

佐藤は、無様に転ぶしかなかった。ナイフを小脇に抱える格好で
突進したため、満足に受身も取れない。

「殺してやるんじゃないかったの？」

転んだ弾みに自分の腕をナイフで切ってしまった佐藤は、自身の
腕を流れる血を見て激情する。

「知ってるんだぞ！ お前が男に媚売って、腰振って、金をもらっ
てることぐらい！」

鬼の首でも取ったように、雫を指差す。

「だから？」

鬼の首は健在だった。

「淫乱女なんだ！ こいつは！ 体売って生きてるんだ！」

どうやら佐藤は、俺の同意を得たいようだった。
視線で俺を確認しながら、雫につばを飛ばす。

「男の性欲を晴らす道具なんだ！ 男に媚びるべきなんだ！ お前
なんかが、僕にとにかく言っていいことなんてない！ 腰でも振っ
て、お金を恵んでもらうのがお似合いなんだ！」

床に尻をついたまま罵詈雑言を吐く佐藤を、かつてない冷酷な表情で見下す雫。もし、その視線が俺に向けられていたら、と考えるとぞっとする。

「何だ、その目は！」

腕の切り傷も忘れるほどにおびえているのか、手に持ったナイフを左右に大きく振って、雫を威嚇する。そんなことお構いなしに、佐藤に近寄っていく雫。

「来るな！ 僕に殺されたいのか！」

「殺してみれば？ 出来なければ、逆に殺してやるけど」

ナイフの切っ先が、がたがたと震えている。

「雫、やめるんだ」

俺は今にも佐藤を殴り殺そうかという、雫の前に立ちはだかった。向けられることのなかった冷酷な瞳が、ついに俺を捕らえた。

「コイツに味方するの？」

「味方とか、そういうことじゃない」

冷酷な瞳はそのまま、雫は一笑する。

また偽善が始まった、とても言わんばかりだ。

「雫、敵味方なんて区別は、ここにはないはずだろ。敵がいなければ、味方はいないんだ」

雫の鬼気に負けないように、俺は両手を広げ、指の先にまで力を入れた。雫を思いとどまらせたかった。

「全員が味方なんだから、敵なんていない。だから、味方なんて識別する必要がない。そもそも、俺たちは仲間なんだから」

雫の腕が動くのが見えた。俺はとつさに歯を食いしばる。

「ひっ……!!」

佐藤の悲鳴が背後から聞こえた。

「……雫、本当は分かってるんじゃないのか？」

雫の拳が、俺の頬の寸前で止まっている。限界まで握り締められた拳はわななき、雫の顔は苦しそうに歪んでいる。

そこに見えるのは、葛藤だろうか。

「勘違いしないで。右手が痛いのを忘れてただけよ。殴れないわけじゃない」

奥歯をかみ締めるように、声を漏らした。

「……アンタがいると、調子が狂うだけ」

俺に背中を向ける。怒りは背中から煙のように立ち上っていた。しかし、雫には珍しく、何とか内側で燃焼させようと努力しているようだった。

「アンタを認めたわけじゃない」

「それでも、ありがとう」

返事はない。

「は……はは。け、結局、殴れないんじゃないか。所詮、威勢だけだな」

佐藤が安心したように立ち上がって、俺を盾にしながら雫を馬鹿にする。

「佐藤、お前もいい加減に」

佐藤を振り向いたのが間違いだった。

臨界点でこらえていた雫の怒りが、今度こそ佐藤に飛んでいった。拳は、怒りを表現する最も身近な武器となる。

左の頬から右の頬へ衝撃が駆け抜け、下あごがスライドする。

俺は止めることすら出来なかった。

佐藤の首が、極限までひねられる。衝撃でバランスを崩した体は、一回転するように書棚に激突した。

雫の怒りがどれほどの破壊力を生んだのか、それは佐藤を見れば理解できる。

佐藤は一瞬何が起こったのか理解できないようで、目をきよろき

よろとさせていたが、やがて口中をもごもごさせると、手のひらを口元にとっていつて、吐き出したものを凝視する。
少し黄ばんだ奥歯が、唾液と血をまもっていた。

「歯が……。僕の歯が……」

殴り飛ばした体勢のまま、静止した雫の息が荒い。怒りの余波を口から吐き出しているようだった。

佐藤が亡霊のように立ち上がる。
クランクを利用して立ち上がり、いつまでも歯を見つめている。
俺は、声をかけることすら出来なかった。

「……こ……こ……こ、殺してやる！」

佐藤がクランクを回し始める。クランクは勢いよく回っていく。
限界まで回したはずのクランクが回るということは、佐藤は反対方向に回しているのだ。

書棚と書棚の距離が広がっていく。
書棚にはさまれていた蜘蛛が、剥がれ落ちる。血溜まりに落ちると、赤い水滴が飛び散った。

……全滅したはずだった。
否、全滅するはずだった。

「佐藤！ 止める！」

「タク……し……ニタ」

動いたのは、錯覚ではなかった。

三本の足を失った蜘蛛が、書棚からはいずり出てきたのだ。全身を血だらけにしながらも、化け物は生きていた。取り込まれた生徒には、下半身がない。背骨が、尻尾のようにぶら下がっているのみ。

書棚の中を見ると、骨盤らしきものが、足と一緒に落ちていた。ちぎれて胴体と離れ離れになった足が、血溜まりの中で痙攣している。

「ニタシ……し……し……ククナ」

驚愕の生命力だ。半身を失ってまで活動する姿は、おぞましい以外の何物でもない。

化け物は、足蹴にされた復讐でもするかのように、背中を向けていた雫に飛び掛った。

半身をなくしても、化け物は化け物。基本的な行動に狂いはない。

「ちょうどいいはけ口が見つかったわ」

背中越しに、雫は笑う。

下弦の月のような笑みを浮かべ、向かってくる化け物の攻撃をかわした。そして、着地した化け物の背骨をつかむと、強引に引き抜く。途中で背骨が千切れてしまい、雫は勢い余って倒れそうになる。化け物は、背骨を引き抜かれて苦しんでいるのか、足のなくなった根元部分を動かしながら、もがいている。あまりの痒みに、患部をかきむしる患者のようだ。

立場の逆転した蜘蛛の醜態を見て、酷薄な笑みを浮かべる雫。頬に付いた血を袖で拭くと、鼻で笑う。

「憂さ晴らしにもならなかったわね」

化け物の息の根を止めようと、手放したモップを再び手に取った。意識は、完全に蜘蛛を殺すことに集中している。

俺の横を何かが通り過ぎた。

蜘蛛ではない。

佐藤だ。

右手には、血液を求めて輝く鋭利な獲物。バタフライナイフ。

雫は、そんな佐藤の接近に気がつかない。

化け物に突き立てようというのか、モップを高々と掲げた。伝説に名を残す剣士のようだった。

殺意が、佐藤から雫へ、雫から蜘蛛へと流れていく。

闇よりも深遠な闇。そのどす黒い霧が、佐藤と雫を取り込んでいくような気がした。

……モップが床に転がる音。

静寂は、ゆっくりと現実の色を付けていく。

「……何、これ……？」

雫は、腹に刺さったナイフを見つめる。

信じられないといったように、驚愕に両眼を見開いている。

「あ……あ、あ……」

ナイフを持つ手を、がくがくと震わせる佐藤。ナイフの刃は完全に腹の中に埋まってしまっている。ナイフの柄を伝う血は、佐藤の手を濡らし、小指から滴り落ちた。

床には、いびつな円が出来上がる。いくつもの円は、やがて重なり合い、さらに大きな円を作った。

真っ赤に染まった円。血で彩られた鮮やかな模様。

「な……んで……？」

聞いたこともない、雫の小さな悲鳴。

血は、俺の腹部からとめどなく流れ出ていた。

第三十一話・「偽善者だから」

「佐藤……俺たちは仲間なんだ」

ナイフを握り締めたまま震えている佐藤に、俺は笑いかけた。
ナイフが俺の腹に刺さっているという実感がない。夢の中にでも
いるような気分であり、なおかつ、頭が透き通るように穏やかだ。

「つまらないことで、争うなよ……」

佐藤が俺の微笑に顔を引きつらせる。幽霊でも見ているかのような顔だ。

「ぼ、僕が悪いんじゃないぞ！ この女が僕を馬鹿にするから、こんなことになったんだ！ この女がやったんだ！ この女のせいだ！」

ナイフから手を離し、震えながら雫を指差す。

雫は化け物に突き刺すはずだったモップを強く握り締め、佐藤に殴りかかる。

「アンタは、どっちの味方なのよ！」

俺は腹にナイフが突き刺さったまま、佐藤をかばっていた。
体を動かすたびに、腹の中をかき回されているような感覚がする。

「味方とか……そういうことじゃないんだ」

腹部を押さえる手のひらが温かい。生暖かいお湯を、手に注がれ

ているような感じだ。

「誰かにやられたから、やり返して……それじゃ、きつといつまでたつても終わらない。誰かが、怒りを……憎しみを飲み込まないと駄目なんだ……」

「だからって、なんでアンタが！」

「なんでって」

腹部の痛みが、俺の膝を折った。

力が抜けていく。

俺は、体を支えられなくて、雲に跪くような格好になる。

「俺は……偽善者だから」

激痛が、腹部から全身に広がっていく。

「なんでアンタはそうなのよ……」

「はは……ははは……こんな馬鹿な奴、僕は今まで見たことがない！」

血で濡れた右手で、額を抑える佐藤。

「なんだこれ！ 何の茶番なんだ！ 教えてくれよ！」

涙を流しながら笑っている。

「僕は人を刺したんだ。なのに刺された本人は笑ってる！ 何だこれ、何だこれ！」

ふらふらと歩きながら、書庫を出て行こうとする。

「シニシ……にシ……イ」

雫が止めを刺し忘れた怪物が、失われていない足を器用に使って起き上がる。少ない足でも体重を支えられるように、足の位置を調整している。

「絶対にやらせはしないわ」

雫は、うずくまる俺をかばうように、化け物と俺の間に割って入った。

今の俺には、手負いの化け物と戦う力はない。体中の力が抜けていくのが分かった。氣力を振り絞っても、体力は戻ってはこなかった。

「アンタだけは、絶対に」

モップを構える雫の背中が、何よりも大きく見える。

そんな彼女に、俺の守護神のようだ、と言ったらどんな顔をするだろうか。

激痛の中で、そんな冗談が浮かぶ。冷静でありながら、朦朧とする意識。俺は何度も瞬きをして、雫を瞳に宿し続ける。

「雫……」

「気が散るから話しかけないで」

集中したい人間が、俺を何度も振り向いて、そんなに苦しそうな顔をするだろうか。加え、俺が話しかけなくとも、雫はすでに気が散っているようだった。

「俺の……守護神みたいだ」

目に涙の幕を張りながら、俺を睨み付ける雫。口を真一文字に引き結んで、感情を押し殺している。眉間にしわを刻む様子は、まるで痛みに耐えるかのようなうだ。

雫がこんな表情を見せてくれるとは思わなかったから、俺は自然と顔がほころんでしまう。

初めて人を微笑ませることが出来たときの嬉しさ。それに似ていた。

「なんで、そんなに楽しそうなのよ!」

「雫が……泣いてるから」

気がついていなかったのか、雫はモップを両手から片手に持ち替える。

「これは汗よ!」

空いた手で目元をこする。こすりすぎて、目が充血しなければよいのだが。

「こんなの、汗が目に入ったに決まってるじゃない!」

目をこすり続ける雫をよそに、化け物は少ない足で跳躍する。

「ニタ……ク、な……イ」

対抗手段を持たない俺を狙うと思いきや、化け物は入り口付近で笑い続ける佐藤に襲い掛かった。

「佐藤！ 逃げろ！」

腹部から血が出るのをかまわずに、俺は叫んだ。
うずくまっていた体を無理に起き上がらせたものだから、ナイフが俺の腹をかき回す。体の中から臓器を叩かれるような錯覚と、不快感が混じる。

「はは……ははは！」

佐藤は化け物に押し倒されても、笑い続けていた。

「雫！」

助けられるのは雫しかない。俺は体に鞭打って、雫の足にすがりつく。

「……アンタを殺そうとした報いよ」

腹部の痛みが、俺の声をのどで押しとどまらせる。
それは違う、と言い返したいのに、それが出来ない。
横隔膜を上下させるたびに、腹部が悲鳴を上げる。声にならない声だけが、俺の口から漏れるばかりだ。

雫は、そんな俺を見下ろすと、小さな声でつぶやいた。

「そつえば、私はまだアンタの手駒だったわね」

思い出したように、化け物に疾駆する。

化け物は、口から出した触手を佐藤に巻きつけている最中だった。生徒の口から、茶色の触手が大量に伸びていく。体に固定するように、あるいは抱きしめるように、伸びた触手は佐藤を捕獲した。蜘蛛

蛛の巣に引つかかった昆虫が、蜘蛛の糸で絡め取られるのに似ている。

佐藤は抵抗するが、生徒に寄生した化け物には効果がない。

素手では有効なダメージを与えられない硬質の皮膚のうえに、本体はおそらく生徒の中だ。

佐藤の抵抗は、まったくもって無意味でしかない。

「助け……！」

最後に、佐藤の口が触手で覆われる。俺から見えるのは、茶色の繭を抱える化け物だけになった。

雫は、横薙ぎに化け物を切り払う。化け物は少ない足で大きく跳躍し、図書室に躍り出た。迷うことなく、雫も飛び出していく。

書庫にいる俺からは、図書室の状況は分からない。足音と、何かがぶつかる音だけが、判断材料だった。

「俺も……行かないと……」

ガラスの割れる音が、最後の攻防だったようだ。その音の後には、一切の音がなくなった。

俺は書庫に血痕を作りながら、図書室に這っていく。

「馬鹿やってんじゃないわよ！」

戻ってきた雫が、俺を図書室の壁に寄りかからせる。壁を背にして座る格好のまま、ナイフの柄を握る。

「正臣、力を抜いて」

雫は俺の返答を待たずに、ナイフを腹部から引き抜いた。

飛沫が、図書室の本を赤く汚す。

激痛を超える、痛みの爆発。テレビの画面が乱れるように、俺の意識も途切れそうになった。

「とりあえず、私にはこれしか出来ない」

手際よく止血処置を施してくれた雫が、額の汗を拭った。自らのスカートを破って包帯の代用にしたり、ハンカチを患部に当てて止血したり。

出血を最低限にとどめるための応急処置が施された。

「……佐藤は？」

俺の問いに、唇をかむ雫。

「逃げられたわ。佐藤も、化け物と一緒に」

俺は図書室の壁を殴る。応急処置を施されたといっても、まだ出血と痛みはある。それでも、俺は自分の中に湧いた悔しさを止めることが出来なかった。

「行こう、雫。ここにいても、佐藤は助けられない」

俺は壁を助けにして体を起こす。爆発するような痛みは失せた。持続的な激痛ぐらいなら、何とか耐えられる気がする。

「化け物は……どこに行つたんだ？」

絶え絶えになる息を、何とか押さえ込む。

「体育館の方向よ。こっちは二棟だから、詳しくは分からないわ」

一棟の先にある体育館は、二棟からは見えない。だが、体育館から大量発生してくる化け物を考えれば、その線が一番妥当だろう。

「雫……肩を貸してくれないか？」

何も言わずに俺の腕を自らの首に回す。

「ありがとう……」

「礼なんていらないわ。それより、自分のことを気にしなさいよ」

図書室を出て、索敵しながら廊下を進む。

「……雫がいなかったら、俺、きっと死んでた」

「アンタがいなかったら、私だって死んでたわよ」

俺をいたわりながら、ゆっくりと進んでくれている雫の心遣いが嬉しかった。

第三十二話・「……つめん」

「アンタは馬鹿よ。どうしようもない馬鹿。刺されたくせに、刺した人間を心配するなんて、気が狂ってると思えない」

「憎しみは連鎖するから。俺が……受け止めなきゃいけないかったんだ……。これ以上、仲間同士で争うのは苦しすぎるから」

「自分を犠牲にするのはいいけど、死んだら意味がないじゃない」
「……死ぬつもりなんかないよ」

痛みをこらえて微笑む。

「これから、佐藤を助けないといけないだろ」

「何言ってるの？ 今のアンタは、間違いなく病院行き確定なのに。そんな体でこれ以上無理すれば、命の保障は出来ないわ」

雫が怒ったように声を荒げる。

「アンタはこれから、私の監視下に置くことに決めたから。私の目の前で死なれちゃ気分悪いし。ま、分かりやすくいえば、アンタは私が守ってあげるってこと」

「雫が……俺を？」

雫の体温が、とても熱く感じられる。

大量の出血のおかげで、余計にそう感じるのか、それとも雫の体温が高いだけなのか。

「嫌なの？ 嫌なら別に無理にとは言わないわ。勝手に私がやるだけだから」

「俺の意思に関係ないじゃないか……」

雫の顔を見ながら苦笑いする。雫は俺に見つめられているのを感じてか、目をそらして前方に意識を集中させた。思わず、そんな雫に笑いそうになるが。

「……香……奈？」

雫を見ていた俺の視界の隅に、屋上にいるはずの香奈の姿があった。

俺たちがいるのは第二棟の三階。香奈がいるのは第一棟の三階。窓から見える景色の中に、香奈がいたのだった。

怖いくらいに美しい月の光が、第一棟、三階の廊下を歩く香奈を照らし出していた。

なぜそこに香奈がいるのか、にわかには信じられない。

目を擦ったり、細めてみたりしたが、香奈の姿が視界から消え去ることはなかった。

和輝と屋上にいるはずではなかったのか。生死にかかわる危険が、そこかしこに転がっている悪夢のような学校。女の子一人で歩ける場所ではない。

俺が思わずつぶやいてしまった香奈の名前に、雫が反応を示す。

「アンタは……私といても、あの女のことを思い出すわけ？」

香奈は一棟の窓越しに俺たちを見つめていた。香奈の微笑が非日常的に感じられる。窓に手のひらをついている香奈の視線は、俺の視線と確実に交わっている。

「そんなに、あの女のことを忘れられないの？」

香奈の視線に縛り上げられて、俺は動くことも、質問に答えるこ

とも出来なかった。雫の語気に触発されるように、腹部がさらに痛み出す。

「アンタがそうなら、私にも考えがあるわ」

雫の言葉は、香奈に集中している俺の耳には入ってこなかった。

「……この私が、忘れさせてあげる。他のことなんか」

俺の顔に、雫の顔が重ねられる。窓越しの香奈と視線を合わせていた俺は、突然のことに何が起こったのか分からなかった。

柔らかな感触が俺の唇にある。

俺は目をつぶることもかなわず、雫に唇を奪われていた。

止まない腹部の痛み。唇同士の甘美な接触。その二つは、あまりにも対照的だった。

だが、俺の意識は雫との口付けよりも、一棟から俺たちを見つめ続ける香奈に釘付けにされていた。

香奈は、微笑みながら俺たち二人を見つめ続けている。

どんな風に言い訳をしようとも、きつとこの現場を逃れることは出来ない。犯罪でいうなら、きつと現行犯。どう解釈しても、キスしていると思えないだろう。

もちろん、それは真実だから、言い訳も、解釈も、するだけ無駄だ。

俺の心臓が、胸の中で跳ね回る。刺された箇所までも、心臓から送られる高熱の血液で波打っている。

……気が動転しそうだった。

雫とキスをしてしまっていることが。香奈に見られていることが。無限にも思える時間。

しかし、数秒にも満たない時間の途中で、香奈は俺と絡みついた視線を下ろすと、うつむき、長い前髪で目を隠した。

前髪から現れた光の粒が、両の頬を滑り落ちるのが見える。

いくつも頬を伝い、あごで合流しては、大きな雫となって地面に落ちていった。唇は相変わらず微笑んだまま。唇を引き結んで耐えるわけではない。いつも、どんなときでも微笑み続ける香奈だから、それが不気味に映ってしまう。

まるで、悲劇の無声映画を見ているようだった。

俺がたとえ大声を出そうとも、香奈には届かない。香奈もそれを分かっているから、俺たちを見て泣くことしかできない。

隔絶された二人をつなぐのは、目に映るものだけ。残酷で、容赦のない距離と現実が、俺と香奈を隔てている。

「自分からするキスっていうのも、案外悪くはないわね」

雫が小悪魔のような笑みを浮かべながら、唇を離れた。

「放心しちゃって、どうしたのよ」

俺の視線が自分を向いていないと分かったのか、疑問符を浮かべながら俺の視線をトレースしていく雫。

「何もないじゃない。一体どうしたっていうのよ」

雫が唇を離す直前、香奈は廊下の向こうに去っていった。

悲劇のヒロインのように走り去るわけでもなければ、その場に崩れ落ちるわけでもない。いつものように平然と、涙を浮かべたまま歩いていった。

「ちょっと、正臣」

空いている手で、俺の頬をつまんでくる。

俺は、香奈のいた場所に釘付けになっていた目を戻す。

「……………え？」

「え、じゃないわよ。リアクションに困るアクションしないでくれる？」

肩を貸したままの姿勢で、頬を風船のように膨らませる。

「雫……………俺にキスしたのか？」

「し、したわよ」

香奈のことが頭から離れない俺は、オブラートに包むことも出来ない。配慮もなしに、直接的に聞いてしまう。

「どうして？」

鼻白む雫。

「どうしてって……………それはこっちが聞きたいくらいよ」

「自分のことだろ」

無粋な俺の問いかけに、雫は気分を害したようだった。

「それはそうだけど、イライラしたのよ。アンタから、他の女の名前が出るのが」

「なんだよ……………それ」

腹部の痛みが増してくる。香奈のことを考えるたびに、痛みが増してくるようだった。

罪悪感が、痛みを増長させているように思える。病は気からという言葉があるが、病気ではなく、傷口に対しても通用するだろうか。なるべく平然を装う努力をしてきたが、痛みの急増に、表情が崩れてしまう。

「しっかりしなさいよ。保健室までの我慢なんだから」
「……分かってるさ」

脂汗が額から流れ落ちて、目に飛び込む。

「無理してるのが、バレバレなのよ」

目に染み込んでくる痛み、俺は片目をつぶってしまう。

空いていた手を、優しく傷口に添える雫。

どうやら、目をつぶった俺に相当気を使っているようだった。目に染みる痛みと腹部の痛みは別物なのだが、雫にそれが分かるはずはない。目をつぶるほどの痛みだと思って、労わってくれているのだろう。

「アンタを監視下に置くと言った以上、無理はさせないわ。絶対安静。一歩たりとも動くのは禁止。分かった？」

俺はそれに頷くことは出来ない。

佐藤の救出、香奈の行方、和輝がなぜ香奈を一人で行かせたのか。それらを直接確かめなければならない。

「雫……」

俺がそれらを確かめようとするれば、雫に止められるのは必至だろう。無理が出来ない体なのは分かっている。それを承知の上で、俺は確かめたい。

傷ついた体でも、俺の意思は前へ進もうとしている。

偽善を貫き通そうとしている。

ここで佐藤を、香奈を見捨てたら、それこそ割り切ることになってしまうような気がした。

「……動くのも苦しいんだ。……保健室に行くことも……できそうにない」

雫の貸してくれた肩にもたれかかるように、全体重をかけた。バランスを崩す雫。俺の体を引っ張りあげるようにして転倒を防ぐと、優しく壁に寄りかかせてくれる。

「正直……歩くのも……きついんだ」

俺のそばに膝を突いて座る雫は、瞳を揺らしながら俺を覗き込む。

「無理に話さなくていいわ」

雫にしては珍しく弱気な口調だった。

「確か保健室に……鎮痛剤があったと思う。雫の治療をしに行ったとき……それらしきものを見つけたから……」

息を切らしながら雫に請う。雫は真剣な面持ちで、俺の言葉に耳を傾ける。

一言一句逃さないようにしてくれる雫の生真面目さが、心に響い

てくる。

「俺はずっと……ここにいるから。だから……」

言葉の先を見越したのか、二の句を継いでくる。

「私が先に行つて取つてくればいいのね。……分かったわ。アンタはここにじつとしていること。それでいい?」

俺はゆっくりとうなづいた。

「念のためにマスターキーは渡しておくわ。何かあったら、図書室にでも逃げ込むこと。あの臆病者ですら生き延びれたんだから、アンタに出来ないわけがないわ」

腰に手を当てて言い切る雫。

買いかぶりすぎだと言おうとしたが、痛みが言わせてくれなかった。

「……ごめん」

「謝らなくていいわ。それに、すぐに戻ってくるし」

雫が立ち上がり、廊下の先を見つめる。

「これで、アンタへの借りを、少しは返せるわね」

そう言つて、雫は俊足を飛ばす。あつという間に背中が小さくなっていき、階段に差し掛かる。

雫は、すぐに階段を下りはしなかった。名残惜しそうに俺を見つめると、両手でメガホンを作る。

「すぐに戻ってくるわ！ 絶対に見捨てたりしないんだから！」

叫び声が俺の耳に届く頃には、雫は口元を引き締めて、階段に足をかけていた。階段を下りる音が廊下に響き、あっという間に遠ざかっていく。

……だからこそ、俺は胸が痛む。

「雫……ごめん」

廊下の天井を見つめる。

「保健室に、鎮痛剤はないんだ……」

窓の外には、雲間から顔を出した月が、美しく輝いている。

「俺は……行かないといけないから」

痛む箇所を手で押さえ、壁を頼りにして何とか立ち上がる。応急処置が施されているとはいえ、じんわりと血が滲んできくる。

歩くのがきついのは本当だ。だが、歩けないわけではない。

保健室に行けないのも本当だ。俺は保健室ではない場所に行くのだから。

「だまされたと知ったら……きつと怒るだろうな……」

壁に手を着いたまま、何とか屋上への道のりを踏み出す。鉄球を

引きずる囚人のように重い足取りで。

「雫のことだから……二度と立ち上がれないくらいにされそうだ……」

雫の怒った顔を想像すると、なぜだか顔の筋肉が緩んでしまう。雫の言動は、他人を傷つけたり、怒らせたりするものばかりだったけれど、いざ無くなってみると、とても寂しく感じられた。祭りの後のような気持ちにさせられる。

「……ごめん雫……俺は」

雫を裏切ってしまうことになる。

でも、これで良いのだと思う。雫にとって怪我をした俺は、盾ではなく、単なる足かせに過ぎない。加えて、俺がないほうが身軽だし、裏切られたと思ってくれたほうが、俺に何らかの心残りを持つこともないだろう。

だから、俺は君との約束を破る。

「佐藤を……助けないと」

これまでに体験したことのない苦痛は、自分の発した声ですら遠くから聞こえた声のように感じさせる。自分を客観的に見るこの出来るほど、気の遠くなる痛み。

「和輝に……会わないと」

廊下を踏みしめる。歩幅を広げて、屋上に向かう。

「香奈に……伝えないと」

伝えたいことがある。やるべきことがある。

俺は、歩き続ける。

第三十三話・「残念だったな」

屋上への道は決して平坦だったわけではない。

二棟の屋上と一棟の屋上は、渡り廊下でつながっている。廊下といても、屋内と屋外とはつくりは違う。階下の渡り廊下の屋根を利用して、屋上の渡り廊下は作られているので、屋上の地面はコンクリートだ。

図書室の入り口から伸びる廊下を、壁に手をつきつつも進み続ける。廊下の先が右に左に揺れる錯覚を、俺は頭を振って取り払った。今度は頭から血が引いていきそうになり、すがりつくように廊下の壁に寄りかかる。

そうしてたどり着いた階段を、俺は赤ん坊のように一步一步を手と足で確認しながら、上っていくしかなかった。化け物から逃げるときに、一段飛ばしで上ってきた出来事が嘘のような、遅々とした速度。

口からは自嘲が、腹部からは血が漏れる。

運良く雫から託されたマスターキーを、真っ赤な手のひらに握り締め、俺は屋上の扉の前に立った。

なるべく怪我をしているのを悟られたくはない。直立不動の姿勢を保てるように練習し、痛み慣れておく。シャツに染み込んでしまった血はどうしようもないが、化け物の返り血とでもいうように、平然と立っていれば、何とか誤魔化せるのはなかるうか。

最後に、額に浮かぶ脂汗を拭い、顔の筋肉をほぐして、気合を入れた。

鍵穴に差し込んでドアノブを回したとたん、扉に体重をかけすぎていた俺は、屋上に転がり出てしまった。すぐに平静を装って立ちあがる。

腹部が燃え上がるように痛んだ。

「どうやって屋上に入ってきた？　ここの鍵は私が持っているんだぞ」

二棟から一棟へと続く、屋上の渡り廊下を歩いている俺を見つけた生徒会長は、腕組をしながら細い目でにらみつけてきた。

俺は手に持っていた鍵を生徒会長に見せる。

「マスターキーか。なるほどな。とすると、コースから考えて理科室の爆発は、お前の仕業か」

「俺と雫は、化け物と戦っていたんだ」

ピントの合わないカメラのように、生徒会長の輪郭が淡くなっていく。

「では他の人間はどうした。死んだのか？」

同情の欠片も見せない生徒会長の淡々とした質問は、さながら男版睦月雫だった。ただ、雫ほど感情表現が大袈裟ではない分、冷徹さは生徒会長のほうが一枚上手だった。

「みんな生きてる。誰も死んでなんかいない。雫も、佐藤も」

先輩も後輩も、言葉遣いでさえも、もはや関係ない。

特にこの生徒会長という人間にあつては、そんなものは必要ないように感じた。本人もそう感じているのか、言葉に馴れ合いは存在しない。

「それはそれは。ずいぶんと勇ましいことだな。あの女のことだから、派手に爆死するのがお似合いだと思ったのだが。どうやら、予

想は外れてしまったみたいだな」

人の死を、まるでゲームをするかのように予想している人間がいる。

学友の生死を、そんな風に捕らえられる生徒会長が、信じられない。

「ならば、他の人間はなぜお前と一緒にはいないんだ。生きているのではなく、生死不明なだけではないのか？」

「佐藤は化け物にさらわれた。雫は、さっきまで一緒にいたけど、今は保健室にいる」

「となると、図書室の赤い光もお前たちの仕業か。よくも乗り切れたものだ。ここから見ていても、あの光景には絶望感が漂っていたからな。早々にあきらめていたところだ。佐藤のことは、ま、残念だったな」

唇がつむいだ、残念、という言葉が、社交辞令のように淡々と通り過ぎていく。

俺は拳を握り締める。頭に血が上れば上るほど、腹部の痛みも増していく。

「睦月は保健室だと言ったが、怪我をしているのか？」

自身の怪我を隠すために、俺はとつさに嘘をついた。俺がうなづくと、生徒会長は満足そうな顔を見せる。

「自業自得だな。私にあんな態度をとっておいて、罰が下らないほうかどうかしている」

眼鏡のブリッジを、右手の中指で持ち上げる。唇はうつすらと笑

みのカーブを描いていた。

「雫は、身代わりになったんだ。あの化け物だったら、屋上の扉をこじ開けるだけの力を持っていた。雫はそれを見越して……」

切れ長の瞳が、レンズの中で鋭く光る。

「その口ぶりからすると、雫の恋人にでもなったか？ 先ほどから呼び捨てになっているぞ。確か以前までは……睦月さん、とても呼んでいたはずだ」

口の端がつりあがる。矛盾点を見つけた評論家のようなだ。

「苗字にさん付けから、名前を呼び捨て。推測するに、つり橋の法則といったところか。二人で危機を乗り切った直後の、興奮冷めやらない状況。そのときの胸の高鳴りを恋と勘違いするという、ごく単純な法則だ。睦月も所詮は低俗な女だったということだ」

人をさげすみ、おとしめることで、愉悦を感じているようだだった。

「正臣……それは本当なのか？」

俺が出て行ったドアに寄りかかっていた和輝は、体を起こして聞いてくる。和輝らしくない、生気の抜けたような声。

「答えてくれよ。本当なのか？」

「俺と雫は、そういう関係じゃない」

俺と和輝の会話の間に、生徒会長が入ってくる。

「果たして、本当にそうかな？　ここから、図書室前の廊下が見えないとも思っているのか？」

胸が痛むのと同時に、腹部の痛みも倍化する。痛みが顔に出てしまい、しまった、と思った。

生徒会長が、それを見逃すはずもなく。

「どうやら、目の錯覚ではなかったようだな。お前のような偽善者に、あの女が惚れるとは意外だったが……人間何があるか分からないものだ」

下劣なものを見るような視線が、俺に注がれる。

「正臣……お前は」

和輝の瞳の中に、黒い炎が立ち上っていくような気がした。

それは情熱や希望の灯火ではなく、憎悪や残酷さをつかさどるような、いままでの和輝からは到底連想できない類の炎だった。

「そんなに気になるなら、教えてやろう。私が見たものを」

真相を語った後の予想図が好奇心をかきたてるのか、生徒会長は笑いをこらえるように口に手を当てる。

「……教えてくれ」

絞り出すような和輝の声。

「あれは熱烈だったな。見ているこちらが恥ずかしくなったよ。お前もそうだったのだろう？　本人の感想をまず聞きたいところだが

？」

もったいぶったように、核心を外して物事を伝えようとする。和輝はそれに痺れを切らして、声を荒げた。

「そんなことはいいい！ 結果だけが聞きたい」

「そんなに聞きたいのなら教えてやる」

不満そうに鼻を鳴らし、腕を広げる。

「二人は、抱き合って、口付けを交わしていた。これでいいのか？」

抱き合ってなどいない、と言いつける気も起きなかった。

そんなことをしても、他の部分は肯定していることにしかならない。香奈が窓越しに俺たちを見つめて涙したように、主観と客観には、埋められない溝があり、必ず食い違いというものがある。

「俺はな、正臣……」

感情のない和輝の声が、化け物から発せられる声に似ていた。

第三十四話・「俺はお前が憎い」

「俺は……お前が、香奈の制止を振り切って、ここから出て行ったときに、きっと香奈の元に帰ってくるもんだと思っていた……」

和輝が俺に近づいてくる。二人の距離が縮まれば縮まるほど、怒りが肌を焼くほど伝わってくる。

「なんでだよ。つらいときにだけ利用して、立ち直ったら、捨てるのか？ 必要なくなったら、すぐに乗り換えるのかよ」

「和輝、それは違う」

腹部の痛みに耐えながら、首を横に振る。

「どこが違うんだ。一度は約束したんだろ……！　ずっと好きでいるって、ずっと一緒にいるって約束したんだろ！　お前がいなくなった後の香奈がどんなだったか、気にしたことあるのかよ。どれだけ苦しんでいたか……考えたことあるのかよ！」

和輝の目には、大粒の涙が溜まっていた。

「自分の好きな女が……他の誰かを愛しながら、胸の中で泣いているのを抱きしめる俺の……俺の気持ちを考えたことあるのかよ！」

月の半分が雲に隠され、数秒だけだが下弦の月となる。それはまるで俺たちを嘲笑うかのようだった。

「俺の胸の中で泣いているんだ。他の誰でもない、お前を思って泣いているんだ！　俺がどんなに抱きしめても、慰めても、香奈は俺

を見ることなんてなかった！ 傍にいる俺ではなく、遠くに行ったお前のことを思っていたんだ！」

目を見開いて、涙をはじけさせる。小さな光の粒は、まるで流れ星のように、コンクリートに吸い込まれていった。

「ずっと、ずっと呼んでいたんだぞ！ 正臣、正臣、って。香奈はお前をずっと待ってたんだ！」

生徒会長が、俺たち二人の言い争いにあきれ果てて、肩をすくめていた。我関せずの態度は、火に油を注いだ先ほどの行動に比べれば、幾分共感できる。

和輝が、拳を握り締めながら声を絞り出す。
懐かしい思い出をひねり潰すかのように。

「香奈はお前をずっと見てきた。そんな香奈を、俺は好きになった……。お前に愛されようとしている香奈を、俺はずっと見てきたんだ！ その気持ちがお前に分かるか？ 他の女にうつつを抜かしていたお前に！ 俺たちの気持ちなんか分かるか！」

俺の脳味噌を揺さぶってくる和輝の咆哮。

「正臣……俺はお前が憎い」

俺に何が言えただろう。

悲しみが夜空の元で展開されて、俺を取り囲んでいく。

皮膚という皮膚を包んでいく悲哀。

誰よりも理解しあえた和輝だから、悲しみは体の奥まで、心の中まで、迷うことなく突き進んでくる。ろ過も、消化もされないで、全てのフィルターを無視して、ダイレクトに俺の心を掴み取っていく。

る。

「だから、香奈の元には行かせない」

一度全身の力を抜き、再確認するように、再び力を全身にみなぎらせる。消えたと思った黒い煙は、殺意のような憎悪となって和輝の穴という穴から放出される。

「あいつはお前を探しに行ったんだ。自分の身をかえりみないで、お前を探しに行ったんだ。そんなあいつを、俺が止められると思うか？ もう、香奈の愛を止めることは、俺には出来ない。けどな……」

分からないことなどない。

和輝の言っていることが全て理解できる。

これほどまでに理解し合える和輝という人間が、この世にいてくれることを、俺は神様に感謝しなければならない。だからこそ、理解し合えるからこそ訪れてしまったこの悲しみ。

俺は神様を恨まなければいけない。

……いや、それはお門違いだ。俺は他の誰でもない、俺自身を恨まなければいけない。不器用に、自分の思った道しか進むことの出来ない、俺自身を。

「香奈がこれ以上悲しむのを、止めることは出来る」

研ぎ澄まされる和輝の眼光。

「香奈には会わせない。追いかけさせるわけにはいかない」

俺は、和輝に膝をついてみせる。

「和輝……頼む。行かせてくれ」

額と両手をコンクリートにこすり付けて、俺は和輝に懇願する。

「……何を聞いていたんだ？　何を言っただよ！　お前は！」

土下座をする俺に向けて、和輝は困惑する。

「和輝、そうじゃない！　俺は、たとえ香奈が悲しむと分かっている、香奈のところに行かないといけないんだ。香奈は間違ってる。香奈の考え方は間違ってるから」

土下座は、思ったよりも腹部に無理を強いたようだった。包帯の隙間から、いつの間にか血が漏れ出してきて、俺は目の前が真っ白になりかける。

「間違ってるのはお前だ！　正臣！」

遠く、遙か遠くから、和輝が俺に叫んでいるような気がする。

「誰かを傷つけてまで、間違いを修正させることが、お前の正しさなのか！」

土下座をすることで、苦痛に歪む顔を隠せることが救いだっただ。

「違う！　傷つくのを恐れて何もしなかったら！　間違っただけ、生きていくことになる！　だから……！」

息を吸い込むのが苦しい。大声を出すのは、もっと苦しい。

それでも、辛いからといって、意思と意思の削りあいから身を引くわけにはいかない。

声を荒げて、正面から俺に向かってくる和輝から逃げるわけにはいかない。

「あいつは泣いているんだ！ お前を愛しているんだ！ ……傷ついても、痛くて涙を流しても、突き放されても！ お前を愛しているんだ！ 愛し続けているんだ！ これ以上、香奈を悲しませるわけにはいけない！ 分かるだろ？ それぐらい、お前にも分かるだろ！」

俺は膝をついたまま、和輝の足をつかむ。

「なら、和輝……なんで香奈を行かせたりした！」

和輝の足をつかみ、上着をつかみ、俺は何とか立ち上がる。眼前には和輝の顔。和輝をつかんでいるという感覚が、薄れ始めている。海で言うところの潮がひいていくように、俺の血潮も、力もひいていきそうになる。

「香奈を好きなら、なんでお前は香奈を行かせたんだ！」

和輝の強張った顔に、俺のつばが飛ぶ。

「本当に好きなら！ たとえ相手の気持ち自分が自分を向いていなくても、守るべきだろ！」

和輝の形相が、俺の勢いを押し返す。額と額をぶつけ合うように、眼光が交錯した。

「奇麗事を並べるな！」

和輝が叫べば。

「奇麗事だつてかまわない！」

俺も必死に叫び返す。

「偽善者が！」

和輝が罵れば。

「偽善者だつてかまわない！俺は、正しいと思えることをしたいんだ！」

俺は自分の偽善を貫く。

「それが香奈を傷つけてるんだよ！」

言葉と同時。

和輝の拳が星空の元に炸裂する。俺は、霞む視界でそれを確認できなかった。頬骨を砕くような衝撃が、霞む視界を左右に揺さぶる。感覚の麻痺しつつある俺は、その痛みを百パーセント感じる事が出来ない。

倒れこむことのみが理解できるだけで、痛みはそれほど襲ってこなかった。

「香奈はお前が好きなんだ！お前を欲しがってるんだ！」

立ち上がろうとする俺に更なる追撃。胸倉をつかんで強引に俺を

立ち上がらせると、反対側の頬骨に、先ほどと同じか、それ以上の衝撃が駆け抜ける。

「俺ではなく！ お前を！」

和輝に胸倉をつかまれているから、倒れることも出来ない。

「お前の代わりは、お前しかないんだ！」

頬を往復するように、最初に殴られた頬に再び打撃が加えられた。殴られた拍子に、生徒会長が目に入る。

生徒会長は俺たち二人の喧嘩ではなく、図書室前の廊下に視線を向けていた。そして、何かに気がつく、俺が入ってきた屋上の扉に向かって慌てて駆けていく。

「誰かに優しくすることだけが」

俺は胸倉をつかむ和輝の手首を握り締める。感覚はわずかだ。だが、持てる力全てで手首を握り締めた。和輝の繰り出す拳の動きが止まる。

「優しさじゃない！」

思いを乗せた俺の右ひじが、和輝のこめかみを打ち抜く。伸ばされた腹部の筋肉が、叫び声をあげた気がした。傷口が完全に開いて、温かいものが腹から飛び出すような錯覚。

俺は和輝にそれ以上何も言えず、膝をついてしまう。

視界に入った生徒会長は、どうやら屋上への扉を施錠しているようだった。

慌てて施錠するその姿には、嗜虐的な笑み。ある意味、怒りにと

らわれた和輝よりも恐ろしく思える。

「お前が、香奈に優しくしたことがあったか？」

「香奈の気持ちに……俺は気がついていなかった。お前との毎日のほうが大事に思えたから……」

和輝は片方の口の端を引きつらせる。

「はは、今更そんなこと言ふなよ、正臣」

月夜に笑う。俺が立ち上がるのを待っていたように、和輝の額が俺の額を砕く。和輝の額が赤く染まった。

「偽善的なお前の優しさに、確かに俺と香奈は惹かれた。でもな、今は、その優しさが苦しいだけなんだ！」

「今更じゃない……。今でも、どんな状況になっても、俺は誰かに優しくしていたいんだ」

俺の視界が真っ赤に染まった。血が目に入り込んできたからだろ
うか。

「分かれよ！　香奈を傷つけてるお前のどこに、優しさがあるって
いうんだ！」

屋上の扉から轟音が聞こえた。化け物が進入してこようとしている
のだろうか。

俺と和輝は一瞬そちらに気を取られるが、生徒会長が今にも笑い
出しそうにしているのを見て、それが化け物でないことに気がつく。

「正臣！　いるんでしょ？　開けなさいよ！」

栗が扉を叩きながら、俺を呼んでいた。

第三十五話・「おねがい……」

乱暴に叩かれる屋上への扉は、大きな音をたてることはあっても、壊れることは決してない。実験室備え付けのテーブルを持ち上げたあの化け物ならば、壊すことも可能だったろう。

「なんで鍵を閉める必要があるのよ!」

いくら雫が一般人とは比べ物にならない運動神経の持ち主だとしても、雫が人間である限り、この扉を破壊することは不可能だ。

「アンタ、自分の怪我のこと分かってるんでしょね! このままだとアンタは……アンタは!」

扉を叩く音が一段と大きくなる。

「死ぬかもしれないのよ!」

叩いている雫にも、相当の痛みはあるはずだ。それでも、雫は扉を叩き続ける。

「鍵を開けなさい! 正臣!」

「鍵は私が閉めさせてもらったよ」

生徒会長の馬鹿にしたような頬の歪み。

扉という絶対的な障壁で守られているせいか、雫への恐れはない。

「アンタ、こんなことをしてタダで済むと思ってるんじゃないでしょうね……!」

「お前こそ、このままでいいのか？ 怪我をしているんだろう？
愛しの恋人が」

腹を押さえて、かろうじて笑いを抑えている生徒会長。

「な……恋人なんかじゃないわよ！ 勘違いしないで！」

扉が叩かれる音が止まる。

「そうなのか？」

どうやらその問いかけは、雫ではなく俺に向かってのようだった。
残念ながら、俺には問いかけに答えられほどの余裕はない。

再び襲った和輝の頭突きが、俺の額を割り、そこから流れ出した
血が、俺の視界を更なる赤に染める。

「血だらけというのは、見るに耐えないな。私の問いに答える気力
もないらしい」

「いい加減にしろさいよ……！」

「永沢もなかなかの格闘センスだ。一方的に終わるな、この戦いは」
「止めさせなさいよ！」

雫のプライドがそうさせるのか、決して生徒会長に懇願するよう
な態度はとらない。

「止めさせてどうする。これは、ただの他人のいさかいだ。参加す
るにしても、止めるにしても割に合わないと思わないか？ 睦月、
お前はそういうことには無関心な人間だと思っていたが……。さす
がに恋人が傷つくのは忍びないか」

「だから、恋人じゃないって言ってるじゃない！」

扉を切り裂かんばかりの、雫の叫び声。

「ならば、他人事と決め付けて、切り捨てればいいだろう。確か、お前は反対したはずだな。あの男が体育館に他の生徒を助けに行こうとしたとき、偽善者などと罵って張り倒しただろう」

雫の反論が聞こえない。生徒会長の事実確認に、論破の糸口をつかめないからだろうか。

「私も同感だよ。そのときと同じようにすればいい。救いようのない人間は、言葉通り、救うに値しない。お前の判断は間違っていない。今回のケースも切り捨てるべきだ。だが、それが出来ないとなると」

俺は顔面に繰り出される和輝の拳を、ぎりぎりで回避する。傾いた体を支える力も失われようとしていた。

「あの男は、お前にとってそれを覆す特別な人間だ、ということになるな」

眼鏡のふちが、月夜に輝く。

「惚れたのだろう？ 睦月雫」

それ以上に不気味に輝く、生徒会長の瞳。獲物を見つけた捕食者の目。

俺の視界が生徒会長を確認できるのは一瞬だ。

和輝から繰り出される怒りの矛と、自らが抱える致命傷。

その二つと渡り合わなければならぬのに、生徒会長の動向も気

になっってしまう。

「やっぱり、本当だったんだな……正臣！」

俺の名前に込められているのは、他でもない怨嗟。

「お前は最低だ」

和輝の中段への蹴りが、俺の腹部を直撃した。内蔵が爆発するかのようだ。かろうじて避けてきた腹部への攻撃。勝敗を決定付けるには十分な威力。

「あ……が……」

屋上のコンクリートに転がる俺を見下す和輝。害虫を見るような目だ。

「腹部にいい蹴りをもらったようだ。立つことも出来ないようだ」
生徒会長が俺と和輝の攻防を実況する。
扉の向こうで、こちらの状況を把握できないでいる雫に対して、詳しく言い聞かせている。

「見ているこちらにも痛みが伝わってくるかのようだ。容赦のない一方的な攻撃は、ただのなぶり殺しだな」

コンクリートに転がった俺の腹部をさらに蹴り上げようとする和輝。

腹部へのこれ以上の打撃は、なんとしても避けたかった。これ以上ダメージを受ければ、香奈を助けることはおろか、動くことさえ

出来なくなってしまう。

俺は腹部を両腕でかばう。和輝の靴が、折りたたんだ俺の腕にめり込んだ。

体中を蹴りの衝撃が襲う。

「まだ、攻撃を加えるのか。さすがにこれ以上は耐えられないだろうな」

生徒会長の声がかすかに耳に届く。

「アイツを助けなさいよ！ 私に殺されなくなったら！ アイツを！」

「はは、ははははは！ みつともないな？ 睦月雫とあるうものが！」

「あいつを見捨てたら、アンタは私が一生かかっても殺してやる！ これ以上ないってくらい、惨たらしく殺してやる！」

「それは恐ろしいな。怖くて手足が震えるよ！」

眼鏡がずれるのもかまわずに、大声を上げて笑い出す。

「アイツには！ 正臣には、借りがたくさんあるんだから！ ここで死なせるわけにはいかないのよ！」

扉を叩く音が再び聞こえ始める。

コンクリートに横たわる俺の耳にもそれは聞こえた。連続で身に受ける和輝の攻撃に、意識が失いそうになる中、その音は、俺を呼び覚ますかのようにだった。

「よくもあんな体で立ち上がろうとする。シャツが血で真っ赤だ」

生暖かい空気が屋上を停滞している。肌を舐められているような感覚がした。

気持ちが悪い。

「正臣……正臣！ もう止めなさいよ！ なんでそんなにしてまで誰かを助けようとするのよ！ 意味ないじゃない……自分が死んだら意味がないじゃない！」

和輝が忌々しそうに拳を握り締めた。

「真っ青な顔は、まさに月夜の下では幽霊だな」

俺を化け物とも思っているのだろうか。近寄ったら、その分だけ離れていきそうな、そんな嫌悪感を漂わせている生徒会長。

「……がい……」

「なんだ？ 何か言ったか、睦月？」

和輝の拳が、やつとの思いで立ち上がった俺に振り下ろされる。脳天に叩きつけられたそれを受けて、俺はまた地面に這い蹲ることになった。

コンクリートの味は、不味いものだった。

「……すけて……」

口の中に入ってしまった砂を吐き出すと、砂は真っ赤に染まっていた。

赤い唾液が糸を引く。

口内に溜まった唾液の半分は、血で出来ているようだった。

「睦月、聞こえないな？」

奥歯がぐらぐらするのに加え、喉の奥には、痰のように絡むものがある。鉄の味がすることから考えるに、血であることは間違いないだろう。

「お……がい」

俺はうがいでもするかのように、喉に力を入れて吐き出した。化け物の体液に似たものが吐き出されて、俺は気が動転しそうになる。自分が化け物にでもなってしまったかのような幻視。

「おね……がい」

俺の血液が、白色のコンクリートをどす黒く汚す。

「正臣を助けて……おねがい……！」

回転不足の俺の頭は、立つことすら忘れかけている。
俺は立ち上がり方のマニュアルを開いた。

「アイツを……失いたくないのよ……」

上体を起こして、方膝を立てる。左手で体重を支え、行き過ぎそうになる上半身を、今度は右手で支える。

「正臣……なんで立ち上がるんだ。なんで立ち上がれるんだ！」

ここからが正念場だ。

幽体離脱しそうになる意識を、何とか体に定着させたまま、全身

に力を入れなければならない。

「……何だつてする。だから、正臣を助けて……」
「何でもするんだな？」

満潮と干潮を繰り返す腹部の痛みに耐えながら、慎重に立ち上がる。両足に力を入れるのを忘れてはならない。せっかく立ち上がった、また転んでしまつては意味がないから。

「なら、ずっとそこで恋人が死んでいくのを見ていればいい。私を馬鹿にした罰としてな。それからなら、この扉を開けてやつてもいい」

扉に口付けでもするかのように、唇を寄せる生徒会長。

まるで扉の向こうにいる恋人に睦言を伝えるかのようだ。

「……嫌よ、絶対に嫌……！ 正臣を監視するつて決めたんだから……アンタがいないと、張り合いがないんだから……。アンタのために泣いてあげてる私に、笑顔のひとつでも見せてみなさいよ！ 涙を拭ってみせなさいよ！ 偽善者でしょ、アンタは！」

ヒステリックになっている雫の声が、俺を叱咤しているようで笑つてしまう。

雫らしくない。

いつでも慌てずに、人を馬鹿にするような態度をとつて、不適に笑っているのが似合っている。

睦月雫はそんな人だ。

「……許さないから……私を泣かせたまま死ぬなんて、私は絶対に許さない。正臣……聞こえてるんでしょ！ 正臣！ 答えなさいよ」

！」

「ははは、ははははははは！ 哀れだな！ 滑稽だな！」

悪趣味な喜劇鑑賞。

生徒会長という責任ある役職を脱ぎ捨てて、笑い尽くそう、楽しみ尽くそうとしている。

「なんで笑っていられるんだ？ 正臣、お前は怪我しているんだろ？ 苦しくて、今すぐにでも逃げ出したいんだろ？ 何で命乞いもせずに、そうやって立ち上がるうとするんだよ！」

……俺は笑っているのだろうか。

俺自身にもそんなことは分らない。

でも、俺がもし笑っているとしたら、それはきっと笑いたいからなのだろう。

「偽善だけを振りかざしてきたお前が……誰も救えなかったお前が……香奈を傷つけたお前が、何で……どうして、笑っていられるんだよ！ 正臣！」

助走をつけた和輝の前蹴り。

「終わったな」

俺の弱点を容赦なく攻めてくる。
腹部はがら空きだ。

「正臣！」

雫の悲鳴が聞こえた。

立ち上がることで精一杯の俺には、それを防ぐ手立てはない。
鋭い槍で一突きにされる。十字架にくくりつけられた罪人に、無
慈悲までの一撃が加えられた。

罪人は俺だ。だから、きっとその例えは間違っていない。

「……正臣、お前……」

屋上の空気が、少しだけ揺れた気がした。

「……和輝、俺は……」

和輝の足が、俺の腹部を直撃したままで止まっている。血が飛び
散って、和輝の足にも付着していた。

「俺はさ……和輝」

肋骨は内臓を守る役目があるというが、折れてしまっている今で
は、内臓を傷つける刃物としての機能しか持っていない。三本ぐら
いはすでに折れてしまっているだろうか。

「馬鹿だから……どうしようもない偽善者だから……誰かが間違っ
ているのを、間違ったままにしておけないんだ。放ったままにして
おけないんだ……」

俺の腹部にめり込んだままの和輝の足に、手を優しく置く。

「和輝の苦しみは分かってるよ……本当に分かってる……。和輝の

言う通りだ。俺は間違ってしまった。取り返しのつかないことをしてしまった……。それは、死んで償うことも出来るかもしれない。でも俺は……生きて償いたいんだ。だから、何度でも立ち上がるよ」

赤に染まる俺の視界。

「和輝……お前にも償いたいから」

和輝の鬼のような形相が変調をきたす。

「謝りたいから……」

和輝に微笑みかけた。

「……ごめんな」

足を戻した和輝が、頭をかきむしる。意味不明なもの、理解不能なものに身悶えるように。

「正臣、優しくするなよ……！俺はお前を殺そうとしてるんだぞ！憎くて憎くて仕方がないんだ！」

両手を広げ、目を血走らせながら、激しく抗議する。

広げた手には、傷つけた頭皮から漏れ出した血がついていた。

「和輝……ごめんな」

和輝に近づいていく。

「ごめん。俺にはこういふことしか出来ないから……他に何も出来

ないから……ごめんな、和輝……ごめん」

微笑んでいいときではないはずなのに、俺の顔からは微笑がこぼれだしてしまう。

「恨めよ、殴れよ！ お前だって殴られて、痛い思いをして、俺が憎いはずだろ！ 許すなよ！ やり返せよ！」

屋上の生ぬるい、腐敗したような空気が、少しずつ動き始める。

「俺は許すよ。だってさ」

一陣の爽やかな夜風が、二人を取り巻く空気を払拭していった。

「俺たち、親友だろ？」

和輝の動きが止まる。

「……また、お前と笑いたいんだ。お前でなければ駄目なんだ。俺には……親友はお前しかいないから」

誰かの身代わりになんてなれない。

和輝が言ったように、香奈には俺しかいないのかもしれない。けれど、それは俺も同じだ。

和輝の身代わりは、和輝しかないから。

和輝だけが、和輝でいられるから。

「朝、登校して、お前は当たり前のように遅刻して……俺と香奈で馬鹿にして……夏美が、それを見て笑って……加藤さんが、そんなお前をなぜかかばって……」

和輝が俺の目を見つめてくる。怒りと悲しみの間で揺れ動く瞳。

「あのときの俺たちのままでいたいんだ。あのときの俺たちを取り戻したいんだ」

和輝の瞳が濡れる。

「正臣……」

俺は和輝の肩に手を置いて、笑いかける。

「香奈を連れてくるよ。あいつも、あの頃を取り戻したいはずだから……」

「……正臣……」

殴るでもなく、叩くでもなく、ただそつと和輝の肩に触れるだけ。たったそれだけのことなのに、何十年ぶりの再会のような感動がこみ上げる。

「ついでにさ……友人として言ってあげなければいけないことがあるから。伝えなくちゃいけないことがあるから……」

「正臣、お前は……」

怒りで充満していた和輝の体から、力が抜けていく。俺を傷つけ

るためだけに使われていた力が、抜けていく。
抜けていく力は、こわばった頬を溶かし、その上から涙が伝って
いく。

「なんでそんなに……優しくなれるんだよ……」

親友の涙。初めて見る和輝の涙。

「偽善者って、そういうものじゃないかな」

「正臣……俺は」

救われたように笑いかけようとした和輝は、次の瞬間、生徒会長
によって殴り飛ばされていた。

「私はこんな結末は認めない！」

血走った目は、次に俺を捕らえた。

第三十六話・「馬鹿みたいに」

まったくの不意打ちだった和輝は、受身すらとれずにコンクリートに転がった。

生徒会長の一撃が重かったわけではない。ただ、何の準備もできていなかっただけ。

「私が望んでいたのはこんな結果ではない！」

俺はコンクリートに横たわる和輝に寄っていく。頭の打ち所が悪かったのか、和輝はぴくりとも動かない。頭から流れ出している血が、俺の腹部から流れ出す血と同様に、コンクリートに染みこんでいく。

「……和輝？」

俺は腹部の痛みを忘れて、親友にすがりついた。

「和輝！」

和輝が呼びかけに答える気配はない。

「当然の罰だ！ 最高の結果を目の前にして、みすみすそれを逃すような輩には！」

今にも眼球が飛び出しそうだ。

普段の鋭く、細い生徒会長の眼ではない。常軌を逸した者の目。

「……何？ 何があったのよ！」

雫の音が、扉というフィルタを通して、屋上に流れていく。

「この私をこき下ろしたんだ。あの女への復讐なんだよ、これは」

引きつった笑みを浮かべて、月光を浴びる。

満月の夜に姿を変える狼男、いや、それ以上の狂気が、足元からあふれ出ている。

「それを途中でやめるなど、馬鹿だと思わないか？ ええ？」

この男は、雫が悲しむ様子を特等席で堪能することによって、己の欲望と復讐心を満たそうというのか。

俺を殺すことによってのみそれが達せられると妄信している。

「もともと私はリアリストでね」

深手を負っている俺に、生徒会長を止める力はない。

「偽善者なんていうものは信じていないんだよ。淘汰されてしかるべき人間だからな」

屋上に転がる砂利を踏みしめる。狂戦士じみた風体で、迷わず俺に向かってくる。

「私は殴ったのも初めてなら、人を殺すのも初めてだ。正直、興味があつた。こういう非常時でもない、体験できそうにもないからな……」

だらしなく開いた口元。笑いながら、大きく息をする。

「正臣に指一本でも触れてみなさいよ！ 正臣が許しても、私が許さない！ 絶対に殺してやる！」

「黙れ！ どうせこちら側には出て来れないんだ。そんなこけおどしには乗らないさ」

俺は和輝の鼻腔に耳を当てる。かすかに息をしている。

「正臣！ 逃げなさいよ！ 鍵持ってるんでしょ！」

ポケットに手を入れると、奥には金属の感触。しびれた指先で温度は感じ取れないが、形だけで判断するに、それは確かに鍵だ。

「残念ながら、逃げるつもりはないみたいだぞ？ 感動するような友情に感謝だな！」

「……この！ 馬鹿！ 正臣！」

扉を叩く雫。

齒がゆさがこめられた渾身の一撃は、屋上の空気を振動させる。扉が発生させた大音量は、今まで以上に校舎を駆け抜けて、山彦となつて聞こえてくる。

「馬鹿！ アンタ馬鹿よ！ どうしようもない馬鹿！ 偽善馬鹿！」

馬鹿、の度に扉を叩く。

扉を叩く雫の手が心配になつてしまう。

「馬鹿正臣！ アンタ大馬鹿よ！ なんでアンタのために私がこんなに必死になんないけいけないのよ！ アンタせいよ！ 馬鹿！」

自分が傷つくのにもかまわず、一心不乱に扉を叩き続ける。

「あんたが私に馬鹿みたいに優しくするから！」

生の感情が、扉の隙間からあふれ出す。

「馬鹿みたいに考えなしだから！」

捕食者の笑みをたたえた生徒会長。

俺は膝をついたまま、和輝を背後に隠す。そんな俺を見下し、捕食者は鼻で笑う。

「馬鹿みたいに偽善者だから！」

雫の声を聞いて快感を得ているのだろう。生徒会長は鳥肌を立て、自分を抱きしめる。

「自分を省みないで馬鹿みたいに微笑むから！」

この叫びを慟哭に変換することで、気分は最高潮に達する。生徒会長にすれば、今はクライマックスに向けての最後の一山と、いうことだろう。

「馬鹿みたいに信じて疑わないから！」

雫の声が、俺の背中を押してくれるような気がした。和輝を守り抜くだけの力をくれるような気がした。

「私だって、馬鹿みたいにアンタを好きになるしかないじゃない

い！」

「認めたな！ 睦月雫！」

扉の向こうの雫を嘲笑する。

「冷血人間が愛の告白をした貴重な瞬間だぞ！」

「……いい加減にしろよ」

背後から人影が飛び出す。

俺の肩に手を置いて立ち上がると、逆巻く怒りを弾丸に変えて、生徒会長を撃ち抜いた。俺の血を飲んだコンクリートの上で、歯を押しえて転げまわる生徒会長。両手の隙間から赤い液体が溢れ出す。

「香奈を頼む……正臣」

殴りつけた右手をだらりとさせたまま、背中であぐらをかき和輝。

「屋上はもう安全じゃない」

歯を押さえたままの生徒会長を牽制しつつ、和輝が俺を振り向く。頭から流れ落ちる血が、こめかみを通り、あごにまで達していた。和輝はそれを袖口で乱暴に拭くと、俺のポケットに手をつ突っ込む。

「香奈と二人で、話さなければいけないことがあるはずだろ」

俺のポケットから取り出した鍵で屋上のドアを開けると、俺を扉の向こうに押し込めようとする。

「待てよ、和輝！」

閉めようとする扉を押し返して、俺は和輝の袖をつかむ。
和輝と扉で、わずかしき屋上の風景は見えなくなっているが、無数の赤い光が金網をよじ登ってくるのが見えた。扉を叩く音に引き寄せられたのだろうか。

「お前も一緒に！」

「……正臣、一度は言ってみたかった言葉があるんだ」

頬を流れていく血の筋を感じさせない、いつもの笑顔で俺に語りかけてくる和輝。

学校の休み時間に、何気なく交わされた会話の数々。
それを想起させる空気を、和輝は作り出した。

「先に行つててくれ、必ず追いつくから」

そう言つて追いつくことの出来なかったドラマや映画を、俺は何度も目にしてきた。

ましてや、現実には追いつけないことはたくさんある。ありすぎて、気が狂いそうなくらいだ。

和輝は俺の逡巡を知つてか、扉を強引に閉めると、素早く鍵をかける。

鍵のかかる音が、脳内を跳ね返った。

永久の別れ、その音に聞こえて仕方がなかった。

「睦月さんが言ったことさ。理解できるんだ。すぐく共感できるんだよ。お前を好きになる気持ち分かるんだ。親友として、一人の人間としてのお前が、俺は好きだから……それが余計に分かった」

扉の向こうで俺が立ち尽くしているのを知っているのか、言い残すように和輝が囁きかける。

「水野さんも、睦月さんも、香奈も、俺も、みんなお前が好きなんだ。お前の、偽善的なところとか、誰にでも優しくしようとするところとか」

真っ暗闇の校舎の中から、屋上の和輝を思う。

「時々には失敗するけど、それもまた愛嬌。不器用ながら頑張るお前の姿に、みんな惚れたんだよ」

扉を閉める直前、転落防止の金網をよじ登る化け物は、十を超えていた。

化け物の中には、見たことのないタイプも含まれていて、特に目立った奇形のそれは、生徒二人を背中合わせにくっつけたような形をしていた。

「さつきは不器用すぎて、殺したくなっただけ……。でも、やっぱり正臣なんだよ。納得できない。でも、お前だから納得できる。みんなに優しくしようとした気遣いの結果なんだろうな、きっと」

和輝が饒舌になる必要はない。

後で、ゆっくりと話せばいい。

すぐに追い付くはずだから。

「今の台詞、もう二度と言わないからな。英単語みたいに、復唱して覚えてくれ」

和輝が扉の前を離れる足音がした。

「和輝！」

「お前、そういえば暗記苦手だったな。大丈夫かな……？」

歩きながら俺に声をかけ続ける。

徐々に俺と和輝の距離が離れていくので、和輝の声が聞き取りにくくなる。

「……さすがに忘れられると困るな……」

テストが返却されたときに、俺の点数を尋ねてくるような雰囲気
の和輝。

「……ま、それも正臣らしいよな……」

昼休み、売店に並びながら話すような雰囲気の和輝。

「和輝！」

和輝の声が聞こえなくなる代わりに、化け物の醜惡な声だけが、
扉の向こうに響く。

第三十七話・「割り切っていいんだよ」

窓枠に手をつきながら、激痛を発する腹部を抱えて、俺は体育館を目指す。

……俺は思い出す。

三階の生徒会室前を通れば、雫と口論したこと、偽善だとのしられたこと、夏美とキスをしてしまったことを。
階段を下りて踊り場に差し掛かる。

……俺は思い出す。

加藤さんが蜘蛛に取り込まれていたこと。加藤さんを救えなかったせいで、夏美までも失うことになってしまったこと。

今日一日で起きてしまった出来事だとは思えない。

学校で起きたことだとは思えない。

現実だとは思えない。

目が覚めれば、俺はきっと部屋にいるはずだ。

嫌な夢を見た、と言って体を起こすと、寝汗をびっしょりかいているはずだ。

遅刻しそうになって、慌てて飛び起きて、制服を着て、バッグを携えて、お気に入りの靴を履いて、部屋を飛び出す。

学校に到着し、教室に入れば、クラスメイトが元気よく笑顔を向けてくれる。俺の机の隣では、夏美が加藤さんに勉強を教えていて、

なぜか香奈が俺の椅子に我が物顔で座っている。

俺はそんな香奈をどかせて、親友が遅刻してくるのを、首を長くして待つのだ。

だが、それは現実逃避でしかない。

全身を這い回る痛みや、腹部にまとわりつく血の臭いが、逃避から呼び戻すように俺の五感に訴えかけてくる。

「体育館へ……」

思えば全ては体育館から始まった気がする。

香奈と二人で仲良く遅刻し、集会があると思って体育館に行ったことが、そもそもの始まり。

和輝達、五人が飛び出してきて、そしてこの忌まわしい事件が始まった。

「なにが『スクール・オブ・ザ・デッド』だ……！」

売れない三流映画のような名前に、一番の皮肉が込められているような気がした。

体育館に続く渡り廊下を進むと、俺は夏美とすれ違った。

夏美が嬉しそうに俺におんぶされている。

後ろから蜘蛛がついてきているのが分かると、俺は慌てて夏美をおんぶしながら走り出し、後ろから和輝が押してくれた……。

俺は、和輝たちが出てきた舞台裏の袖から、暗闇が支配する体育館に入る。

放送機器がうずたかく積まれた袖を通り、真っ暗な舞台の上へ。袖口から見える舞台の上には、驚くほど何もなかった。

演説台の上には、集会時に用意される大きな花瓶が置いてあり、飾られた花が萎れて、演説台にしなだれかかっている。

分厚い幕が下りていて、舞台の上からでは体育館全体を把握することが出来ない。

まるで観客席が舞台の上で、鑑賞すべきものが体育館全体に広がっているような感覚。

……まだ舞台の幕は上がっていない。

そんな言葉が示唆されているように感じた。

「来てくれたんだね、正臣」

声がして俺は振り返る。動いた暗闇の中からは、俺が良く知る人物が姿を現した。

舞台の上のライトが点灯し、俺は目を細める。

「来てくれると思ってたんだ」

演説台を挟んで、俺と香奈は向かい合った。スポットライトを浴びる俺と香奈は、まるで舞台俳優のようだった。

「寂しかったんだよ。正臣がいなくなってから」

窓越しに見た泣き顔は、そこにはない。

いつも通りの、いつも通り過ぎる香奈の微笑が、そこにはあった。

「香奈、俺は……伝えたいことがあるんだ」

「何かな？ 時間はまだ残っているから、少しぐらいなら聞いてあげられるよ」

香奈の言葉の端々に出現する理解の及ばないことを、俺は頭からはじき出した。

「香奈、割り切ることは間違ってる。俺たちは失ってしまったことを……忘れることなんて出来ないんだ。失ったものを失ったものとして、心の中に秘めて生きていかなければならないはずだ」

舞台に落ちる俺の血の音が、メトロノームのように時を刻む。

「挫折して、絶望して……苦しいけど、それでもあきらめずに後悔して、反省して……。失ったものに対して、必死に償うことが大事なんだ」

俺の語りかけなど聞こえていないかのように、香奈は俺に笑いかけたまま。子供を見守る母親のように、優しく微笑んだまま。

「その場限りで割り切ってしまうことは、確かに何よりも楽だ。苦しみからも解放される。……でも、それは自分の殻に閉じこもるのと同じなんだ。それでは人は何も変わらないし、変わらない。ましてや、誰かを思いやることなんて出来ない」

微笑み続ける香奈の心に届いて欲しくて、心を、声を絞り出す。

「香奈、俺は……お前にそれが分かって欲しいんだ」

俺と香奈の間には、金の糸が舞う。

スポットライトに照らし出されたほこりが、花びらのようにゆらゆらと漂っていた。

「大切な……友人として」

幻想的な舞台。

観客のいない、二人だけの舞台演劇。

「おかしいよ、正臣。私たち、恋人だよ？」

「香奈……」

思いをまくし立てた俺に代わり、今度は香奈が口を開いた。
あいつも変わらず、香奈からは笑みがこぼれる。

「私たちはこれからもずっと一緒。だって、正臣は割り切れたんだから。これがその証拠でしょ？ だから、私のところに戻ってきたんでしょ？」

両腕を大きく開いて、俺を受け入れるように前に差し出す。

「香奈、俺はお前のことも……背負っていこうと思ってる」

苦渋の選択だと分かっている。

自分勝手な選択だと分かっている。

それでも、和輝に言われたとおり、俺は寂しさを晴らすためだけの存在として、香奈と付き合っていくことは出来ない。

それは、好きでいてくれる香奈に対しての、最大の侮辱だから。
俺は最大の力を持って、刀を振り下ろす。

「……以前の俺たちに戻ろう」

広げていた香奈の両腕が、ゆっくりと下ろされた。

……俺が振り下ろした刀は、容赦なく香奈を傷つけるだろう。悲しみにいざなうだろう。

でも、俺はその刀を振り下ろさなければならぬ。

その責任が俺にはあるから。

「俺は、間違っていたんだ。あんな気持ちで……香奈に寄り添っていいはずがない。きちんと、もう一度自分と見詰め合って、それからきっちり答えを出さないといけないと思う……」

俺が振り下ろした刀を弾き返すように、香奈の唇が動く。

「正臣は、私を過去にするの？」

声色が一瞬だけ、狂気に変貌しかける。

過去、香奈はその言葉に反応したように見えた。

「そうじゃない。もう一度、俺は自分を……」

スポットライトに照らし出されている香奈をよく見れば、目元には泣き腫らした跡がある。

血液不足がたたって、香奈が二重にも三重にも見えるせいで、気がつくのが遅れた。

考えるまでもない。

香奈はすでに泣いていた。屋上を去るときも、雫とキスをしたと

きも、そして今も。

傷口をえぐるような行為を、俺はしているのだ。

「……あの女が、正臣をこんな風にしてしまった。私が正臣の傍にいてあげられなかったのが原因だね。ずっと正臣の傍にいてあげられたなら、正臣はずっと私を好きなままだったのに。でも、大丈夫だよ。これからはずっと一緒だから。私、正臣から離れたりしないから。だから、あんな泥棒猫のことなんて忘れて　割り切っていないんだよ」

「雫のせいじゃない。これは俺自身が望んだことなんだ。雫は関係ない」

「雫……？　前は睦月さんって呼んでいたよね」

香奈の笑みが引きつる。

「水野さんといい、睦月さんといい……なんで私の大好きな正臣に手を出すのかな……。痛い目に遭わないと分からないのかな……。睦月さんは、正臣に気がないようだから、安心していたのに」

笑い疲れたように、頬が痙攣する。

「正臣、私ね」

香奈はそれでも、スポットライトの下で笑い続ける。

演技を強いられる女優の意地、プライド。

笑い続けることが、香奈のそれに合致しているように思える。

「正臣のこと愛しているよ。出会ったときからずっとだよ。近くに
いるだけで、声を聞いただけで、胸の奥がぎゅって締め付けられて
どうしようもなくなるの。何をされたっていい、何をしてあげても

いい。そんな気持ちになるの」

スポットライトが俺たちに降り注ぐ光は、高熱を帯びている。にじんでくる汗、極度の疲労と出血に、俺はめまいを隠せない。何度も足の位置を変えて、ふらつく体を維持し続ける。

「でも、正臣は格好いいから、優しいから、すぐに正臣を好きになる人が出てくる」

声の調子が次第におかしくなる香奈。
喜びと怒りが交錯する。

「……だから、正臣が割り切れるように、割り切りやすいように、正臣の周囲を軽くしていこうと思ったんだ」

大発見でもしたかのように、嬉しそうに。

「軽く、していく……？」

意図するところが分かりそうになり、俺は思考を停止させた。

「うん。水野さんの次は、睦月さん。そうすれば、正臣は憂いなく私を好きになれるでしょ？」

耳から入り、脳内をかき混ぜる。

記憶と思考がぶつかり合って、頭が痛みで泣き喚く。

「……何を言ってるんだ？ 香奈……」

香奈がポケットに手を入れる。取り出したのは、手のひらに収ま

るぐらいのリモコン。

演劇部員が無断で使用して、教師に注意されていた記憶がよみかえる。それがあれば、遠隔操作で幕の上げ下げをすることが出来るはずだ。

「私の大好きな正臣の足かせになるものは、みんなこの子達が排除してくれるんだよ」

香奈がりモコンのボタンを押すと、幕がゆっくりと巻き取られ始めた。幕が上がる金属音が、舞台上に響いていく。

耳を切り裂くような不気味な音。

幕が上がることで発生する隙間風が、スポットライトの中で揺らめいていた黄金のほこりを吹き飛ばす。

そして、幕が上がった。

第三十八話・「痛いのは嫌だよね」

ここは本当に体育館なのだろうか。

見渡す限り赤い大海原。何百、何千という蜘蛛の群れが体育館の内側に張り付いていて、目を光らせながら蠢いている様子は、まるでさざ波のようだ。

「この子達はね、今回試験的に導入されたんだよ」

体育館の床には、生徒だったものと思われる人間の四肢が散乱していて、蜘蛛がその上から生徒達の体を物色している。首や太ももが無造作に転がっていて、赤い血にまみれながらも、白い骨が見てとれた。

女か男かなんて識別は、まったくいいほど出来そうにない。

「最初は一匹だった。私がバックに卵を入れて持ち込んで、集会の中に放り込んだの」

バスケットゴールの下では、二匹の蜘蛛が生徒の腹の中から腸を器用に引き出し、互いに引っ張り合う。

「そうしたら、あっという間にこんなに増えてくれたの。そうそう、正臣、この子達ね、頭もいいんだよ」

引っ張りすぎてちぎれてしまうと、ちぎれたところからは、消化の終わった内容物と液体がこぼれだす。魚を三枚におろすように、

臓器を次々と下半身のない人間から引き出すと、蜘蛛はその中に自らの身を入れる。

肋骨の中は空洞。

心臓すらも引き出された生徒は、生きることすら出来ないはずなのに、ゆっくりと立ち上がる。

「バケ……も……ノ」

化け物の放つ奇妙な声は、やはり生徒の断末魔だ。

生命の息吹が生徒を見離す、その今わの際に出した声が、まるでダイイングメッセージのように、生徒の口から吐き出されている。

「モノ……も……バケ」

体育館の天井を見上げると、何十人という生徒が、まるでみの虫のような衣に覆われて、ぶら下がっていた。

佐藤をさらった化け物も、糸を吐き出していたことから、どうやら生徒たちを保存しておくための貯蔵場所のようだ。

すぐに一匹の蜘蛛がやってきて、衣の中に入っていく、直後、衣の中が激しく動き出す。次に出てきたときには、見たこともない化け物になって出てくる。

蜘蛛にとって化け物へと進化する形態は、特に定まっているというわけではないようだった。

ただ単に、どこから侵入したか。

どこから足を出すか。

侵入する人間がそのときどんな形をしていたか。

それだけの要因で、化け物のバリエーションが決定される単純さ。現に、体育館の中にいる大量の化け物には、これ、という決まったパターンがない。全てが全て、微妙に異なっている。腹から足を出したり、背中から出したり、横腹から出したり、腹と背の両方か

ら出したり、思い思いの形態をとっている。

「私のことを親だと思っているみたいなんだ。他の人間には容赦なく襲い掛かるのに、私にだけは決して襲い掛からないの。水野さんが襲われたときのことを覚えてるよね。あの時、私のほうが水野さんよりも前にいたのに、襲われなかったのはそのおかげなんだよ」

天井から吊り下げられた衣のひとつから、佐藤が顔を出す。

「さ、佐藤……！」

俺の声が届いたのか、佐藤は激しく腕を振り回し、周囲を覆っていた衣をはがしにかかる。だが、天井に張り付いている衣を破れば、支えているものがなくなり、体育館の床へと落下してしまう。

「佐藤！」

俺の叫びと同時に、佐藤は床へと落下した。

体育館中に響く轟音。

佐藤の両足は、考えられない方向に折れ曲がってしまった。糸を失った操り人形のように。

「今、助ける！」

俺は腹部の痛みを省みずに走り出そうとする。

「駄目だよ、正臣。殺されちゃうよ？」

香奈が俺を背後から優しく抱きしめる。俺の背中に顔をうずめて、胸元に腕を回してくる。

「俺は……俺は！」

守りたい。

助けたい。

思いやりたい。

「駄目だって言ってるのに……」

胸元にあてがわれていた香奈の手が、俺の傷付いた腹部へと下りてくる。香奈が背後で微笑んでいるような気がした。

「私の言うことを聞いてくれないなら……」

香奈が応急処置の跡に気がつき、乱暴にそれを引き剥がす。俺はあまりの痛みにその場に膝をついてしまう。

香奈は膝をついた俺をやはり後ろから抱きしめ、俺の頭を愛撫する。

「痛いのは嫌だよね、正臣」

俺の肩に、小さな顔を乗せて妖艶に微笑む。

表面上は穏やかだが、右手で俺の頭を愛撫しながらも、左手は出血の止まない腹部をわしづかみにしてくる。

血をもてあそぶように左手を動かし、次の瞬間には、傷口に指を差し込んできた。

例えようのない激痛が走る。

俺は香奈の手を引き剥がそうとするが、大量出血は、すでに俺から多くのものを奪っていったようだった。

抵抗する力は微々たる物で、香奈の手すら引き剥がせない。

「痛いよね、苦しいよね、正臣。痛いって顔してるよ……」

あろうことが、香奈は俺の傷口に差し込んだ指を、さらに奥へと強引に差し込んでくる。

「でも、いいな……正臣のこういう顔も好き。大好き。私の与えた痛みで苦しんでくれているんだよね……」

恍惚とした表情を浮かべながら、人差し指で俺の腹部をかき回す。指の間からは俺の血が漏れだしている。

吐き気が俺を襲う。

内臓が口からこぼれたすのではないかという、強烈な吐き気。

「正臣の中、あったかいよ。正臣……」

傷口を広げるかのように、俺の中へどんどん指を差し込もうとする。死の気配が、体を極寒へと導く。

死神の鎌が、俺の首元にあてがわれているような錯覚。

その錯覚が、もし錯覚でないとすれば、死神は間違いなく俺の背後で嗜虐的に微笑む香奈であろう。

俺は最後の一線を振り切って、左ひじを香奈へと振りぬいた。

第三十九話・「もう、やめてくれ」

左ひじは、俺を後ろから抱きしめる香奈の顔面に直撃する。

腕を通して伝わってくる暴力の感覚。

香奈は、尻餅をつき、鼻を押さえる。俺は、左ひじを振り切った回転力そのままに、受身すら取ることも出来ず、壇上に転がった。

「正臣、どうして分かってくれないのかな……」

香奈は、痛そうにする素振りも見せず、鼻を押さえたまま立ち上がる。

押さえた手の隙間からは、真っ赤な血が漏れ出していた。

あの感触は、どうやら鼻を直撃したらしい。

発狂しそうな痛みと、氷河期に突入したかのような寒さ。

俺はその二つを身にまといながら、何とか香奈から逃げ出そうとする。

「どうしたの正臣？ 私が怖いのか？」

鼻を押さえていた手を下ろして微笑む香奈。小さな鼻からは、想像以上のおびただしい量の血が垂れ流しになり、それは香奈の着ている制服に染みこんでいく。鼻が赤く腫れ上がっているところを見ると、鼻骨に異常があるのは明らかだった。

おそらく、骨折している。

「いくら怖がったところで、私たち二人は、これからずっと一緒なんだよ。どんなときでも二人で乗り越えなくちゃいけないんだよ。だから、正臣のわがままなら、私は許してあげられる。それが恋人だから。愛し合った二人に出来ることだから」

凄艶な笑み。天使と悪魔が混在したかのよう。

俺は、香奈の言葉を無視して壇上を転がり下りた。

蜘蛛の海に飛び込んでいく。

蜘蛛は他の生徒の解体に夢中になっているのか、波間をかき分けて進む俺には気がつかない。

「正臣を殺しちゃ駄目だよ」

演説台の上においてあるマイクを通して、体育館全体に香奈の声が拡張される。蜘蛛は、香奈の声が聞こえると、一斉に壇上にいる香奈を振り向き、その動きを止める。

独裁者の演説としてはふさわしくないかわいらしい声で、香奈は蜘蛛と化け物の群れに語りかけた。

「正臣は私のものなんだから」

香奈に感謝しなくてはならないだろう。

腹部に深手を負った俺は、いまや人並み以下の運動能力しかない。蜘蛛のすばい動きを回避することも、おそらく出来ない。

もし、香奈が蜘蛛に俺を無視するよう指示を出していなかったら、佐藤にたどり着く前に八つ裂きにされていたことは、疑いようがない。

「佐藤、大丈夫か？」

俺は天井から落下してから、全く動こうとしない佐藤を揺り動かす。両足は見事に骨折してしまっている。だが、人間はタフな生き物。この程度では命には別状はないはずだ。

「佐藤、帰ろう。ここには危険だ」

佐藤の体が震える。

俺の声に反応したようだった。

「……たすけ」

「ああ、助けるよ。絶対に助けてみせるよ。だから、佐藤、もう少し耐えてくれ」

佐藤の声が聞いたことで、俺は涙が出そうになる。全身に染み込んだ死への倦怠感が、少しずつ体から抜け出していくような感覚。

「タ……すけ……」

佐藤の声音が機械的なものに变化していく。

「……スケ……た」

俺はこの声に聞き覚えがある。

「タ……ス……け……」

佐藤を介抱しようとした俺を、見下ろすように立ち上がる。両足の骨折をもっとしないで立ち上がろうとした佐藤は、自重を支えることが出来ずに、仰向けに倒れてしまう。

佐藤の目が、透明な卵から孵るおたまじゃくしのように、白目の中で暴れだす。

人間が、こんな目の動きをさせることが出来るのだろうか。まるで瞳だけが別の生物であるかのように、激しく動き回っている。

すぐさま眼窩を飛び出して、俺に襲い掛かってきそうな勢いだ。

「そんな、佐藤……」

仰向けになったままの佐藤の口が大きく開かれた。

噴水のように、そこから微細な蜘蛛の群れが大量に出てくる。手のひらで握りつぶしてしまう大きさの蜘蛛の大群。

微細な蜘蛛は、俺を襲うでもなく、ましてや個別に行動するでもなく、佐藤の体にまとわりついていく。

透明な体から判断するに、それは生まれたての蜘蛛。

それぞれに透き通るような触手を口から出して、佐藤の肌に突き刺していく。

ストローで何かを吸い上げるような行為に似ていた。

触手の中を液体が通過しているのか、内部がわずかに蠢いている。蜘蛛の成長は顕著だった。

あつという間にその体を膨れ上がらせる。すぐに手のひらぐらいの大きさになると、佐藤の体に張り付いたまま、三つの瞳に光を灯す。

それが百匹以上。

養分を吸われたと思われる佐藤は、やせ細り、骨と皮だけになった。そんな佐藤に蜘蛛は群がり、表面を隠すように佐藤を覆っていく。

「スケ……す……た」

やがて佐藤の体は、一部分が膨れ上がったたり、へこんだりを繰り返し、どこか見覚えのある風体に変貌していった。

上半身が肥大し、下半身はやせ細ったままの、あの化け物。

俺と雫がやつのことで倒した、化学実験室の化け物。

全身に蜘蛛の鎧をまとい、怪力を駆使し、テーブルを根こそぎ持

ち上げ、あるいはその腕力で蜘蛛を投げつけた、あの化け物。

「佐藤、佐藤……佐藤！」

俺は蜘蛛に覆われた佐藤から、蜘蛛を引き剥がそうとすがりつく。香奈の命令を忠実に実行している蜘蛛と化け物は、そんな俺には見向きもしない。俺のなすがままにさせている。

今の脆弱な俺には、蜘蛛を剥がすことすら出来ない。

佐藤から、蜘蛛を取り除いてやることも出来ない。

苦しみから解放してやることも出来ない。

あまりにも無力だ。

俺は涙を流しながら、佐藤を覆った蜘蛛に手をかけた。蜘蛛は怒りをたたえたような赤い瞳を俺に向ける。

命令がなければ、今すぐにでもお前の臓物を引き出してやる。そんな憎悪をたぎらせた目だった。

「た……スケ」

佐藤が立ち上がる。

骨折していたはずの両足は元通りだ。蜘蛛の隙間からのぞく佐藤の目が、悲しげに揺れた気がした。

「佐藤、今、助けるから！　こんな蜘蛛なんか、俺が取り払ってやるから……！」

立ち上がった佐藤から蜘蛛を取り除こうと、手を伸ばし続ける。

「正臣、無駄だよ」

香奈の指示に従順な蜘蛛の群れは、俺にわしづかみにされようと、足をもぎられようと、烈火のような瞳で俺を凝視するだけで、攻撃を加えようとはしない。

「だから、もう少しだけ耐えてくれ……」

助けたい。

守りたい。

心にある意志はいまだに強い力で満ちているのに、蜘蛛を引き剥がそうとする力だけが弱まっていく。

「分かっているんだよね。正臣は」

香奈の声が体育館に響く。

壇上の演説台に設置されたマイクを通して聞こえるから、それはまるで天の声であるかのように耳に飛び込んでくる。

不可避の結果を思い知らされるように、目をそらすことの出来ない現実を見せるかのように。

「佐藤君は、もう死んでいるって」

ポケットから出したハンカチで丁寧に鼻血を拭う。

その何気ない仕草が、日常の一風景を思い出させる。

「たす……ケ？」

「手が止まりそうなのはそのせいだね？」

香奈は壇上にいるのに、まるで後ろから抱きすくめられているような感覚。

「泣いているのはそのせいだね？」

俺の傷口に手を差し込むように、俺の力を内側から根こそぎ奪おうとする嫌悪感。

「正臣は、自分が無力だつてことを自覚してる」

「タタ……すス……け」

「だから、正臣は知っている。佐藤君は助からない、助けられないつてことを。言葉では否定できても、心の中では理解しているんだよ。私達人間は、そうして生きてきたんだから」

蜘蛛に覆われた佐藤は、目でも回しているかのように、上半身を揺らしている。

「死を宣告された重病人に、あなたの病気はきつと良くなる、つて言うことと同じ。良くなるわけがないと心の奥底では理解しているのに、それを認めるのが嫌だから、言葉で否定するしかないんだよ」

「けケ……タス……け……」

「第一、侵入されたら、脳を直接、その子達の触手でいじられちゃうから、たとえその子達を引き剥がしたとしても、脳は壊れちゃったままなんだよ？ 養分も常に吸われることになるから、体も駄目になるし」

学会で研究結果を発表するかのように、淡々と結果だけを、躊躇いもなく述べていく。

「何より、佐藤君の体の中はもう空っぽだし。……そうだ」

良案でも浮かんだのか、香奈は手をたたいて、笑顔を浮かべる。

「正臣に分かりやすいように見せてあげて」

香奈の声を受けた蜘蛛は、拘束から解放された喜びか、一斉に佐藤の体に足を突き刺していく。

ぶすり、ぶすり、と佐藤の服の上から長い足が突き刺さっていく。豆腐に包丁を突き刺すように、蜘蛛の足は、簡単に佐藤の体内に入り込んでいった。

ビニール袋に入れた満杯の水。

そこに針を幾度も、色々な方向から突き刺すと、シャワーのように周囲から水が漏れる。

「スケ……タ……す」

目の前で起こっている光景が、まさにそれだった。

佐藤の体を開いたいくつもの風穴から、赤い血が漏れ出している。

「やめてくれ……もう、やめてくれ……」

俺の懇願も空しく、次々に獲物に群がる蜘蛛は、真つ赤な塔のように積み重なっていく。その中に佐藤がいるとは思えない。

だが、蜘蛛が蠢く隙間から、佐藤の血が流れ出していることから、そこに佐藤がいるということが分かった。

「もうそろそろいいかな？」

香奈の声に従順な蜘蛛は、波が引くように佐藤から離れていく。後に残ったのは、上半身と下半身を離れ離れにされた佐藤だった。

人間の営みに欠かせない五臓六腑が、香奈の宣言通り、ごっそり消え去ってしまっている。

「タスケ……」

それでも佐藤は、空っぽの体でほく前進している。
俺に助けを請うように近づいてくる。

「ね？ 見て分かるじゃない。佐藤君はもう死んでいるんだよ。ころうじて生かされているだけ。この子達が養分を残らず吸い取ってしまえば、後は廃棄されるだけの物体」

佐藤が俺に右手を伸ばす。

吐血しながら、苦しそうに俺を求めている。

人差し指と、中指がなくなってしまった右手で、必死に俺をつかもうとしている。

「心が痛いんだよね。正臣の気持ちが手に取るように分かるよ。誰にでも優しい正臣だから、思いやりのある正臣だから、苦しいんだよね」

淡々と事実だけを述べる香奈の声が、一転して優しい声に変わる。

「……ねえ、正臣。正臣は、もう無理しなくていいの。他人に優しくしてしまうから、みんな優しくすぎる正臣に無理を強いるようになる。正臣には、出来ることと出来ないことがあるんだから、どこかでそれらを割り切らないと生きていけないんだよ」

香奈の甘言によって輪郭付けられた幻想が、俺に手を差し伸べてくる。

「正臣が背負っている苦しみも、割り切ってしまえば、すぐに楽になる。正臣はそれが出来る人間だって、私、信じてるよ」

佐藤の手が、俺の血に染まったシャツをつかむ。

俺はその手をとって、佐藤を見つめる。

半身を失った今も、俺のシャツをつかみ、何かを訴えようとしている佐藤。それは蜘蛛の意思によるものなのか、佐藤の意思によるものなのか、判別はつかない。

だが俺は、それが佐藤の意思によるものだと思いたかった。

第四十話・「これが最後だよ」

「俺のせいだ。佐藤がこうなってしまったのも、加藤さんや、夏美を失ってしまったのも」

通り過ぎていった、過去の情景。

佐藤の冷たい手を握りながら、俺の感情は、繰り返してきた過ちを追体験していく。

自分の犯してきた過ちを忘れないように、一生かかっても償う決意をするように。

「正臣……」

落胆の色を隠せない香奈は、俺の名前にため息を混ぜる。

「だからって、俺はそれを割り切ることなんて出来ない。俺が犯した罪は、どんなに時間が経過しようと、消えない。……けど、人間は償うことの出来る生き物だから」

「……夕……す……ケ」

佐藤の動作が鈍くなっていく。

体を引き裂かれ、上半身のみになった佐藤の生命活動は、いくら蜘蛛によって引き延ばされているとはいえ、限界があるようだった。香奈が言った通り、佐藤の生命は、内部に巢食った蜘蛛によって吸われ続けているのだろう。

その生命が、もうすぐ枯渇しようとしている。

「何度でも言うよ。香奈……俺は、お前にも償わなくちゃいけないんだ」

俺のシャツをつかんでいた佐藤の握力が失われて、床に落ちる。
佐藤の瞳を、そつとまぶたの裏に隠してやると、佐藤はまるで眠りについたように穏やかな寝顔になる。

「私に償うことなんてないよ。私は割り切っているから。正臣がしてきたことは全部許すよ」

佐藤の最後の表情を看取り、俺は立ち上がる。

「香奈、俺たちは間違っていたんだ。ようやく気がつくことが出来た。だから、これから二人で間違いを直して、全てを償って生きていこう。もう一度、和輝と三人で……馬鹿みたいに笑っていた頃に戻って、やり直そう」

なぜだろう。

俺と和輝、そして香奈。

三人でいた頃を思い出すと、微笑みが止まらない。昨日までは当たり前のように享受してきた時間なのに、もうだいぶ昔のことにように思える。

それがとても不思議だった。

「私は、正臣の過去になんかならないよ。私はずっと現在と未来を生きていくの。正臣と二人で」

「ごめん、香奈。俺は、そういう生き方は出来ない」

要領の悪い、損得勘定で言ったら圧倒的に損が多い、不器用な生

き方。

そんな生き方でも正しいと思えるから、俺は首を横に振る。

「どうして……？」

演説台の横に歩み出た香奈の拳が、限界まで握り締められている。

「過去があるから、今がある。今があるから、未来がある。俺たちは、過去があるからこそ生きていけるんだ。償うからこそ、一步を踏み出せるんだ」

「もういい！」

香奈が握り締めた拳を振り払うと、マイクに直撃した。

「そんな奇麗事ばかり言って、私を困らせないでよ！」

殴り飛ばしたマイクは、壇上に激しく転がる。

鼓膜を破らんばかりのハウリングが、体育館中に響き渡った。

「偽善的だと言われてもいい。奇麗事だと罵られてもいい。それが東城正臣だから。香奈……俺はお前に、それを分かって欲しい」

俺の必死の説得に、香奈は表情を前髪で隠す。

「……正臣、これが最後だよ」

穏やかさを装った口調。

「割り切って」

「……ごめん。それは出来ない」

前髪によって隠された香奈の瞳から、涙が流れた。

次々と頬を伝い、壇上にこぼれていく。雫とキスをしてしまったときと同じ、いや、それ以上の涙が、滂沱として流れていた。

「好きなのに……愛しているのに……正臣は私を過去にするんだね。だったら私」

顔を上げた香奈は、微笑みながら泣いていた。

「正臣を割り切るしかないじゃない」

涙はとどまることを知らない。

「正臣が心の中にいたら、私を苦しめるに決まっているから。ごめんね、正臣。愛しているけど、割り切るよ」

涙を拭うこともせずに、流れるまま。

「それが私の生き方だから」

瞬間、笑みの色が変わる。慈愛から、狂気へ。

「香奈！」

最悪の方向に向かいつつあることを察した俺は、あらん限りの声を振り絞る。

香奈を引き戻したい。その思いを一心に込めて。

「ごめんね、みんな。我慢していたんだよね。好きにしていよいよ」

歌い上げるように、香奈は体育館中に声を響かせた。

蜘蛛の動きが活発化する。待ってましたと言わんばかりに、足を鳴らして体を揺らす。

穏やかだった海が、一気に荒波へと変貌した。

「でもね、正臣は特別。あの子が食べてくれるよ」

体育館の一角が、切り取られるようにゆらりと動き出した。

「私が持ってきた最初の子供。最初は手のひらぐらいしかなかったのに、あんなに大きくなったんだよ」

華菜の指し示した先には、見たことも無いような巨大な生物がいる。

ありていに言えば、それは巨大な蜘蛛だ。

体育館の隅、天井に張り付いたまま動かなかったから、今の今まで気がつくことができなかった。

それ以前に、体育館中を照らし続けている大小さまざまな蜘蛛の群れや、化け物に張り付いて離れない蜘蛛の赤目のまぶしさに見失っていた、と言ったほうが適切か。

「ここにいる全ての子供達はね、みんなあの子から生まれたんだよ。基本的には、蟻と一緒になのかな。一匹の女王蟻から、兵隊蟻や、働き蟻が生まれるような感じ」

天井から床に落ちてくる巨大な蜘蛛。体を反転させて、見事に着地する。

八本の足で貫かれた体育館の床は、板が割れて真っ二つになり、ぎりぎりのところで蜘蛛の体重を支えていた。

「私は研究者じゃないから、詳しいことは知らないけど、この子供達は最高の命令系統を持っているみたいなの。誰もが、きちんと女王つまり、あの一番初めに放った蜘蛛に従ってる。それに、あの子ですら私に従うんだから。きっとヒエラルキーがしっかりしているんだと思う」

巨体を揺らして、身にまとった蜘蛛を振り落とすと、体の様子はつきりと見て取れる。

それは、蜘蛛と形容するにはあまりにもおぞましい姿だった。

「だから正臣も、抵抗するのはやめたほうがいいよ。無駄だから」

頭部には、他の蜘蛛と同様、赤く光る巨大な三つの目が、爛々と輝く。

だが、それは目であって目ではない。何百という目の集合体だった。

各々が、死角を補うかのように八方をぐるぐると監視している。まるで、春の野に、群生して生えるつくしだ。

「あの子に正臣が食べられることで、きつと正臣への恋心は終わる

と思うの。だって、あの子のおかげで、正臣と想いを通じ合わせるきっかけが出来たんだから」

胴体は堅牢な骨格で守られている。周囲を取り巻く蜘蛛の赤い光を反射して、黒光りしていた。

「物語の始まりと終わりは、同じほうがいいよね」

おぞましいのは、頭部と胴体だけではない。

最もおぞましいものは、腹部にあった。

透き通るような腹部。その中には、どろどろに溶け出した生徒達が蠢いている。パンクしてしまいそうなほど人で敷き詰められた腹中には、オレンジ色の液体が満ちていて、見るからに消化液と分かる。

ゴムのように伸縮性のある腹部。

苦しむ生徒たちが内側から腹を押すと、その分だけ外に伸びる。

破ることの出来ない腹部の粘膜。蜘蛛はそれを痛がりもせず、重そうに腹部を揺らしている。

遮音性はないようで、腹部からは生徒の苦悶の声が、絶え間の無い念仏のように響いてきた。

足元から這い上がってくる恐怖。

助けを求めるような生徒たちの視線。

亡者の群れのように、それは俺を喰らい尽くそうとする。

一番手前にいる男子生徒は、頭の毛が抜け落ち、白い頭蓋の半分が見えてしまっている。

その上から覆いかぶさるようにしている女子生徒は、体の半分以上が白骨化してしまって、すでに意識もないようだった。

女子生徒の眼窩からこぼれだした寒天質の眼球が、かろうじて視

神経とつながっているのが確認できる。

「怖がることは無いよ。みんなと一緒になんだから」

肌がただれ、骨が見え、髪の毛が散らばる。

助けを求める生徒達が必死にもがくせいで、内部に浮かぶ肝臓がかき混ぜられ、心臓が握り潰される。腹部から飛び出した腸が、紐のように絡みつき、生徒たちをがんじがらめにした。

我先に助けを求めようと、押し合い圧し合いを始めると、消化液で弱体化させられているせいか、腕が簡単にへし折れる。

引つ張られた足は、おもちゃのように胴体から引き抜かれ、踏みつけられた頭蓋は、熟した柿を踏み潰したように、中から脳味噌が飛び出す。

生徒が口から吐き出した吐瀉物は、消化液と混ざり合い、色を変えた。

そこにあるのは、一瞬の死ではなく、緩慢な死。

自らが腐乱していく姿を見ながら、精神と肉体の両方を痛めつけられる。

すぐには死ねず、意識が保てなくなるまで激痛を、絶望を味わい続けなくてはならない。

地獄絵図。

俺の頭にその言葉が浮かんだとき、俺は胃からこみ上げるものに

耐え切れず、その場に嘔吐した。

朝、胃に何も入れてこなかったのが、せめてもの救いだっただけが、唾液と混ざり合って床に落ちる。

口の中を酸味が駆け巡った。

「なんで……こんな……」

「仕方のないことなんだよ」

蜘蛛の目だけではなく、巨大な蜘蛛の腹部にいる生徒たちの目までもが、俺を凝視する。

嫉妬と憎悪をない交ぜにした視線。

なぜ、俺達、私達と同じ苦しみを受けずに済んでいるんだ、と。

早く助ける、と。

同じ目に遭え、と。

「これは決まったことなの。私たちの意志の及ばないところで決められた計画」

遠い目で、どこを見るでもなく中空を見つめる香奈。

「偶然にも、その候補地として私たちの町が拳がり、結果的に選出されてしまった。ただ、それだけ」

香奈の言う、ただそれだけで、目の前にいる生徒たちは苦しんでいる。蜘蛛の中で溶解していく。

「私達の町の外では、今も普通に人々が暮らしている。誰もが平和を当たり前のように享受し、テレビに映る悲惨な状況を、他人事のように眺めている」

一人、また一人と、蜘蛛の中で蠢く生徒の数が減っていく。香奈の一方的な述懐を耳にしている間にも、目の前で消えていく生命がある。

あまりにも残酷に、あまりにもあっけなく。

「仕方が無いの。こうなってしまったことは。運が悪かったと、割り切るしかないんだよ」

言い終わると同時に、香奈のポケットが震え、淡い紫色の光が点滅する。

ポケットに手を入れて携帯電話を取り出すと、香奈は当たり前のように通話ボタンを押した。

「はい、香奈です。……大丈夫です。私は心配ありません」

俺から外した視線を、壇上に落として電話の向こうの何者かと会話する。いつもの香奈ではない、事務的な口調。

「……はい。タイムスケジュールもこれといって狂いはありません。メールでやり取りした、私を含めた二名の脱出予定ですが……」

壇上に落ちていた視線が、再び俺を捕らえた。

「当初の予定通り、私だけで構いません。もう割り切ることに決めましたから」

香奈が俺を見据えて断言した 刹那。

高速で飛来した一線が、香奈の携帯電話を貫いていた。

「弓道部の部長だけあって、さすがにいいもの使ってるわ」

彼女　睦月雫は、不敵に笑った。

第四十一話・「馬鹿な女！」

香奈は驚いたように右手を確認するが、どうやら携帯電話だけを撃ち抜いたようだ。

携帯電話を貫いた一線は、さらに香奈の背後にあつた集会用の大きな花瓶をも撃ち抜いていた。

割れた花瓶からは大量の水がこぼれ、壇上に付着した俺の血を洗い流す。

「最高級のカーボンファイバー製、きつと十万はくだらないわね」

壇上に横たわる萎れた花。

「弓具に金がかかる弓道って、だから好きになれないのよ」

そのそばに落ちているのは、一本の矢。

「『スクール・オブ・ザ・デッド』の地域担当者、中井香奈。やっと、正体を現したわね。やっぱりアンタが、この事件の元凶」

壇上から見て最奥の入り口。

開け放ったドアの向こうには、月光を一身に浴びた雫が、右手に弓を携えて立っていた。

足元には黒いボストンバッグ。

「アンタの携帯電話だけが使えるのも、地域担当者だって事の決定的な証拠ね。周囲の状況に左右されない最新機種？」

馬鹿にするような口調は健在だ。

「睦月さん……。生きていたんだ」

香奈の声は俺と会話するときのものではない、冷徹なものに変わる。

「死ぬわけないでしょ。私を誰だと思ってるの？ 睦月雫よ」

ボストンバッグを肩に提げながら、俺のほうに大股で近付いてくる。

蜘蛛は香奈の指示もあつてか、襲い掛かる素振りは見せず、雫の放つ異様な自信を警戒しているようだった。

巨大な蜘蛛でさえも、香奈の前面に移動しつつ、雫の動向を探っていた。

「正臣、私が言ったこと覚えているわよね？」

俺の傍にボストンバッグを下ろすと、重量感のある音がした。

「私達の中に犯人がいるって言ったときのことを。アンタはそれを否定した。でも、現実とは違ってたわ。この女が犯人で、佐藤も殺された」

俺の傍で眠る佐藤の亡骸に、一瞬だけ視線をくれる。

「覚悟を決めろって、私は言ったはずよ。でないと、アンタ自身が死ぬってね」

言葉だけを刃物のように俺に突きつけながらも、雫は両肘を曲げ、親指を腰骨に当てて、ひじを張る。

弓道で言うところの、執弓の姿勢。

「……ま、私がいる限り、そんなことにはならないけど」

まるで熟練者のように、スムーズに一連の動作　射法八節を行っていく。

足踏み、胴造り、弓構え、打起し、引分け。

蜘蛛に周囲を塞がれ、いつ襲われても不思議ではない極限の状況下で、雫は明鏡止水の境地に至る。

狼狽することも無く、ただ大きく息を吸い込み、吐き出しながら、ゆっくりと自らを高みに持っていく。

「動かないで！」

会。

引き分けた状態、つまり、矢を引き絞ったままの状態を保ち続ける。

その指を離すだけで、矢は一閃と化すだろう。

「蜘蛛に命令した瞬間、アンタの額を射抜くわよ」

「私を殺した瞬間、正臣は蜘蛛に食べられちゃうよ」

香奈の携帯電話を、寸分の狂い無く撃ち抜いた雫の腕だ。はったりではないだろう。

しかし、香奈も負けてはいない。

俺を人質のようにすることで、雫の苦渋の表情を引き出した。

互いに譲れない一触即発。

平行線をたどると思われた膠着状態は、香奈の意外な言葉によって破られる。

「……けど、もう食べていいよ」
「馬鹿な女！」

離れ 残心。

そうして、射法八節は終わりを告げた。

第四十二話・「さよなら」

唸りをあげる矢。

一条の煌きが、血生臭い体育館を切り裂いていく。

俺はそれを見送ることしか出来ない。

高速で射出された矢は、間違いなく香奈の眉間を貫くだろう。
俺に、それを止める術はない。

「……面倒ね」

雫の舌打ちが聞こえる。

矢は、巨大な蜘蛛の足によって、方向を変えられていた。

香奈はそれを見越して、大胆な発言をしたようだった。

弾かれた矢は、演説台に突き刺さり、矢尻が振動している。

口の端を持ち上げて、舞台袖に歩いていく香奈。

「待ちなさいよ！」

香奈は巨大な蜘蛛に守られながら、悠々と歩いていく。

雫はそんな香奈の余裕が許せなかったのか、素早く次の矢を取り出して、香奈を射る。射法八節を極端に省略したにもかかわらず、雫の射的は正確だった。

だが、それも一本目と同じように、巨大な蜘蛛の足によってさえぎられてしまう。

「さよなら。大好きだったよ。正臣」

その言葉を残して、髪の毛が流れるように舞台袖へ消えた。

「ムカつく女……！」

それが蜘蛛の怒りに触れたのだろうか。

地団駄を踏む雫に、巨大な蜘蛛の足が振り下ろされる。

紙一重とはまさにこのこと。

蜘蛛の足によって切れた雫の髪の毛が、ふわりと体育館に舞う。

床板に突き刺さった足を引き抜きながら、横回転で逃れた雫を正面に捕らえる蜘蛛。

「正臣！ ポストンバッグ！ 矢！」

名詞だけの指示が飛ぶ。

俺は急いでポストンバッグのファスナーを開ける。中には、各種運動部室から奪ってきたものと思われるスポーツ用品が、ぎっしり詰まっていた。

欧米ならば、ここには銃が詰まっているところだろう。

そうでないところが、ここ日本という国だ。

俺は痛む腹部を左手でかばいながら、右手で矢を握り締め、雫に投げ渡した。

蜘蛛はそれを確認していたのだろう。

何百という小さい目の集合体である赤い眼球が、俺と雫を同時にとらえていた。

蜘蛛は素早く俺と雫の中間地点に体を滑り込ませ、自らの体で矢の受け渡しを阻止した。

無情にも床に転がる矢。

蜘蛛の想像以上に機敏な動きが、俺を翻弄した。

俺のほうに向けられた腹部には、生徒たちの亡骸が詰まっている。慣性の法則に従うように、腹部の中の生徒たちがもみくちゃにされ、

引きちぎれた頭部が、腹中で攪拌される。

俺は吐き気を覚えながらも、次の矢を、今度は雫とは関係のない方向に投げる。

それを見た雫は不敵に笑い、弓を持っていないほうの手の親指を立てて見せた。

雫は走りながら矢をキャッチしようと動き出す。

やはり、巨大な蜘蛛に死角はないようだった。

ぐるぐると赤い目を周囲にめぐらし、状況判断。サッカーで言うところのスループラスであると判断したのか、俺の投げた矢を再び阻止しようと体を入れてくる。

「フエイクよ」

動き出したはずの雫の足は、踏み出しの第一歩で終わっていた。

雫の本命は、最初に阻止されたほうの矢。

ここで生きてくるのは、個体差。

いくら蜘蛛が機敏に動こうとも、それは巨大な蜘蛛のレベルでの話。人間でもずば抜けた運動神経を誇る雫の相手ではない。

雫は方向転換し、転がりながら、最初に俺が投げた矢をつかむ。相変わらずのそののなさ。

一つの行動で二つの物事を達することが出来る妙技は、すでに達人の域だ。戦闘訓練など満足に受けられる国ではないのに、このサバイバビリティーは目を疑うばかりだ。

弓を引き絞る雫に、射法は存在しない。

ひざを立てたまま、弓を床と平行にし、矢を放つ。

一直線の軌跡を描いて、蜘蛛の目に命中する。

「ゲームだと、目が弱点つてのが相場なんだけど」

額を滑り落ちる汗が、ゲームと現実を分ける。

何百もある目のうちの一つを潰したぐらいでは、蜘蛛はひるまなかった。猛牛のごとく、残心の姿勢を保ったままの雫に突進していく。

体育館が揺れた。

雫は横つ飛びで突進を回避しようとするが、完全に回避することは出来なかった。蜘蛛の巨大さを物語るには十分な光景だ。蜘蛛の突進をかわそうと横に飛んでも、蜘蛛の攻撃範囲からは逃れられない。蜘蛛の左足の前に飛び出す形になってしまう。

一本目は右。

二本目は左。

三本目も左。

四本目も左。

四本の足を、右に左に体をひねりながら難を逃れていたが、最後の左方向になぎ払われた足の直撃を受けてしまう。カーボン製の弓で防御するも、極限までしなってしまう弓では、防御の限界が生ずる。

よって、いなすことは不可能。

雫は衝撃によって、周囲で静かに観戦するばかりの赤い観衆に、飛び込まざるを得なかった。

「雫！」

叫び声をあげる。

感覚のない足を叱咤して、雫に駆け寄ろうとする。

……が、巨大な蜘蛛の足によって阻まれてしまって、前進できなくなる。

とつさに後方に倒れた俺の股の間に、蜘蛛の足は突き刺さっていた。床板が外れ、俺は滑り落ちそうになる。蜘蛛の足を蹴って、なんとか距離を開けると、俺はポストンバッグに手をつ込んだ。

蜘蛛の動向を終始気にしながら、ポストンバッグを探る俺の手に、

グリップのような感触。

俺はくじでも引くような感覚で、ボストンバッグから獲物を引き出した。

「テニスラケットって……」

突き出される蜘蛛の足。それはまさに巨大な杭だ。

俺は顔を隠すようにラケットを構えるが、それはあまりにも無謀。ガット越しに、蜘蛛の爪先が接近してくるのを見せ付けられ、俺は恐怖のあまり地面に転がるしかない。

蜘蛛の足は、容易にガットを貫いていた。

自分の顔面に穴が空く様子を想像してしまい、背筋が凍る。

繰り出されるのは、足だけではない。蜘蛛の口から大量に伸びる触手。それは小型の蜘蛛と同様だが、巨大な蜘蛛の口から出てきたそれは、小型のそれをそのまま縮尺どおりに拡大したもの。ゆえに、触手の一本一本が、消防車についているホース並みの太さだ。

ガトリングガンさながらに、次々と繰り出される突きの嵐。

体育館の床には、切り取り線のような穴が開いていき、俺の体中をかすめていく。

シャツが、ズボンが切り裂かれ、俺は命すら切り裂かれる感覚だった。

よく直撃を受けなかったと、自分の底力に感謝する。

腹部の痛みは、すでに俺の中の日常と化した。

茫洋とする頭を振れば、何とか足は動いてくれる。全力をイメージすれば、一歩だけは動いてくれる。

それが、俺の命をつなぎとめていた。

視界が白く曇り出し、赤い光だけがはっきりと見える。

俺はそれを頼りに、体を反応させているだけ。まるで赤子のように

に、目に映るものを信じるだけ。

「巨大化は、戦隊物のお約束ね」

ボストンバックの傍に仁王立ちする雫。

破れたシャツの隙間からは、白い柔肌が傷ついているのが見える。剥がれ落ちそうな湿布を鬱陶しそうに引き剥がすと、蜘蛛に向き直った。

右手には、剣道部素振り用の木刀。

左手には、野球部素振り用のマスコットバット。

背後には、弓が突き刺さった化け物が倒れている。

生徒の顔面を貫いた弓からは、内部に巢食っていたと思われる蜘蛛の体液が漏れ出して、生徒の血液と混ざり合っている。弦はすでに切れてしまつて、弓としての役目を果たすことは出来ないようだ。挑戦的に微笑む雫に、蜘蛛は狙いを定める。

同属を殺された恨みだろうか。さつきよりも増して、目が赤く輝いているように見える巨大な蜘蛛。

最初に放たれた蜘蛛だけに、周囲で静観する蜘蛛の群れは、全て巨大な蜘蛛の子供と言える。

その恨みを晴らそうというのであろうか。

「巨大化した化け物が」

蜘蛛の攻撃は、止むことを知らない。

足を横に薙いだかと思えば、空中からは触手の雨あられ。

雫は横薙ぎにされた足をジャンプ一番で飛び越えた。

「主人公に勝てないってのは」

短いスカートが翻る。

「定説なのよ！」

背中をかすめる蜘蛛の触手をかいくぐり、懐にもぐりこむ。

両手に持った二つの獲物が、巨大な蜘蛛に牙を剥く。

懐にもぐりこんだ雫の脅威を察知したのか、周囲で静観していたはずの化け物が、自発的に雫を迎撃する。雫は木刀を巨大な蜘蛛の腹部に突き入れる一方で、襲ってきた化け物を、左手で持ったマスコットバットでなぎ払う。

蜘蛛の悲痛な咆哮が、体育館を揺らす。

天井に吊るされた繭が、左右に揺れるほどの大音量。

雫は腹部に突き刺した木刀を抜き取る。

予期していなかったのか、消化液が溢れ出して、雫の腕にかかってしまう。

雫の白い腕から、湯気が立ち上る。

蒸発する雫の肌。

雫はそれでも木刀を取り落とさない。歯を食いしばって、再び蜘蛛の腹部に木刀を突き入れる。

雫の白い肌が焼けただれて、赤く染め上がる。

「くそ………！」

俺は歩くようなスピードで、雫に接近するのがやっとだ。

「雫………雫！」

俺の声が雫に届いたのかは分からない。

だが、雫は俺と視線が合うと、強がるように笑って見せる。

蜘蛛は漏れ出す消化液を止めることも出来ずに、体を身震いさせた。雫の周囲に消化液が飛び散ると、化け物ともども、白い煙が煙幕のように広がる。

蜘蛛の鎧をまとった化け物も、蜘蛛ごと溶け始めた。赤い目は力を失って黒く染まり、蜘蛛の足は途中から溶けて、脆くも折れてしまふ。

消化力のすさまじさは、見ていだけで分かる。

雫は化け物を盾にしながら逃れようとするが、髪の毛に付着した消化液は、雫の美しい髪の毛を溶かしてしまう。

雫が身を翻した瞬間、髪の毛は大量に分断され、雫は短髪になった。

マスコットバットが、化け物の横っ面を叩く。

頬骨を折られた化け物は、滝のように流れる消化液の真下に転がり、あっという間に溶けていった。

バットを振り切った雫の背中が見える。

何よりも美しい雫の背中。

どんな美術品も及ばない美麗な背筋は、今はそこにはない。

背中に浴びた消化液で、制服はとうの昔に溶けてしまっている。

ブラジャーの下に貼った湿布も、すでに溶けてなくなっている。当然、ブラジャーも、ホックごと溶けてしまっていて、かろうじて肩の部分でぶら下がっているだけだ。

だが、その肩の部分でさえも、飛んできた消化液によって溶かされ、ブラジャーは雫から外れて床に落ちた。それは体当たりしてきた化け物によって踏み潰され、振り返ちにされた蜘蛛の体液で汚れた。

栗の背中は、見ていられないほど真っ赤にただれている。

汚された芸術品ほど、惨たらしく、無残なものはない。
栗は、それでも叫ぶ俺と視線を合わせ、そして、笑む。

私は大丈夫。

読唇術を学んでいない俺でも分かるように、栗は大げさに口を動かした。

第四十三話・「俺は助けたいんだ……！」

駆け寄りたい。

助太刀したい。

雫を守りたい。

思えど、願えど、俺の体は意思についていけない。

肩にのしかかってきた化け物によって、雫が床に押し倒される。

雫は頬を強張らせながら敵の腹を蹴り上げると、空中に浮く化け物をバットで振り抜いた。

化け物は縦回転しながら、巨大な蜘蛛の懷から飛び出して、加勢に向かおうとする蜘蛛に激突する。

片手でバットを振るといふ荒業を披露しながら、もう一方の手に持った木刀で、さらに蜘蛛の腹を突き上げる。

更なる蜘蛛の悲鳴が轟く。

身を切るような思いをしてまで、雫は戦い続けている。

腹部の怪我さえなかったら。

怪我がもつと浅かったなら。

出血さえしていなければ。

雫の背中を守ってあげられたかもしれない。

あの馬鹿にしたような皮肉を、そばで聞いてあげられたかもしれない。

自信満々の表情を、間近で見ることが出来たかもしれない。

「動けよ……俺は助けたいんだ……！」

まともに動いてくれない足。

まともに見ることさえ出来ない視界。

馬鹿。なんで泣いてんのよ。

雫は戦闘中なのにもかかわらず、口だけを動かして俺を馬鹿にする。

滝のように漏れ出し続ける消化液の袂で、雫は縦横無尽に駆け回る。

刺していない箇所を探し、そこに木刀を突き刺す。木刀も、ボストンバッグから取り出したときの半分の細さになってしまっている。雫は、マスコットバットを防御に回し、木刀を攻撃に回していた。

見事に作戦が成功する理由。

それは、自分の体が傷つくのを厭わない、神風的な行動が故だ。

巨大な蜘蛛も、それをやっと理解したのか、はたまた、化け物や小型の蜘蛛に任せておけなくなったのか、口から吐き出した触手で雫をけん制しつつ、体を回転させて、雫から腹部を遠ざけようとする。

口から吐き出した触手が、雫の足元に襲い掛かった。

捨て身の攻撃であることは、雫も分かっているようだった。

簡単によけられるはずの触手の攻撃をよけずに、腹部に木刀を突き刺すことに専念している。

力を失いつつある巨大な蜘蛛は、最後の力を振り絞るように、触手を雫の足に巻きつかせた。

人間の腕ほどの太さの触手が、消化液を浴びた雫の右足を締め上げる。

雫の表情が、今までに見たこともないほど歪んだ。

強大な力が、右足を締め上げる。

まるで細い枝でもへし折るかのように、雫の足は潰れていった。

それでも、雫は鬼の形相でそれを耐え、さらに腹部に木刀を突き刺そうとする。

しかし、木刀はついに耐久力を失い、真っ二つに折れ、床に転がった。

雫はすぐさま木刀を投げ捨てて、マスコットバットを両手で握り締める。

「ふざけるんじゃないわよ」

フルスイングのバットが直撃した先は、雫自身の足。

消火ホースのように太い触手が、千切れ飛ぶ。それに伴って、右足を解放された雫が、支えを失って倒れこんだ。

好機と見てか、取り囲んでいた蜘蛛が、雫に押し寄せる。

潰された右足をだらしなく床に伸ばしながら、雫は残った両手と左足で、蜘蛛を撃退していく。

右足の至る所から、深紅の液体が流れ出している。

複雑骨折では済みそうにない重症。

左足で微妙に位置を変えながら、体勢を維持し、小型の蜘蛛を血祭りにあげていく雫。

……だが、そこまでだった。

小型の蜘蛛は撃退できても、進化を遂げた化け物に対抗する手段はない。蜘蛛に寄生された生徒の瞳が、妖しく輝く。

ショートカットになってしまった雫の頭部に、膨張した拳が振り下ろされるのが見えた。

雫は背後に迫っていた化け物に気がつく様子はなく、完全な直撃を受けてしまう。

雫の体が、頭から吹き飛ばされて、床を滑っていく。

「調子に……乗って……！」

殴り飛ばされた先も、最悪だった。

背中から足が生えた化け物の口元に、雫はいる。

雫はそのことに気がつく、自嘲気味に笑った。

……自分の運命を呪うように。

化け物の口が大きく開かれる。

背中から足が生えていることを除けば、俺が今日初めて出会った化け物、生徒指導の教師に似ている化け物だった。

生徒の口の端が裂けて、血が滴る。

これから訪れるであろう最悪の結果に、俺は目をつぶることしか出来ない。

化け物の口が、雫の喉元を強引に噛み千切った。

雫の喉から鮮血がほとばしり、生徒が新鮮な血を満足そうにする。

雫は力を失ってぐったりとなり、右手に握り締められたマスケットバットが、持ち主を失って床に寂しく転がる……。

俺は、そんな錯覚を見た。

俺が目を開けると、化け物は顔面に強烈な一撃を受けて、仰向けに転がっていた。

ハンマー投げの、回転力を込めた一撃を受けては、化け物といえど、起き上がるのは無理だろう。

「 追いつくって言ったろ？ 親友」

錯覚は、懐かしい声によって吹き飛ばされた。

第四十四話・「和輝」

「私一人でも……十分」

右足を引きずりながら、和輝への開口一番、強がって見せる雫。

「そう言ってもらえると、俺としても心強いよ」

和輝が手を伸ばすと、雫は右足をかばいながら、手をとって立ち上がる。

鉄球を浴びた化け物は、顔面が陥没していて、もはや虫の息だ。

「私を潰すかもしれないって、考えなかったの？」

「正臣を助けることで、頭がいつぱいだったから」

「それなら納得してあげるわ」

ボストンバッグは遠くで逆さまにされていた。

どうやら、和輝が慌てて武器を探したと思われる。俺は雫のピンチに意識が釘付けになっていて、それに気がつくことが出来なかったようだ。

和輝は雫の腕を取ったまま、巨大な蜘蛛の腹部から抜け出そうとする。だが、蜘蛛はそれを阻止する。

顔面が陥没した化け物を飛び越え、小型の蜘蛛が二匹、和輝に飛びかかった。雫は立ち上がって早々に舌打ちし、和輝を突き飛ばす。和輝は蜘蛛に気がついていなかったようで、突き飛ばされることで、かろうじて危機を脱する。

雫と和輝の真ん中を、蜘蛛が通過していく。

「アンタも、結構頑張ってきたのね」

マスコットバットを杖代わりに、右足を支えて和輝の顔をまじまじと見つめる。和輝の左目は塞がれていた。額から頬にかけて、鋭利な刃物で切り裂かれたかのようなうだ。

「約束したからさ。その代償つてところかな……」

「アンタのそういうところ、アイツと一緒にね。悪くないわ」

腹部を幾度となく突かれ、その度に雄たけびを上げる蜘蛛が、大きく飛び上がった。化け物が実験テーブルを放り投げるのを見たことはあったが、よもやこれほどの質量が空中に飛び上がるとは思っても見なかった。

消化液を振りまきながら、化け物は俺と雫の中間に着地した。

蜘蛛は全神経を俺に集中させているようだった。赤く輝く目、その全てが俺を凝視している。

そのあまりの異様さに、俺は身動きをとることが出来ない。

「正臣！」

二人の声が重なる。

まず飛び出したのは和輝。

ハンマー投げの鉄球を鎖で引きずりながら、巨大な蜘蛛に突進する。そして大きく振りかぶると、一回転。

丸太のような足を、俺に向かって振り上げる蜘蛛の背後に接近する。

蜘蛛が、俺に足を振り下ろすのが早いのか。

和輝が、蜘蛛を攻撃するのが早いのか。

その勝負は、和輝の勝利に終わった。

一回転、二回転、三回転。

左足を軸にして体を回転させ、遠心力を鉄球に付加させる。

模したのは、典型的なハンマー投げのフォーム。陸上部のそれとは比べ物にならないほど幼稚な回転ではあるが、ハンマーに加えられた力は多大なものだ。

和輝はハンマーを手放さずに、蜘蛛の後ろ足に鉄球を叩きつける。さすがの蜘蛛の足も、鉄球の攻撃力には耐えられなかったようだった。

亀裂が入って、体液が漏れ出す蜘蛛の足。赤い体液を、岩間から湧く水のように滴らせ、巨大な蜘蛛はバランスを崩した。

結果的に、それが俺を救うことになった。バランスを崩しながらも、俺を破砕しようと振り上げられた足。それは俺を破砕することなく、俺の横から襲おうとしていた化け物を潰すこととなった。

化け物の胴体に大きな風穴が開く。

化け物は巨大な蜘蛛の足から抜け出そうともがくも、自らを貫く圧倒的な質量から逃れることは出来ない。痛みにもだえるように、生徒から生えた八本の足をばたつかせるだけだ。

巨大な蜘蛛の意識が俺に向いたことで、雫と和輝に傾いていた蜘蛛と化け物の意識が、俺に傾注していくのが分かる。

もともと、香奈は俺を割り切るために、蜘蛛をけしかけたのだ。

巨大な蜘蛛は、邪魔なものから排除して、最後に俺を殺してしまおうという魂胆だったのだろうが、予想外の雫の抵抗と、手痛い反撃もあって、計画変更。

推測するに、前菜からよりも、さつさとメインディッシュ、という変更案だろう。最低限、香奈の命令である俺の処理だけは、確実に実行するという意思の表れだ。

……裏を返せば、雫たちを相手にしている余裕などなくなったということだろう。

なりふり構ってられないという蜘蛛の焦りが、振り下ろされた巨大な足と、それに貫かれた化け物の醜態から見る事が出来た。足で叩き潰すことを断念した巨大な蜘蛛は、崩れた体勢のまま、太い触手で追撃をかける。触手は輪ように展開し、俺は逃げ場を失った。

輪はさらにドーム状に広がっていき、俺の視界は、ほぼ蜘蛛の触手、という状況に追い込まれてしまう。

「くそっ！ 正臣！」

和輝は俺に駆けつけようと、殴りつけた蜘蛛の足元から走り出すが、すぐに化け物と蜘蛛の群れに進路をふさがれる。怒りにその身を任せるように、足元を駆け抜ける蜘蛛を容赦なく踏み潰し、顔を横切る小型の蜘蛛に、裁きの鉄球を振るう。

圧殺された蜘蛛は、高所から落としたトマトのように破裂し、鉄球には赤い血液と、つぶれた皮膚がこびりつく。

……和輝の咆哮が聞こえた。

鉄球は一度振り切ってしまえば、死に体の時間が長大だ。

人海戦術を駆使する蜘蛛にとつて、それは最高の獲物といっていだらう。防御の姿勢すら取れない和輝に、蜘蛛がハイエナのように群がりだす。

和輝は胸に取り付かれるのもかまわず、鉄球を振り上げる。

鎖が天井に向かって一直線に伸び、やがてそれは渾身の力をもつて、蜘蛛の頭上に叩き落された。

重力、質量、筋力。

三位一体の一撃が、中型の蜘蛛の頭部をとらえ、真っ赤な瞳が三方にはじけ飛ぶ。

味方がやられても、蜘蛛は恐れをなさない。

次から次へ、飽きることなく数をもって和輝を制する。

全身に蜘蛛をまとわりつかせながらも、和輝の瞳で燃え上がる炎は、衰えるところを知らない。いつそう輝きを増して、俺に近づいてくる。和輝自身が炎で燃え上がるような、そんな和輝の足取りだった。

鉄球を振り上げ、あるいは振り回し、進行方向を妨害する蜘蛛を圧殺していく。

隙が出来ても、和輝は泰然自若。

「俺は……正臣のところに行くんだよ……！」

静かにつぶやいた言葉は、腕に飛びついた蜘蛛へ。

素手で蜘蛛を叩き落す和輝。

拳は自らの血と、蜘蛛の返り血で紅の花を咲かせた。

「邪魔をするな……！」

胸に張り付く蜘蛛を、自らの心臓を取り出すように、シャツごと引き剥がす。引き剥がした蜘蛛を床に叩き付けると、とどめとばかりに踏み潰した。

破れたシャツからのぞく上半身はすでに痣だらけで、黒くうつ血している。

和輝が屋上でどれだけの死闘を繰り広げてきたのか、俺は知らない。だが、どんなに傷ついても、俺のために力を尽くそうとする和輝。

誰よりも人が良く、俺の親友であり、俺の憧れ。

「和輝……お前は……」

中型の蜘蛛が、和輝の左右から接近する。

触手を同時に放ち、和輝の両腕を固定する。

上半身をさらしたまま、和輝は両手をふさがれた。左右の蜘蛛に見習うように、続々と触手を放ち始める蜘蛛の群れ。

数で攻める蜘蛛に対して、和輝の手数はあまりにも少なすぎた。すぐに身動きの取れない状態に束縛されてしまう。

胸、腹、脇腹、背中、二の腕、太もも、ふくらはぎ……至る所に蜘蛛の足が突き刺さる。

マシンガンで撃たれ、血を流す奴隷そのもの。

和輝は、それでも歯を食いしばって耐え続けている。

「もういいんだ！ 和輝、やめてくれ！」

俺と目が合うと、いつもの笑顔で微笑んで見せるが、直後に襲った苦痛に歯を食いしばる。

三匹目の中型の蜘蛛が、ゆっくりと和輝に向かい合う。和輝を見据えて瞳を赤く輝かせると、長い足を和輝へ。

「和輝！」

胸に狙いを定める。

それは、和輝の生命を絶つ介錯人。

「和輝を放してくれ！ あいつは俺の親友なんだ！ 行かせてくれ！」

俺は取り巻く蜘蛛の触手に体当たりする。

ドーム状に俺を取り巻く太い触手は、俺の体当たり程度ではびくともしない。

俺の滑稽な姿をあざ笑うかのように、気持ち悪く脈動するだけ。

「和輝が傷つくことなんてないんだ！」

腹部の痛みより。

「あの頃に戻るって！ 三人でいた頃に戻ろうって！」

朦朧とする意識より。

「和輝！」

和輝の胸を貫く蜘蛛の足。

その光景が、夢ではないことを証明していた。

第四十五話・「まだ終わってない！」

和輝が、ぐったりと頭をたれるのを、俺は見ていることしかできない。

蜘蛛の足が、和輝の胸に乱暴に差し込まれていく。和輝は体中から血を流しながら、一度大きく痙攣した。

蜘蛛は和輝の容態を感じ取ったのか、腕と足に巻きつけた触手を解いていく。

支えを無くした和輝の体は、あっけなく床に倒れる。

ごとり、という音がして、和輝の頭は床に打ち付けられた。痛みに顔を上げることもしない。

精巧に作られた親友の人形が、目の前にあるような気がした。

人形は、髪の毛の一本一本に至るまで和輝そのもので、傷口さえもリアルすぎた。流れ出し続ける血や、鉄球を握り締める握力が、少しずつなくなっていく様子……。

ハリウッドも驚くほどの造形技術。

「……か……ず」

うつ伏せに倒れている和輝に届ける言葉がない。

蜘蛛は細かい痙攣を繰り返し続ける和輝の背中に乗って、触手で和輝を物定めする。

和輝の背中から寄生するのは断念したようで、和輝の顔のほうに回り込むと、八本の足を器用に使って、和輝を開口させた。

唾液とともに、血液が和輝の口の端から流れ落ちる。

抵抗する意思も見せない和輝。

目はきちんと閉じられていて、指の一本も動かない。

鉄球の鎖は、すでに和輝の手から落ちてしまっていて、和輝は丸腰だった。

自動的に、俺の記憶は再生を開始した。

夏美の口に蜘蛛が入った瞬間を。

それと全く同じように、蜘蛛は和輝の口の中に体を滑り込ませようとする。

夏美はゆっくりと立ち上がり、歩けないはずの足で俺に向かってきた。

右足、左足、右足、左足。俺の名前を呼びながら、無表情で。

和輝はゆっくりと立ち上がり、起こすことの出来ない体で俺に向かってきた。

右足、左足、右足、左足。俺の名前を呼びながら、無表情で。

「……ま……サオ……み」

俺は膝をつくしかなかった。巨大な蜘蛛の触手で作られた牢獄で、絶望に打ちひしがれる。

「サオミ……」

親友が歩いていた。

まるで酔っ払ったかのような千鳥足で、俺に手を伸ばす。

和輝の腕は、蜘蛛を殴り飛ばしたときの、たくましい腕ではない。

無気力さを漂わせた、力が入っていない腕。

欲しいのか、いらぬのか。それすらも分からない脱力しきった手が、俺を求めてさまよう。

「まだよ！ まだ終わってない！」

雫の声が、頭上から降り注いできた。

「悲しむのは、全てが終わってからよ！」

奈落の底に落ちそうになる俺を、すんでのところで受け止める声。断崖絶壁から足を滑らせた俺に手を伸ばして、力強く引き上げる腕。

「アンタには、まだできることがあるんだから！」

雫は巨大な蜘蛛の背中に立ち、俺に向かってマスコットバッドを突き出していた。

それはまるで、情けない部下を激励する上官のよう。

右足の激痛を隠す頬のこわばりが痛々しいものの、出会った当初の睦月雫そのものだった。

不安定な蜘蛛の背中の上で、無理をして立ってみせる雫の自信過剰ぶりと派手な演出は、まさに彼女の専売特許だ。

雫は大袈裟にバッドを振り上げると、背中から蜘蛛の腹部を突き刺した。

俺を触手で閉じ込めることには成功したものの、巨大な蜘蛛は自らの移動を捨てた。

傷ついた腹部で、これ以上激しく動き回することは出来なかったのだろう。

それに加え、香奈の指示である俺の排除が、容易に達成できる状

況になったことで、巨大な蜘蛛は、部下である化け物や蜘蛛の群れに和輝や雫の処理を任せた。

それが、ねずみを追い詰めた猫のように、自分の勝利を信じて疑わなかった蜘蛛の、詰め甘さではないだろうか。

蜘蛛の考えなど俺にはわかるはずもないが、俺はそうであるように感じられた。

窮鼠、猫を噛む。

蜘蛛がその言葉を知っているとは思えない。

だが、教えれば誰よりも理解できるのではないだろうか。

蜘蛛の悲痛な叫びが、鼓膜を傷つける。

深手を負った腹部で雫に傷つけられていないのは、天井に向けている部分のみだ。懐にもぐりこんただけでは攻撃できない場所を、雫は狙っていた。

布石はすでに敷かれていた。

和輝が鉄球で破砕した一本の足のおかげで、蜘蛛はバランスを崩し、床に突っ伏している。

その体勢のまま、蜘蛛は触手で俺を捕らえたため、身動きが取れなくなる。

それに乗じることで、雫は蜘蛛の背中によじ登ることが出来たのだ。

「あと少し……！」

雫の青白い顔が見え隠れする。

バットを蜘蛛の腹部に刺し続ける雫も、すでに満身創痍だ。

蜘蛛もそれを知っているのか、巨大な体を揺すって、雫を振り落とそうとする。

右足の怪我は、雫の体重を支えきれない。すぐにバランスを崩して、雫は宙に放り出されそうになる。

「こんな……ことで！」

しなやかな左腕が、蜘蛛の節に伸びる。節足動物であるこの蜘蛛の腹部と胴体の継ぎ目に手をかけて、蜘蛛の激しい揺さぶりに耐える。

感嘆すべきは、雫の執念だろう。

左手一本で蜘蛛の激しい動きに耐え、なおかつマスコットバットは右手に握り締められたまま。

「あと一太刀……！」

雫の声と同時に、俺を覆っていた触手のドームが解かれる。触手の隙間からしか見ることの出来なかった、体育館の全体像が露になる。

巨大な蜘蛛が上下左右に暴れることで、雫は相当なダメージを受けていた。バウンドする度に、雫の体は蜘蛛の強固な骨格に叩きつけられる。

砕かれた右足の痛みも尋常ではないだろう。

それに、取っ掛けかりをつかむ握力でさえ、無限ではない。

一方の蜘蛛も、腹部の消化液を撒き散らしながら暴れていた。腹部の中で蓄えられた生徒の体が、裂けてしまった腹部から吐き出されている。

溶けた頭蓋骨が床に転がったり、半分解けてしまった女生徒の胴

体が、落ちてばらばらになったり。

中途半端な消化のままで、体育館中に撒き散らされる。

背中に取り付いている雫を取り払おうと、小型の蜘蛛が飛びつこうとしているが、巨大な蜘蛛の激しい動きで取り付くことも出来ない。

額に大量の汗をかきながらも、雫は馬鹿にしたような笑みを作る。

「これで終わりよ！」

巨大な蜘蛛の動きが止まった瞬間を好機と見たか、雫はマスケットバットを振り上げる。

一太刀。

雫はそう言った。その一太刀が、雫の最後の対抗手段なのだろう。絶対に振り落とされてはならないという執念が、俺に伝わってくる。

……戦いの終末が見えた気がした。

振り下ろされたバットは、雫の渾身の力を込めたまま、蜘蛛の腹部に突き刺さった。はずだった。

見れば、突き刺さる寸前で、バットは停止している。

雫の右腕が蜘蛛の触手によって封じられていた。

雫の表情が凍る。

巨大な蜘蛛は、最大の間を作る代わりに、雫を捕らえることに成功した。

雫と蜘蛛、どちらに転んでも、勝負を決する重大な隙。

雫はその賭けに負け、蜘蛛に命を握られた。

触手の力に抗うことは、いかに雫が常人離れているといっても無理だ。

鉄筋コンクリートをへし折らんばかりの剛力が、右腕を締め上げる。

雫の細腕が、関節とは逆の方向に折れ曲がった。

第四十六話・「雫」

雫の悲鳴。

今まで聞いたことがなかった。

耳をつんざくばかりの絶望の叫び。

耳をふさぎなくなる衝動を抑えて、俺は全ての情報に意識を傾けるしかなかった。

「……なんてね……」

雫は下手な笑みを作って見せた。

右手に握られていたマスコットバットを落とし、左手に持ち替える。そして、すぐさまバックスイングを取ると、最後の力で蜘蛛の腹部を突き刺した。

マスコットバットは最後の一太刀らしく、奥まで腹部に入り込んでいく。

大気を爆発させるような蜘蛛の叫びが響き渡った。

窓ガラスが揺れ、バスケットゴールが震える。

ダムが決壊するように、蜘蛛の腹部に亀裂が入った。生徒を飲み込んで、限界まで腹部に蓄えていたから、いくつもの傷を付けられれば、決壊する可能性がある。

硫酸をかぶるような思いをしてまで腹部を突き続けた理由が、そこには存在していた。

蜘蛛の断末魔が体育館を駆け巡り、力を失った蜘蛛はその場にくず折れる。

腹部から溢れ出る溶けた生徒、そして消化液。

「雫……！」

雫は蜘蛛の胴体に乗ったまま、立ち上がることも、這うことも出ずに横たわっている。

雫が戦い続けてきた軌跡。

それは一番俺が知っている。

廊下で、化学実験室で、図書室で、そして今ここで。

どれほど傷付き、倒れただろう。

その度に何回立ち上がっただろう。

右手、右足を潰されただけではない。

蓄積されてきた疲労が、雫を蝕んでいる。

「さすがの私でも、少し疲れたわね……」

雫が大きく息を吐く。

蜘蛛の胴体で仰向けになって、体育館の天井を見つめている。

右手と右足はすでに血だらけで、目を覆ってしまいそうになる。

巨大な蜘蛛の、赤く輝く目が光を失っていく。

足が丸まっていき、蜘蛛特有の死体と化していく。

消化液が、決壊した腹部から流れ出していた。

足を丸めて死んでいく巨大な蜘蛛の体が傾くと、雫が胴体から落とされてしまう。

雫は小さな悲鳴を上げて、横様になった巨大な蜘蛛の死体に寄りかかる。

小型の蜘蛛は雫を襲うことが出来ない。それは、親である巨大な蜘蛛を倒した雫に対する畏怖ではなく、流れ出し続ける消化液のた

めだ。

消化液は、周囲を溶かしながら、体育館中に広がっていく。まるで流れ出した溶岩のように、体育館に巢食う蜘蛛の群れを溶かしていく。生徒の死体はもちろん、化け物、蜘蛛、床……体育館そのものを溶かすが如く、広がっていく。

雫はすでに消化液に囲まれていて、独力で抜け出すことは出来なくなっていた。

連戦連闘で使い果たした体力は、簡単には回復しない。

雫もそれが分かっているのか、消化液が迫ってくるのにも動じてはいなかった。

ただ、ため息をついて、まるで朝の占いで最低の結果でも出たように、つまらなそうに眉根を寄せているばかりだ。

「マ……さ……オミ……」

逃げ遅れたらしい化け物が、和輝の口を借りて俺の名前を呼ぶ。

和輝の体はすでにその半分が溶けてしまっていて、下半身が存在していなかった。

上半身もみるみるうちに溶け出して、肋骨の白さが消化液に溶けていく。

「こんな最期は予期してなかったわね。私ともあろうものが……」

雫が俺と目を合わせる。

雫は鋭い視線で俺を見つめるが、次の瞬間には、そっと微笑む。

「アンタのせい……と言いたところだけど、自業自得だから仕方がないか。最後なんて看取って欲しくないから……さっさと行つてよ。どうせ何も出来ないんだし。邪魔よ、邪魔」

追い払うように左手を振る。

俺は膝をついたまま立ち上がれずにいる。

和輝はもう跡形もなく溶けてしまった。和輝の中に入っていたと思われる蜘蛛が、最後に和輝の喉元から出てきて、苦し紛れに跳躍した。

しかし、消化液の広がった範囲に着地してしまい、足元から溶け出し始める。

最後に見た和輝の横顔は、信じられないほど安らかで、むごたらしい最期を遂げた人間には思えなかった。

「早く行けって言うてるのが分からないの！」

俺がいつまでも行かないのに苛立ったのか、雫の声が荒くなる。

雫と消化液の距離は、零距离と言っていい。

雫が体を縮めることで少しだけ隙間が出来たものの、折りたたむことの出来ない右足の爪先は、すでに消化液に侵されていた。

上履きの溶ける異臭が、俺の鼻先を掠めていく。

「時間の無駄なのよ！ 私の言うてることが分からないの？」

雫が左手で床を叩く。

上履きが溶けて、雫の足が焼かれ始めると、わずかに白い煙が立ち昇る。

雫は左手で無理矢理右足を曲げて、何とか消化液から逃れるが、もはや時間の問題だ。

「なんでアンタは……」

俺は、気づいたときには消化液の海に足を踏み出していた。

俺の腹部から落ちる血液が、消化液に付着し、あっという間に溶け込んでいく。

俺は、流れる血に構わず、一步一步、俺に出来る最大の歩みで、雫の元へ。

「馬鹿よ……馬鹿。救えない馬鹿」

繰り返す雫の目には、大粒の涙。雫という名前にふさわしい、美しい涙だった。

「……俺は思いやりいただけなんだ……。夏美がそうしてくれたように……和輝がそうしてくれたように……」

夏美が俺の背中で応援してくれているような気がした。

和輝が俺の背中を押してくれているような気がした。

体育館から逃げ出した、あのときのように。

「だから、最後まで俺は雫を思いやるよ……」

雫を背中に背負うと、俺は今来た消化液の海を再び歩き出す。

上履きの底はすでに溶けてしまった。

ソックスなんてものは、慰めにもならない。

火にあぶられるような痛みが、足の裏から俺の神経を駆け上がる。

歩いている感覚は、足を前に出す度に、背後に置き去りにしてき
た。

雫を背中に負いながら、空中散歩でもしているような感覚。
痛みだけが、俺の皮膚にまとわりついて離れない。

それでも、俺は消化液の海から抜け出して、体育館の外に出る。
逃げ場を失った蜘蛛の群れが、散り散りになって溶けていく。

俺は、蜘蛛がこれ以上体育館の外に出てこないように、雫の入っ
てきた扉を閉めて、体育館を塞いだ。

体育館の中は、しばらくの間、蜘蛛の群れが起こす暴力的な雑音
で溢れ返っていたが、俺が出てきた扉が溶け始めるのと同時に、そ
の音も衰退していった。

「雫」

「……なによ」

俺が背中に呼びかけると、雫は恥ずかしそうに声を漏らした。

「……痛みがひどいんだから、あまり話しかけないで」

俺の首を絞めるように、左手だけでつかまっている。

「それと、べつに気にしなくていいから」

俺が雫の臀部に触れることでしか、雫を負ぶうことができないの
を知っているのか、雫はそのことに文句は言ってこなかった。

体育館の外は、体育館の喧騒とは裏腹に、あまりにも静謐だった。
神聖な場所を歩くような静寂。

裸足で地面を踏みながら歩くのは痛みを伴う。しかし、感覚のな
い足のおかげで、痛みはほとんど感じられなかった。

「アンタのせいじゃないわ。和輝がこうなったのも……私がこうなったのもね」

話しかけると言っておいて、雫が先に静寂を破った。

「悲しむな、後悔するなって言ってるんじゃない。……ただ、私たちがこうなったのは、自分自身の意思の結果だから。アンタが殺した、とだけは考えて欲しくないのよ……」

「……ありがとう」

俺は雫を抱えなおしながら、月夜を歩いていく。

体育館を抜け出した蜘蛛の集団が、渡り廊下から、校舎に入り、校庭に向かつていくのが見えた。

向かう先は、おそらく香奈の元だろう。

「それはこっちの台詞」

雫は疲れたように息を吐くと、俺の耳に唇を寄せる。

息は荒く、激痛に耐えているのが分かった。

しかし、出てきた言葉は激痛とは違い、至って穏やかだった。

「なんか、アンタの背中って……いいわね。負われたことなんて、生まれて一度もなかったから……すごく気持ちがいい……」

声量が弱まっていくのを自覚しているのか、俺の耳に口付けるほどに唇を寄せる。

耳朶に触れる雫の吐息に気恥ずかしさを覚えながらも、俺はそれを止めさせなかった。

止めることは野暮だと思ったから。

雫が痛みを押して伝えようとする言葉だから。

俺は相槌も打たないで、雫の声に耳を傾けた。

「正臣……疲れたから、あんまり言葉に出来ないけど……」

雫が微笑む。

巨大な化け物を打ち破ったとは思えない、女神のような儂い微笑。

「三つだけ……言わせて」

俺の首に回された左手に、力が込められる。

「偽善者……馬鹿……ありがとう」

そしてすぐに、左手の力は抜け、俺は雫を落としそうになる。

「愛してる……」

背中にかけられていた雫の重量が増す。

「……雫？」

俺は不審に思って雫に声をかけた。

少し背中を揺らして、雫の反応をうかがう。

「雫、起きてるか？」

二度、揺らしてみる。

「もうすぐ終わるんだぞ……？」

校庭までもう少し。この調子で歩いてても、五分とかからないだろう。

「ここまできて寝るなよ……」

俺の耳元に顔を寄せる雫に、あきれたように呼びかけてみる。

「負ぶったままじゃ、動けないだろ」

よほど深い眠りについてしまったのか、雫はまぶたを閉じたまま、黒くつぶらな瞳を見せてはくれない。

「なあ、雫……」

その顔は、月夜も手伝って、恐ろしいほどの純白に輝く。

「雫……」

静かに、本当に静かに眠る雫。

彼女を起こすことは無粋かもしれないけれど、俺は雫に聞きたいことがあったから。

「……震ってば」

雫が力を入れてくれないから、背中が重い。
腹部の痛みもあって、歩みがより遅くなってしまふ。

「起きてくれよ。聞きたいんだよ……」

俺は少し苛立ったような声を上げて、雫を起こそうと背中を揺らす。

強情な雫は、それでも起きようとはしない。

平行線をたどる我慢比べに負けた俺は、雫が狸寝入りしている
しか思えなかったから、かすれたような声で話し出す。

「三つって言ってただろ？ あれさ……」

思い出すだけで笑いそうになる。

自分で宣言しておいて、雫はその宣言を破った。

雫らしいといえば、雫らしい。

「四つあったよな」

雫は俺の指摘にも動じない。微笑むこともなく、ただ俺の背中で
夢を見ている。

「そつだよな？ 雫……」

きつとそれは幸せな夢に違いない。

蜘蛛も化け物もない、幸福な世界。

争いもなく、永遠に笑っていられる理想の世界。

……雫は、最後まで俺の問いかけに答えてはくれなかった。

「雫……」

呟いた名前は、傾いた月には届かない。

第四十七話・「香奈」

眠ったままの雫は、馬鹿にすることも、憎まれ口をたたくこともなかった。

まさに深い森の奥で永遠に眠っている美女のよう。

写真に性格は写らないと雫が口にした通り、その寝顔からは安らかさしか感じられなかった。

月はもうすぐ光を失い、太陽はその輝きを取り戻す。

それは誰もが知っていて、何者にも犯されざる絶対の真理だ。明けない夜はない。訪れない朝はない。

一時間もすれば、俺の人生で一番長いであろう一日が終わりを告げ、新たな朝が訪れる。はるか東の山際が、ぼんやりと輝きだしていることから、それが分かった。

俺は雫を背にしたまま、校庭の中心に立ち、背中を向ける香奈に近寄っていく。

校庭のトラックの中心に香奈はいて、蜘蛛と化け物はトラック外で待機していた。体育館のときと数があり変わっていないのは、町の住人の数が含まれたからだろう。

周囲の蜘蛛がざわめきだしたことを不審がって、香奈が頭に疑問符を浮かべていた。

「正臣……！」

俺に気がついた香奈が、あからさまに顔を歪める。

「私は割り切りたいのに……！」

グラウンドの中心で齒軋りする香奈に、ある程度近寄ってから、雫を地面に下ろす。

蜘蛛が香奈と距離をとっていることが分かったから、俺に背負われるよりは、その方が安全だと思えた。

雫を地面に下ろす時、眠りを妨げないように優しくするのが大変だった。腹部は俺を死へ引きずり込もうと最後の痛みを発していて、中腰になるのすら気が遠くなる。

俺は、横たえた雫の冷たい頬と、短くなってしまった髪の毛を撫でてから、香奈に向き直る。

「割り切りただけなのに！」

微笑の少女は、泣き出しそうな顔で叫ぶ。

両手の拳を握り締め、体を細かく震わせる。主人の苦しみに呼応するように、トラック外の蜘蛛が、俺に飛びかかろうと目を光らせた。

「香奈、割り切ることは駄目なんだ。出来ないんだよ」

自分が持ちえる優しさを、総動員して言葉にする。

「割り切れないことなんてない！ 割り切れば、新しい私になれるの！ 苦しんでいたままでの自分がなくなって、新しい自分に生まれ変われるの！」

「俺は香奈に割り切って欲しくない」

香奈に微笑みかける。

香奈が俺に捧げてきた微笑を、今度は俺が香奈に捧げる。

「昨日、宿題出ただろ？ 数学のさ。あれ、やってないんだ。学校

に着いてから、夏美に見せてもらおうとしたけど、結局遅刻したから、それも出来なかった。先週の課題だって、ほとんどやらないまま、和輝と遊んだ。香奈も一緒にいたから分かるよな。三人で、駅前の銅像前で待ち合わせして、それから電車で新しく出来たテーマパークに行つて……」

複雑な表情を浮かべる香奈。

「ジェットコースターはやっぱり苦手だった。俺は目をつぶって下を向くことしか出来なかった……。やつの思いで隣に座るお前を見れば、俺を見て何事も無いように微笑んでくるし、後ろの席に座ってた和輝は、降りてから、退屈だった、ってあくびを連発するし。小心者の自分が情けなかったよ、あの時は」

夜から朝に変わろうとする空気の波が、俺と香奈の間を通り抜けて行く。

「お化け屋敷に入った時だってそうだ。お前は和輝と一緒に入ろうつていうのを頑なに拒むし、俺は入りたくないって言ってるのに、無理矢理俺を連れて行こうとするし。ジェットコースターの醜態を見れば分かるだろ？　俺が小心者だってことぐらい」

溢れ出した思い出は、止まる気配がない。

俺の頭にある、三人の思い出のページ。

どんなに偉大な文豪の全集でも及ばないぐらい、ページ数も冊数も多くて、一生かかっても読み終えることは出来ない。

三人で過ごした月日はまだそれほど長くはないが、密度にすればきつと百年分ある。

「香奈は相変わらずだよ。驚かそうと出てきたお化けに微笑み返す

んだもんな。俺はさつさと出たくて仕方なかったのに、お前はゆっくり進もうと駄々をこねるし」

痛みで言葉がさえぎられることはない。

話したくて、伝えたくてたまらない思いが口を走らせる。

もつとたくさん話せたらいいのに、簡単に伝えられたらいいのに。歯がゆい思いを抱きながら、俺はフィルターのかけられていない生の言葉を香奈に届ける。

「あの時は楽しかったな……。香奈は和輝の誘いを最後まで受け付けなかったし、和輝はそのせいですなるし、俺に当たるし。楽しくないな、って思ったけど、俺だって気が付けば笑ってた……」

香奈は顔を変形させて苦しさを表し、耳をふさぐ。

「……割り切ろうとすることは、きっと簡単なことなんだと思う。でも、香奈は本当に割り切れるのか……？」

耳をふさいだまま首を振って、拒否を態度で示す香奈。

「俺たちが作ってきた思い出は、そんなに簡単に割り切れるものなのか……？」

「割り切れるよ。私はそうして生きてきたんだから、割り切れるんだよ！」

蜘蛛の包囲網が縮まってきているのが分かった。

主人である香奈が苦しむ様を、これ以上傍観していることは出来ないのだろう。

赤い炎を三つの瞳の中で燃え上がらせながら、徐々に近づいてくる。

「楽しかった思い出、苦しかった、悲しかった思い出。それがあるから、それがあるからこそ、それがある限り……俺は立ち上げられるんだ。前に進むことが出来るんだ。どんな困難も乗り越えられる力を得られるんだ」

今まで俺が過ごしてきた年月。

正しさを頑なに信じ続けてきた日々。

和輝と香奈、そして俺、三人で笑いあってきた日々。

雫の隣を歩くことを憧れた日々。

夏美に勉強を教えてもらった日々。

クラスメイトとの日々……。

「たくさんのものを失ってここまで来た。耐えられない思いもした。でも、俺はここにいます。香奈のそばにいますんだ」

香奈がずっと微笑んでいた理由。

「だから、割り切るなんて、言わないでくれ」

それは、傷つきたくないから。嫌われたくないから。

「悲しいだろ、そんなこと」

「聞きたくないよ……私から出てってよ！ 正臣が私の中にいる限り、私はずっと苦しむんだから！」

誰かに近づくことも、離れることもしないで過ごしてきた香奈の日常。極端に感情移入しないことで、自らの心が揺れるのを防いできた。

「俺たちは何度でもやり直せるんだ」

香奈は恐れていた。

誰かを好きになってしまうこと、近付きすぎてしまうことで伴うリスクを。

香奈なりの精一杯が、俺と和輝と過ごした日々の中で溢れていた。俺はそれに気がつかず、しつこいとか、うるさいとか、わずらわしいとか、そんな感覚で考えていた。

香奈はその度に苦しかったはずだ。

「一度きりじゃない。当事者がいる限り、何度でもやり直せる。俺はあきらめない。割り切ることが香奈の信念だとしても、俺はそれが正しいとは、どうしても思えないから……あきらめない。思い出があるから立ち上げられる。そして、立ち上がる度に、俺は香奈に呼びかける」

俺は香奈に対しても償わなくてはいけないのだと思う。

「俺は偽善者だから」

俺なりの正しさを伝えなくてはいけないのだと思う。

「客観的とか、合理的とか、割り切るとか……現実にはそんな言葉が、正しいように思えることが、たくさんある。けど、香奈だって何が正しいのか分かっているはずなんだ。その正しさを、俺は香奈だけではなく、みんなに伝えたい。守って生きたいんだ。だから、俺はたとえ偽善的でも……」

香奈にもっと良く聞いてもらうために。

「何度も、何度でも、香奈があきれくらいい……大声で言うよ」

少しでも心に届くように、俺は香奈に歩み寄っていく。

「俺は香奈を、みんなを助けたい。思いやりたんだ。感情的でいたいんだ。正しいと思えることを、みんなが幸せになれることをしたいんだ」

手を伸ばせば香奈に触れる距離。

「香奈なら……そばで俺をずっと見てきた香奈なら、俺がそういう人間だって、一番よく知っているはずだろ……？」

耳を引きちぎろうかという力で、香奈は音の進入をふさいでいる。

「割り切らなきゃいけない……割り切りたいの！」

次の瞬間、香奈は耳をふさいでいた手を力なく落としていた。

「でも、割り切れないよ……正臣のこと、割り切れないよ……」

子供のようになんか泣いたために、顔を歪めて俺を見上げてくる。

「好きなんだよ……。苦しいよ！ 胸が痛いよ！ 割り切ろうとすればするほど、心が痛い……。どうしようもないほどに、正臣が恋しい、求めてるってことが分かるの！」

涙がはじける。それはまるで、新緑に落ちる朝露のように。

「正臣のこと割り切りたくないよ！ でも苦しいんだよ！ もうこんな思いしたくない！ だから私は、正臣を割り切ることでその痛みを……」

俺の中からこみ上げてくるものがある。

この感情に出会うのは二度目だ。

雫と職員室で話していたときにも、この感情は俺の動悸を加速させた。

胸が締め付けられて、やるせなくなる。

俺の中に溢れてくる大量の何かを、誰かに注ぎたくなるような、制御の利かない感情。

生まれてからずっと、俺が受け取ってばかりいた気持ち。

温かくて、心が安らいで、思わず泣きたくなるような、液体のよ
うなもの。

絶え間なく、注がれてきた、何か。

その何かが、今俺の中で産声をあげる。

誰もが知っていて、誰もが理解に苦しんでいるもの。

誰もが受け取ったことがあるけれども、誰もが気が付けずにいるもの。

幸い、俺はそれを言葉で表現することが出来る。

「香奈……おいで」

愛。

「俺たちは間違っただ。やり直せるよ、何度でも」

腕を広げて、俺は香奈を受け入れる姿勢をとる。

「正臣……」

香奈は、泣き顔のまま微笑む。

引き寄せられるように一歩を踏み出すと、俺の胸に指を触れさせた。

「私も、正臣と……」

俺は香奈を抱きしめようとするが、瞬きした瞬間、腕の中にいるはずの香奈はいない。

その代わり、俺の視界に映ったのは、血管を破裂させんばかりに浮かび上がった生徒会長だった。

「私を助けると、約束しろ。死にたくなかったら！」

レンズが割れ、フレームの曲がった眼鏡をかけた生徒会長の両手には、墓石にでも使うような大きな石が握られていた。

「私をこんな事件に巻き込んでおいて、ただで済むと思っていたのか？ 自分だけのうのうと生きて帰れると思うな！」

香奈が頭から血を流して、校庭に倒れこむ。俺は生徒会長の狂気に彩られた瞳を無視して、香奈に駆け寄る。

だが、それがあだとなった。

香奈のまぶたが開かれるのを見て安心する俺の頭上に、石が振り下ろされる。

自分の頭蓋骨から発せられる大音響が聞こえた。

頭蓋骨の中を反響する音と共鳴して、俺の意識をかき乱す。

香奈に寄り添うように倒れた俺。香奈の顔がちょうど正面にある形で、俺は視界を血に染める。

立ち上がることが出来ない。

今までの、俺という人間の限界を超える行動力が、ついに底を尽きたようだった。

指一本すら動かせない。

かろうじて意識を保っていられる程度だ。無理にでも動くものなら、その瞬間に意識が空に飛んでいってしまうだろう。

視界に映る香奈の顔が、そっと微笑む。

「……ありがとう、正臣。私、正臣のこと忘れない」

俺よりは確実にダメージの少ない香奈が、砂に手をついて立ち上がる。香奈の頬を伝って落ちた血が、砂に吸い込まれていった。

俺は声を出すことも出来ない。

「これが私の、最後の罪」

生徒会長は香奈の宣言にひるむ様子も見せずに、香奈に突進していく。

振り上げられた石と、巨大な怒りが、香奈の頭に襲い掛かった。

第四十八話・「正臣」

大きく振りかぶった石は、不意打ちでもない限り、簡単に当たるようなものではない。

額に流れる血を散らしながら、香奈は生徒会長の懷に勢いをつけて抱きつく。

その拍子に、香奈の携帯電話がポケットから飛び出して、俺の目の前に転がった。

腹にタツクルを受けた生徒会長は、苦悶の声を上げる。

……が、香奈の体重をのせた攻撃など、たかが知れている。生徒会長は後ろに流れていきそうになる体重を、足を後ろにずらすことで耐えしのぐと、嗜虐的な笑みを浮かべる。

「それで終わりか？」

頭上に掲げたままの石を、懷にしっかりと抱きついた香奈に振り下ろす。

背中が真つ二つにされるのでは、と思わせる鈍い音。

石の尖った部分が、制服にめり込んでいく。

香奈は、膝こそ折るものの、決して生徒会長を放そうとはしない。両手を生徒会長の腰に回して、手と手を握り合わせるように口ツクしている。

ちょうど膝をついたままで、生徒会長に抱きつている格好だ。

「女に抱きつかれるのは嫌いではないが……。私をこんな目に遭わせた女なら話は別だ！」

振り下ろした石を再び香奈の背中に叩きつける。

先刻よりも確実に勢いは増していた。風を切る音に遅れて、鈍い音が俺の耳に届く。

「みんな、お腹空いてるよね」

香奈のつぶやくような声が、生徒会長の動きを止めた。

「この人を食べていいよ」

トラックの外で待機していた蜘蛛の群れが、水を得た魚のようにざわめく。

赤い光が、俺の目を焼き尽くし、赤いうねりは、洪水のようにトラックの内側を埋め尽くしていく。

「ば、馬鹿なことを言うな！」

石を投げ捨てた生徒会長が、香奈を殴って引き離そうとする。香奈は、雨のように打ち付けられる拳に堪えながらも、抱きしめる力を強くした。

「来るな！ やめさせろ！」

生徒会長を中心点に、蜘蛛の群れが収束していく。

何百、何千という蜘蛛の大群が、盛大に土煙を巻き上げらせる様子は圧巻だった。

「は、離せ！ 私は！」

天から垂れた蜘蛛の糸を我が物にしようと、目を血走らせる亡者の群れ。物語世界そのままの構図が、ここにはあった。

「この糞女が！ 汚い手を離せ！」

鉄拳に込められる罵詈雑言。

香奈は、生徒会長に殴られ続けながらも、小さな口を開く。

「正臣と出会ったのは、偶然だったんだよ」

髪の毛を引き抜かれる香奈は、痛みに苦悶することなく述懐する。根元に血のついた髪の毛が、生徒会長の手握られていた。

「この町が候補地として上がった時に、私は本当にふさわしいかどうかを判定するために、この学校に派遣されたの……」

俺は香奈の過去を何一つ知らない。

聞かなかったということもあるが、香奈は自分から語ろうともしなかった。

「……そこに正臣がいた」

俺のことを執拗に聞いてくるばかりで、他のことには興味も示さなかった。

授業が終わって休み時間になると、香奈は誰よりも先に寄って来る。下校時もそう。計算してみれば、俺は和輝よりも香奈という時間の方が多かったのではないだろうか。

そんな香奈だから、俺はわずらわしいと思ってばかりいた。

「正臣と和輝が話しているのを見るとね、心が温かくなれた」

「そんな話はいい！ 化け物を何とかしないか！ この雌豚が！」

まるで雑草。

次々に引き抜かれる香奈の髪の毛が、無残に投げ捨てられる。

「いつの間にか引き寄せられていたんだよ……」

髪の毛を引き抜くのを止めた生徒会長は、今度は香奈の柔肌に爪を立てる。

頬に食い込んだ爪は、簡単に香奈の頬に爪痕を残した。

一生の傷になるであろう顔の傷からは、まるで涙のように血が大量に流れ出す。

「それから、正臣を好きになって……離れたくないって思ってた……ずっと正臣のそばにしようとした」

まぶた食い込んだ生徒会長の指が、眼球を潰しながら眼窩に深く入り込んでいく。一歩先んじた蜘蛛が、生徒会長の背中に取り付いたときには、人差し指の第二関節が、香奈の眼球を穿り出していた。眼球の視神経を引きちぎり、生徒会長はそれを握りつぶす。

「止めろ！ 離せ！ 私は！」

蜘蛛の急襲で生徒会長の眼鏡が外れる。

俺の目の前まで転がってきた眼鏡のレンズは、すでに抜け落ちていて、フレームはくの字に歪曲していた。

「迷惑だっと思われていたことも知っていたよ。でも、私は自分の思いを伝える方法を、他に知らなかったから……」

抱きついた人間が、目の前で惨殺されていく。

二の腕に噛み付いた蜘蛛が、生徒会長の腕を美味しそうにほおば

る。

そんな光景を目にしても、香奈は動じない。

「腕を、返せ……。それがないと、私は……」

香奈を引き剥がすことをあきらめたのか、それともすでに意識を超越してしまったのか。奇天烈なことを口走る生徒会長。

「物心つく前から組織に引き取られて、一方的な教育だけを受けて育ってきたから、自分勝手にしか出来なかったんだね」

体中に食いついた蜘蛛が、生徒会長の皮膚をはがし、骨をかじり、耳を食いちぎる。

流れ出る血を浴びる蜘蛛は、気持ちよさそうにすら見えた。

「は、はハ……ハはハハ……美味しいのか？」

生徒会長の体を噛み砕く蜘蛛の咀嚼音が、狂想曲を奏でる。

「そうか、夢だ。これは夢だ……夢に、決まッテ……！」

生徒会長はその言葉以降、ぐったりと香奈に覆いかぶさったまま動かない。事切れたように、体から力が抜けていった。

「今でもよく分からない。私にあるのは、正臣を好きだって気持ちだけ。それ以外には何もないよ」

バケツの水をかぶったように、血に濡れそぼった香奈。
生徒会長を蜘蛛に任せて、立ち上がる。

「みんな、今までありがとう」

両手を左右に大きく広げて、香奈は天を仰ぐ。

「私を食べていいよ」

清々しそうに香奈は言った。

おこぼれに預かれない蜘蛛が、一瞬ためらうように瞳を明滅させるが、それもひと時のことで、すぐに香奈の足元から這い上がっていく。

「あ……でも、ひとつだけ理解できたかもしれない」

女性としてもそれほど背の高いほうでない香奈の体は、あつという間に蜘蛛に覆われる。

「正臣は偽善者」

微笑。

「だって、誰にでも優しい」

蜘蛛に埋もれた香奈の顔だけが、何とか確認できた。

「みんな、そんな正臣が大好きなんだね。そばで見えてきたから分かるよ。正臣がいてくれたから、みんなが幸せになれたんだって。初

めて誰かを好きになることが出来たんだって」

「か……な」

俺はすでに意識を失いかけていた。

まるで映画でも見せられているように、ただ静かに風景が流れていく。

それが現実か夢かなんてことすら満足に判別できないほど、俺は憔悴しきっていた。

「……だから、ごめんね」

耳に入ってくる言葉ですら、どこか夢うつつのような気がしていた。

俺の手が、蜘蛛に埋もれた香奈に伸びる。

手を伸ばしている実感がない。俺の視界に映る手は、自分のではない気がした。

それぐらい、俺は意識が現実からかけ離れていた。

無意識のうちに俺は手を伸ばしていた。

自らの命を削るように。

ただ、香奈に触れたかった。

ただ、香奈を胸に抱きたかった。

ただ純粹に……誰よりも愛したかった。

「正臣にとって、私はふさわしくないよ」

その言葉をかき消すように、遠くから風を切り裂く轟音が聞こえてきた。

その轟音は止むことを知らず、俺のほうに向かってくる。

「生きて、正臣」

伸ばした手がつかんだのは、香奈の携帯電話。

俺が本当につかみたかったはずの香奈の姿は、すでに大量の蜘蛛の中に消失していた。

「……か……な……」

ライトを点灯させながら接近してくる二つの巨体。

プロペラを前後に設置した胴長の輸送ヘリと、中型のヘリ。全長三十メートルを超える前者は、存在するもの全てを吹き飛ばすような暴風域を作り出しながら、俺の近くを滞空する。ヘルメットをしたパイロットが二人、コックピットに見て取れた。

中型のヘリからは何本ものロープが垂れ、武装した兵士がラペリング降下を行う。

どうやら、輸送ヘリ着陸の安全を確保しているようだった。

胴長のヘリが、プロペラの回転数を減少させる。

完全な着陸態勢に入ると、背後にある巨大なハッチがゆっくりと開いた。中からは中型のヘリ同様、次々に武装した兵士が飛び出す。どういうわけか、飛び出してくる兵士に、蜘蛛は危害を加えようとはしない。

まるで磁石で言うところの同極同士が反発しあうように、一定の距離を開けたまま近付こうとしない。

……一人の隊長らしき兵士が、俺に近付いてくるのが見えた。

男は膝について俺になにやら話しかけているようだったが、俺にはそれに答える気力も、体力も残されてはいなかった。
俺は海中に沈んでいくようにゆっくりと気を失う。

香奈の携帯電話を握り締めたままで……。

第四十九話・「一人」

……電車がホームに滑り込んでくる音で、俺は目が覚めた。

ベンチから慌てて立ち上がると、人込みに流されながら、俺は電車にその身を滑り込ませる。

耳をふさぐヘッドホンからは、流行のナンバーが大音量で流れ出していた。

手すりに身を預けながら、窓を流れていく景色をなんとはなしに眺める。

線路の向こうには、咲き始めたばかりの桜の木々が、桃色に染まっているのが見えた。俺はぎりぎりまでその桜に視線をくれていたが、やがて見えなくなると興味はすぐに失せていった。

空いた席に腰掛けると、隣になったサラリーマンが俺のほうを見て咳払いをする。

どうやら、ヘッドホンの音量がお気に召さないらしい。

俺はポケットに入れたポータブルプレーヤーをいじって、音量を下方修正した。

次から次に、人は電車に乗り込んでくる。

誰もが我関せずで、四方八方に視線を散らしている中。俺は再び夢の中に落ちそうになる意識を覚醒させようと、手のひらで頬を叩いた。

頬に走った痛みが、ゆっくりと広がっていく。

隣に座った女子高生が、俺の奇怪な行動に怪訝そうに眉を寄せて、隣の女子と内緒話を始めた。

気にしないように努めていたけれども、突然女子高生は大声で笑

い出したので、俺はそれに耐えられなくなり、再び立ち上がると隣の車両に移る。

目指す駅はもうすぐだ。

「俺は…… 生きているんだよ……」

つぶやいた言葉は、きしむ電車の音にかき消されていく。

誰に聞かれるでもなく、誰に理解されるでもなく、俺は問いかけていた。

電車を降りると、俺は駅前の噴水で立ち止まる。

腕時計に視線を落とすと、定刻五分前。

日本の電車は世界有数の正確さを誇ると言われているが、まさにそれが証明されたわけだ。

遅刻は過去に一度しかしたことがないから、これで無遅刻日数は一年を数えることとなった。

記憶が正しければ、一年前まで、俺は遅刻を一度もしたことがなかった。

生きてきた年数が、そのまま連続無遅刻日数だったのだ。

空に向かって水が吹き上がる涼しげな光景。

水面に反射する太陽光線に目を細めながら、俺は大きく息を吐いた。

「……遅いよ」

待ち人は三十分遅れで現れた。

「電車が遅れたのよ。私のせいじゃないわ」

両手を広げて、参ったわよ、と言いたげなポーズをとる。

「電車に乗り遅れた、の間違いじゃないの？」

「ま、そうとも言っわね」

噴水の水が輝きを増し、雫の流れるような黒髪を照らす。

まるで主演女優に照射するスポットライトのように。

「それで、怪我の経過はどう？」

「俺のほうはもう大丈夫。頭の包帯もとつくの昔に取れたし、腹の傷も完全にふさがったよ」

「良かったわね」

雫が俺の背中を思いっきりはたいてくる。俺は手加減の知らない雫に顔をしかめるが、雫はまったく気にしていないようだった。

「雫は？ 足、もう大丈夫なのか？」

「まあまあね。小走りくらいしか出来なくなっただけど、それほど不自由はしてない。問題なのは、むしろ右手の方。卵すら握りつぶせないんだから、参っちゃっわよ」

左手を腰に当てて、右手を俺に突き出すと、俺の眼前で、結んで開いてをしてみせた。

「同情なら間に合ってるわ。それより、今日は久々に会ったんだから、少し付き合ってよ」

俺は指を鼻先に突きつけてくる雫に、苦笑いをこぼす。
雫の強引さは相変わらずのようだった。

「もう毎日毎日リハビリの繰り返しで、本当に嫌になる」

「でも、雫はすごいよ。普通なら、今の状態になること自体、奇跡なんだろう？」

「睦月雫よ、私は。他の人間とは違うわよ」

不敵な笑みを見せて、親指を立てる。

「あ、あそこに入るわよ」

雫は瀟洒な喫茶店を指差す。

路地裏でひっそりと営業しているようで、客はあまりいないようだった。

中に入ると、カウベルの音が店内に鳴り響いた。店員に案内させる気もないのか、窓際の席にさっさと座った雫は、長い足を組んで腕を組むと、態度の悪い客に成り下がった。

「……いいですか？」

俺は困った顔で立ちすくむ店員に愛想笑いを浮かべると、雫の席でいいかどうか訪ねた。

店員は、構いませんよ、と俺に負けなくらいの愛想笑いを浮かべて、水を取りに引き返していく。

「雫、もう大人なんだから」

空調が効いていて、ジャズが心地よく耳に入り込んでくる。

「細かいこと気にするんじゃないわよ。お客様は神様。少しぐらい構わないわ」

俺が座ったのを確認した店員が、グラスに注いだ水を差し出す。雫はそれを一気にのどに流し込むと、引き返そうとする店員にグラスを差し出す。

俺は、雫の接客だけはするまいと心の底から誓った。

「半年振りかしら」

「そうだね、それぐらいになるかな」

汗のかいたグラスを持ち上げると、バランスを崩した氷が、清涼な音を響かせた。

「あの事件のあと、しばらく同じ病院に入院していたのよね。でも、怪我の程度からして、アンタが一足早くに退院して……それっきり連絡もなし」

「悪かったよ……。少し考えたかったんだ。あんな恐ろしい事件の渦中にいた俺たちが、次の瞬間、いつもの日常に逆戻り。時間が欲しかったんだ、一人になる……」

俺はグラスの水を口内に流し込み、渴いた喉を潤す。

「信じられるわけない。目が覚めて、起き上がってみたら県外の病院にいて、原発事故の被害者扱い。俺たちの町は完全封鎖。安全が確認されるまで立ち入り禁止……」

病院のベッドで目が覚めた俺は、一人で歩けるまでに回復していた。

一週間以上眠っていたらしく、体中が倦怠感でいっぱいだった記憶がある。

病院はいたって普通で、一般の患者も大勢いた。

映画やドラマで見るとような完全隔離などはされずに、ただ事故で足を骨折した患者のような扱いで、特別なことなど何もなかった。

病院内を歩いて、待合室のテレビを見ると、そこに映し出されていたのは、大規模な原発事故のニュースだった。

俺たちの町には確かに原発があつたが、そうそう何度か不祥事を起こしているわけではなかった。

周囲の患者は、俺の生存を奇跡だと喜んでくれる一方で、医者も、看護師も俺の周囲にいる誰もが、俺の町で起きた事件のことを信じてはくれなかった。

むしろ、話せば話すたびに、哀れんだ目で俺を見てくる。

きつと彼らは、俺が放射能で頭をおかしくしてしまったと思い込んでいるのだろう。

「それは私も一緒よ。学校で、蜘蛛が暴れて全員が殺されました。蜘蛛に寄生された人間が、化け物になって襲ってきます。ダンブルよりも大きい蜘蛛と戦いました」

雫が窓の外を眺める。

「誰もそんなこと、信じてはくれないわ。私だって、立場が逆なら信じない」

窓の外では、手と手をがっちりと握り合ったカップルが、体を寄せ合いながら歩いていく。

「完璧なのよ。そして、痛くも痒くもないのよ。私とアンタを生かしておいたって」

雫のいうことは正しい。

兵士たちが、俺と雫をどうして助けたのかは分からない。殺してしまってもなんら問題はなかったはずだ。むしろ、殺してしまったほうが良いに決まっている。

それでも、俺たちはこうして今を生きている。監視や、束縛もない。

今まで享受してきた平和が、俺たちの手のひらに、姿形を変えずに戻ってきた。

「私は、その余裕が許せない」

雫がテーブルを叩く。グラスの水に波紋が広がった。

「人の生活をめちゃくちゃにしておいて、許されていいはずがないわ」

新聞でも、ニュースでも、原発の安全性についての論争ばかりで、『スクール・オブ・ザ・デッド』という計画については、その単語すら出てこない。

町ひとつを完全に閉鎖するくらい大規模な事件なのに、情報は何一つとして漏洩してはいないのだ。それとも、漏洩してはいるが、緘口令を敷かれているのか、あるいは買収されてしまったのか。

どちらにせよ、日本という国は、何事もなかったかのように情眠をむさぼっている。

どんな事件も、悲劇も、他人事のように無関心。

同情はしても、すぐに忘れてしまう。

それが日本。

それが日本人だ。

俺たちが体験した悲劇が、誰にでも起こりうる悲劇だということ。それすらも知らないで、人々は生きている。

『スクール・オブ・ザ・デッド』という計画が、誰の起案で、誰が実行して、日本政府はどうしてそれを容認したのか。

そんなこと、たかが一学生である俺に分かるはずがない。

むしろ、分からないからこそ、俺は生きていられるのだろう。

「だから、私は私なりの方法で逆襲してやるつもり」

「逆襲？」

俺は雫の口から飛び出した、信じられない言葉に耳を疑う。

「そう。といっても、力じゃどうしようもないし。今すぐというわけではないけれど、いつか必ず」

雫の瞳が、まだ見ぬ戦いに燃え上がる。

「だから、アンタも協力して」

体が強張るのが分かった。

「……俺は……」

「アンタしかいないのよ」

一年前の悲劇を思い出すたびに体が震えだす。

大量の血。大勢の死人。無限に増殖する蜘蛛。

夢を見れば、俺は今でも学校をさまよっている。

夜中に飛び起きて、俺は安心する。

膨大な汗をタオルで拭き取りながら、俺は体が恐怖におびえてい

ることを知る。

たとえ朝に目が覚めたとしても、一年前の朝であるような気がしてならないときがある。

俺はその度に頭をかきむしり、吐き気を催し、トイレに直行する。便器の中に、今しがた吐いた大量の胃液が浮いているのを見て、俺はまた吐き気にさいなまれるのだ。その繰り返し。

「アンタが必要なよ。私には」

チャイムが鳴るたびに、玄関前には彼女がいるような気がしてならない。

慌てて玄関口に走っていった、外の確認もせずにドアを開ける。

だが、外には誰もいない。

チャイムの幻聴。

部屋にいるときの俺の耳には、あのときのチャイムの音が休みなく響いてくる。

あれ、正臣も遅刻？ 奇遇だね。

ドアを開けた俺に微笑みかけてくれる彼女を、必死に捜している俺がいる。

ドアの後ろ。壁際。アパートの周辺。

探しても、探しても……彼女の微笑みはみつからない。

あきらめるぐらい、鬱陶しく思うぐらい彼女につきまとわれていたのに。

今更になって、彼女を捜している俺がいる。求めている俺がいる。心と、体が、泣き叫んでいるのが分かる。

だから。

「……………協力は出来ない。……………もう、何もしたくないんだ」

雫の顔を直視することができなかった。

最終話・心を動かすもの

「正臣……」

雫は自分の耳を疑っているのだろうか。

「今日はそのために呼び出したの？」

「だとしたら？」

挑戦的な言葉とは裏腹の、少し不安げな目。

「……ごめん、帰るよ」

俺は注文もせずに、席を立つ。

俺が背中を向けて出口に向かおうとすると、雫が後ろから呼び止めた。

「アンタはこのままでいいの？　ずっと怯えて暮らすの？　死んだ人間は戻ってこないのよ」

「分かってるさ！」

店内だということも忘れて声を荒げる。

客のいない店内だったのが幸いしてか、店員がおろおろするだけで済んだ。

「俺は雫じゃないんだ！　何もかも簡単に割り切ることは出来ない！」

……割り切る。

口をついた言葉に、俺は心が痛む。

「アンタは、私が過去を綺麗さっぱり割り切ったと思ってるわけ？」

俺はこれ以上の言葉を交わすのが怖くなって、カウベルを鳴らして喫茶店を出て行く。

雫も喫茶店を出たようだった。

数秒送れて、カウベルが耳に飛び込んでくる。

「逃げたいだけなんでしょ？ アンタは！」

早足で歩く俺の背中に打ち付けられる言葉。

「目をそらしたいだけなんでしょ？」

俺は雫が走れないのを分かっている、スピードを速めていく。

「ちょっと！ 待ちなさいよ！」

雫がたどたどしい走り方で、何とか俺についてこようとする。

全速力で走りたいという意味に従ってくれない体に、舌打ちをする音が聞こえた。

「自分で言ったわよね？ あの時アンタが言った言葉があるから、私は！」

地面を蹴った。

両腕を大きく振って、全速で人ごみの中をすり抜けていく。
最後に雫を振り返ったとき。

……雫は地面に這いつくばっていた。

酷使した足がもつれて、転んでしまったのだろっ。

かつての強靱な足腰の面影はない。

まるで翼をもがれた鳥のように、雫は地面に顔をこすり付けて転んでいた。

不自由な足を使えば、こうなるだろう事は簡単に予測できた。

だから、俺は振り切るように全速力で走り出した。

どこへ行くでもなく、何をしたいでもなく、人ごみの中を疾走していく。

肩をぶつけながら、転びそうになりながら、俺は一心不乱に走り続けていた。

肺が悲鳴を上げ、足は破裂しそうな感覚に襲われる。

完治したはずの腹部から血が流れ出しているような錯覚が、俺の思考をかき乱す。

その時。遠く人ごみの向こうに、見覚えのある人影を見た。

「香奈！」

すれ違ふ人々の真ん中で、俺を見て微笑んでいた。
変わらない微笑み。

何度も見た微笑み。

いつでも、どんなときでも思い出すことの出来た微笑み。
走り続けた代償か、思うようにスピードが上がらない。

腕を振り、足を回転させ、肺をフル稼働させる。全身を臨界点まで酷使しても、なかなか香奈の下にたどり着くことは出来ない。

「……香奈！」

香奈の下に、俺より先にたどり着いた人物がいた。

その人物は、香奈の肩を軽く叩き、俺を見る香奈の注意を引く。

香奈は少し嫌そうな顔をしたが、やがてすぐに微笑んで、ふらふらになりながら走る俺に向き直る。

遅れてきた人物も、そんな俺を見ながら微笑む。

まるで、待ち合わせに遅れた人間を、微笑ましく見守るように。

「かず……き？ ……和輝！」

和輝は香奈の肩に手を置きながら、俺を見守っている。

俺の馬鹿な話にも、最後まで付き合ってくれる、ただ一人の親友。
どんなことでも真剣に受け止めてくれたあの優しい瞳で、俺がたどり着くのを待っている。

和輝が他の誰かに気がついたようで、手招きをしているのが見えた。

俺ではない人間に対して、というのは明らかで、香奈もそちらを向いてやはり微笑んだ。

遅れてきたのは、二人の女性だった。

一人目の女性は、遅れてきたことを反省するように、頭を深く下げ何度も謝っている。

もう一人の女性は、遅れて来たのにもかかわらず、少し尊大な態度だ。

和輝の背中を乱暴に叩くものだから、和輝の顔が痛みにゆがむ。

「夏美！ 加藤さん！」

後から来た二人も、俺が走っていることに気がついたようで、やはり他の皆と同じように、俺を見て笑っている。

少し背の低い夏美を後ろから抱きしめるように、加藤さんが俺を指差す。

夏美の耳元で何事かをささやくと、夏美は顔を真っ赤にして小さくなった。

意を決したように、夏見が真っ赤な顔をあげて、手でメガホンを作る。

頂上で叫ぶ登山者のように、夏美は大きな声で叫ぶ。

だが、それは聞こえない。

夏美の行動を見た和輝も、肺にためた空気を声に変換した。
香奈も、加藤さんも、つられるように口を大きく開けて叫ぶ。
俺の耳には全く届くことのないその声は、それでも俺の体に力を
与えた。

「香奈！」

だが、いつまでも俺がたどり着かないことに微笑を崩すと、香奈
はあきらめたように背中を向ける。

「和輝！」

和輝は、仕方がないな、と両腕を広げると、香奈に従うように背
中を向けて歩き出す。

「夏美！」

加藤さんに腕を引かれた夏美は、困惑しているようだった。
それでも加藤さんが強引に腕を引くものだから、夏美は俺に一礼
して、加藤さんの横に並ぶ。
夏美の腕を離れた加藤さんは、背中を向けたまま、頭の上で手の
ひらを振った。

「加藤さん！」

四人が人波の中に消えていく。

人と人が重なり、紛れ、やがて見えなくなる。

俺がどれだけ走っても、追いつこうとしても、追いつけなかった。
俺が近づこうとすればするほど、離れていく。

決して追いつけないもの、手に入らないものを追いかけていく。

そう見せ付けられた気がした。

俺は走る体を急停止させて、その場にたたずむ。

「……幻想だ。幻想に決まってるだろ……なんで本気になってるんだ、俺は……」

自分の馬鹿さ加減に笑ってしまう。

次いで訪れた深い悲しみに、俺はその場にくず折れる。

人の波の真ん中で膝をつく俺に、周囲は冷たい視線を向け、奇人変人を見るような感覚で、俺を避けて通る。

誰も俺に同情したり、助け起こしたりしない。

それが当然の行動だ。

無駄と思えることに、労力を使う人間なんていない。

人は誰にでも優しくなれるわけではないから。

正義の味方なんて都合のいい人間は存在しないから。それは偶像でしかないから。

「 やつと追いついた」

俺の目の前に立ちふさがるように立つ一人の女性。

疲れているはずの荒い呼吸を、無理に押しとどめているのは、見栄か、プライドか。

右手を腰に当てて、左手で俺を指差す。

「アンタ言つたわよね。みんなを助けたい。思いやりたいうて」

雫は大量の汗を流れたままにしながら、言葉を続けようとする。

しかし、押さえ込んでいた呼吸の衝動に耐えられなくなったのか、咳き込んでしまう。

「……いい？ アンタがしようとしていることは、怖いこと、苦しいことから逃げ続けること。過去を割り切ろうとしていることなのよ」

少しの間隔を置くと、雫の肺は落ち着きを取り戻す。

「アンタがみんなの心を変えた。あの極限の状況下で、アンタは私の心を変えて見せた。あの女ですら、最後はアンタのことを想って身をなげうつた」

あの女とは、香奈のことだろう。

苦々しく代名詞を使いながらも、どこか納得するしかないといった様子だ。

「あんたの優しさが、思いやりが、人の心を動かすのよ」

雫が手のひらを差し出す。

「何も、力で対抗しようっていうんじゃない。武力や憎しみに頼るような『復讐』がしたいんじゃない。言ったでしょ、私は『逆襲』がしたいだけ。優しさや、思いやりで動かすことも出来るんじゃないかって、そう思えるから……私は、アンタにかけてみたいのよ」

優しい声だった。

平静を装った態度だが、雫の右足は震えている。

おそらく、気を抜けば倒れ込んでしまっただろう。リハビリの途中なのだから、めったなことは出来ない。

それでも雫は痛みを押し隠して、俺に手を伸ばそうとする。

「過去があるから前に進める。みんなアンタのことが好きで、アンタに生きて欲しいって思ったから、東城正臣という人間は生きていられる。それを忘れて、立ち止まることは許されないはずよ」

右足の震えはだんだんと大きくなる。

雫は痛みを表情に出すことなく、俺の鼻先に手を差し伸べ続ける。

「責任を果たさなければいけないのよ。アンタは」

それは、雫なりの優しさ。雫なりの思いやり。

「そつでしょ？ 正臣」

微笑む。

俺が忘れていた感情。

忘れかけていた信念。

苦しみに押しつぶされていた、正しさ。

俺はそれを思い出す。

あの学校で起こった惨劇は、確かに大いなる悲しみを生んだ。

だが、それ以上の大切なことを経験した。

そのすべてを忘れて生きようとすることは、割り切ることと同義だ。

俺はそれを否定し、過去を背負いながら生きていくことを決めた。

誰かを思いやり、手を差し伸べ、優しくすること。

偽善的なことかもしれないが、俺はそれを決して厭わない。

そう決めたはずだ。

「ああ、その通りだよ……」

俺は雫の手をとって立ち上がろうとするが、どうやら雫の右足は限界だったようだ。

俺を立ち上がらせることすら出来ず、逆に雫が俺に倒れこんでしまっ

俺に抱きつくように倒れこんだ雫は、笑ったまま起き上がろうとしない。

それどころか、倒れこんだのをいいことに、俺を抱きしめたまま起き上がろうとすらしない。

「……もう少しだけ。いいわよね？」
「うん……」

図書室の光景が思い出された。

「こういつときでもなかったら、殴り飛ばしているんだから。そこ
のところ、分かってるんでしょうね」

「その台詞を言われるのは、二度目だ」

周囲の視線も気にならなくなっている雫と俺は、それでも抱き合
い続ける。

「これから、ずっと言ってるわ。アンタは、だらしない偽善者
だから」

雫に押し倒され、抱きしめられた俺は、空を仰ぐ格好になる。

雫の髪の毛越しに見える空は、雲ひとつない蒼穹。

その空をさえぎるように俺たち二人を覗き込む四つの影。

「お手柔らかに頼むよ」

そう言って笑った二人の声が、覗き込む四人の冷笑を誘ったのは
言うまでもない。

加藤さんは、青筋を立てて唇を引きつらせ。

夏美は、頬を強ばらせて爪を噛み。

和輝は、あきれたように肩をすくめ。

香奈は、見守るように優しく微笑む。

「……本当に馬鹿」

雫は、嬉しそうに抱きしめる力を強くし。

俺は

「偽善者だから」

香奈の微笑みを真似てみる。

【第一部 END】

最終話・心を動かすもの（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

評価、感想、本当に栄養になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3242b/>

スクール・オブ・ザ・デッド

2010年10月9日22時39分発行